

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

3月号



3-MARCH '66

昭和四十一年二月二十日印刷 昭和四十一年二月一日発行 三月号（第二十卷第三号）毎月一回一日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

昭和三十一年六月十七日国鉄大塚特別扱承認雑誌第二二二号

奇譚クラブ

昭和四十一年三月号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



3月号 ¥ 300

★最新資料へ文献写真V特別分譲品★

落ちた下着後手吊

大手札三枚一組 略号(ろよ) 三〇〇円
東浦ひかる

激しい緊縛ブレイの連続の末、たった一枚残ったパンティが足元に引き上げられ、厳しい高小手の縄尻が高々と天井へ引き上げられる。爪先立つた脚線の緊張。

浴槽荒縄強烈折檻

大手札三枚一組 略号(ろる) 三〇〇円
山原清子

トゲトゲとした荒縄が柔肌を痛めつける上に、更に浴槽に浸されて緊縮する荒縄。情容赦のない折檻の手と足は、悶える裸身を水中に埋没せよとする。

梁から両手吊り

大手札二枚一組 略号(ろふ) 三〇〇円
木村洋子

交叉して括られた両手首は梁にしっかりと縛りつけられた。両足は先は床から離れて全身が完全に宙に浮いてしまった。軽量でマゾ性のモデルだからこそ出来る難業。

床柱宙吊り縛り

大手札二枚一組 略号(ろへ) 三〇〇円
木村洋子

瘦身を床柱にぐるぐると胸から

胸、膝頭、足首と括りつけられて完全に宙に浮かんだまま正面向いて晒される女体。全身を締めつける緊縛感に苦悶の表情が漲る。

開股々間縛正面

大手札二枚一組 略号(ろほ) 三〇〇円
山原清子

麻縄による全身を縦に真二つに割る強烈な股間縛りの上に更に両膝を八の字に開かせ両足首を括った縄を左右に引っぱって後手の縄に連結した凄惨な目のむきさ。

二女連縛責模様

大手札十枚一組 略号(ろそ) 一〇〇〇円
大塚・山原

後手高小手に厳重に縛り上げられた二女の縄尻を連結して、いたぶられてくるので、両足だけは自由にされてくるので、いたぶりに対して奇妙な姿態が交錯転々とする。

二女連縛煩悶場面

大手札十枚一組 略号(ろひ) 一〇〇〇円
山原・大塚

縛られた二女の上半身は高小手手に厳しく只自由な四本の足だけが空を蹴って悶えぬき、後手を連結した縄がきしきしと悲しいきしめきの声を放つ二女連縛の姿態。

股間縛刺青競艶

大手札三枚一組 略号(ろさ) 三〇〇円
山原清子

背中刺青をいっばいに見せて股間縛りと刺青の競艶は、むごたらしいサジスチックな連想を画面いっぱいにふりまいてくる。

股間縛正面表情

大手札三枚一組 略号(ろす) 三〇〇円
山原清子

豊胸をくびれる程縛った麻縄が身体をタテに割り裂く微細の縄目の行方を正面と背面から大寫しにいきいきと描写しました。

喰込む股間縄目

大手札三枚一組 略号(ろせ) 三〇〇円
山原清子

肉づきのよい肌をまるで俵をくびるように区切った横縄にプラスして縦縄が身体を割った有様を側面からのカメラアングルで前面背面の様子を同時に捉えました。

女レスリング寝業

大手札八枚一組 略号(ろわ) 二〇〇〇円
東浦・大塚

晒の六尺権一本の両端が、プロレスのルールに従って大胆に、奔放にマット狭しと荒れ狂うレスリングの寝業の攻防戦。双方共真剣に興味を以て相争う数場面。

女斗美争闘シーン

大手札八枚一組 略号(ろか) 二〇〇〇円
大塚・東浦

裸女二人がなりふり構わず、こころ先途と掴み合い押さえ込み合う女体の躍動美となまめかえみエロチシズム。押さえる者も下になる者もナマの裸身を晒けだす。

女相撲取組場面

大手札六枚一組 略号(ろぬ) 一〇〇〇円
大塚・東浦

相撲をきつちりと身に付けた両者が十二分に練習を続けた上で合せてより、一方が仕手となり戦いが繰りひろげられます。

女相撲実戦場面

大手札六枚一組 略号(ろお) 一〇〇〇円
大塚・東浦

機が熟したところで、お互いに相手を物したところ、お互いに命になったチャンスを見逃さず、早いシャッターで次々と撮影していく実戦的な興味のある場面。

女相撲投業場面

大手札六枚一組 略号(ろり) 一〇〇〇円
大塚・東浦

力の筆った裸身を躍動する二つの女体が四つに組んで投業を放つ瞬間に、予想もしなかつた美しさ魅力溢れるエロチシズム。

★総天然色(カラー・プリント)作品写真分譲★

従前より天然色の色彩豊かなカラー写真の分譲を希望されておりました。比較的高価な写真に比べて、比較的安価で、写実的な色彩豊かな天然色の写真が、今、実現されました。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

角の女性と山原清子嬢をモデルとした天然色の写真。これは、天然色の写真の普及に大きく貢献するものと期待しております。

天然色緊縛写真

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント
☆手札型三枚一組 略号(ろあ) 一〇〇〇円

床柱にきりきり縛られて両足先が宙に浮いたままもくもく交感。

高小手に縛られて悶える全裸。

手札型三枚一組 略号(ろき) 一〇〇〇円

赤い紐に白い肌、そして、その赤い紐が美しく光に映える。

脱がされた着物の下で、手札型三枚一組 略号(ろく) 一〇〇〇円

着物の長襦袢、腰巻、帯、それらの色彩の中に埋れた緊縛裸女。

手札型三枚一組 略号(ろさ) 一〇〇〇円

定評のある清子の悶え方、それが豊富な色彩の中で、手札型三枚一組 略号(ろし) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろち) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろて) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろと) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

天然色野外女相撲

☆モデル 大塚啓子、東浦ひかる
☆手札型カラー・プリント
☆手札型三枚一組 略号(ろあ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろき) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろさ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろし) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろち) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろて) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろと) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろふ) 一〇〇〇円

腰巻一つで縛られて、手札型三枚一組 略号(ろへ) 一〇〇〇円

限定版グラビア写真集／美しき縛しめ／第八集

大塚啓子
鈴木晃子
山原清子

女斗緊縛競艶写真特集

頒価一部 一〇〇〇円（送共）略号（美8）

「女性対女性」の激しい女斗美、緊縛プレイの
フォト化―動きのある縛り場面の美しい展開―

女性対女性、女性同志の組打ち（六尺禪
着用或はパンティ着用）から緊縛に至るま
での動きのある縛り動作の連続を、大塚啓
子、鈴木晃子、山原清子の三女によって傍

若無人に展開させました。二月中旬完成の
予定ですが、今すぐ予約お申込みを頂け
れば完成次第すぐ先着順にお送りいたしま
す。すべて未発表のフォトばかりです。



昭和四十一年三月号

〈第20卷第3号・通刊第212号〉

奇譚クラブ 3月号 目次

△本文▽

扉……本誌の信条……………	編集部……………	(25)
「続・アブ談義」……………	久我 庄一……………	(26)
のおと・あと・らんだむ……………	千草 忠夫……………	(31)
ポケット・ブックに発見した M的小説クライマックス紹介……………	安津 安春……………	(36)
「痴人の糧」△狂妄▽……………	山本 一章……………	(44)
耕土散筆 「落穂拾い」……………	保藤 久人……………	(52)
殺人マニヤのたのしみ……………	黒田 寿……………	(59)
御仕置おぼえ書……………		
「はりつけ」について……………	おもだか・しの……………	(62)
女相撲物語 花の女斗美たち……………	奮斗士好太……………	(72)
マゾヒスチック・ストーリー……………		
しもべ……………	三原 寛……………	(83)
心傷たむ遍歴 (確定女囚ミシユリーヌ)……………	西条 操……………	(86)
サジスチック・ストーリー……………		
ぎん子の靴下止め……………	佐原陽一郎……………	(108)
アリアドネ (希臘神話の再編成)……………	黒淵 嬰一……………	(116)
小説・新解体新書 (下)……………	高野 原美……………	(128)

◇奇クサロン……………編集部選

[illegible]

廣作芳野眉美氏の優雅な生活……芳野 眉美……(14)

S M ・ カメラ ・ ハント

「断層の女」

△KK時評△
論壇拡大して第二段階に入る…橘
行司子… (166)

連載小説 花と蛇
(続篇第十五回)

牡丹／＼花物語・2……………万田 不二……………(184)

フエチ小説 カード・プレイ

嗜虐の歴史 ソバイノの記録より……………三原 覚……………(192)

△告白▽
深紅の歌

冬子のクリスマス・イブ……………山中 冬子…(206)

讀者通信

編集部選：（218）



限定版グラビヤ写真集△美しき縛しめ▽第七集完成！

山原清子 **刺青の魅力を探ぐる**

頒価一部一〇〇〇円（送共）

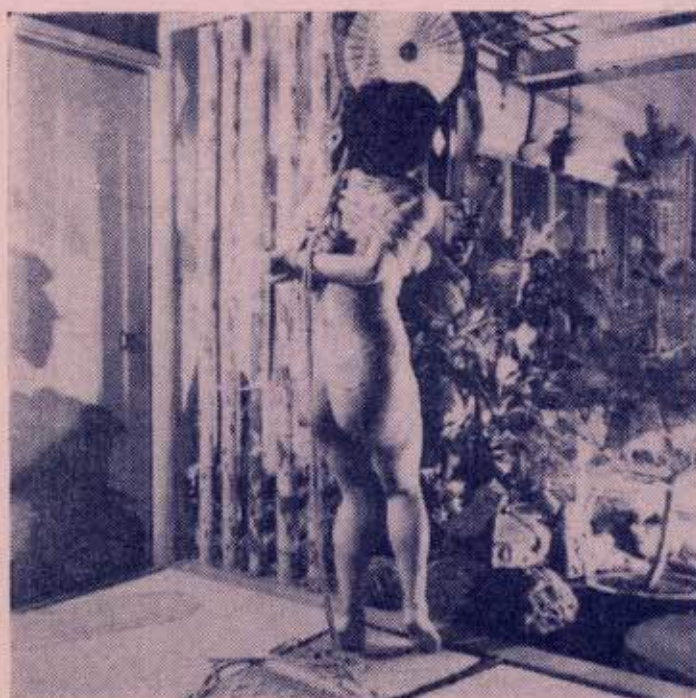
略号△美7▽

全部最近撮影の力作！未公開の秘蔵写真集！

刺青の女王——山原清子の魅力を最高度に発揮した強烈な緊縛フオトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズ）

このグラビヤ写真集の刊行のために、近々三カ月の間、山原清子を連日のように煩して特写した、総て未公開の傑作写真ばかりです。山原清子の刺青の魅力を探求して、その肉体の隅から隅までを強烈な緊縛によって、マニアの皆さまの目にこらんにいれます。今

後二度と手に入らない素晴らしいとおきの写真多数をこの「限定版写真集」のために投入いたしました。一般市販は絶対にいたしませんから、直接発行所へ「略号△美7▽」と御記入の上、お申込み下さい。本欄に掲載の写真は、写真集には入っておりません。





昨年引き続き神戸、横浜、東京、大阪などの大都会に若い女性の晴れ着にいたずらをする晴れ着魔が出没している。火のついた煙草の吸い殻を袂に投げこむ、インクや墨汁をかける、果ては硫酸魔とて、晴れ着に硫酸をふりかけるなど、ストレス解消の手段に使われては、若い女性にはたまったものではない。幸い次々と犯人が逮捕されているので、心配されているような模倣犯の連鎖反応はないものと思われる。

知人の適齢期の娘さんがお正月の晴れ着姿で外出するといったところ、早速数人の青年が護衛役をかって出て、若し煙草の吸殻でも投げ込む奴があったら、忽ちタックルして現行犯逮捕をやるんだと張りきっていたが、これからは皆警戒を厳重にしているだろうからうっかり軽い気持ちで、いたずらし

でやろうなどと、真似したりしたら、ほんの出来心でして、などの言訳は通らなくなる。

美しいものを汚したいという異常心理が、こういった形で発散されるということは、まことになげかわしいことだ。ストレスの解消を、こんな卑劣な手段に訴えなくとも方法は他にもある筈だ。

捕った犯人はとみれば、やくざでもなければ愚連隊でもない、れっきとした妻帯者であり、真面目な小市民といったタイプか、あるいは社会的地位のあるサラリーマンだというのが、驚くほかはないし、なんともやりきれないものを感じる。

晴れ着魔に想う

編集子

例によって、その犯行の動機や

原因などを分析しているが、無意味である。犯人の言った言葉を例え、家が貧しくて妹に晴れ着を買ってやれないので、その腹イセにやったという言葉、そのまゝ鵜呑みに、あたかも、それが動機のように大きく報道しているが大体、自分の行動を分析し、その動機や原因を説明できる程の心理学者であつたら、そんなつまらない通り魔的犯行はやらぬだろう。

若い女性の六〇%から八〇%は人混みの中の痴漢の被害者であるというから、余程魅力に乏しい女性でない限り、なにかしらの痴漢的被害を受けているとみてよいだろう。ましてや訪問着や振袖に着飾った美しい女性であつてみれば尚更のこと、ついフラフラとハイド氏の面が触手を伸ばすということになりかねない。雑踏の中から、人にわからないという気持ちが悪魔の囁きとなって、誘惑される男性は、えてして真面目で気の小さい、一見善良で内気な人間

かもしれない。

バーや料理屋では、もっともつと悪い悪ふざけや悪戯をやらかしている自称紳士が多い。芸者の晴れ着に放尿したり、ホステスの袂をライターで焼き切ったりするニセ紳士の中には、案外政界や財界の大物がいたりして、ときには武勇伝の一つとして自慢話のタネになったりする。美人の晴れ着に故意に酒をこぼして、何倍もの弁償金を支払うのなどは、意中の女を陥落させる手段としては、いまや初歩のうちに入っている。

こそこそと雑踏の中の女のあとを追って、つまらない悪戯をやるのはやめよう。そんなスリルを追ってストレス解消などと鼻の下を長くしていると、いずれ捕って男としては最低の生恥をかくことになる。そんな割の合わないこと、うつつをぬかすより、この世の中には、もっともっと面白いことが沢山あるということを知るべきである。若い女の着物の袂に、火のついた煙草の吸殻を投げこむということが、如何につまらない作業であるか、ということがわかったら、そういった痴漢的所行を真似るものもいなくなるだろう。

「オシメ・フोट」について

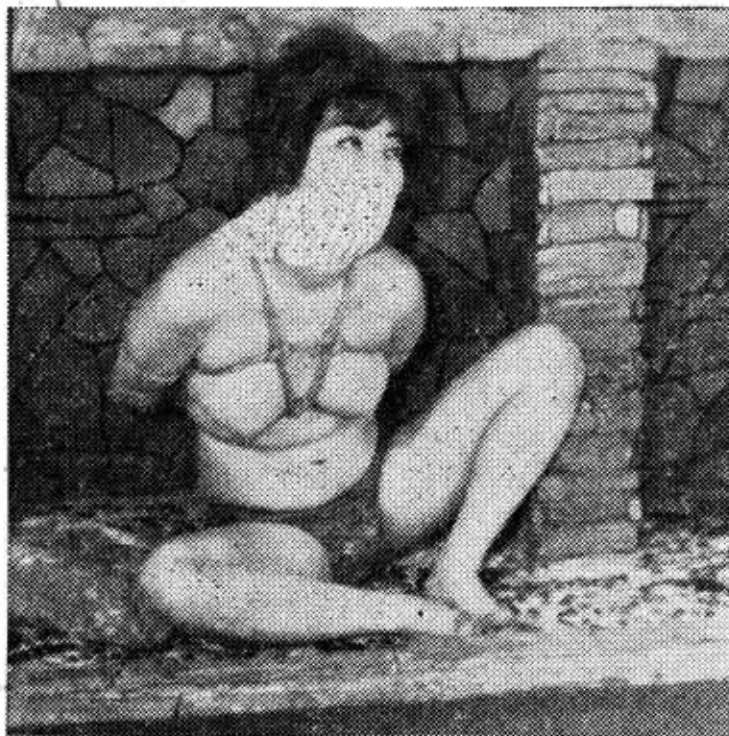
赤井 茂

新作分譲フोट／オシメと女学生は、私が最も関心を持っていたものだけに、楽しさが一杯のフोटでした。以前の梨花嬢のオシメ・フोटに比べると、格段の進歩のあとが見られて嬉しく思っております。

フोटを見て楽しむものだけに派手さとムードがポーズは勿論で

すがフोटの生命を決定するものと思います。モデルの大塚啓子さんも異存はありませんし、オシメも派手さがあって、楽しいものです。ムードも適度に表現されていて、入手してよかったという気持ち湧いてきます。

セーラー服姿の啓子嬢がオシメカバーにオシメをセットして開股し、一〇〇CCのリスリン浣腸を注入し



自分の手でオシメをつけるポーズはたまありません。私も経験があり、又、多くの女性の中にも、この様に独りプレーを楽しんでいる人もある事でしょう。暴言かも知れませんが、啓子嬢自身にも、この様にプレーを楽しんでおられる事かも知れませんが今後の素晴らしい企画に期待いたします。

以上に書きました様に、このフोटは全く素晴らしいの一語につきますのですが、オシメマニアとしての観点からみれば、まだまだ物足りない点も多々あります。今後の企画の一端にでも加えて頂きたいアイディアというか希望を申し述べてみます。

これまでオシメフオトの実現に努力下さった編集部の御尽力には心から感謝してやみませんが、今一步突込んだポーズ、小道具等を配してムードを盛り上げてほしいものです。

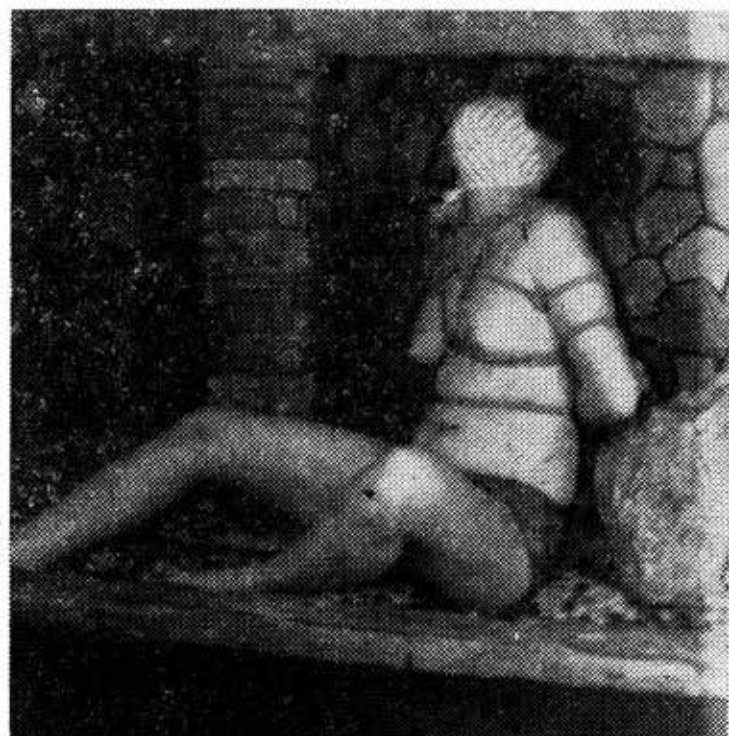
(イ) 六枚のフोटの中、四枚は同じポーズかカメラアングルを変えただけという点に、いささか不満をおぼえます。ポーズの六枚とも変化がほしいものです。

(ロ) 前にも書きましたが、眼で見て楽しむのがフोटです。今少し多彩というか派手さを表現してほしいものです。例えばポーズのそばに、とりかえるためのオシメを配するとか、浣腸器に液を入れ

るコップとかいった小道具を置いてはどうか……。

(ハ) オシメカバーにもビニールであっても良い派手さがほしい。子供用のオシメカバーの様に柄とか模様入りのカバーとしては。オシメ地(柄)にも昔からの純然たる雪花柄のオシメの代表的な柄を用いたら一層ムードが盛り上ると思う。

(ニ) こうした浣腸+オシメ+女性は勿論ですが、施術者も登場させてほしいですネ。是非ともお願いします。例えば友達同志、セーラー服姿で浣腸をしオシメをつけ





△フェチの海水浴▽

・安田隆夫・

昨年の夏、光市の海水浴場にて私が自ら体験しました△フェチの海水浴▽と題した体験記に掲載し

て貰うため、そのとき撮影した写真と同封いたします。適当に文中に配列下されば幸いです。

る。又母親或は姉といった想定のもとにお願いします。モデルは施術者、山原清子。被術者、東浦ひかる。(例)女学生と姉。

1、ひかる嬢がベッドの上で仰臥し下半身を露出している側面ポーズに、手前では山原嬢がオシメカバーにオシメをセットしているところ、或はオシメをしき込んで手前で浣腸器に液を吸引しているところ、それをひかる嬢が切ない

表情で見つめているポーズ。

2、いよいよ施術、山原嬢が左手で浣腸器を持ち右手でひかる嬢の足を支えている。

3、派手な柄のオシメをひかる嬢の股間に当てている山原嬢。オシメを当てられているひかる嬢の切ない表情とポーズ。傍らに浣腸を配する。

4、オシメカバーをはめる。
5、ピッチリはめられたオシメ

カバーの下からオシメがはみだし

ているポーズ。
6、グッショリ濡れたオシメをとりだしてカバーをはずしているポーズ。

といった変化のあるポーズが望ましいものです。又この他に、こうしたポーズに一人が介助するとか、そばでこうした場面で見ているとかいったポーズが希望です。和服ポーズの場合、はだけた着

物の裾からこうしたオシメがハッキリと見えているといった配慮がほしいものです。

フォトを見ても啓子嬢がま

〔次号掲載予定作品〕

○ポケットブックに発見したM的小説のクライマックス紹介△フレデリック館▽……河津安春○痴人の糧「拷問」……山本一章○女性の切腹随想……高野原美○モッキンバード……三原寛○花と蛇(続編第十六回)……団鬼六○のおと・あと・らんだむ(三)……千草忠夫○心傷たむ遍歴……西条操○ある青年の断片……津治良一○SMカメラ・ハント……辻村隆○昭和四十年台風23号顛末記△暴風雨下の責め日記▽……森中雨奇男○トイレット談義……川崎進一○ハロー御機嫌如何?モデル嬢さん……よるのたんろう○孤独の緊縛……牧

洋子○アリアドネ……黒淵嬰一○耕土散筆「落穂拾い」……保藤久入○「お犬様異聞」……夜乃探郎○△話題▽婦人雑誌から拾った『正常と異常』……保藤久人○インテレセクション……三原寛○或る浣腸マニアの誕生……茂野礼○浣腸の思い出……力丸康子○フリート・エネマ使用の記……栗瀬長○女腹切り奇談……鳴海大介○女工哀話「仙子とおとわ」……壁信介○セロポン使用の記……栗瀬長○かずひこのノートから「わが唇は魔の味にふるえて」……とやま・かずひこ○「見世物ふあんだしー」……夜乃探郎○天保女忠臣蔵……川上米子。その他○KK時評(橘行司子)

サロシ楽我記

(第二十一回)

辻村 隆

谷崎潤一郎の原作に『ドラキュラ』『ドリアングレイの肖像画』などを加味した『刺青』が撮影中であるが、美への耽溺と女の魔性を描いた原作の味が、どこまで生かされるか愉しみにしている。若尾文子の白い背に一杯に這う女郎ぐもの刺青の絵は、京都の某日本画家が描いたらしいが、矢張り山原清子のナマの魅力には及ばないだろう。『お艶』という女が背中いっぱい女の女郎ぐものいれずみをされて、刺青師に殺された時に、くもの口から血が流れて芸者染吉の姿かたちから、昔の清純なお艶に戻るといった結末も多分に神秘めいている。刺青マニアにとって見逃せぬ好一篇であろう。

× × ×
京都の『魔子』と師走の某日、意馬心猿のままにプレイを行なったら、すっかりMにされてしまった。『甘美なる魔子への降服』である。恰度丸一年前東京のY氏を紹介したが、魔子の妖精的なプレイにとうとう音をあげて身を退いたらしい。しかしかなり彼女の神

酒を味ったから愉しかったのだらう。Y氏が繊維界の不況と、一つは家庭への背信に悩んだ挙句、綺麗にサヨナラしたのだが、一度のMプレイの味をしまった魔子は、孤独をかこっている。魔子の身長一六センチ、体重五一キロ、ヒップ七八です。ウマ年生れの今年は当り年です。(一九六五年四月号奇クサロン参照して下さい)

× × ×
最近号では夜乃探郎氏への風当たりが相当に強い。あの人はあの人なりのいいところもあり、耽美をロマンを謳っているのだが――。唯、私も読んでいて気になるのは無闇矢鱈に『ETC』が多い。ETCは大体『等々』『など』というその他の不特定に使うのだが夜乃氏の場合、文につまるとETCになり、句読点代りにETCになる。そういえば、久我庄一氏もよくを使う。これらの方々『ETC』は一体どんな目的で使っておられるのかおたずねしたい。いつも私を褒めていただいているのにどうもこんなこと申して申し訳あり

ません――。期せずして登場した二氏が二氏共、符蝶を合せた様に『ETC』をよく使うので、ヘンに感ぐたりしているのだが……。

× × ×
いつも締切りギリギリに『楽我記』を送るのだが、遂に芳野眉美氏との会合には、間に合わなかった。来月は彼との愉しい対談の模様をお伝えします。『山原清子座談会』を二回司会して、色々の方と面識になり、電話や自宅を訪れられたりして、個々に楽しいお説

△豊満への挑戦▽

を拝聴し、正にアブは花盛りである。その方には皆健全な温厚常識的且つ円満な社会人許りである。そして実行派が案外多い。奇クに書いている人の方がペンネームのかくれみのをかぶって、反って保守的な秘密主義の人が多いのは面白い。過去十数年、ついぞ自己の姿を見せなかった私も、青木順子のフォトや、山本清子対談のフォトでチラリチラリ自分自身を出す迄に心臓が強くなって来た。やはり幾分はSMの年輪のせいだろう。



小妻 容子

テムペスト

黒淵賀集子

福田久文様。

新年号で嬰一に賜りました賞讃の御言葉に対し篤く御礼申し上げます。

四十年十月号もそうでしたが、新年号でも嬰一自身が余り意識せず書いた部分や二、三ページから「感銘を受けた」と言われるのですから、嬰一も「細心の注意を払って書かなければならない」と言っていました。

又、「悪人を過早に亡したらしい。今後は伝説にこだわらずに、悪人を殺さないような書き方にしよう」とも言いました。

嬰一は純粹の日本人ですが、日本の生れではありません。昭和二十二年までは日本の土をふんだ事がないそうです。以前書いたように「五才から乗馬を覚え、小学校五年から拳銃を習った」のはその為です。外国語は学習したのではなく、日常会話で覚えたらしく、「中国語」も北京官話ではありません。お疑いを受けたのも当然です。

編集長は鄭重な自己紹介を嬰一

に送って下さいました。そのお返しに嬰一も履歴書を送ったようです。彼の二十才までの経歴を公開したら小説は出来なくても読物にはなるでしょう。でもそれはS・Mとは無関係な奇譚ですから御教示に従って発表を控えるよう頼んでおきます。それに彼の父親は奇クのような出版物を潰そうとしている元兇みたいな仕事をしているから、正体が明らかになったら親子のどちらかが困ります。

芳野眉美様

マユミ様と木戸川先生が同人物と思っっている者は日本中に一人も居ないはずですよ。どうか行間の意味を読みとって下さい。

麻生保様

嬰一が幼少の頃覚えた乗馬と拳銃は主として女親から習ったと言ったら興味をお持ちでしょうか。彼の父は戦時中多忙で此のような必須教育さえも婦人に任されたようです。明治生れの女性がいつでもこれを覚えたのか不思議な気がします。でも一般向の話題ではありませんから又の機会に譲りま

しよう。

嬰一は「麻生先輩にさえ読んでいただけるなら、いつまでも書こう」と言っています。近代式乗馬服の日本女性を主人公にした次期作品を書き始めました。でも彼の作品は奇ク的でないようですから採用されるかどうかは別の問題です。

編集部へ

奇クの危機が噂に上り、心配しています。どうか廃刊にだけはしないで下さい。

嵐が鎮まるまで、現在の編集方針を堅持して下さい。多少の不満や批判は意に介さないで下さい。

その為に採算上の無理が起るなら

天星社を株式会社改める方法も

考えてみて下さい。株式は公募。

一株五百円。七十二株で一口。配

当は年一割、つまり本誌一年分保

証の他、特別配当として臨時増刊

号がつき、年一回株主総会(？)で

営業報告(？)が行われる。これで

百口位集まるでしょうか。

「日本中で最も奇ク的なものは」

と嬰一が申しました。

「春秋の筆法を以てすれば、それは

奇ク編集部自身である」

私は無学なので、此の意味が理解出来ません。どなたか教えて下さいませ。



賀集子夫人緊縛図

マニア通信

愛妻の写真提供

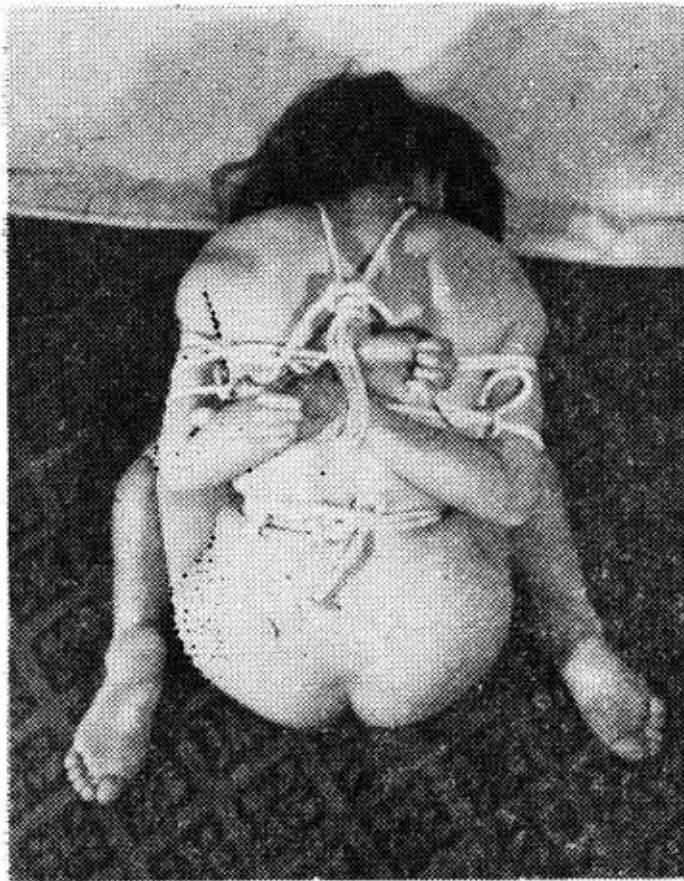
新宮明夫

皆様お変わりありませんか。本当に久しぶりにサロンに顔を出させて戴きます。白表紙以来の熱心な愛読者であり処刑ファンの私にはグラビヤ廃止、処刑残酷ムードの低調など、号を追って期待を裏切る奇クに愛想をつかしこれまでの奇クを分解して挿絵やグラビヤの内、気に入ったものを分類してスクラップに貼り整理しました。そして妻を相手にSMプレーフォトを楽しんでおりました。しかし夫婦だけというものはやはりマンネリ化するもので他の同好者との交流を必要とします。

勿論奇クで知合い、お互いのフォトを交換しあっている御夫婦も三組程あり親しく文通し、お互いのアイデアや作品を批評しあっています。ですが、どうしても多数の人達の意見や体験、希望などを見たり聞いたりする必要がありません。結局私は約六カ月で再び奇

クに戻って来たのです。しかし現在の奇クに決して満足しているのではありません。もっともっとと私自身の求めるものをという願いは多いのですがいろいろのファンの方々をも含めた公刊誌である以上それに世間からの強い風当たりから見ると、致し方ないものかも知れません。今月号では、『新解体新書』を楽しく読みました。斬首の様子を細かく描写してあり処刑ファンとしては絶対のものです。これに伴う挿絵が無かったことが少々物足りない感もありましたが、私達のようなSM夫婦のプレーフォトもどしどし発表されるよう切望いたします。妻を写したものの内掲載に差しさわりのないようなもの三枚を同封します。スペー

スがあれば御発表下さい。
(註)三枚のうち二枚掲載します



二月号について

河津安春

福田久文氏の「続・悪女の手紙」保藤久人氏の「或る回想」の二篇、近來稀に見る格調高い読物でした。些かのゆるみも無く、ピンと張り切った作者の神経が感じられ、読後の印象は清々しいものでした。両先生の筆硯、益々牙えん事を祈りたい気持ちで一杯です。福岡キラー氏へ。御賞詞を頂いて、恥しいやら、嬉しいやら、御愛読、厚く御礼申し上げます。何しろ、生れて始めて原稿用紙に書

代理部だより

○折角代理部の分譲品を代金同封にてお申込み下さっても、次のような注文書のため、お送りできないものがあります。即ち、封筒及び内容にも住所も氏名も何にも書いていないもの。住所だけか氏名だけしか書いていないもの。局留を希望すると書いてあって局名の書いてないもの。府県名を書いていないもの(郡や町村名だけでは宛書不十分で返戻になります)などがあります。

○分譲品の中でZ組やY組はすでに分譲打ち切りとなりましたが更にB組も分譲中止とします。どうか最近号の広告の中から、必ず八略号Vにて、お申込み願います。略号をお書きにならないときは発送が大変おくれますから、ご承知願います。尚ご注文は必ず広告したもののの中から、ご指定下さい。こういった趣向のもの、とか、こういった趣向のものといったご指定はご勘弁願います。

○長らくお待ちいたしましたがグラビヤ写真集限定版、八美7V及び八美8Vが完成いたしました。

くのですから、意余って、筆足らず、今後共、御叱正をお願い申し上げます。

私も昔、沼正三先生の「足なめクラブ」の紹介を読み、どうすればこの本を手に入れられるかと切齒した事を思い出します。

1、原書の入手につきましては私も帰国後、随分探しましたが、輸入されてない様です。入手方法として考えられますのは、左記発行所からリストを送らせ、禁止本ではありませんから、丸善か、洋書取次店を通じて買入れる事です。ただ、矢張りM的なものは非常に少く、私も千冊余り買った中で、Mと言えるものは十指に満つるかどうかと言う有様です。

2、原書貸与について。別に門外不出の本でもなく、ペーパーブックの事とて、年月と共に、ボロボロになりつつあります事故、お近くの方なら、真実喜んでお貸ししたいと存じますが、遠隔の地では、不測のトラブルで厭な思いを致したくありません。不悪。

3、コピーについて。これはお役に立てそうですが、本務の傍らの事です。余りお急ぎになられても困ります。出来上りましたら、奇ク編集部へお送り致しますよう。

余談ですが、キラ一氏にパルプマガジンの漁書をお奨めしたいと思えます。私も最近、七年前の「メール」に素晴らしい物を発見しました。「赤いキモノの女」という題名ですが、美貌の女性が中心となり、サディスティックのクラブを創ります。赤いキモノは制服です。捕えた男の顔をメチャメチャに傷けて、人相を判らなくし女医が脳手術をして、動物的な本能のみを残した人獣として、飼育するのです。第一番目の犠牲者は女医の夫で、手術の不完全のためか、時々暴れるので、首環と鎖で

妻の女医のベッドに繋がれています。凄くショックキングでしたが、何しろ古い雑誌で、一枚二頁が破られており、無念残念、遣る方無い気持ちです。

御承知と思いますが、メール、メン、キャヴァーリイ等、毎号二、三〇頁の長編読物があり、ポケットブック一冊位の量はありません。

但し、三五仙の本を三五〇円で売るのは、暴利だと腹立たしくありませんが……。

Vega Books,

2968 Olive Avenue East,

Fresno, California,

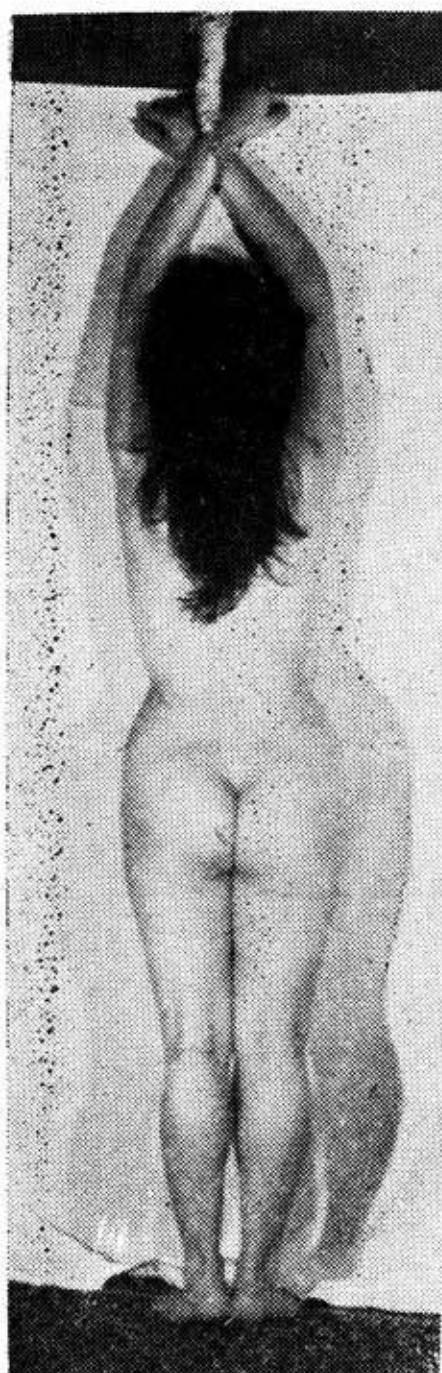
U.S.A.

Fabian Books, Ltd.,

2919 East Belmont Avenue,

Fresno, California 1,

U.S.A.



いずれも、限定版写真集のために新しく「特写」したもののばかりで今まで一度も公開したことのないものです。本誌グラビアページの中止により、ファンの方々に大層淋しい思いをおかけしておりますが、どうか、この限定版写真集によって、渴をいやして下さい。

○本誌の旧号も、いよいよ定価一五〇円の分定価二〇〇円の分が全部売切れとなってしまいました。

臨時増刊号『花と蛇』特集号などと共に、すでに売切れになった旧号のご注文があとを絶ちませんが返金その他いろいろと手数がかかりますから、どうか売切れた分のご注文はなさらないで下さい。

○八代理部分譲品総目録Vの請求をなさる方もありますが、残念ながら、只今『目録』の作成はいたしておりませんから、最近号の誌上の広告により、ご注文下さるよう、お願い致します。今後、目録が完成しましたら、その旨誌上に広告いたします。

○ご送金は切手代用でも結構ですが、必ず小額（十円、二十円、三十円、四十円、五十円切手）のもので、紙にはりつけたり、紙にはりつけ剥いだりしていない新しい切手をお願いいたします。

『新年雑感の中から』

保 藤 久 人

この稿を書き出したのは、大晦日の暮れなずむ頃。一気にという訳にかず、自然に八ゆく年くる年Vを股にかけることになる。省みれば、40年度の34期間は、我ながら……と驚くほど書いたものだが、未熟者なので愚文に終始し皆さまをお悩ませしたかも知れぬと恐縮している。

が、書くことにより、または、書くために更に知識を得て、自分のためになったのは事実。こののちも、一段と努力し、自分だけでなく……と、ささやかながらの希いを抱きつづけている。が、最近特に、同一筆者の複数寄稿が問題になって折でもあり、八耕土散筆II落穂拾いVも残念ながら一回休ませて頂き、潜在的衰退徴候として憂慮されている「性病蔓延」を取上げることにした。

△話題V即△課題V

ある統計資料による「白書」を見ると、近近数年間に性病患者は激増し、本人の気付かぬ初期症を含めて推定すると、20人に一人の

割合に近いという。

しかも、その罹病年代も低くなり、14歳……という。きくだけで、ゾッと悪感の走るのを覚えるのは、私だけではないだろう。性病はその昔、亡国病と称されて、徹底的に排撃されたものである。

その頃は、徴兵検査があり、これが一種の関所の役をしていた。検査で発見されれば、正に大事である。

売国奴!! 最早や日本の国民でないように極言され、身の縮む思いをしなればならなかった。

現今のように、ペニシリシ其の他の新薬もなく、細々とした治療で、泣くにも泣けぬ思いをした人も可成りあったようだ。自然に用心するようになり、軍戦的政策も検疫に力を注ぎ、それが一般の社会常識であったように記憶している。

戦後の懸案であった『売春防止法』が成立したのが31年5月。いわゆる赤線は消えた。

月と鋼(ハガネ)

室井亜砂路画



この立法に、関しての賛否は論外。現実に、人権問題や人間性尊重の思想から、当然のものであったと思わねばなるまい。

しかし、考えてみると、「仏作って魂入れず」の感がする。

『売春法』のなかったころ、主としてSEXは強圧的閉鎖時代であった。ところが、法律の成立した背景世相は、SEX解放の声高かく、漸進的に、奔放な自由へと移

行していた。このあたり、一般の社会動向と併せてみたとき、そこに、因果関係のような、相互逆行の状態があるように思える。

昨今なら、男女の交際は全く簡単。しかも、ある種の感情を助長するかのような、煽情的肉欲的な映画の広告・題名・スチール写真が仰々しく街に飾り立てられ、新聞にまで登場する。いろいろ遊び場も出現し、若い人たちは青春の



文身(いれずみ)の緊縛フォト 浜松弘子

謳歌のうち側に、情感を漂わせて狂熱的に、エネルギーを発散させる。

性病蔓延という事実に接し、私はふと、これらハイティーンの人びとが、果して性病というものの存在を知っているのかしら、と疑うことさえある。

それほど、彼や彼女たちは自由奔放なのだ。△奇ク△のような真面目なものを書き……非行化に結びつける以前に、こういうSE

X面の認識を新たにし、教育と自覚をうながす必要があるのじゃないかと痛感する。

性病の最たるものは「梅毒」期が進むにつれて脳神経をおかされる。身体の特徴も破壊される。

胎児への影響も大きい。感染は性交を最高として、接唇は勿論、タバコの吸い口などからも――

これでは人生を楽しむどころか人間失格を意味することになりか

ねない。恐ろしく、無気味な思いがする。

「赤線」がなくなり、白線か青線か、何やらわからんものがあって兎も角、自由――

しかし、私たちの時代と違って現代の青少年は、自然な本能的生理欲求の放出口所もなく(公的なもの)、ある意味では不幸といえるかも知れない。が、与えられている「自由と解放性」は、もっともっと素晴らしく尊いものなのだから

ら、それを大切にし、その前提として、改めて、このいまわしい病気(性病)に対しての知識と理解を深め、正しい認識を――と、私は思う。

これは、人間一般……いわゆる社会問題なのだ。非行防止も大切なのだが、この、目に見えないような悪魔の撲滅こそ、明日につながる△課題△ではないだろうか――

過日はお見事な写真ありがとうございます。ごさいました、彼女は髪も初回よりは少々伸びましたね。

毎号確実に拝見いたしておりましたが、今回の号に依りますと、彼女を囲んでの集いがあったのと、と、残念でした。是非とも次回に行なわれる時には出席させていただきたいと存じます。名古屋や大阪でしたら、何をにおいても参加させていただきますから、御一報賜れば幸いです。

その節は参考資料として持っております文身の写真及び資料を持参したく考えております。参考として一葉、乳房から胸へかけてクモとクモの巣の文身をした女性と

緊縛プレーをしたフォトを同封いたします。これは貴誌に発表されても結構ですが、拙い作品ですゆえ、御参考にしていただければ幸いです。次の山原清子後援会の会合には、彼女と一緒に出席させていただきます。いただき、親しく文身ファンの方々に鑑賞していただいてもよいと考えております。その節はよろしくお願いいたします。

文身ファンの同好の方々と文身や縛りについて、いろいろとお話し合えたら楽しいと思います。特に文身の大先輩である山原清子さんと親しくお逢いできるのは、ほんとうに楽しみです。彼女によるしくお伝え下さいませ。



えす・ふあんたじい

「丘」

久我庄一

リングをざっくりとかじったら
白い実に齒形のあとが血をにじま
せて、鮮やかに印された。私の強
烈な欲望は、そこから再燃した。
私はバスルームの戸を激しくノッ
クした。

「いま出るわよ」

女のかすれ声がした。

「とても待てないのだ」

濡れたはだかを両手で抱くと部
屋まで運び、私は思いきり、じゅ
うたんの上に投げころがした。

紅色の小花が芯を見せていた。

私は歯をあてた。

私はリングの幻想をじかにたしかめる。

△あああ△

銀色の地帯は、やわらかく、そのくせ微妙な弾力があつた。

私は立ち上った。やけに暑い晩だ。カーテンをあけ、窓をひらいたが、風は死んでいた。

だが、夜空には一杯の星が散らばっていた。



熱気に地肌をさらし、一色に
まばゆい輝きをみせ、ぼっかりと
高く盛り上った二つの丘には、淡

文章のかき方

福田久文

◇画家が挿絵をかくとき、いきなり画用紙にさつと墨でかいてそのまま印刷にまわすでしょうか。名画といわれるものが世に出るまでに、何枚の下がきや時として完成寸前のものまでが廃棄されたことでしょうか。魔法の絵筆でさつとできあがったものではありません。天才は努力だといわれます。うむことなくやりなす根気、これがないればいいものはできません。文章をかくときもまったく同様のものです。

◇まずざら紙の片面だけを使い、行間をあけて草書で下がきしましょう。あなたがより正確によりわかりやすくしようとする誠意をもって下がきをつづけられるかぎりこの下がきは、あなた以外にはよいめないほど加除がくわるでしょう。これを今度は行書でもう一度ざら紙にかきなおして草稿をつくりまします。かきなおしてみると、じゅうぶん修正したはずの下がきがまだまだなおす余地のあったのに気づかれるでしょう。ここで辞書をひいて漢字をあてるべきところは漢字になおし、国語の表記法に

したがって仮名づかいなどをみなおす作業をすませます。このあとはいじめて原稿用紙に浄書する訳です。原稿用紙に浄書してからいろいろと修正したい点が出てくるのが普通で、校正、印刷に負担をかけないため、もう一度原稿用紙に書きなおすことができれば、もうし分ないとおもいます。つまり、下がき——草稿——原稿という過程は最少限必要でしょう。この草稿はまた原稿が活字になるまでのひかえもかねる訳です。

◇わたしたちは外国語のややこしい文法や綴字は一生懸命おぼえるくせに、国語のわずかな数千の漢字と簡単な文法をマスターする時間をおしむ傾向があり、これが国語の混乱の一因になっているとおもいます。辞書なしで漢字がかけること、国語の表記法について国文法の知識に基づく一言をもつことは、文筆の専門家だけがもっていることです。この文章は本来の名詞以外はみな平仮名で表記しました。◇これはかなり文章をかいながらの議論でして、初心の方はこまか

「花と蛇」短歌

津治良一

静子夫人――

○ 中腰に柱にしばられズベ公にさ
からいむなく浣腸される

○ 憎みてもなおあまりある川田よ
りオシメ姿をしいられるわれ

○ 屈辱のメンスバンドを腰につけ
森田組への初のお目見え

○ 青竹に足あげひろげ縛られてお
ひろめのよな浣腸のショー

○ 風呂の中森田と田代にはさまれ
てあますことなく足を洗わる

○ フンドシの姿はずかし踊りいる
静子夫人をやじるズベ公

○ 剃りとられあぐらを組んで縛ら
れて田代の責めになすすべもなし

京子――

○ 身をかくす最後の布を引きはが
れ憎き相手に肌を見られる

○ 人の字に足をひろげてそそうす
る前に非情のカメラのレンズ

○ 迫りくる白く冷たきガラス器具
背筋もさむくあつと声あぐ

美津子――

○ 姉おもいだまされながら浣腸の
冷たき味を受くる美少女

○ 縛られし手足もかなし肩胸に吉
沢の口いやらしく触る

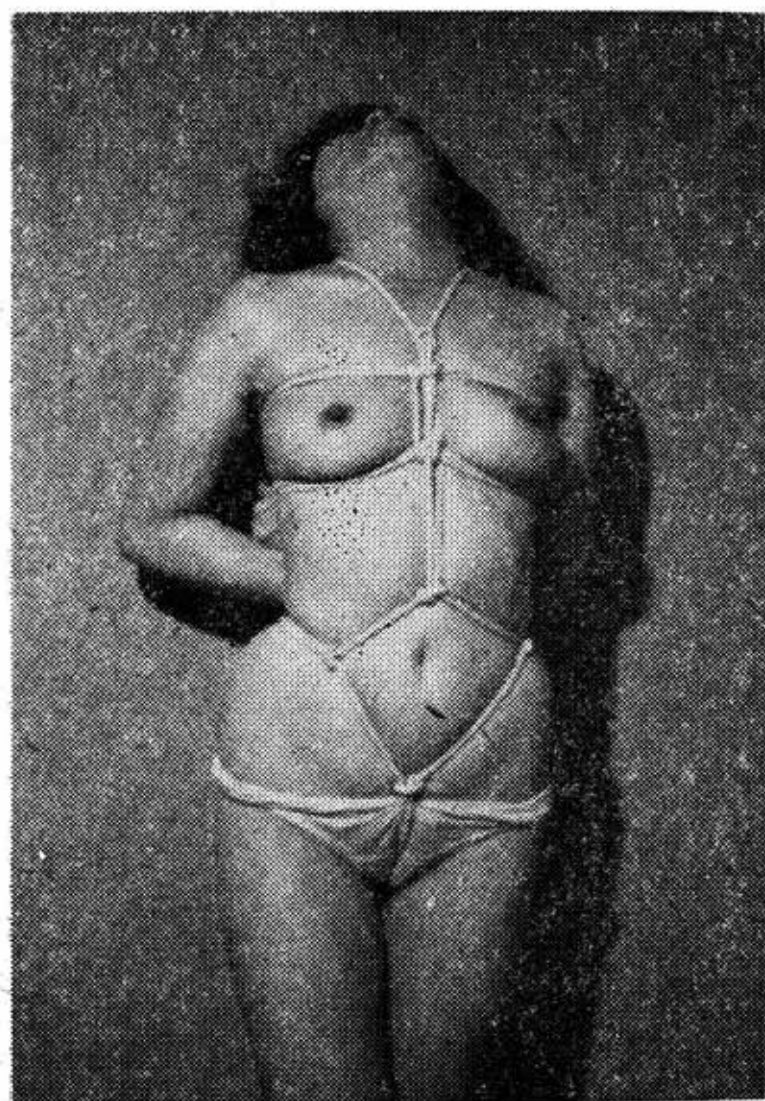
桂子――

○ ズベ公の掟きびしく吊られつつ
銀子のムチを雨のごと受く

小夜子――

○ 塩水を無理に飲まされこらえつ
つ木馬の上で涙流しぬ

○ 凝視する田代の指はまさぐりぬ
餅肌の尻びくとふるえて



「夫婦の緊縛プレイ」

新田英雄

いことは編集部と印刷屋さんにかせて、まず原稿用紙のかき方をおぼえましょう。かきはじめは一字分あける。点、丸、括弧、感歎符などの記号は一字分として字と同様に一駒つかいます。が、行の最後に点、丸、括弧がきたら、その行の最後の字とともに一駒なかへいれておきましょう。改行したらまた一字分あけてかきはじめます。ただし改行して会話の文をつつむ括弧がくるときは、その括弧

は一字分あけたところにつけておけばよろしい。
◇文は人なりといわれます。したわしい人格、みずみずしい個性、ゆたかな教養、真摯な生活、これ等がなくてはいい文章はできません。教養のなかでは、中国の古文を含む外国語の素養が特に大切です。日本語にはない斬新な表現法をしり、また完備したその表記法をみて国語を愛することをしるようになるものです。

ボクの責め方

宝塚二三夫



考えてみればボクのマニア歴も古いものだ。第一次世界大戦のとき化学染料で大儲けをして巨万の富を積んだ俄成金が、京都の祇園で金に糸目をつけずに芸者遊び。この成金野郎がボクの親爺の友人である。そんなところから、ボクもちよくちよく呼ばれて女遊びの手ほどきを受けたものだ。だから十六のころから、舞妓と遊んだり大学もお茶屋から通ったりしたものだ。不肖の子というよりは、親爺に似たドラ息子といったところだ。

第に女性緊縛へと進展していったのだが、なにしろ、その頃は文献といったって、皆無というに等しい。僅かに粹古堂から頒布されていた伊藤晴雨のものがあるだけだった。ボクはこいつを全部買ったものだ。石油箱に三杯ぐらいはたまったろうか。

勿論、日本髪の流れにポイントをおいた惨酷趣味の晴雨調は、ボクの好みに合わないから、すぐに倦いて嫌いになった。只、他にならから集めたというに過ぎなかった。その頃、ボクは数種の事業を経営していて忙しかったが、専ら女性美鑑賞の方へ触手を伸しかけ

ていた。以来、現在まで緊縛した女性の数は、一体どのくらいになるだろうか。

手をふるわせながら、真白くて繊細な手を扱帯で縛った舞妓も、今では結構いいオバアちゃんになっているくらいだから、ボクの縄の洗礼を受けた女性も、ちょっと考えただけでも、空おそろしいぐらゐの数になるだろう。

そのうち、ボクの趣味も、もとに戻って本来の若い女性の足鑑賞へと再展開していった。可愛い受付嬢にストッキングを脱がさせデスクの上へ立たせたりしたのもその頃である。冬の最中である。冷たい事務机の上に素足でじかに立たされた彼女の、真白い足は、みるみる赤く染んできた。



ビルの窓から、こちらを双眼鏡でのぞいていたとしたら、気狂い沙汰としか考えないだろう。

ボクの眼の前で鑑賞を待っている淑子の足、彼女はボクが前々から狙っていただけあって、全く素晴らしい足の持主だった。不動金しほりにあったように、命ぜられたまま、机の上に佇立している淑子のスカート裾を僅かにめくってみた。ビクッと可愛い膝小僧のケイレンがボクの掌に快く伝ってくる。

小雪のパラつく外を歩いてきた冬装束のまま、机の上に立たされてい

る彼女、全く奇妙な姿とい

すらりと伸びた脚線がボクの目の前にある。胫から、踝、きゅっとくびれた足首、甲、桜貝のような足先、ボクは手に触れながら仔細に観察してゆく。淑子は熱いボクの視線を感じてか、とき折り、くすぐったそうに膝を曲げて、爪先立ちになって、踵を机からあげて、ボクはその足の裏へ掌をさし入れて、つきたての餅のような柔らかい感触をたのしむ。爪先立つと胫えくぼが可愛い。

「もういいの、早くおろしてエ」淑子の甘えた声でボクの陶醉は破られた。回転椅子に腰をおろし



に平気いや平気を装っているものもある。そんなのには、ボクは興味を示さない。

顔が万人変っているように、足の表情も又千差万別である。盛装して街を歩いている女性、オフイスで澄まして勤務している女性を見るとき、果して、どんな足をしているか、靴を脱がせストッキングを脱がせたく思う。

嘗て十数人の芸者をあげて馬鹿遊びをしたとき、みんなを集めて「お前達の中で誰が一番きれいな足をしているか、コンクールをやろう。一等をとったものには、こ

てストッキングをはいている彼女の仕草には、もうさっきまでの羞らいはなかった。

素足の羞らい、これがボクの魅力である。着物はそのままにしておいて、足だけハダシにさせると多くの若い女性は、素足に羞らいを感じるものだ。だが、いつでも例外というものはある。一向

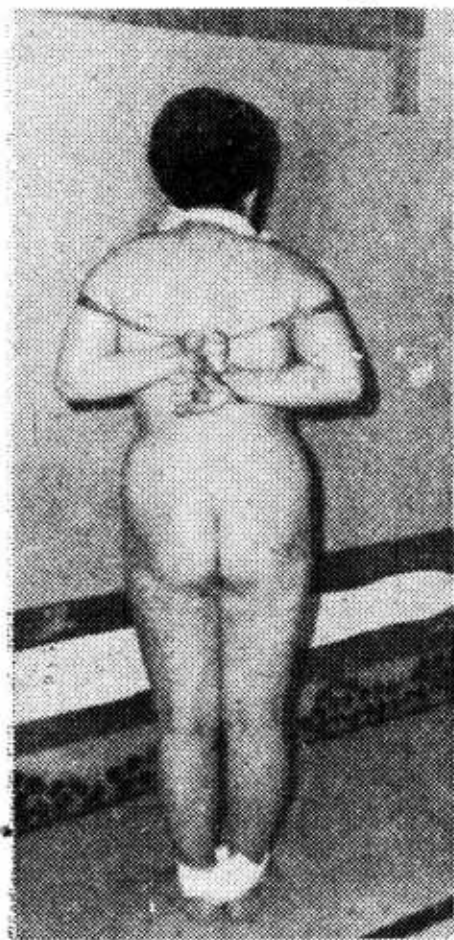
の鱗皮の財布を金の入ったままやろう。さあ足袋を脱いだ脱いだ」

とボクが懸賞を出したところがある。女将も旦那さんのお言葉ですよ、早く足袋をお脱ぎなさい、とすすめるが、仲居をまじえて二十人ばかりの女たち、お互いに顔を見あわせて、もじもじとしている。中には、私は今日は風邪の気味でお風呂へ入っていないからと棄権する始末。

結局、自信があるというか茶目っ気があるというか比較的若い五人の芸者が、足袋を脱いで白い足の皆の前に御披露に及んだのだがさすがのボクも全部手

にとって鑑賞するというわけに行かず、御披露に及んだものの全部美しい足だという判定で、財布の中の賞金は五人に等分に与えたことがあった。

この頃は、もうそんな馬鹿遊びの元気もなくなったので、専ら、一対一か、三ぐらいで楽しんでいる。



マニアの手帖

(花原龍子)

サジスチンからの便り↓ドレイ青年へ

はじめてお便りいたします。長谷川洋子さまに対する安田さまのお手紙拝見いたしました。その可憐な心情に思わず、ほろりとさせられました。宗教にまで高められた女性崇拜の心情は、恐らく男というより、人間として持ち得る最高のものと思います。

普通の男女関係から、その動物性と利己主義を除き、その愛も最もプラトニックに高めたものと思われまふ。ドレイとしては最高の品物でしょうね。私も生来勝気な方なので、こういう男ドレイをひざまづかせ、礼拝させながら征服感を味わいたいです。中学、高校、短大を通じてスポーツのキャプテンをやっており、勤めてからもそうでしたが、この秋から引退しました。そのせいか、一六六センチの身長に対して六四キロと、大分肥ってまいりました。今年二十六才なので、まだまだ若いつもりでおりますが、運動をやめるとやはり肥ってくるのですね。

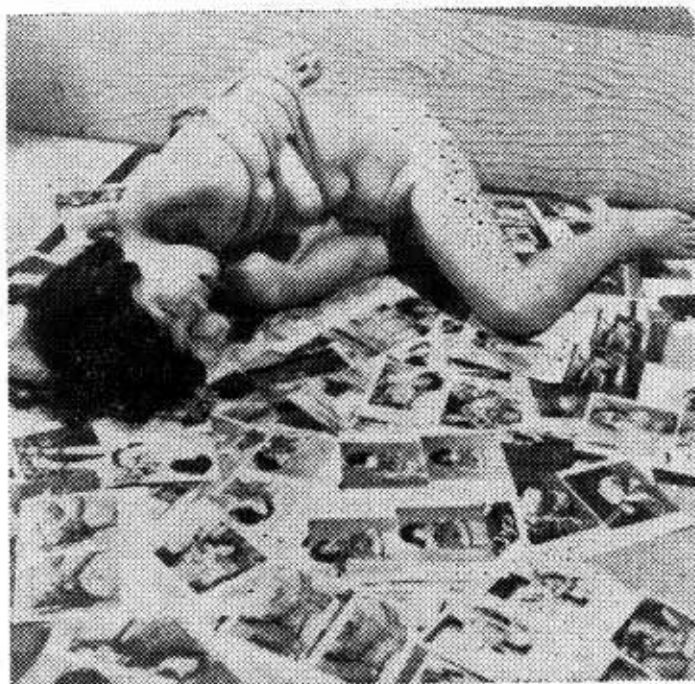
元氣はもて余しております。男

に負けるなんて、断然いやです。男を支配したいのです。会社のお風呂などで、「お姉さまは外人のようですね」と、年下の女の子に甘えられますが、筋肉質のひきしまった白い肌は、自分でもすばらしいと思います。ナルチズムとでもいうのでしょうか。それに、男を自分のお尻の下に組み敷いてみたいというS傾向もあります。

お前にそれだけのスタミナがあるかしら、私の気持はあくまで、女王として気位の高いもので、しばったり、手をかけたたりするようなことはいたしません。女王様はドレイなどにさわたたりはしないものです。気位だけは男などに絶対に負けません。それに手をしばったりすれば、いろんな役に働かせることができます。ドレイとしての面白味が半減するんじゃないやあ

△責写真に埋れて▽

大塚啓子



りませんか。そのかわり、間違っても私の上半身に触れてはなりません。もし無礼なことがあれば、即座に三角の刑に処してしまいます。三角というのは、双の太股と片脚のこむらで、三角形を組合わせ、その間に首をはさんでしめる古式柔術のしめ業で、私の脚は長く特に太ももは、長年のスポーツにより鍛えられていますから、ぐっと伸ばすと、笑くぼのように筋肉のふくれるくらいです。別にしめなくても、少しのしかかるようにするだけで、たいいていの男の息

編集部だより

○昨年中のエロダクションの濫立で制作された作品の数も夥しいものがある。本誌連載小説の映画化△花と蛇▽は、現在大阪ではオリオン座で上映されているので、未見の方は見られたらよいと思う。○スチール写真やポスターを見ても縛られた女性のシーンが比較的多く目につく。一般雑誌の小説でも単行本の中にでも、緊縛とかSM、或はサディズム、マゾヒズムといった文句が堂々と書かれている。流行といえば、それまでだが中には意味をとり違えて使っているのになんか出喰わすと、如何にも一夜漬の便乗といった気味が感じられて嫌味だ。

○過日、芳野眉美氏が、来阪になり、辻村隆氏宅へ宿泊された。いづれ△芳野眉美・辻村隆対談▽がスナップ写真入りで誌上に紹介されることと思うが、編集部としても両氏の今後の健筆に大いに期待したい。

○サジスチン春日ルミ女史が姿を消して以来、SM両刀使いの山原清子嬢が出現するまで、長らくブ



＜伊藤晴雨遺墨集＞

伊藤晴雨

の根はとまるはずで。
若い男をずらりと並べておいて、順番に落していったら、どんなに楽しいことでしょう。気つけ薬はゴム管で公平に配してあげます。これこそ勝利の快感というべきでしょう。さて、二月には試合で東京へまいります（私はOBとしてゆく予定）試合後一日休暇がとれます。サダオ様の気持が気に入りましたので、その間ホテルの一室で飼育してあげてもよろしいです。ホテル代と飲食代だけでよろしいです。但し他に三人ばかり一緒にいるかもしれません。
部屋へ入ったら私は一切動かないのよ。室内での乗物、椅子、座

ぶとんとして使用します。白い木綿の腹巻きとふんどしをしっかりしめてきなさい。すべて優美に清潔であること。入浴のときは腰かけにしてお湯を使いますから、うっかり目をあけると、石鹸が目に入って大変な目にあいますよ。
食事のときは、そばにつないでおいて私がおいしいところを食べたカスを吐きだしますから、カス入れとして、いつも口をあけて待っているなさい。新聞を読んだり手紙を書くときは、椅子になるのですよ。テレビを見るときは、ざぶとん代りになるのですよ。汚ないものを食べさせたりする趣味はありませんが、紙を用いず一切湯で

洗う習慣ですから、後しまつはぬかりなくするのですよ。
すべて優美にドレイとしての義務を果して下さい。私は無論女王として清潔に優雅に、そして力強く行動します。プレイは別に音楽に合わせて何時間でも、お前のスタミナの続く限り激しく責めてあげます。夜は脚が疲れますので、マツサージをしないさい。足ゆびや足裏は舌で掃除をしてもよろしいが、爪や甘皮は食べてしまいいない。いろいろ注文をつけましたが私はそんなにひどいS型ではありません。只拝まれたい、征服したいのです。

ランクをかこっていたMフォト界のクインとして、今回絶世の美女の登場を見た。本誌の熱心な愛読者である彼女が、果してどのような登場ぶりを見せるか、M男性モデルの志願者が殺到している現在必ずや瞳目の活躍ぶりを見せることだろうと期待する。

○好評の辻村隆氏のハカメラ・ハントVは、豊富な材料を得て、益々快調！これからの誌上を花擦乱と飾ってくれることと思うが、それと呼応して、美貌のサジスチンのフォト入りの手記が誌上を賑してくれば更に楽しい。

○黒淵賀集子夫人のフォトを掲載してもよいと頂いていたが、先には正面のものを掲載させてもらった。他にも保留したものがあるので機会があればごらんにいれたいと思う。座談会での回覧も許可されていたのだから、誌上公開で広く読者のごらんに入れた。
○今月号の「カメラ・ハント」ハ断層の女Vで辻村氏から梨花・伊吹二嬢のコンビ・フォト数葉のネガ提供を受けていたが、種々の配慮から掲載を見合せた。氏が非常に残念がっておられたので、その旨特にお断りしておく。

感想 最近号の読後感 黒田 寿

一月号二月号拝見しました。どうやら新しい年はますますイバラの道となりそうですね。

私は仕事のため、しばらく南米に出張することになりました。その間、奇クともお別れするわけですが、最後にのぞんで勝手なことを言わせていただきます。

最近殊に残念なのは、相手を傷つけるような批評がでてきたこと

舞
奴



です。論争なら、まだよいでしょう。それが愚作だとか、読むに耐えぬとか、きめつけるのは、どんなものでしょう。

私が現在勤務している会社でも自分の△係△についてなら、経験も自信ももっております。しかしこれが△課△△部△とひろがるとあやしいものになり、まして他の会社のこととなれば同業者であつても白紙同様です。

SMといっても無数の種類があり、そのうち同一趣味者のなかにも大学院から幼稚園までの差があります。奇クへの投稿者はすべて奇クを愛する人達でしょう。それが自分相応

の力をこめて投稿するので自分の趣味にあわぬという理由で中傷するのはやめようではありませんか。

幼稚でもよいのです。迫力と苦悩などむつかしいことは私のように殺人趣味にのみこみ固まり、しかも新入生にすぎぬ人間にとってはなくともよいのです。幼児に哲学書は読めません。しかし大人も子供のたどたどしい言葉を笑わないで下さい。他人の投稿をそのまゝ引用し、それをひやかす気味の批評を加えるなど、まるで弱いもののいじめではありませんか。

私は奇ク誌上の作品について、好きか嫌いかは言えるのですが、良いとか悪いとかいう力はとうていありません。すべての部門にわたっている全投稿家に対する寸評など、いかなるオールド・ファンかは知りませんが、私にとっては超人とは思えません。

私自身、二百三十余頁のうち、見ごたえのあるのは毎月十頁位しかありません。しかし、それでも満足しています。欲をいえばきりがありませんが、種々の制約がある以上、止むを得ないでしょうから。

ますます勝手なことを言わせて

もらえば、現在連載されている長篇は、すべて十頁位に制限し、同一投稿家は一篇のみとする。その分で、できるだけ多数の投稿を採用したらどうでしょう。特に前月に予定した作品は、どんなことがあっても掲載したいものです。夜乃、木戸川両氏など、他人はアチヤラカものと考えているようですが、私は△好き△な作品です。しかし、毎月三、四篇も姿を見せたのでは、ヤッカミたくなるのも無理はないでしょう。あらゆる傾向の、あらゆる程度のもの、すべてを満足させるのは至難の業ですがそこは編集部の方識に期待しようではありませんか。

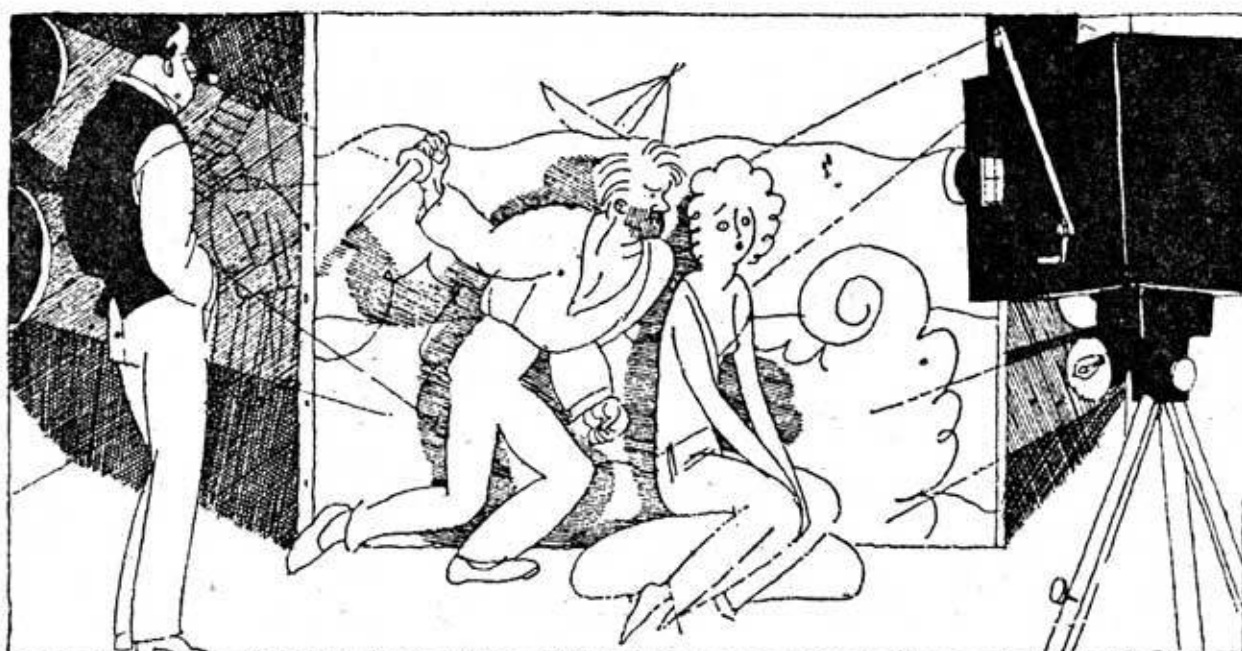
もっとも編集部もおかしいことをやりました。フオトの略号の問い合わせに対し、旧号を見ろといわんばかりのそっけない返事が一月号にのっていました。その旧号はどこにあるのでしょうか。今月号から読み初める人もいるのですから、もっと新しいファンを大切にしたいものです。では、殺人にしか興味のない変りもの黒田寿。立つときにちよつとあとを濁して南米へ参ります。さようなら

(一月六日、福島にて)

奇譚クラブ

昭和41年3月号

(1966年・3月号 <第20巻第3号・通刊212号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



「続・アブ談義」

久我庄一

○

書きたい放題に、ペンを走らせた「アブ談義」十一月号掲載が、△読者通信▽十二月号の広島・所沢弘氏に「こういった放談は楽しいですね」と、おほめのお言葉を頂いた。また同ランの福島・黒田寿氏にも「私の仲間に加わっていただけますか」と、未完の「久我流立川文庫・忍法女忠臣蔵」を評してもらった。私は頭の痛くなるような伝記物も書くが時たまメチャメチャなデタラメも書きたくなる。いわば破目はずすというわけだ。「マゾヒスト・古川裕子メモ」で苦筆したので、また続きをやってみたくなった。気楽にお読み下さい。いうなればSMマン談というところか——。

○

△奇譚クラブは次第に「奇譚」の名に恥じつつあるようである。こんなものが「奇譚」であるべき筈がない▽とか、△K誌は風俗雑誌である▽それなのに現代風俗が少ないというようなマニアの声（世相診断室・木戸川健）がある。この答えは簡単である。もっと△奇譚▽を（現代風俗）を書けばよいのである。ただし、木戸川氏の発言には、ユーモアがある。悪書とよばれる奇クに実にまともな話が載って、他誌に悪書的なワイゼツさが感じられる——こういう諷刺だ。奇譚、風俗といっても△美▽がなければエロになる。このへんのカネアイがむずかしい所。これさえわかればもっと奇譚クラブも刺激ある物が出るべき

だろう、いや必要だ。

その点、柴鍊の眠狂四郎など、エロと耽美のストレスの一線をふまえて良識ある人種から、けっこう現代のストレス解消などもてはやされ、まったく小憎らしいほどの達筆である。

彼はよく△秘所▽を文中に出すのがオトクイのようだ。いま、この書物が手もとにないが、美女の秘所に花一輪をさし込み、抜く手も見せず花を斬るなど小道具の使いわけはあざやかだ。とにかくエロ寸前が眠狂四郎の神技によってさわやかな余情を残す。S小説も剣道でいえば△残心▽は必要か。そう、白昼美女が公衆の面前で全裸になる。これも狂四郎の一颯で、身体に刀がふれず着てるものだ

け斬られるというオマケがあつてワイゼツさはない。

さて、風俗と奇譚を書こう。早い話が犬もあるけば——では無い。久我もあるけばだ。

駅裏のパチンコ屋で百円ばかりゆびの運動をし、あげくはパアとなり、その近くの『バー』に入った。ちゃんと定価表は入口に明示されている。ハイボールは一杯六十円。私は三杯のんで千円を取られた。昭和四十年は十月の相場である。『ハイボール一つ』とまず注文すれば、だまつていてもピーナツとコンブのような物がお皿に盛られてくる。これが曲物。あたいにナントカおごつてよ」と、手など女給がにぎってくれる。

——近頃は女給さんたち、洋装よりネダンも手ごろ、ぐうーっと顔も引立つと思つてか、みなアセテートの五、六千円級のきものをお召しになっている。これは金紗とか御召など違って色彩がきれいに染め上るというせいもあるが一段とセクシーだ。特に彼女らは生地の薄いのを着るからオッパイのあたりがフンワカと眺めよく、その分、チップも倍増ということになる。タッチした感じも上等。男たちはゴキゲンである。着物のえりもとを少しはだけて、白い肌には、ネックレスがキラ

キラ。これは女給さんのきもの風景。えり足を見せ、むねもとはキチンと、これは芸者さんなど（お座敷では駄目。後でシッポリ、四畳半？）。得てして芸者さんは酒席では武装完備？

ところで本番といこう。私の入ったバーの近所に成人向専門映画劇場がある。それで「男が責めて、女は責められる。スリルあつてよいもんだ」

私はしゃべる。

「まあ、ヘンタイね」

お相手に出た女給さんが二人、異口同音にさげんだ。

「君たち、その映画見ないの？」

「好きよ」

「それなら道徳ぶるのはよせ。よし一例を出そう。恋人に何かの機会で頬をうたれる。彼氏は去って行く。あとに残された君の目にふと月が……、そんな場合、どんな気持だね」

「じーんとくるわ。男がたのもしくなる」

「受け身つて、そんな気持が本当さ。それも相手にほれた場合は」

十九才とかいったいやにハトムネの娘が、急にすそをひらいて、ふともものへんをこひろう。みみずばれが一筋。

「浮気したって彼氏に斬られたのよ。その時痛いというより、血を見てヘンな気持になった」

——ここで私はK誌の受け売り、SMをわかりやすく説明した。

また余分な金があつたら、このバーにこようと出た。プレイとまではいなくても、スリルは味わえそうだと思つたからだ。

○

美女の生首がスポン、スポンと斬られ地上に真赤な花が咲く。空想したり、書いたりする分には耽美な芸術であり、罪のない大人のおあそびと思うのだが、オシャモジのオバサン連や、ナントカ審議会のオジサンたちから△はなはだしく粗暴△とか、△異常性欲△など持ち出れるから弱いんだ。紙芝居やマンガなど、奇クに出てくるより数倍、スリルなんだがね。まあ、そんなことは△豚に真珠△とスマシテ、一丁、超芸術的な生首斬りをやらかそうか。

真夏の太陽。ヨットをうかべて、飛込台の下に待機する。ビキニ・スタイルとかいうのかね。オッパイとあそこをかくし、可愛いヘソが笑ってる。そんなあの娘やこの娘が、ピヨンと飛上って波間めがけて落下してくる。

そこを居合斬りの要領よろしく、スパッ、スパッと、首をはね上げる。しばらくたつと、ことしやカボチャの当り年じゃない。生首のオンパレード。ユラリユラリと海を血に染めて――。

×

元禄の花見踊りの真最中に、コマ廻し流の達人、のびたサカヤキ淋しくなでて素浪人がふらりと現われる。大太刀をスラリとぬき、ブンブンコマの如くふり廻しつつ、花よりもまた美しき腰元達の間を右に左に自由自在に走りまわり去って行く。

その後には、五・六十の美女の首がハラハラと落ちる花片を浴びてハサクラ、サクラVとコーラスをする。あまりにもすばやい斬り方なので、彼女たちは、首を斬られたとは気付かないのだね。(まったく久我式このデータラメさよ)

×

バカ殿様が、月にうかれて美女のためし斬り。

「一人二人は面倒だ。そこに並びおろう」

哀れなギセイ者が十人ほどかしこまる。はじめはマッコウカラ竹割り。

ズブリノ 右と左に身体は二つとなって両

側にバタリ。血は空間に飛び散って、夜空に真紅の花火を描く。ハイ、落つるは春雨となつて濡れるもオツなもの。

お次は、ドーナツ式は輪斬りとゴザイ。さつと、横にはらって、上と下との生き別れ。

三十八度線のこなたで、美女の首がウラメシヤ。あなたでは胸と足とでフラダンス。

三番目の花チャンは、すそを乱して「あれーい」と逃げけうと背をむける所を、ピュンと一閃。これヶサ斬りとござい。肩先からハスメにザックリノ返すヤイバで前によるめくところを、ボンと首をはねて

「次の者、そこになおれ」と殿様、ますますハッスル。

四番目は番茶も出花の白肌しらはだにおう匂子さん。これはいっそう芸術的に、ポインとけとばし、赤いけだしがヒラヒラする所を、下から上に刀をはねあげ左右に二回。ピュン、ピュンとすばやい太刀さばき。人間サシミが一丁出来上り。

(これどんな風にサシミになったのかね?)

次は裸にして、ハさんさしぐれVでも踊らせて、殿様は自源流のかまえ。太刀先を天にかざし、気合もろともかけよりさま、イエッノ 美女は立もなくそこにくずれる。

六番目は、すばやく首をはねあげ、地に落んとする寸前、もう一度斬りつける。西部劇顔まけの秘術ノ 少しかれた。殿様ではない。書く方がである。またの機会に。

○

いま同人雑誌形式がうんぬんとか、けっかうマニア雀がさえずっている。なんであれK誌が続刊されることは、けっかうじゃないか廃刊では実もフタモない。ところで同人雑誌的とはいまにはしまったものじゃない。昭和三十九年七月号のハ奇クサロンVの冒頭に、「本誌は同人雑誌か」とチャンと編集子、おしゃべりしている。「八方破れの雑誌なので。皆様突然、「今日は――」といって顔を出したとしても、一向に不思議ではないといった下町の井戸端会議のような雑誌です。だから浴衣がけでもいいし、フンドシ一丁でも誰も笑う者もいません。一流だとか大家だとか言って威張る人もおりません。和氣霽々として機会はほんとうに均等なのです。胸襟を開いて語り合える共通の広場が、このささやかな小冊子の中に温かく息づいています。中略―このような意味なら、本誌を同人雑誌として見ることは賛成です。」といっているのに、いつのまにかハ同人雑誌的Vという

言葉が、"どうもベテラン諸氏だけが独善的（独善的かな）に思い入り"とか"特定の読者や寄稿者だけのオナニーの場"とかおかしな表現とスリ変って使われ出してきた。だれもが、編集子の言葉のような意味で言ってるのかと思つてたら、いつのまにか急変している——これこそ奇譚である。

○

奇譚といえ、近頃の世相風俗が「奇譚」にみているので、とまどうことがままある、いま、映画はテレビにくわれて大変こまった状態であるといわれているが、同じ映画でもセックス路線は大入袋という手放しでホクホクよろこぶはんじょう振りである。また、過

日、東映封切館を見に行ったが、丹波哲郎とかの「弁慶」の予告編が写った。あれ、こんな映画近日上映？それにしても休けい室のどこにもポスターは見られなかったがと首をひねると、これ東映制作のナントカ・チャンネルはテレビの番組御紹介だ。

映画ばかりでない出版界もちょっとおかしな風潮がある。K誌はこの所、△制約△という言葉がお家芸のように何かといえ一発ぶたれる。たまに「異常」などという表現があるとドキリとさせられる（ホントだよ）。ところが健全なる万人のためのゴラク雑誌を標榜していた筈と思つた「小説現代」「オール読物」などが盛んに△異常△特集、△性△

女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌受読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬そ

の他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部△

特集とキャッチフレーズも忙しくデカデカと広告している。雑誌は世相を映す鏡だから、これも方便でよいのだろうか……。

ああまったく何度もいうようだが、奇譚クラブに△奇譚△がほしいね。カップブックスで売り出した光文社で「宝石」が二号まで出た。この雑誌のグラビヤには、若い娘さんの生れたままのお姿が毎号（といっても二回だが）サービスされている。題して「女の字典」だよ。芸術だからよいのさ。いいオッパイしてた。最も芸術に苦心しているK誌はグラビヤとオサラバ。これをどう考えればよいのか。

一步、街に眼をむけると白昼、オバケが出たのかとドキリとさせられることがある。あれ、なんという髪の高さ。カミの毛をアップにして、顔より髪の高さが面積ある。それで化粧もドーランでツケまつげ。服装も流行とかで、どなたも同じようなスタイル。——美女とすれ違う。すこしあるくと、また同じ女がやってくる。横丁から同じ女が。これは忍法だね。私は一人の女の変化かと、ビツクリさせられることがままある。

木戸川氏の世相診断なら、おそらく個性なき現代女性の風俗図とでも評しようか。流行

もよいが、こう右へ並えでは男の方がサッカ
クおこして審美眼がどうにかなってしまう。
セーターもハチきれんばかりのOPPパイにほ
れて結婚したら彼女はパットでおまじない？
をしていたなどんだ現代野郎の純情奇譚。
彼氏、タッチもしたことなかったのかね。ま
さか、「結婚までは見るだけタダよ」とは、
彼女はいわなかったらうに——。

○

身体の健康のためと、近頃になって八日本
舞踊Vを習いはじめた。私は女を責めたい方
であるが、このケイ古場では責められて？
楽しいという変な気分を味わされつつある。
どだい一人の人間にSとMとが七・三位ある
というようだから、Mの方がたまたま顔をも
たけても特記すべき現象では無いのだろうが
——。とにかく久我庄一の生活は、踊りの世
界ではM。それ以外はS。そんな近頃を送っ
ている。

私はめったに着物などきたことが無かった
が、はじめて踊りの先生に弟子入りして持参
の着物をきた。白足袋をはいて、かしこまる
と、妙におとなしくなってしまうから不思議
だ。踊りは女が十に男は二位の色分けが普通
だろうか。私は花園の中に迷いこんだように

片隅で小娘たちの黄色い声を耳にして、どう
もくすぐったいような照れた気分になった。
借りてきた猫みたいである。

「ねえ、オジサン、レコードかけてよ」

十八位の赤いウールのひとえを着た娘が私
にぶえんりよな言葉をかける。会社では「お
い、K子君、お茶をたのむよ」の方だった私
も、ここでは、「ハイ、やらしてもらいまし
よう」と中年づらを変にくずして、いそいそ
とプレーヤーのそばに近づくから面白い。私を
紹介した若い奥さんも普段は上品にふるまっ
て、ちょっとしたすその乱れも気にしてなおす
のに、ここでは私の前で平気というより自然
な動作でスリーマーをみせ着物を着替える。
さて、踊りを習うことになったが、いつも
はステコに半裸体という姿で、男子はこれ
にかぎると入浴後など家の前に出て空を見上
げる方なのに、ちょっとすその方がひらくと
妙にはずかしく気になるから変だ。

若い先生（女です）に、この所をこうやっ
て、ああやってなど手取り、足取りさせられ
て振付をしてもらうと、子供になったように
いちいち「ハイ、ハイ」と神妙な声がでる。
間違うと、この先生。センスで、ポンと私の
肩をかるく叩いて、メツと色っぽくくらむ。

身体中、ゾクゾクする。センスでなくて棒で
たたいてよ——と、まことにハラの中でおか
しなことを期待する。帰宅すると、その反動
か？、深夜、家内の陽子をビシビシと教育？
（プレイ）して、責め上げる。こんなことっ
て、どうだろうか。まことにセックスとはお
かしなものだ。

○

八木山の自然動物園に行ったとき。ライオ
ンとかチンパンジーなど見てるうちに、S的
空想がとどめもなく広がった。

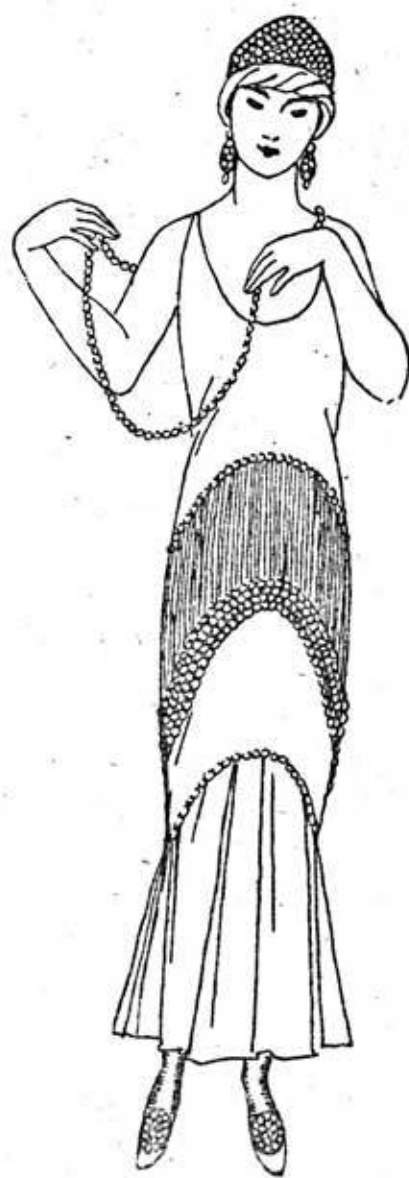
大塚啓子さんを後手にくくりチンパンジー
のオリの中に入れる。チンパンジー君にむち
をもたせてけしかけたら、どうなるか。

梨花悠紀子さんを、さかさ吊りにして、下
でライオンや虎を吠えさせる。象のハナに口
ープのハシをからませ、裸身の美女を振りま
わさせる。

猛獣たちが放し飼いになってる上に一本の
綱を張り、少女に綱渡りをさせる。生か死か
の大スリルだ。

——猛獣とモデル嬢たち。何かよい分譲品
が出来そうだが。またS小説。告白なども、
新しいジャンルが開拓されそうだが。

(完)



のおと・あと・らんだむ (二)

千草 忠 夫

三、江戸川乱歩私見

久我庄一氏が十一月号に発表された『江戸川乱歩』論を幾度も読み返して見たが、結局何のことか判然としないままに放り出してしまった。どうも、持ってまわった言い方で、いっこうに要領を得ない一文だったと断定せざるを得ない。

氏はあの論文で、何を述べたかったのか？ 乱歩の中の『ハイド氏』（実は、これが実に

アイマイな言葉である）を追求したかったの
であろうか？

若しそうなら、乱歩の全作品を読めば、よ
っぽどカンの鈍い読者でも了解できることで
事さらにあげつらう必要はなさそうである。
乱歩は明らかに探奇、猟奇の趣味があった。

若しハイド氏の性質を究めたいのなら、乱
歩の全作品から抽出したサンプルを、分類す
ればよい。

とにかく、どうもよくわからないのである。

このイライラが筆を取らせる事になった。

以下書くことは全く何の傍証もない、私の
頭の中で作り上げた推理である。ベッド・デ
ティクチブもいいとこだが、参考文献をほと
んど持ち合わせていないので仕方がない。

乱歩を考える場合、私は必ずといっていい
ほど潤一郎を思い出す。文学の筆を取った時
期も大して違わないし、同じような好みを持
っていた。その好みというのは、大ざっぱに
言えば、猟奇、耽美ということになるのか。

両者とも初期の短篇には共通したものを多
く示していることでも、その事はわかるのだ
が、根本的に違うのは、乱歩が探偵小説とい
うことを自分の作品の中心に置いたのに対し
て、潤一郎はいわゆる純文学に籍を置いてい
たという点である。

両者のこのウェイトの置き方の違いが、後
に両者の道を分つことになった。

潤一郎の大正五―十年あたりの短篇に探偵
小説的なものが多いのは、よく知られている
が、これはあくまでも潤一郎にとっては、自
己の進む道に対する模索のあらわれであって
その道を一本に深く突き進むためのものでは
なかった。

ところが乱歩は違う。探偵小説家になるこ

とが、彼にとって至上命令だったのだ。当時「新青年」を通じて紹介されつつあった外国探偵小説を読むにつけて、乱歩の野心は燃えさかたに違いない。「よし、おれは日本のエドガー・アラン・ポーになってやろう」

乱歩が開拓者として当然のことながら選んだ道は、ポーの「モルグ街の殺人」「マリーロジェの秘密」「盗まれた手紙」の後を継ぐ道、即ち「本格」探偵小説であった。

久我氏は「一寸法師」後の休筆期間を、ハイド氏の問題としておられるが、私はそうは思わない。それはハイド氏などの問題ではなくて、表看板のジギル博士の問題だと確信する。日本探偵小説の先駆者たんとする決意と自分の好みとの乖離。これが最初の本格的長篇『一寸法師』を書き続けている間に、どうしようもなく大きな口を開けて来たのではなかったらうか？

自分の筆がどうしても、江戸時代の錦絵、無惨絵、怪談等の影響から抜け切れず、陰微な世界に引きずられてゆくのを絶望的に感じていたに違いない。ところが一方では、英米の黄金時代の作品が続々と紹介されてくる。ヴァン・ダイン、エラリー・クイーン、バーナビー・ロス、アガサ・クリスチー、フリー

マン・クロフツ、等々。乱歩はこれらのきらびやかな作家の傑作に接して、深刻な絶望にとらわれずにはいらなかったらう。乱歩の野心が大きければ大きい程、この打撃は大きかった筈だ。

しかし生きて行かなければならなかった。乱歩はここで妥協をよぎなくされたのだ。理想は高く持ちながら、世間が自分に与えてくれた「怪奇小説家」のレッテルを逆用して生活にいどんでいったのだ。乱歩が探偵小説文献と、探偵小説（特に外国）の研究に力を注いだのは、生活のために満たされなかったものを、これでもっていささかなりとも満たそうという気持ちがあったからではなかったらうか。

以上ざっと私の乱歩観のアウト・ラインだけをたどって見た。もっとくわしく論ずれば面白いのだが、本誌の性格から逸脱する危険があるので、久我氏の論文中最も疑問を持った点に関係のあることについてのみ述べた。（ただひとつだけ言いそえておきたい事は、ポーがのたれ死にし、乱歩が不本意な妥協をせざるを得なかったのには、もうひとつ、時代的背景が大きく作用しているということである）

乱歩の影の世界をとらえるには、SMの立場からではなしに、探偵小説家として追求する方が一層効果的だろうということを最後に言っておきたい。

四、相互理解は可能か

一月号で夜乃探郎氏が、芳野眉美氏の神酒願望を理解するために、すすんで一女性のそれを味あわれたという一文を読んで、私は深い疑惑にとられた。

夜乃氏の探求精神の旺盛さを賞讃するのにやぶさかではないが、私が最もおそれを抱くのは、この世界にあつては、そのような探求精神がほとんどなんらの実りをもたらさないのではあるまいか、ということである。前にも書いたことがあるが、この世界ほど「好み」がものを言う——「好み」によってのみ成り立っている世界はない。このような世界にあつて、果して相互理解は、単なる体験によって可能となるであらうか？

まず、奇く最近号の読者通信から例を引いて見よう。

「私は長い間女斗美は限り貴誌を愛読して来ました」

「葉山様、手記『私と私の周辺』大変面白く

読みました。私もヴァギナよりも、アヌスの方が（女性の）魅力的であるとの説、共感です」

「読者の方へお便りを書いている今、私はそのダンロップ総ゴムのプチプチした真新しいゴムカバーをおしめをせずに肌に直接着用しています」

「小生、若い女の方のお尻の下に顔をしかれいやというほどその臭気を嗅がされたり、小用のあと始末に使われたチリ紙に深いあこがれを持つM男です」

「首のとんだ瞬間とか絞首されて完全に吊り下った場合、及びハリッケ、火あぶりなどの処刑中、処刑後の場面が私の望むところなのです」

「私は三十才になるM傾向の者です。手足を縛られ束縛された上で鞭打ち、アヌス責めエネマ、尻に敷かれこずき廻される事を生甲斐としています」

「小生もパンティファンです。美しい人の肌に太腿にピッタリとひっついていて白のピンクの……パンティ、どうか奥様の穿いておられたパンティを私に譲っていただけないでしょうか」

「僕は、あまり縛っている女の姿は好みませ

ん。しかし真赤なネルの腰巻はマニヤと云える程好きでいろいろ集めています」

「もっともっと美しき女性の鼻を囁く写真が欲しい」

（以上の引用は、奇ク十一、十二月号から取りました。いちいち氏名は記しませんでしたが、御了承下さい）

まことに百花繚乱の多彩さである。勿論、すべての読者通信が孤立し、それぞれの好みを、主張しあっているというのではない。呼応、共感の表明等は、好みの多彩さに劣らず多く見出される。だが、少なくとも、ここにあげた幾つかの通信に対して、私は共感も持ち得ないし、ひとつ実験してやろうという気も起らないのは、何とも動かしようのない事実なのである。

だからこそ、それをあえてした夜乃氏の実験は貴重なのだ、と人は反論するかも知れない。が、私は、氏の実験を尊いと思いつつも、それが無意味なものに終るであろうことを残念に思うのだ。実験精神は、自己の好みの分野で行なえばそれでよい。他の領域にまで足を踏み込む事は、実験ではなくて好奇心に過ぎない。好奇心だけでは建設的な何物をも生み出し得ない。

前の「花と蛇」論にもちよつと触れた事だが、奇クの愛読者をもって自任する程の人たちは、みなそれぞれ好みのスタイルを持ち、そのスタイルを形成する要素になるものとして、なんらかのシンボル——エロチシズムのその人におけるあらわれ——をそれぞれの心の中に抱いている。私はこれをキリスト教にならって、エロチシズムのペルソナ（存在様式）と名づけたい。即ち、ペルソナとは、我々のリビドーを触発する外界の刺戟の形式である。

盲人たちが象をなでて、象が何であるかを判断する。あの有名なたとえ話を思い出してもらいたい。象がエロチシズムである。盲人たちは象のほんの一部分のあらわれ（ペルソナ）を、真の象の姿と思い込んでしまう。その盲人にとっては、自分の手に触れた部分が象そのものである。以後その関係（手に触れた部分＝象）は彼に固着してしまう。それはほとんど妥協をゆるさないまでの頑固なペルソナとなる。

このような頑固なペルソナを持った人たちの相互理解は——といって誤解をまねくとするなら、相互のコミュニケーションは、果して可能であろうか？

現在の奇クの論壇のあり方では、私の結論は否定的にならざるを得ない。昨今、奇ク論壇の私信めいた言葉のやりとりに対する非難がようやく大きくなって来たのも、その一つのあらわれではないかと思う。ただ賛成反対を叫ぶだけでは馬鹿にでもできる。異なったペルソナを信奉する者が或る事柄に賛否を表明するとなると、それはほとんど気違いざたに近い。

では、コミュニケーションは絶対に不可能なのであろうか？

私はそうは思わない。奇ク論壇の現状では不可能だが、突破口がないわけではない。そして、その突破口はただひとつ、各自のペルソナの奥にあるものに眼を向けることだ。ペルソナの本質に肉迫することだ。現象より本質へ——本質は遂にあらゆるペルソナに共通したエロチシズムに通ずるであろう。そこにはじめてコミュニケーションを可能にする空間が開けよう。

色立体というのを、御存知だろうか？、色彩の明度を縦軸に、その周囲に各色相の色を放射状に並べて、あらゆる色を規則的に配列したものである。それはゆがんだ球形をなしている。

十人十色のペルソナを持つエロチシズムの世界にも、エロ立体とでも言うべきものが作れないであろうか？それには各自が自己の感度曲線とでも言うべきものを作成する必要がある。そして各自がその感度曲線を持ち寄った時、意外にその曲線の裾野が大きく重なり合っているのに気づくことであろう。そこが私の言うコミュニケーションの広場である。

現象から本質へ、病理学的観察から自己肯定的世界観の確立へ。この方向にのみ、我々の相互理解は可能であろう。

五 芳野眉美氏へのお願い

毎号「濡れにぞ濡れし」を興味深く読んでいる者ですが、ただひとつだけ、いつも不満を感じることがあります。それは一言でいえば、あなたの文章があまりにもソフィスティケートされているために、鈍感な田舎者の小生には真意を取りかねる場合がしばしばあることです。そしてこのソフィスティケーションから来るミステイフィケーションが、あなたの文に答える人たちの文章にまで反映して奇ク誌上は、どこかクロバチックな言葉のやりとりで墮してしまったということがない

でしょうか？

あなたのお書きになる小説（又は告白）はほとんどが会話のみで成り立っています。それと同じように、お書きになる論文も多くは他の人の書いたもの或は言葉の引用が大部分を占めています。例えば十二月号の「ワルプルギスの夜」一月号の「サド侯爵夫人」「悪魔と神」など。

この方法は、ミステイフィケーションというより、神酒党であるあなた、或はあなたが神酒党であることからくる必然的な方法であるのかも知れません。他者によって自己の存在を主張する——といえはおおげさな表現に過ぎるでしょうか。

しかし、私はやはり不満なのです。あなたの本当の声が聞きたいのです。

例えば、「ワルプルギスの夜」の最後の所で「『ファウスト』を観ながら、私は、私なりに『行為』と『性』と『悪魔』を結びつけてみました」と書いておられますが、私の最も知りたいのは、どう結びつけたか、ということなのです。

又、「悪魔と神」では「そしてサルメルのメッセージにある『なんの意味も持たない』という言葉が重くのしかかってくる。私なり

の理解では、そこに『無』しかない』としてありますが、このサルトルの言葉が、あなたの捧ずるペルソナ（この言葉を使うことをおゆるし下さい）と、どこでどのようにかわりあって、どのような結論を生むのか、その所を一番知りたいのです。

私が前節「相互理解は可能か？」で主張したことも、実は、あなたに対するこのような要求——普遍的な思想が、ペルソナとどのよ

うにかかわりあうか——に根ざしているのです。

あなたは「生活に立脚したSM現代小説」とか「強烈な現実の告白文や手記」とかをしきりに主張され、倉橋由美子の「聖少女」に「こういう小説は、えてして、精神的遊戯になりやすいものだから」と、不満をもらしていられることでも推察されるように「現実」ということを非常に重く見られているようで

す。それは感覚的美の尊重ともいえるでしょう。あなたの小説（告白）の文体にも、それがよくあらわれていると思います。

私がお願いしたいのは、その瞬間的な美感の中に生きる自分を、ひとつの思想の中に定着することなのです。

私はお読みになる文でお判りの通り、実行派ではなくて空想派に属します。そして、ペルソナの思想化——とでもいったことを目標にしています。（この事については、又、触れる機会もあると思いますが）私にとって、現実の抽象化、思想化、体系化は、自己肯定更には自己的世界の確立のために不可欠なのです。サルトルの言葉をかりれば、自分が神となる為に——とでも言いましょうか。

あなたには、そのような要求が全くおありにならないのでしょうか？

これらの問題を通じて、SとMとの相違が思想的な面で、明らかにされはしないでしょうか？

私がおあなたにお願いしたいのは、つまりこのような問題を論ずる場に降りて来てほしいということなのです。

（おわり）

女性切腹（時代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求め、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものですが、今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

女性切腹（現代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を發表して斯界に独特の新风を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性が絶對命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定し、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

ポケットブックに発見した

M的小説クライマックス紹介

河津安春

「畜生の願望」 ベガ文庫

農村の生活に飽き足りぬ青年、チャーリーは、父や許嫁の引き止めるのを聞かず、町へ職を探しに出かける。ヒッチハイクの途上、町で電気器具店を経営するヒューバート夫妻の車に拾われ、そこで働く事になる。主人のヒューバートはすでに六十に近いが、妻のローラは後妻で、まだ二十七、八才の肉感的な美人である。

青年が働きはじめて、漸らくすると、ローラの悪魔のような誘惑が始まる。主人の留守

を見計って、ピンクのキモナのまま、店に現われる。眩しい程、輝いて見える美しい姿に青年は戦慄する。

……ローラは唇に薄笑いを浮べて青年に近寄る。

「チャーリー、お前、どうして、そんなに震えているの？熱でもあるの？」

ローラが俺の側に膝をつくと、キモナは滑って、真白い脚が露わになった。柔かい、良い香いのする両手が俺の額にあてられ、それから、俺の頬を愛撫した。俺は火がついたようになつて呻いた。

「何でもありません。お願いですから、退い

て下さい」

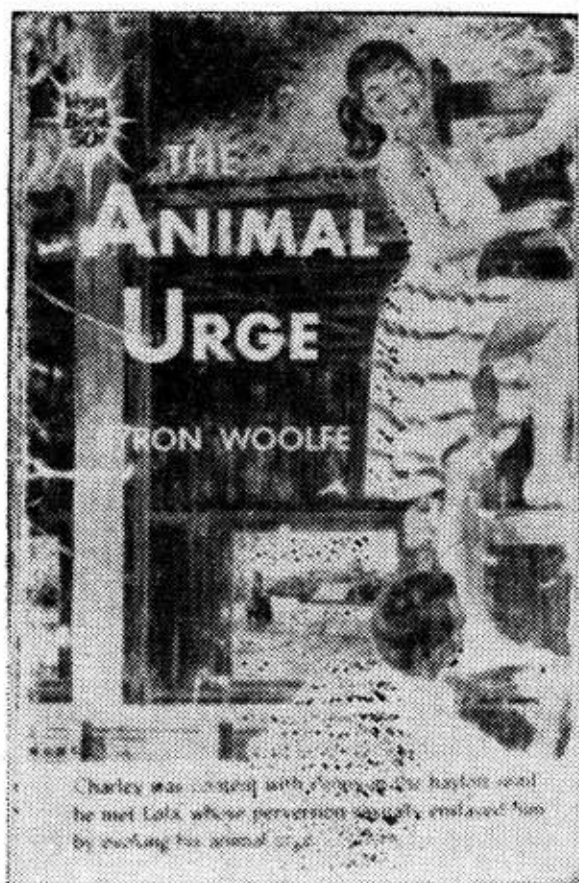
「そんな事を言つては不可ないよ。お前、熱に浮かされてるんだわ」

彼女は俺の唇を優しく押さえた。俺は震え出した。白い魅惑的な肢体と、甘いコロンの香りに、俺の身体中の細胞が欲情で叫び出しそうだった。

「ローラ、ローラー」

遂に堪え兼ねて俺は彼女の手に接吻した。「お止め、チャーリー。こんな事をしては不可ないよ」

素晴らしいながら、彼女の指は俺の唇を押さえたまま。俺はもうすっかり、混乱してい



(畜生の願望)

た。頭の中は卑しい欲情が渦を巻いていた。彼女の指の味は素敵で、俺の血は逆上した。思わず手を延して、彼女の太股に触れようとしたとき、ローラはさっと俺を突き離れた。「油で汚れた手で触られるとゾツとするの」キモナはしどけなく乱れて、豊かな乳房が胸許から覗いていた。

「お願いです。手は絶対に使いませんから、何卒、貴女を愛させて下さい」

ローラは甘く笑った。

「そんな事、出来るか知ら」

「そうです」

俺は夢中で、白い太股に唇を押しつけた。彼女はクスクス笑い出した。

やがて彼女は腰を右、左に動かして、俺の唇を避けようとした。俺はまるで催眠術にかかったように、右に左にそれを追った。彼女は次第に興奮して行った。どうしても俺の唇は彼女の身体に触れられず、俺はとうとう泣声を出した。一心に哀訴したが彼女は許してくれない。とうとう俺の目から涙が流れてきた。それを見て笑うローラは、まるで悪魔のように見えた。時々、ほんの数秒、彼女の動きは止まる。それは彼女の身体の魅力に俺に味わせるためだ。そして又、動き始める。いやでも俺はそれを追わねばならない。泣き声はだんだん高くなり、まるで猫に弄ばれている鼠だった。彼女はこの遊びを何時までも続けた。俺が完全に無力になり、欲情に憑かれた畜生になり、そして彼女のお慈悲を涙ながらに乞い願うまで……。

時々、彼女の身体が震え動きが止まった。指の爪は俺の頭の皮膚に強く喰いこんだ。痙攣して呻き声をあげた。しばらくすると、彼女は静かに笑い、また、ゲームが始まった。いつまでも、いつまでも

……

ある夜、ヒューバートは、商用で家をあける。ローラはバスを使っている。青年は台所でコーヒを飲みながら、もしや彼女がバスルームに呼んでくれるのではないかと待っている。

……ローラは悪魔だ。男をその魅力の虜にし、何の意志もない器具にする。そして男に何一つ与えない。このままでは、俺の人生は地獄のように惨じめなものになる。俺をいつまでも、こうして弄ぼうとするなら、俺は暴力であの女を犯してやる。俺の自由にしてやる。男とはそういうものなんだ。

俺はバスの中のローラの裸身を想像する。象牙色の肌が湯の中に揺れている。バスルームのタイルはピンクだ。バスから出て身体を乾かすマットもピンクだ。ピンクは実際、彼女に、よくマッチした色だ。俺の身体が燃えそう。燃えて灰になりそう。キッスしたい。濡れて輝くクリーム色の裸身のどこもかもキッスしたい。貴女の身体が未だ濡れている間に……。呼んでくれ、ローラ。貴女の豊かな肉体を崇拜している、この俺を……

「チャーリー」

そら、彼女だ。ローラが呼んでいる。さあ

行け。膝がガクガクする。さあ、ピンクの浴室だ。

「ローラ？」

「ええ、呼んだわ、チャーリー。タオルを忘れたの。済まないが、持ってきてくれない」

「よいですとも、喜んで」

「有難う。きつと、お前はそう言うだろうと思ってたわ」

ピンクのタオルを持って、俺はまた、浴室へ急ぐ。俺を浴室へ入れてくれるだろうか。駄目だ。彼女は扉の隙間から、手を差出すだろう。俺に勇気があれば、彼女を押し退けて中へ這入るんだが……。

扉をノックすると、鍵が掛っていないのか少し開いた。周章でて扉を押さえようと思ったが、手の方が勝手に押し開けていた。そして阿呆のように、バスの中のローラを見詰めた。

「チャーリー。行儀が悪いわね」

彼女は恥じ知らずな目で、俺を点検するように見た。

「真逆、這入ってくるとは思わなかったわ」

ローラは怒って口を尖らせた。だが目の方は笑っていた。

「這入ってしまったんだから、仕方がないわ

ね。そのラックに掛けておくれ。でもこちらを見ては不可ないよ」

俺は見まいとしたが、目はどうしても彼女の美しい裸身から離れなかった。コロンの甘い香りが浴室に満ちていた。

「タオルを掛けるのに、一晩中かかる積り？ さあ、もう行っていないわ」

「ローラ、ローラ！」

俺は掠れた声で叫ぶと、浴槽の側に膝をついた。ローラは俺の顔を調べるように、じつと見た。

「ローラ、何と言う美しい……」

俺が手を差し出すと、ローラはピシッと払いのけた。

「触らないで！少しでも触ると承知しないから！」

「キスを、キスをさせて下さい」

彼女は笑いながら、指で湯を弾いた。

「お前にキスをさせると、止められなくなるからね」

「否、止められます。止めると仰有れば、直ぐに止めます」

「約束出来て？」

「誓います。誓いますから……」

悪魔のような目で俺を見つめていたローラ

は、ゆつたりと四肢を伸ばすと、膝と太股を湯の中から突き出した。濡れてキラキラ輝く美しい足に俺は飛びついた。その膝は徐々に湯の中に沈んで行く。俺は夢中でそれを追って湯の中に顔を突っこんで行った。息苦しくなって顔を挙げようとする、ローラの手が後頭部を押さえ、俺は湯に噎せて半死半生だった。今度は膝を右、左と交互に湯から突き出すので、俺はまるで気狂い犬のように、追いついた。いつか湯が減り始めていた。排水口の栓を抜いたらしい。段々に湯の中から出てくるローラの身体に、俺は大喜びでキスを続けた。時々ローラは踵で排水口を押さええて流出を止めた。その度に俺は踵を除けて下さいと、哀願しなければならなかった。

湯が流れ出てしまうと、ローラはピンクのマットの上に立った。俺は四つ這いのまま、彼女の脚を上から下へ、下から上へとキスをした。タオルの方へ手を延ばしかけたローラが笑い出した。滴がポトポトと裸身から落ちて来る。

「お前がこうするのなら、タオルも要らない訳ね」

「要りません共。私に吸いとらせて下さい。この輝く肉体から一滴も残さずに」

そして俺はそれを証明しようと、一心にキスを続ける。楽しいこの仕事に、俺は夢中だった。ローラは興奮で肢態を震わせている。ある地点では、ヒステリックに痙攣させた。やがて彼女は俺を止めさせると、シッシッと俺を浴室から追い出した。

「もう一度シャワーを浴びるから、お前は外で待っていて」

……青年は台所で犬のように、彼女が呼ぶのを待っている。ローラは居間へ戻った気配だが、仲々、青年を呼ばない。堪え切れず、彼は居間へ行く。

……ローラはバスローブのまま、ビロードのソファの上に丸くなっていった。彼女の身体は殆んど露わだった。

彼女は予期していたように俺を見た。

「何故、呼んでくれないのです？」

「一体、何のためによ」

彼女は残酷だった。その言葉は針のように俺を突き刺した。俺は少し腹が立ってきた。

「否、何でもありません。只、私は、貴女ともう離れようと思うのです。貴女が私を、思うように使用して、それから残酷に突きつけられる。こんな事はもう沢山です」

俺は室を出て行こうとした。

「チャーリー。一寸ここへお出で、ここへお座り。話があるの」

ローラは香水のにおう手で、俺の頬を挟んだ。

「何うしたの、チャーリー？何をそんなに怒っているの？」

「止めて下さい。貴女は知っている筈です。悩みの原因は貴女です」

彼女は身体を動かさせて、更に身体を俺に押しつけ、笑いながら俺の頬を柔かく叩いた。

「一体、何の事を言っているの？」

「貴女は美しい。素晴らしく美しい。私は貴女を愛したい。だが、貴女はキスを許すだけだ」

「それが何うしたの。お前、私にキスしたくないと言うの。喜んでキスするように、見えたけど」

彼女は冷たい指を俺の額にあて、それから目の上まで撫でおろした。

「じゃ、よいわ。お行き。もう私にキスしない事、よくって？私も夫のある身だからね」

俺はふくよかな乳房の膨らみを見た。絹のように滑っこい膝と太股を見た。心臓がドキドキして来た。ローラは笑った。

「私を見ては駄目。お前はまた、キスしたく

なるわ。そんな事になっては、不可ないんだろう」

「判りません。貴女は真実に美しい」

「お前、先刻、二度と私にキスしないと言ったろう。自分で決心したんだろう」

「ええ、でも……」

「そら、また負けようとしている。もう行っただ方がよいわ。私を一人にしておくれ。お前によくないそうだから」

彼女は指で優しく俺の唇を押さえた。

「サア、お前が男である事を見せて、行って頂戴」

俺はもう辛抱出来なくなつて、その指にキスをした。

「お止め、チャーリー。また、辛抱出来なくなるわよ」

「止められません。ローラ、もう止められないのです」

ローラはガラガラする目で、無力な俺を見詰めた。彼女は俺を魅惑し、俺の運命を決めようとしている。彼女の肉体の奴隷にしようとしている。だが俺に何が出来るのだ。絶望的な呻きと共に、俺は身体から一切の抑圧が離れるのを感じた。残ったのは、飢えた畜生のような願望だけだった。泣きながら俺は彼

女の足の爪先から乳房までキスで覆った。

彼女は面白そうに笑うと、ローブをスリと肩からずらせた。その輝くばかりの美しさに、俺は盲目になった。艶やかな膚の味は素晴らしかった。

「ローラ、ローラ！」

ローラは高らかに笑った。

「かかった！お前は、私の毘にかかったんだよ。もうお前は私の物だ。私の命じる事ならどんな事でもするの。これからずっとね。お前は毎日毎日、何時も何時も、私をキスしたくて、仕方がなくなるよ。そしてお前は、毎日毎日、私の前に跪いて、お願いするようになるよ」

「そうなります。きっと」

「そうよ。そうならせてやる。もっと、もっと惨じめに、お願いさせてやる」

俺は膝をついた。ローラは笑い声を挙げてソファの上に美しい肉体を横たえ、面白そうに苦痛に顔を歪めながら哀願する俺を見ていたが、更にそれを掻き立てるように、指で俺の唇を愛撫した。やがて俺の頭髪をグツと握った。これが把手で、彼女は俺の顔を自由に動かせるのだ。俺の顔は彼女の欲するところへ引き寄せられた。だが白い肌との間に

は、一センチの間隔があった。俺は夢中で哀願した。やがて俺の唇は彼女の肌に触れる事を許されたが、それから俺の覚えていた事は彼女の噛みしめた口から洩れる笑い声と、悶える彼女の足が、ソファのビロードと烈しく擦れあう音だけだった。

長い長い夜中、ローラは俺を単なる器具として快楽に耽った。しかも俺は欲情に燃えながら、どうする事も出来ず、苦悩に満ちた彼女の肉体の毘に、深く深くはまりこんで行った。俺は惨じめな虜囚で、逃れ出る途もなく彼女の快楽のための、一箇の玩具に過ぎないのだ。

× × ×

その中、先妻の娘、リンダが帰ってくる。ある夜、青年とリンダは、ヒューバート夫妻の寝室を覗き見する。

……「あの音は何？」

リンダは俺の腕を掴んだ。ヒューバートの噓がれた声が聞こえて来た。

「ローラ、頼む」

そしてローラのクスクス笑う声が聞えた。室の扉に近づくと、声が判然として来た。

「打ってくれ。ローラ、打ってくれ」

ローラは笑いながら、厭よと言っている。

隙間から覗いた俺は、自分の目を信ずる事が出来なかった。

ローラはベッドの上に横たわり、片肘をついて顔を支えていた。片一方の手には、刺げのある恐ろしい皮鞭を持っていた。そして、裸かで、カーペットに膝をついてローラを見上げるヒューバートを、笑いながら見下していた。スカートはまくれ上って、形のいい太股が露わになっている。ヒューバートの身体にはすでに数条の鞭痕があった。

「打ってくれ、ローラ。もっと打ってくれ」
ローラは鞭を振り上げるような素振りをして、ただで、止めてしまった。

「いやよ。もう打ってやらない」

「頼む。頼むよ」

ローラの口から笑いが洩れた。蛇のような暗い彼女の目は、哀願する夫を突き刺すように見詰めていた。悪魔の目だ。

ヒューバートは哀願を続けた。やっと彼女は鞭を一振りすると、彼の肩を軽く打った。ヒューバートは呻いたが、その顔は苦痛と快楽に交錯していた。

ローラの顔にも不思議な興奮が現われていた。だが何という美しい女だろう。サデイスチックな表情は益々、彼女を美しく見せる。

見よ、ヒューバートの惨じめさが、彼女を喜ばせているのだ。彼は鞭で打ってくれとお願いをする。ローラは鞭をやらずに彼を苦しめる。ほんの時々、鞭のとげで打つが、それは彼の鞭打たれたい欲望を強くするためだ。残酷な女だ。彼女は男に、自分を破滅させてくれと願わせる傲慢な女だ。

「ローラ、頼む。どうか鞭で……」

微笑みながら、漸く身を起して、床におりたローラは、夫の側に膝をつくと、鞭の柄で顔や肩をつついた。ヒューバートは激しく興奮して来た。もうローラの顔も見られず、両手で顔を覆って哀願した。

「ローラ！ローラ！」

だが、ローラが仲々この悪戯を止めないので、ヒューバートは惨じめさのために、涙を流した。

突然立ち上ったローラは、無慈悲に一撃をくれた。更に一鞭。ヒューバートはガクガク震えはじめた。鞭は更に強くなった。ローラの顔は輝くように美しい。

「ソラッ、打ってやる」

残酷に皮鞭を振るいながら叫んだ。

「貴方が頼むからよ。ソラッ、ソラッ。この気狂い犬奴！」

ずっと笑いながら、大きな図体の惨じめな人間の身体の上に、激しく鞭を振るった。遂にヒューバートは苦痛に堪えかねて、床を転げ廻り叫び出した。

「もういいよ。もう充分だ」

だがローラは止めない。その目は何かに憑かれたように光っていた。鞭は力一杯、振り下された。醜悪な傷痕を肉体の上に残しながら、ヒューバートは許しを乞い始めた。だがそれはローラを更に喜ばせるだけだった。漸く疲れたローラは、ベッドの上に身を投げかけ、彼の呻き声を聞きながら、天井を見て笑っていた。まるでそれが音楽でもあるかのように……。

その夜、興奮した青年とリンダは関係を持つとうとするが、歪められた青年の欲情は、リンダにも唇の奉仕をさせてしまう。青年は後悔するが、リンダは大喜びで、翌朝、青年の唇を指で愛撫して、「何と言う素晴らしい唇を、貴方は持っているの」といったりする。その夜も亦、リンダは青年の部屋を訪れるが青年は迷っている。

……「今夜、貴方変よ。私を愛したくないの？」

「愛したいとも思うし、止めたいとも思う。」

「だけど愛するよ。仕方がない」

「何よ、その返事。いやなら私帰るわ」

「行かないで呉れ。今のは冗談だ」

俺はリンダのピンクの乳房にキスをした。

「擦ったいわ。いや。私、矢張り帰る。今夜は気分が出ないわ。貴方が、うちこわしたのよ」

「済まない。さあ、横になっておくれ。償ないは、きつとするよ」

「いや。もう貴方なんか欲しくない」

今、リンダに出て行かれるのは我慢が出来ない。こんなにリンダに引きつけられているとは思わなかった。俺は夢中で、彼女の腕、手、肩、腰、太股、脚とキスして行った。リンダは五月蠅そうに、手で押しのけた。しかし彼女は理解したのだ。拒めば拒むほど、熱情的になって行く俺の性質を。

そして嬉しそうに笑いながら、俺の顔を持つと、キスを妨げた。俺は一心に追いかけた。

「いや、いや、いや」

「リンダ、リンダ」

「いや、いや」

「リンダ、何故、逃げるんだ」

「面白いからよ。私にこんな力があるとは思

「わなかったわ」

「だが、君は、それで俺を苦しめているんだよ」

彼女は手で笑いを抑えながら言った。

「判ったわ。貴方が判ったわ。何て面白いんでしよう。男が狂気のようになって、私を欲しがるなんて。素晴らしいわ」

リンダは俺のキスを避けて、避けて、避けぬいた。俺は恐怖に包まれた。

「リンダ、リンダ」

「汗をかくのよ。チャーリー。もっと汗をかくの。そう容易に欲しい物は得られないわよ」長い間、俺は苦しめられた。願い、キスをしようとし、また、願い、俺の誇りも、正気も消え去ったとき、彼女はやっとその地獄のような欲情の前に俺を投げ出した。

その中、リンダにボーイフレンドが出来て余りチャーリーに近寄らなくなる。青年は二人の女の間を畜生のように彷徨する惨じめさに堪えかね、リンダと正常な関係を持つことより脱却しようとする。ある夜、デートを終えたリンダの帰宅を待ち受け、彼の室に引き入れ、ノーマルな関係を要求する。

「駄目だわ。私には恋人があるんだもの。それに真実をいうとね、チャーリー。私、もう

貴方を彼と同じように考えられないの。貴方は私をキスするだけの男、そう信じているの。貴方の愛し方は素晴らしいわ。私、とても素敵だと思う。だけど、それ以外の貴方なんて考えられないわ。私、時々考えたわ。貴方を檻の中に飼って置いて、キスして欲しくなったら、貴方を檻の中から引き出して、思うままに使えたら、素晴らしいわ。私達、女はね、チャーリー、両方の愛し方が欲しいのよ」

俺は顔に血が昇るのを感じた。

「いやな事をいわないでくれ。俺をそういう風に考えるのは、只今限り止めてくれ。俺はもう二度とあんな事をしない積りだ」

リンダはこれを挑戦と受け取らした。

「もう絶対にしないって？」

「絶対にだ」

「私、信じてないわ」

「何故だい？」

「何故って、私がしようと思えば、何時でも貴方にキスさせる事が出来ると思うからよ」

「そんな風に思うなんて、君はどうかしているよ」

リンダは俺の側に座ると、クスクス笑いながら囁いた。

「やりましょうよ、チャーリー。また、キスさせてあげるわ。ネエ、チャーリー」

「止める。側へ寄らないでくれ」

「愚図々々言わないで。私、キスして欲しいのよ。チャーリー、好い子だからキスして。ホンの一寸の間よ」

「いやだ、クソッ。いやだ。俺の顔に触らないでくれ」

「貴方の唇、とても素晴らしいわ。私、その唇と遊ぶの大好きよ」

俺はだんだん気が変になって来た。

「サア、もう帰ってくれ。俺を放つといてくれ」

「キスしてくれたら、直ぐ帰るわよ」

「しないよ。そう言ったらろう」

「するわよ。チャーリー。するともさ。ホラ貴方だんだん興奮して来たわ。私にはよく判るの。心臓もドキドキしてるわ。顔も、真っ赤になって来たわ」

「俺の唇に触らないでくれ、なあ、リンダ、我慢出来なくなるんだ」

然し、彼女は止めなかった。俺の敗けだ。俺はだんだん弱っていった。虚脱感が全身に満ちてくる。俺は溜息をついて、緊張をほぐした。リンダは笑い出した。好い香いのする

指を、俺の口の中に差し入れた。俺はクラクラして来た。

数分の後、俺はリンダの前に膝をついて、キスさせて欲しいと言っていた。

「だけど貴方、先刻、二度とこんな事をしな」と言った筈よ」

リンダは嘲笑した。

「もう変ったんだ。キスさせてくれよ」

「何故決心が変ったの？私にはチャーリー、貴方が判らないわ。どっちが本当なの。判然

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の幹旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

と言いなさい。どっちが本当なのさ」

「俺にも判らないよ。只君が欲しいだけだ」

「アラ、チャーリー。脚を噛んだら、痛いじゃないの」

「アア、俺はお前を喰べてしまいたい」

「私の脚、奇麗だと思わない？チャーリー、私は素敵だと思ってるんだけど。返事なくともいいわ、チャーリー。奇麗だと思うからね。後にマークを残さないようにね。お止め

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

よ。そんな事したら、マークが残るわ。そうよ。ゆっくり、優しく、そうチャーリー。私貴方には、こうして欲しいの。好い子だわ。アラ、それも取ってしまいたいのか？ いいわよ、その方が貴方、嬉しいのならね。ホラ、無理をしては駄目、破れるわよ。ガツカツしないで。私、どこへも行きはしないわ。貴方の手、震えてるのね。私、貴方を絶望的にさせたいの。そのときの貴方、とても素敵だわ。チャーリー、本当に貴方の心臓の音が聞こえるわ。凄いい情熱ネ。そこよ、チャーリーあんまり強くしないで。そう、そう、好い気持ちだわ。一寸、チャーリー、そんなに急がないでよ、よくって？私、今楽しんでるんだから。こうして脚を貴方に、キスさせるの大好き。とてもよい気持ちよ。止めないで。ホホ……。チャーリー、まるで犬ね。貴方、まるで脳味噌のない犬みたい。ホラ、この方がいいわ」

ローラとリンダの玩具になり、犬のように彷徨した青年も、最後に暴力で、二人の女を犯し、田舎へ帰る。

△註▽余り露骨な描写は省略しました。ポケット文庫漁りに病みつきになった最初の本で私には忘れ難い本です。次は「フレデリック館」をお送りしたいと思います。

「痴^ち人^{じん}の糧^{かて}」

∧ 狂 宴 ∨

山 本 一 章

「パンパンにされるのかと思ったわ」

アケミに話した言葉が、そのままセツコの本心だった。しかしそれにしては暗いかげはなく快活だった。大山はセツコが処女ではないことを本能的に感じていたし、彼女がアケミより一つ年下でありながら、むんむんした女の体臭をより多く持っているのも、そのせいだと思っていた。

アケミとセツコと大山の三人だけの生活が始ったが、平穩そのもので、時たま百合子が訪れて泊って行くのが変化といえは変化だった。彼女は全く大山にとってセックス処理だけの対象のようでもあり、彼女もまた彼との直接的なセックスだけを楽しんでいるようでもあった。アケミとセツコは平穩な生活の中ではお手伝いさんであり、家政婦でしかなかった。しかしこの二人の舞台が間もなく開かれ

ることになった。

○

（今般止むを得ない事情から当店を閉店いたすこととなりました。日頃の御愛顧に対し厚く御礼申し上げますと共に、経営者一同の未熟さを深くお詫び申し上げます。については閉店に際し有終の美を飾るべく、そして皆様の御懇情の一端に報いるため次のとおり最終パーティを計画いたしました。その趣向等につきましてははいささか自負するところがございまして、是非共御出席賜りますよう御案内申し上げます。

日 時 昭和四十年十月三日午後十時より。

開演後は御入場できません。

会 費 御一人 金三万円

シ ョ ー 出演者 二名

写真撮影は御自由です。

レザニマル 支配人

案内状が送られた先は十名、レザニマル階下サロンの常連だけだった。当日定刻までに店を訪れた客は六人だった。すべて男性であったことはいうまでもなかった。表のドアには錠がかけられ、一階の明りはすべて消された。地下のサロンに集った客は、めいめいブルンデーやウイスキーのグラスを手に、オードブルをつまみながら開演を待った。ホステスは一人もいなかった。ボーイもいなかった。すべてセルフサービスだったが、酒も料理も充分用意され、静かにレコード音楽が流れていた。

「長らくお待ちいたしました。今日はよくお越し下さいました。では早速ショーを開演いたします。最後までごゆっくり御観賞下さい。途中御帰宅を御希望の方は私までお申し



出で下さい。なお、念のため申し上げますが最後にゲームを行い当選者には豪華な景品を提供いたします。もし外れた方で景品御希望の節は私までお申し出で下されば御相談させていただきます。ではどうぞこ

ゆっくり」

大山は一気に挨拶を済ませると部屋のライトを全部消した。レコード音楽が優しく妖しく真暗闇を流れ、客達はその雰囲気になつて倒されたように口をきかなかつた。ゴトゴトと重い音がして円形になった中央のフロアーに何かが運ばれた。音楽が変わって軽いリズムになった時、スポットライトが中央フロアーを照らした。余り高くない四角い台に真紅の大きな布がかぶせられ、そのふくらみから布の下に女が仰向けに横たわっていることがわかった。客の目がその布の下を想像している時、さっと白いものが浮び上がるように横から現われて台の横に立った。目に黒いドミノをつけた黒い網目の長い手袋とストッキングをつけただけの裸女だった。

白い胴体がなまなましく滑らかな皮膚感を晒し出していた。背に垂らした頭髮以外毛髪を取り去られたその白い裸形は、一瞬生命のない彫像と錯覚する程美しくかった。静止したポーズが崩れ出すと、その女体は柔らかに静かに曲げられ始めた。アクロバットだ。

彼女がアケミであることは既に読者の皆様には分つてもらえると思う。そり返って両脚の間に頭を挟んだ姿勢、そのまま両手で足首

を握って円く転り、開脚の倒立へ。アケミのアクロバットは専門家が見れば初歩的なものだったとしても、彼女の肌の若々しさと美しい曲線は観客を魅了するには充分だった。

ストロボがきらめき、シャッター音がこだました。左右に広げた足をゆっくりと回転して縦位置へ、それから片足を背負っての一本足。アケミは客達が固ずるのみ、息をはずませて得意だった。次第に汗が肌を湿めらせ、筋を引いて流れ出すのを意識した。十分間余りの演技ではあったが、きわめて長い時間に感じられた。曲は三曲目から四曲目へ「火の踊り」のテンポに乗ったアケミは踊りながら、さっと台の上の真紅の布を取り去った。

客はハッと目を台の上に注いだ。

そこには大の字になった女体が仰向けに載っていた。その肉体はアケミと同じように毛髪はなく、しかも手首、足首を縛った縄がしっかりと台に四肢を引き伸ばしていた。首から上には、すっぽりと赤い木綿の頭布のようなものがかぶせられていたが、ピッチリと顔に密着したその布の下で、口には紐が咬まされてることがはっきり見分けられた。それがセツコであることはいうまでもなかった。台の隅りをアケミが踊りながら廻った。それ

は生贄を前にした野蛮人の踊りにも似た激しいものだった。

ふっくらと盛り上った両の乳房と薄紅の乳首は若い女の美の象徴だった。そして胸の下から腹部への滑らかなスロープとその中心で微笑するような臍窩、白いヴィーナスの丘と小さく迫った小径は、若い女の美の表現だった。美しくそして艶めかしい光景に、客達はただ生つばをのむばかりで声はなかった。

アケミの踊りが終ると、彼女は片手に赤いワインの壺を持って台の上の生贄に近づき、赤いワインをセツコの臍窩に注いだ。その量は少なかったが赤い液体は、そこに宝石をはめ込んだようにキラキラと輝いた。アケミが片手で軽く会釈すると同時に、一人の中年の男が近づいてそのワインをすすり飲んだ。更にワインが注がれた。次の客が同じように顔を白い肌の中に埋めて女の盃から酒をすすった。

六人の客は憑かれたように、その盃を奪い合った。彼等はもう体裁をつくろう心の余裕を持っていた。だからライトが消されて真暗闇になった時、彼等はハッと自分に戻り、そしてつい今の出来事が夢に違いないとさえ思った。暗闇の中での音楽が長く続い

て、客は徐々に心の平静を取り戻した。その間に舞台装置が変えられていた。客はその気配を感じながらも、それがどんなものか把握できなかったのは、舞台が中央から部屋の一番奥に移されていたからでもあった。申し合わせたように煙草に火が点けられ、煙が部屋に拡がった。

音楽が低くなった。そして女の声がささやくように聞えた。

「皆様、大変長らくお待たせいたしました。では次のシーンに移らせていただきます前に一ことお断りを申し上げます。これから始まりますショーについては、皆様にも御参加いただきたいと存じますが、決してモデルの頭巾をお取りになりませんように、そして私のお渡しする物以外は絶対に御使用になりませんようにお願い申し上げます。写真をお撮りになることは御自由でございます」

スポットが先ず中央を照し出した。顔にドミノをつけ紫色一色の衣服を着けた女が黒革の手袋をはめ長靴をはいて手に細い竹の鞭を持って立っていた。ぴったりのスラックスにブラウス姿の彼女は百合子だった。彼女は手にした鞭で部屋の奥を指した。客の視線がライトを追ってその方向に移った。そこには

黒い頭布と赤い頭布をかぶった二人の若い女が両腕を上差し上げてそれぞれ低い小さな台の上に二メートル程の間隔で立っていた。首から下は全くの素裸で、上にした両手首は合われて布の紐が巻きつき、低い天井の棧に打ち込まれた鉤に結ばれていた。

百合子が革の長靴をギューギューといわせながらその二人に近づき、足の下小さな台を順に外したので、二つの女体は爪先立ちになって半吊りの姿になった。その恰好は肉屋にぶら下げられている家畜の枝肉のようでもあり、バレリーナの一瞬のポーズのようでもあった。

百合子はこの二つの生贄の腰を持って客に背を向けさせた。肉づきの良い臀部が二つ客の前に並んだ。赤い頭巾の女が先程、台の上に晒されていたセツコで、黒い頭巾の女がアクロバットを踊ったアケミであることは、客のすべてが覚っていた。百合子の細い鞭がヒュッと空を切って先ずアケミの尻に当てられた。連続して三つの音が肌を叩いた時、彼女の体は手を上にしたまま、ぐぐっと弓なりになった。声はなかった。次いで同じように鞭が隣の尻を打った。

「ウムムムム」

押し込められたような呻きが、セツコの頭巾の下から洩れた。

「皆さんも、どうぞ」

百合子は同じような細い竹の鞭を二つ手にして客の前にそれを差し出した。それから二つの白い無防備の女体に鞭の乱打が加えられた。鞭を手にした客は、喉をからからにしながら最初はおそろおそろ尻を打ったが、交代して行くにつれ、段々と大胆になって鞭を強く振り降ろし、臀部から腰や太腿まで打ち据えて行った。

二つの女体はのけぞり、片脚を曲げ、呻き続けた。肌には薄赤く筋が浮び上った。

「ウハ―」

鞭を手にセツコを打っていた客が声を上げた。彼女の爪先立った足許の床に、ゆっくり液体が拡がり始めたからだだった。鞭の苦痛に堪えかねて失禁したのだった。その時五十過ぎの一人の客が突然走り寄った。

「片足を持ってくれ！」

鞭を持った男が電撃を受けたようにセツコの片足を担ぎ上げた。走り寄った男が、ブランドーのグラスを押し当てた。滴が一、二滴グラスに落ちたが、後続はなかった。

「出せ！出せ！きばるんだよ！」

白毛まじりの男は狂ったようにわめいた。彼の意図を覚った他の客達は、血走った目で注視した。アケミを鞭打っていた男がセツコに近づいた。

「さあ、全部出してしまいなさい！」

言葉は丁寧だったがその手に持った鞭は、彼女の乳房を軽くこづいていた。そして一向に心配がないのを見ると、強く尻に鞭を当てる。一つ二つ三つ……

半白髪の男は、そのグラスを大事そうに両手で挟んだ。

「諸君、見たまえ、美しい液体じゃないか。

僕は医者だが、この濁りない琥珀の水は確かに健康体から出されたものだ。しかも美女から採取された美酒なんだ。希望者は来たまえ。僕がカクテルを調合するから」

客達は呆然として彼に視線を集めた。ジンとソーダ水と少量の砂糖を琥珀の液体で割ってシェイクし、泡立ったそれが数個のカクテルグラスに注がれ、レモンの輪切りが浮かされた。医者と自称したその男はグラスを鼻に近づけてしばらくその芳香を味わったのち、なめるようにして飲みほした。二人程がそつとグラスを手にして嗅いでみてから一気に飲んだ。

「いけるじゃないか！素晴らしいよ！」

大山はライトから手を離してグラスを手にしてみた。舌先でなめてみると不潔感はなく尿の持つ臭みも消されて少し甘味のかかったその味は、悪いものではなかった。アケミとセツコのミックスされた体臭が喉を通して行くような感じさえた。

「諸君、バンザイ！吾々は乙女的美酒を飲んだ。兄弟になろう！」

医者は酔っているのか正気なのか、わからないような態度だった。半吊りのままの二つの裸形を取り囲んだ客は、雰囲気溶け込んで狂ったように踊り、踊りながら女体に触れた。正気でないことは確かだったし、といって酒だけに酔っているわけでもなかった。痴人の群れがそこにあった。

百合子はその異様で熱っぽい空気に耐えられず、一人レザニマルを抜け出していた。

「マスター、この娘を降ろしてやっていいかい？」

「ええどうぞ御自由に。煮て食うなり焼いて食うなり、どうしていただいても結構です。ただ頭巾と貞操だけは、取ってやらないで下さい」

「ああ、わかってるよ」

男達はアケミとセツコを半吊りの姿勢から降ろすと、一人ずつ胴上げをした。客の手に若い女の肌が躍った。それは適度の弾力性と滑らかさを持ってなま温かった。

「さあ、お祭りをしよう！」

誰かが叫びサロン横の物置へ走った。そして壁の塗装用の足場に使われた二メートル足らずの丸太を二本担いで来た。

「マスター、縄はあるだろうね」

大山はカウンターの下に用意してあった縄の詰ったボール箱を引き出した。丸太を運んできた中年の男は満足そうに、その箱の中から縄を引きずり出すと、床の上に横たわっている黒い頭巾のアケミに近づいた。両手首を前に合わせて縛り、両足首も縛り合わせた。

そして手首と足首を連結した。赤い頭巾のセツコも同じように四肢を獣のように括り合わされた。それから丸太が四肢の縄に通され、二人の男が先ずアケミの丸太を持ち上げて前後から担いだ。猪吊りの女体が床を離れて揺れた。セツコの丸太は他の二人が担いだ。客達は猪吊りの二つの生贄を担いでぐるぐるとサロンの中を練り歩いた。

「重いなあ」

誰かが云った。

「おい、浣腸してやろうじゃないか。生贄は腹の中まで綺麗にする必要があるからな」

「先生、今度は団子でも作りますかねえ」

皆がどっと笑った。二本の棒は真中に女体を吊り下げたまま、カウンターとテーブルに橋渡された。

「道具は、あるんかい？」

「ああ、恰度鞆を持ってきた」

半白頭の医者が古ぼけた黒い鞆を持って来て中を探った。注射器を大きくしたシリンドー式のものだった。

「先生、いきなりやらずに少し酔わせたらどうです。腸からでもアルコールは吸収するんでしょう？」

医者は手馴れた手つきでグラスからシリンドーにウィスキーを吸入すると、床に膝をついて、吊り下ったアケミの傍に寄った。猪吊りになった彼女は全く無抵抗にその注入を受けなければならなかった。セツコにも同じようにウィスキーが注入された。アケミの白い肌が徐々に桜色に染まってくるのと対照的にセツコの方は酒に強いのか変化はなかった。

客達の中で一人だけが終始カメラから手を放さなかったが、他の者は撮影する余裕を持たず、強烈な刺戟を持ったこの遊びに夢中に

なって、少しの動きも見落すまいと目を見張ったまま生つばを飲み込んでいた。

「グリセリン浣腸でもやりますかねえ？」

医者が尋ねた。

「もういいじゃないかね。酒はいいが団子の方はねえ……」

「この部屋じゃ臭がこもるから止した方がいいようだよ」

「マスター、ゲームをやるって、どんなことをやるんだい？景品は何だい？」

大山は一瞬戸惑った。最初に計画していたことを実行するのが惜しい気がしたし、アケミに聞かすのもセツコに可哀想に思えたからだった。しかし思い切って云った。

「皆さんさえ良ければ、これからゲームに移ります。ゲームの終りが、このパーティの終りとなりますが、よろしいでしょうか？」

皆が頷くのを見て大山は言葉を継いだ。

「景品は、この娘です。」

彼の手はセツコを指していた。アケミとセツコの体が瞬間ピクッと動いた。

「オオオオ」

客の中から声が洩れた。

「ゲームは簡単な方がいいと思いますので投げ矢で行います。円盤の9の番号が当ります」

複数の当選者の場合も、当選者のない場合も異議を言われませんように予め断り申し上げます。先に申し上げましたように当選されなかった方で御希望がありましたら私までお申し出下さい。では、どなたからでもお投げ下さい」

的の円盤は1から12まで等分に区分けされてあったが、円盤は早く廻わされたので狙うことは不可能であった。最初の一人は矢が3に突きささったのを見て、がっかりした表情をした。二人三人、9の番号に矢は当らなかった。

「こりや運を天に委すだけだな」

一人カメラで撮影をしていた男が五番目に矢を持った。色の黒い痩せた男で三十七、八才と思われた。彼の矢が隣の8とすれすれに、しかしはつきりと9の区分に突き立った時、客の中からどっと嘆声が洩れた。結局その男が唯一の当選者となった。その時の大山の顔を明るい所で見たら、きつと気の毒になるような当惑の表情をしていたに違いなかった。

「もう一人の黒頭巾は駄目なのかねえ」

「駄目です」

叱りつけるような大山の声だった。

「マスター、希望者の条件をはっきり言ったらどうかねえ。一人ずつこそそこそ申し出るのは面白くないからねえ」

客たちは皆、にやにや笑っていた。

「御希望の方には当店再開の資金を御負担願います。お一人これだけです」

大山は指を一本出した。

「一かね、一〇かね？」

「一じやございません」

「ほほう、こりやちよつと無理ですな」

皆がどつと笑った。結局希望は一人だけ現われた。それはカクテルを作った医者と自称する男で、その場で現金を支払った。

二人の客を残して他の客は、名残り惜しうに猪吊りにされたままの二つの裸女を振り返りながら先導する大山に随った。もう夜の十二時をとくに過ぎていた。

客を送り出した大山が、もとのサロンに戻ってくると、アケミとセツコは猪吊りから降ろされて床の上に横たえられていた。

「ここでやるのかねえ？」

カメラの男が云った。

「いいえ、私が車で送ります。この黒頭巾の方は自由にやって下さい。そちらの赤の方は全部終るまでは生贄ですから、お二人で

縛って下さって結構です。人の目につくところではないですから、この麻袋へ入れてもらいます車のトランクへ入れますから、そのつもりで私はこっちの娘と先に車の所へ行行って、車を表へ廻わしますから、表へ出て来て下さい」

黒頭巾だけを残して縄を解かれたアケミは大山に手をとられて階段を上って行った。

セツコを入れた麻袋は自動車のトランクに納められ、服を着たアケミと二人の客を載せた車は大山の運転で神戸の街を去った。

○

車の中でアケミはセツコのことを考えていた。いましめられ、運ばれ、そして犯されようとしている彼女を哀れに思いながら、反面嫉妬に似たいらだたしさが心の中をぐるぐる廻るのを感じていた。そして自分をセツコの立場に置いてみて、そのゾクゾクするような被虐の快感が血を沸かすのを、どうしようもなかった。客の手で責めさいなまれ、狂おしく悶えのたうつ自分の体を大山の目にもっと晒したい。そして大山の手で女にして欲しい――。死んだってかまわないとさえ思う。

「どうだった？」

大山が運転しながら小声で云った。後部座席の二人には、カーラジオのジャズが邪魔し

て聞えなかった。

「セツチャン、かわいいそうだわ」

「うん、仕方ないな」

「代ってあげようかしら？」

「ふーん馬鹿だな。もの足りないんかい？」

「……………」

「じゃ少し虐じめてもらうか？」

「……………」

大山はアケミが不満らしいのを読みとっていた。だから彼女の目の前でセツコの恥辱の様子を展開するのも悪くないと思った。晒されたアケミの前での行為を客はより望むに違いないし、セツコには心理的苦痛を倍加し、そしてアケミ自身には男の本能の浅間しさを教え女の哀しさを自覚させることになる。

「相談してみよう。いいんだな？」

アケミは僅かに頷づいて見せた。

大山の家に着いた時、彼は客に云った。

「あの娘を、脇役に使って下さって結構ですよ。貞操だけは駄目ですがねえ」

三人の男と二人の女は納屋に入った。

袋から出された赤い頭巾のままのセツコが後手のままむしろの上に横たえられた。

「じゃ、そっちの娘にも裸になってもらいましょう。どうです、吊り下げてみたら？」

医者が云った。

「面白いな。しかし余り時間が保たないだろう」

「そりやあ吊り方によりますよ。うまく吊ったら、相当辛抱できるもんです」

二人が話している間に、大山はアケミの服を脱がせていた。アケミは目を閉じたまま彼の手が、すべての衣類を取り去るのを妨げなかった。

「口はどうしますか？」

「顔はそのままでもいいですね。その方が長持ちするしねえ」

手首が後手に縛り合わされ、その縄尻でウエストが強く締められた。くびれた胴のため臍が上向きになる程だった。背から両腋下を通して黒い絹帯が巻かれて胸の所で結び目が作られ、それに縄が結ばれた。机の上に立ったアケミの胸の縄尻が天井の梁にしっかりと括りつけられてから、机が外された。アケミは背中と両腋を通った帯のため、腹部を突き出したような姿勢で空間にぶら下った。足先と床との間には三十センチ程の隔たりがあった。

「これなら少しは保つだろう。足は開かした方がいいね」

カメラの男は、そう云いながらぶらぶらしているアケミの左足首に縄を巻きつけて引張り横の柱に結んだ。右足はそのままだったの、しばらくは股を閉じる運動が繰返されたが結局は、両足の間はほぼ直角を保つことになった。

「いい恰好だね。このままゆっくり見物して貰いましょう。それにしても、この娘はいい体をしているね。尻の恰好がいい。日本人には珍しいよ」

カメラの男は、アケミの背後に廻ってしげしげと眺め、その曲線を軽く撫でた。

「どんな気持ですかねえ？お嬢さん、なんと云ってごらんよ」

顔は自由だったがアケミは目を閉じ口をつぐんだままだった。口も縛って欲しかった。そのの方が苦痛が大きいにしても、屈辱感が少いように思えたからだだった。

「じゃアケミ、よく見ておくんど。そこからなら、よく見えるからな」

大山はそう云い残して、納屋から出て行った。彼はこれから行われる光景を見ている気持にはなれなかったし、また見ない方が客や女達も気分が楽だろうと思ったからだだった。「このままじゃ、無理だな。手は上の方がい

い、縛り直しましょう」

「前手に括って頭の後にやった方がいいですよ。抱き易いしね」

そんな言葉をアケミは目を閉じたまま聞いていた。縄のシュッと擦れる音がした。

ポンポンと二人は吊り下ったアケミの尻を素手で叩くと納屋を出て行った。

○

真暗な空だった。アケミは庭の土に打ち込まれた四つの杭の中で空を見ていた。四肢は杭に結ばれ、大の字になっていた。Dには大きな絆創膏がベッタリと貼りつけられていたが、目は自由だった。客が帰り、吊られた体

を大山の手で降ろされた時、彼女は云った。

「足りないわ」

「じゃ庭で寝るがいい」

そしてこの姿にされたのだった。セッコと大山は母屋の中に消えていた。アケミは仰向けのまま、自分がどうしてこんな女になったのだろうと考えていた。虐められて喜ぶ女、恥辱と苦痛の中で、快感すら感じる女——恥しい。しかしその欲望は麻痺の禁断症状にも似て絶ち難いように思えた。彼女はふと貞操というものが空しい意味しか持たないのではないかと想像した。性の喜びは未知の世界にあったが、自分が虐待の中で感じる痺れるよ

うな恍惚に較べれば影が薄いように思えた。

星のない空は静かで暗かった。

夕方からの気狂いじみたパーティ、そして残酷な人身御供——しかしアケミには物足らなかった。それは彼女が唯一の主役ではなくてむしろセッコの脇役といった立場で終始したからかもしれない。だから今こうして晒されているが、彼女は大山のことを、そして残酷な処遇のことばかり考えているのだった。

足音が近づいてきた時、アケミはそれが大山だと思ったが期待が外れた。

「寒いでしょう？大山さんが、これを着てろって。それから明日は満足させてやるから、よく休んで置けってことづけよ」

セッコだった。彼女はつい先程のことを殆んど気にもとめていないような口ぶりで、アケミの体の上から毛布をかぶせた。

セッコは去って行った。再び静寂に戻った。しかし、アケミに孤独感はなくなっていた。

注入されたウィスキーが、まだ彼女の体に酔いを残していた。その酔いが彼女の慾望を、果しなく走らせていた。

滅茶苦茶にして欲しいノ

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号〔文献〕

○限定版写真集「豊満と清楚」

女体緊縛グラフィック 定価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

定価 一〇〇〇円 略号（美4）

○限定版写真集

「女性刑罰拷問特集」日本版

定価 一〇〇〇円 略号（美5）

○限定版写真集△緊縛美女艶姿百態▽

定価 一〇〇〇円 略号（美6）

— 耕土散筆 —

『落穂拾い』

〈其の六〉

保^{やす}藤^{ふじ}久^{ひさ}人^と

24 狭き門

25 被写体

〈附記〉 24・25に関して

26 形態美 (腕) 27 形態美 (胸)

28 形態美 (腰)

〈補足〉 26・27・28に関して

〈後記〉 小口事件

24 狭き門

新年号の読者通信は〈花山〉に〈花〉でざかり。変な語呂合わせではないが、応募者

殺到には唯「驚き」の一語に尽きる。

12月号の〈花山千鶴子さん〉東京の通信文を見た時、

これはまあ、何と勇敢な(?)お嬢さん!! と感じ入ったものだが、新年号の通信欄の賑々しさに、編集部でなくても改めて投稿文を読んで見たくなる位。

未掲載の返信も多いというから、これはもう「娘一人に婿十人」なんていう生易しいものじゃなく、正に「三国一の花嫁」といっても過言でなさそう。

物好きに数えて見たら、通信全部で五十八通。その内の十通までが彼女宛のもの。

お一人の方に、これ程沢山の返信が集中したのは近頃珍らしい(以前にもなかった様に思うが……)。又、通信とは別に八上松潔さんVは「美学」を押し出して、正面切って挑戦していらっしゃる(奇クサロン)。

それというのも、12月号の〈花山さん〉の通信が余りに大胆であった為らしい。

「……たとえ全裸にされてつり責、えび責、股間縛りと、さまざまに責められ恥しめられ

でもかまいません（中略）。存分に縛り、恥しめもだえさせてくださいませ（中略）心ゆくまで、責めいじめてくださいませ……」

気の弱い私など、彼女の文章を此処に写すだけで胸がドキドキして来る。

この通信に接したなら、世の男性たるもの総て（SやMやに關係なく）、我れも我れもと発奮せずにはいられなくなりそう。

全く、刺戟的——過ぎる。

併しこれらを別の意味で考えると、一般的傾向として、SM（プレイ）へのハ入口きっかけVの如何にむつかしく、同時に、その相手の人の少なさ、及び、目差す人に対しての接触の困難さを、如実に物語っているといふことが出来そう。

大抵の方の場合、自分の周囲からSM的部分、その可能性を見出そうとする筈だが、その触れ合いの至難さを痛感するのではないだろうか。

アブニストにとって、これ程寂しいことはないのだが、この辺りが実社会の「現実」とでもいう可きか——。

従つてその感情の両面（SとMと）を問わず、悩み心で悶々としていらっしやる方も多いだろう。

——どうすればいいだろうか？

——どうにかならないものか？……と。

この場合、まず初めに考えるのはその「相手」そして「入口」。これが最大の問題点となる。併し『事実は小説よりも奇なり』という諺もあり、人生途上に於て、それを巧みに掴まえること、或は、積極的なその方法も皆無という訳ではないだろう。

が、「相手」に対しての、いくつかの可能性方途を、今此処に書き並べる訳にも行かない（発表したりする様な事柄ではない）。

で、話を一歩前進させ「相手」は仮想し、「入口」という部分に集中させて行こう。

つまり、可成り親交のある間柄、或いは若い夫婦、という状態でのいざない（入口）とすると、この場合は比較的その可能性に恵まれているといえそう（但し状況のみ）。そして、何事もまず最初……一番初めが肝心ということになる。

SM（プレイ）への「入口」は大変に手狭で窮屈、というのが常識である。

特に、大抵の場合は若い女性が相手なので、殆どの方が「未経験」であると予想されるので、そのハ入口↓きっかけ↓誘導Vという点に関しては種々の状況を考慮した上で、

尚且つ細心の注意が必要ということになる。

実際に、受（女||M）と能（男||S）との關係では、極めてデリケートな、そして上品なムードの中から萌芽発展して行く形態こそ望ましく、初めから直情的に、

ハ一種の告白的言葉↓嗜好↓緊縛の美学↓縛るVというように進めては、如何に当事者間に「愛」が存在しても、或は又、受動側（女性）の内的心理（潜在性も含めて）に「被」的要素があるとしても、余程の好奇心（理解を含め）がない限り成功せず、時には「艶消し」状態から「白々しい」ことにならぬとも限らない。

元来SM願望（露出も含めて）の方々（特に若い女性）は、フォトや關係記事を見て

——胸を締めつけられる想いが……。

——背中が痺れる様な、そんな気持ちに……。

——私も一度……。誰か私を……。

などと仰言る方も多く、確かにそれは、第一印象的な感情の發露で、自分の気持ちに対して正直なのだと思う。

併し、現実には其の場に直面して、直ぐ第一歩から悦虐状態（Mの場合）にまで入り込むことが出来るものだろうか？

「受縛」に到るまでの内部心理の葛藤は並大

抵のものではなく、能動者(男||S)が考えている程安易なものではないと推定出来るし内心(発意||空想)と外心(言葉||現実)の差異、SM的諸行為にはその様な「空想と現実」の相違がある(受感的に)様に思える。

普通の場合、若い女性方の内部にあるのは「未知↓悦虐」に到る空想的憧憬ではないのだろうか。そして実際の受覚(プレイの諸行為)は徐々に(初歩から)というのが自然であり、健全であり、又、SMの道義といえるのではなからうか。

従って、極く親しく、身も心も委ねられる相手なら別だが、始めは縄(緊縛)に羞恥以上の脅えを感じる様に思えるのだが――。

若しそうでなく、最初(未経験)から激しく鋭くと望み、充足点(M的な)に到るのだとしたら、常識的に考えて、一種の『危険な心理』の様に思える。

その感受性が激し過ぎるのだ。

そしてより以上(受覚的に)と突走って行きそうな気がする。

「溺れる」ということ以上になるのだろう。

実際のM的心理(或はS)は鬱勃から解放されて奔流の様に凄まじくなるものかも知れないが、その形態は明らかに「進行性」であ

り、何か空恐しい様な気がする。

(註・進行性↓発展型△小口事件V||後記) その様な激しい「進行性」よりも、静かな「将来性」的なものの方が望ましく、一つの理想形態といえる。

SM(プレイ)への入口、その「狭き門」もこの「将来性」に託した場合、割合安易に入り込めそうな道が開けている様に思える。それは――カメラ――である。

「被写体」として馴染み、或は馴染ませること。その前提として、お互いの愛情に始まる強い信頼と理解の必要なことはいうまでもなく、加えて、事後処理、その取扱いに充二分の注意が必要なのは勿論だが――。

25 被写体

将来性――今日よりも明日への望み……静かな想いでもある。

直情的な縄(緊縛)でなく、ゆっくりと外側から内部に侵入する。一種の心理作戦。

それが「被写体」であり「入口」なのだ。

SM(プレイ)への入口(誘導)は、被写体(縄のない)として馴染む(馴染ませる)ことにあるといえる。

始めに必要なのは、縄(緊縛)ではなく状

態(ムード)であり、与えるのも、羞恥苦虐(責め)でなく、信頼理解(触れ合う心)でなければならぬ。

入口(初歩及びそれ以前)から入らずに、奥(耽美的SM)には到れない。

これは――道理――である。

将来に託しての縄のない静かな作戦。

△カメラ↓被写体↓フォトV||は、この場合意外に役立って行くものの様だ。

少しずつ馴れ馴染んで行く。

受(M)と能(S)を問わず、その過程に於て、内的願望(SM・露出を含め)も、ささやか乍ら満たされる部分がある筈である。

直行的でないので、警戒や脅え心も次第に薄れて行くものの様で、一種巧みに被的心理(女性の)の動向を掴み得ているものと推定出来る。

種々の口実を作って少しずつ脱いで戴く。

フォトに関しての考え方や状況などについては既に書いた。

(註・拙筆△落穂拾い②V||2月号参照)

その理由は極めて作爲的(口実)である。

確かにその時点では単なる口実に過ぎないが、やがては当事者間の実質的な△記録↓記念V||とも成り得る質のものだから、決して無

意味なものではない。

そして、見計った適当と思われる頃に漸く縄（緊縛）が登場する。

仕組まれた謀計であり、「被写体」は抵抗を覚えるであろうが、その実、被的感情の流れに極く自然に寄り添って来ているので目的地（奥）に到達し易い。

加えて、レンズは常に「美」を追う。

人間というものは（特に女性）意外に、「美」に対して弱いもので、美しい、或は綺麗を意味する言葉の集中攻撃には負け易く、相手が親しい程崩れ行く度合が多いので、この辺りの心理をも上手く捉えているということも出来そう。

そして、この様な形態の推移が、最も安易で安全な△SM（プレイ）への入口△に通じている。

△附記▽ 24・25に関して

△カメラ↓被写体↓フォト▽を決して奨励するのではない。この様なことを奨めると叱られそうだし誤解を招く恐れもある。

又、私の様な乏しい経験で断定することも間違っているかも知れない。

併し、数少ない可能性……その内の一つとして有意義と判断したので、飽迄、その目的の

手段として書き綴ったまで——。

尚、口巾ったいことを書き並べたので、お前は——？ と、皆さんの反問がありそうに思える。

私……残念乍ら失敗の部類。というより、教えられ気付いた時が遅かった、という方が正しい。で、今になって後悔している。

それだから尚、最初の「きっかけ」が大事だと強調し度い。

そして、これらの思考を割出すについては交友から教えられるところが多かったと申上げておく。

その方々、少くとも七、八名（ご夫婦もある）ので実際は十数名になる）は、このところ何カ月かの△奇ク▽を見て

「あの野郎！又、勝手なことを書いてやがる！」と苦笑されているに違いないと思う。

兎に角、その方々は、私の総て……住所氏名はもとより動向まで知っていられる。

△但し、奇クの継続愛読者は少い。私などと違って立派（？）な実践者であり乍ら——。

この辺り、芳野さんの言||註・11月号・濡れにぞ濡れし・A||を裏書きしていることになり、実際にそういうことを聞かされている▽

最近、折々目につくことだが、プレイ希望

の方々の中でご夫婦同伴というのがある。

前記△花山さん▽に対するものから例をとって見ると△小竹一浩さん||東京▽がそれ。

文面を拝見したところ至って親切丁寧。若し花山さんが希望されたなら「M||被」の実態にも接し、その上で、我れと我が心に問うことも出来る。

私の様にヤジウマ的に観察させてもらうなら、最も無難な様に推察出来るし、実際の場合を想起しても、同伴即一種の安全弁、という事が出来るのではないか——。

厳密にいうなら△三者関係▽の内の一つ、そういう形態なのだが、初心者（変ないい方だが）向きの一つの△有り方||入門▽といってもおかしくない。

又、人に接するということは、きっかけを作る意味でも、知識を博める為にも必要なことの様だ。

併し、実際には自分の四囲、日常顔を合せる方々と心の中（SM的な）まで語り合うという事は、それがSM（所謂アブ）であるだけに甚だ困難、というのが誰方にも共通する本音であろう。

これを解決して呉れるのが「文通」による交信。以前私は△文通||という名の味覚▽とい

う言葉を使用した(註・9月号)、比較的顔を合すことの少ない方、そういう方の方が心の繋りが深くなる様な結果が出ている。

その場合でも、決して意識してアブ的なことに触れた訳ではない。

何時の間にか、知らず知らずに深い部分を探ぐり合い話合っていて、逢った時に、お互いに思わず微笑を——ということが多い。

そしてこれらは、ご夫婦という形に比較的可能性が高いということは、はっきりいえる。

視野は至って狭くなるが、読者通信欄の貴重さ、存在価値もこの辺りにあると思う。(私事で恐縮とご諒承をお願いして右加筆)

26 形態美 (腕)

△被写体△を取上げたなら当然の様に、その次はご婦人の方の「美」を追いかけていく。

この場合、問題は△着衣か脱衣△ということになるだろう。

着衣△美しいというより綺麗という方が適切かも知れぬし、艶めかしくもあり、深奥を秘めているので、幻想的な神秘さを感じることも可能。夢的要素が全姿に満ちている。

脱衣△その形態美を追うことは芸術性とい

う意味で当り前かも知れないが、余りに誇張されたものは造形的な「美」に近くなり、何となく近寄り難い威厳を感じることもある。

併し結果的には後者の方が好ましい。というのも、私という人間が至って俗っぽい為でもあるのだろう。

扱って、その形態美について、まず△上肢△から——。

白魚の様な指……美的形容詞である。

△ダ・ヴィンチ△の△モナ・リザ△の指は最も典型的な女性の指の美を表現しているといわれているが、実際に、やわらかい感じで長い指は、女性の繊細な心をも表わしているということである。

確かに指の美しさは単に指先や爪だけでなく、女性そのものの美しさや愛らしさを感じさせる様である。

柔軟で柔和。伸び伸びとして健やか。

爪先から肘、上膊から肩に至る柔かい肌と曲線は、腋の下のかぼみと組合って快的な連想さえ湧かせるに充分な要素を秘め湛えている。やんわりと動き、髪を撫でる風情は、その内側の白さが艶々と際立ち、最も美的であり魅惑的でもある。

M派は極めて耽美的な憧憬眼を以て仰ぎ見

ることだろう。そして美しく光る爪、時には鋭い尖端を持つ爪のある優美な指、その手に握られた「非情のもの」その対照の妙に、或る種の陶酔的愉悦を覚えることも出来る。

S派は「吊る」ことで、その「美」を見極めようとするだろう。牙え牙えとした優雅な二本の小柱は微かに戦のく。その根本には「羞」がある。極めて女性的な美の悶えはその辺りから始まろうとしている。

ロープも荒々しい「剛」よりも、鮮烈な色彩のある「柔軟」の方が好ましい。妖しい模様を描き出すことも出来る。そして、搦やかな指の喘ぎに極地的な「美」を発見する。

(註・上肢に次いで下肢(脚)なのだが、既に触れたので省略する△落穂拾い(9)(10)

27 形態美 (胸)

胸の美しさ……女性美象徴の重要な部位。

曲線はやわらかく、隆起は優しい。その感触にはとろけるような甘さがあり、男性を魅了し感嘆させる。

乳房の形を大別すると三つあるという(適令期の女性の場合)。

お椀型△大きなお椀を伏せた型で尤も理想的で「美」的であるといえそう。

円筒型Ⅱ少し垂れ下った感じだが、豊かな肉付は又違った一種の美しさを保っている。

円錐型Ⅱ初々しく清々しく、そこには清らかな美しさがあるといえよう。

円い隆起のある胸は、おおらかなゆるい傾斜を描いて頸につながる。いや、頸から始まっているのだ。

白いふくらかな線と、深くこんもりとした谷間から双つの丘に至り、その項点にあるのが“ベル”即ち女性の“目覚め”に通じる。

M派にとって、麗美の隆起は、唯、讚美し憧がれるだけ(M的男性にとって女性の胸部は、礼讃憧憬の場合が多いらしい)。

だがS派は……彼等にとって女性の胸部程

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食 略号「ほや」

大手札三十六枚一組 六〇〇〇円

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある山原清子が他に一名のアシスタントの女性を使って一人のM男性を、こてんこてんに虐じ差しめる有様を順を追って、刻明に写真化、マゾファンの思わずぞくぞくする場面ばかりを集めました。

“美”的充足(緊縛)を得る個所はないのではないか。

其処は豊かな肉塊である。極めて柔軟、しかも、押せば跳ね返る弾力性に富んでいる。

その変化は、汲めども尽きぬ泉の様に、夢的想念さえ充足させて呉れる。

縄の美学は、この女性の豊かな胸部があつてこそ、始めて完成されて行くと言っても過言でないだろう。

妖しい想いも芽生え育つ。

実際に、縊れる程に喰込んだロープは、脳裡(想念)で描くことの出来ぬ、自然な造形的な美しさを表示することさえあり得る。

緊縛による女体悦虐美は胸部から産れ出て来るものの様。それは実に千変万化、形態の妖美と共に、受縛の苦虐、その喘ぎを起伏の緩急で明示する為でもあるのか。

28 形態美(腰)

ウエストからヒップの曲線……そのバランスの妙は、更に続く下体、脚線への実質的な“美”を物語っている。

それは、細い急激な曲線から始まる。

大きく割れる様に拡がり乍ら、円く固く引締り、しかも弾力豊か。極めて肉感的であ

る。女性の生活の総てはこの辺り、ウエストとヒップの関係から始まるといわれるのも、或は穿ち得た言葉かも知れない。

それ程、内的、外的の意味を含めて女性の中心部位であることを示している。

愛らしい臀部。ボリュームのある双丘。

その何れもが、ご婦人の肉体の美しさには絶対に欠かすことの出来ぬもの。そして其処には、最も女性的な根源、神秘的な部位が確在する。

M派には夢幻的な凡ゆる想念と動向が其処から芽生える。

女性の腰部に対するM派の渴仰は“無限”といっても言い過ぎでなく、若しその部位が存在しないと仮定したなら、世のMと称する方々の殆どが失望落胆、自己の道を見失って虚脱状態に陥って仕舞うことだろう。

それ程、重要な意味を持つ。が併し、これはSM以前、つまり人間として当然のことであり、アブニストはその“当然”に更に“アルファ”を加えるのだから、その想念には或る種の凄しさが籠っているといえるだろう。

悩ましいとM派は見る。そして切なさを哀願にこめる。極めて人間的な真実のMの姿。その瞬間、女性の腰部は脚線と共に、実に

偉大な力を發揮し、凡ゆるものを懼伏し尽くす程の勢いを見せる。

そして、それがM派の歡喜に通じているのだ。S派は極めて妖美な極限的羞恥の悶えを其処から貪ることに専念する。

割りつけるものは、荒々しい程効果的であろう。

洩れる苦鳴はそのまま「悦服」に通じる筈なのだ、自ら浮ぶ悦びを隠し切れない。

そして蠢くものに真新しい異質的な「愛」を覚える。その「愛」に相應しく、喘ぎ乱れるものは、妖しく又美しい「すがた」であり「かたち」でもあるのだらう。

△補足▽ 26・27・28に関して

昔から女性の美しさは花にたとえられている。その何れもが明花であり麗花である。

そして「花をあざむく」と表現される。

女性美は△花の様な色調の美▽と△目を敲てる曲線の美▽と△澆漓とした躍動の美▽と……その三つが組合さった△立体美▽にあるといえる。

色調美は襟足に始まる。美々しく柔らかな襟首の白さと、嫋々とした黒髪との調和は女性だけの持ち味でもあろうか。

曲線美はそのまま女体美を明示する。なだ

らかで引締まり、そのどの部分にも「美」が存在し、全姿に言い尽せぬ総合美を見せ乍ら女体の美しさを形成している。

立体美は動きにある。所謂姿態美は其処から産れる。駆ける姿、躍動、戯れ……揺れ動く全姿。それは実に誇示するに相應しいものといえるのではなからうか。

再び△脱衣と着衣▽の問題点に逆戻らう。

脱衣は直視的に女体美を探ぐり出すことが出来、視感覚の反応も著しいがそれだけに、「夢」に乏しい。

着衣には色彩がつき従う。男性の感覚に激しく作用する色もあるという。

桃色乃至紅色、或は真紅色は高揚を促す。

赤色は強い刺激を与えるという。

青色乃至緑色は「静」を表現し抑制的な色彩だという。これらは総て一般的な色彩に対する視感覚だが、色によって相手の感情を左右することも可能だといえる。

着衣はこの視覚刺激度の効果……その結果を期待することも出来、男性側の受覚度は極めて複雑なものになり、その辺りからも又、新しい「美」が創造出来るともいえそうだ。

(註・26から28までの三項目及び△補足▽についての参考文献は△夫婦の美学▽及び△視

覚と性感情▽何れも33年度刊行)

(尚、右形態美は主として△被写体▽の対象として記した事をお断りしておきます)

△後記▽ 小口事件

進行性——より強く、より激しく、より鋭く、と更に更にと刺激を追い求め、その心理過程が極端で、最早や病的に近くなる。

大正六年、全国の人々を驚かせたという△小口米吉の殺人事件▽が、その被虐進行の好例といえそうなので一筆。

当時△変態性欲者の殺人▽として騒がれたこの事件は、昭和七年△猟奇資料▽に小説化され掲載された。題名は△烙印▽。作者は花房四郎。この人は例の秘密出版の雄、梅原北明の第三活躍期(昭和三年十月以後)に協力した人(北明は出獄後の昭和三年九月に花房四郎を訪問している)。

雑誌△猟奇資料▽の右掲載誌は発行と同時に禁止。発行実数(読んだ人)二百位と推定されている。尚(小口事件)は同じ作者(花房四郎)に依り全面的に改作△猟奇一代女▽という題で戦後(23年)発表されている。

(了)

殺人マニヤのたのしみ

黒田 寿

桐原 柴門 絵



……暗い夜道を、私はただ一人であるいている。はるか前方にかすかな灯を認めたのに力づけられて。

やがて、その灯の明りのなかに一基のT字架が浮びてきた。言うまでもなく、それには一人の女性がハリツケになっている。T字架というのは首がないのだ。

間近に立ってよくみると、明らかに若い女性、それも処女に違いない。かたい、おそろくは誰にも触れられたことのないふたつの乳房。ふくよかな下腹、スラリとのびた両脚。いずれもが生れたままの姿をみせている。

ただ、両の脇腹には無惨にもポツカリとほら穴があいていて、なかば凝血した血汐がこびりつき、まさに地獄の入口を思わせた。

そして首がない！これ以上のとどめはないだろう。斬口からは白い骨がのぞいている。

今迄気がつかなかったが、ここは家の軒先であった。窓からかすかな光がもれている。私は勇をこして、その窓の内部をのぞいた。

室内にはテーブルがおかれ、一本のローソクが、その上に立っている。更に白い大皿がその傍にあり、私は遂に探し求めていたものを発見した。

それは小百合の生首であった。苦悶のためゆがんだ頬。無念そうにむきだした歯の間から、ひとすじの血汐が……

○

これは十年ほど前にみた夢ですが、今でもはっきり覚えています。殺人マニヤの私でもこんなすばらしい夢は三回とありません。

私の小説の読み方は、何回か紹介しましたが、街を歩いていても空想の世界に生きている有難さ、美女の死体は本当の夢でなくとも山をなしてゆくのです。

例えば、クリスマスが近づけば東北の小都市でも肉屋の店先には七面鳥がさがります。羽根をむしられ首っ玉を縛られて……これが私の目には全裸のまま絞首刑に処せられた美女となるのです。

以前、私は屠殺場に勤務したことがありますが、職員の仕事を見るのが楽しいものでし

た。美女が後頭部を撲られ、床にくずれおちるとみるや、おおむけにされて鋭い刃を頸すじにあてズバズバと首を掻き落される。

ふくよかな腹に巨大なメスがさつと横に走るや、血汐と共に内臓があらわれる光景。

一方では回転のこぎりで股から真二つに裂かれた死体が天井から逆吊りになっている。鮮やかな流れ作業は、これら多勢の美女をたちまち片附けてしまい、首から爪の先まで何一つ無駄にはしません。

最後に私の前にあらわれるのは、ヌードのレットルをはった女肉の大和煮のカンヅメ。それにアルコール漬の生首であることは、言うまでもありません。

空をおおげばヘリコプターが飛んでいる。あれには脱獄した女死刑囚が乗っているのではないか……。間もなくエンジンが故障して彼女はパラシュートで降りねばならない。その着地した場所は、彼女のために準備されていたギロチンの傍であった。かくして「ごくろうさん」とばかり、首を斬られて哀れ一巻の終り……。

空想もこうとりとめがなくなると、ダンプカーあたりにはねられるかもしれません。早く家に帰るとしますか……。それとも今迄無事

でいるのは、あまりフラフラしているので向うの方でよけているのかな？

○

家に帰って最初にするのは、一冊五円ナリで買ってきた古週刊誌から、美女の顔や姿を切りぬくこと。ただし、おめめを大きくあいてニッコリ笑っているものには用はない。

F・Yの顔が一頁大になって出ている。どんな場面かは知らないが、目をとじ、唇をちよつと開いた、いくぶん苦しそうな表情。これだ！

チヨキチヨキと切りぬいて、別な白紙にはりつける。首の下には四角な板をうちつけた棒杭が、あらかじめ画かれてあり、斬口その他にちよつと手を加えれば、F・Y嬢は斬罪梟首に処せられたわけ。

Y・T嬢が鉄棒にぶらさがっている。当然両脚はダランと宙に浮いた形。よし！彼女は絞首刑だ。

切りぬいた時は、両手を高くさしあげた姿だが、これを両腕を後にまわして縛られた形にするのはわけない。だが目が死人の目らしくない。かくして彼女には目かくしが与えられてから絞首台より吊りさがる。



S・Y嬢の水着姿。四肢を大の字にひろげ陽の光をあびている。すばらしい、是非バラしたいが笑顔ではどうも……。そうだ、首なし死体にしよう。美しい首が無造作にチヨキンと斬り落される。

こうして美女たちは、次々と処刑されてゆきます。ハリツケ、串ざし、股裂きなども出来るし、絵の下手な私には、もってこいのおあそびです。

夕刊をひろげ、タネをさがします。あるある、一秒間に二百万枚の超高速撮影が可能



黒い旗は死刑が執行された合図です。おそらく八時ジャストに、行なわれたのでしよう。一、二分で終了したのだから絞首刑ではありません。銃殺とも思われないので、テス嬢のうけた刑は斬首ということになります。

両腕を裸の胸にくんで台上にあがり、静かに首をさしおろす。その白く柔かい首すじめがけて斧がふりおろされ、

鮮やかに切断してしまう。

刑吏はその首をつかんで検死の役人にさしおろし、大きくうなづくのをみて処刑終了の旗をあげる……一、二分で十分でしょう。

死刑囚には正式の埋葬は許されぬので、テス嬢の死体は刑務所の片隅に掘られた穴にほうりこまれ、生首はそのひろげた脚の間においてすべて片附く……。

外国物の場合、その執行場面だけはムリして横文字の文向までおぼえようというのだから、すこし念が入っていると思いませんか。さて、今日も終わった。たのしい夢でもみるとしますか。

……洞穴の奥からはいだしてきたお富士は大きく深呼吸した。敵に追われて闇のなかを逃げまわったが、ようやく助かったのだ。だがその時、お富士はプーンという血汐の香りに気付き、すぐ目の前に、生首がころがっているのを発見した。

それが仲間の晴子であると認めるのと、出口でまちかまえていた敵が大刀をふりおろすのとが全く同時であった。

「バシッ」というぬれ手ぬぐいを床にたたきつけるような音と共に、お富士の首は見事に宙をとんだ。「どおっ」とばかり鮮血が噴きあがる。

敵はくずれおちた死体をひきだし、新たな獲物をまつ。よくみれば死体の数は五つも六つもあるではないか。克子などは首にロープがまきついていて、これなどは穴から首を出す。キューと締める。ぐんなり。ハイ、一チヨウあがりと軽く片附けられたものだろう。ゴソゴソと音がする。また獲物がでてきたのだ。敵は穴の傍に立って大刀をふりあげてまっている。

幸代が顔をだした。

「アッ！これは……キャア！たすけて!!」
「バシッ！」

になるといふ。これを用いれば打首の場面など、どんなにすばらしくなるだろう。銃殺で弾丸が乳房に喰いこむ瞬間もわかるだろうし爆破の刑で首や四肢が砕けとぶ様子も見られるだろう……。

「テス」なる小説を手にとる。世界の名作も私にかかってはかないません。おめあては最終頁、清純な乙女テスが処刑されるシーンです。

「運命はテスとのたわむれを終わった」などの文学的表現は好みません。「八時をすぎて、一、二分たつと黒い旗があがる」というのが問題なのです。

御仕置おぼえ書

「はりつけ」について

おもだか・しの

十二月号には、久しぶりに磔の画が出ました。

女の大文字磔の画は十年位前に出た「女人磔零花」のさし画以来で、その後も禪着用のや火焙のための刑架の画は二、三回見られましたが、ちゃんとした磔の画はまことに珍しく、本誌の外にもU誌に一度出たきりではないかと思えます。

女人磔零花の時の二人並んで刑架に懸けられた画で文章の通りに湯文字一枚の姿で大文字磔に成った画でした。此の画は罪人の姿勢は大変よく髪も髻を解かれた乱髪が風になびいて居り、中々よい画でしたが惜しい事に縄が両手首と足首だけにしか掛けて居りませんので安定感が無く残念でした。

今回のものは囚衣の両腋を破って肌を出したもので縄もよく締って居ります。又刑架の高さもほとんど定法通りで柱も五寸角に見えます。横木が角材に成って居るのは一寸変ですが有合せの材木を使ったのでしょう。

江戸では磔も珍らしく無かった様ですが、地方の藩では何年、何十年に一度位の御仕置ですから刑架の寸法も江戸の小塚原、鈴ヶ森両刑場以外の所では、それ程きちんとした物では無かったと思います。

図のものは江戸のものですが、此れが一応標準に成って居りました。しかし腕木より足木の方が長いのは此の図を画いた人が何か思い違いをしたらしく書き込み寸法が腕木は五尺五寸と有るのに足木の方は左右それぞれに

三尺と書いて有りますが、他の古い画を見ても横木の長さは三本共同し長さに書いて有りますし、有名な横浜における磔の写真の刑架も横木の長さは同じですから、横木の長さは五尺五寸又は柱の太さを加えて六尺に作ったものと思われ、当時の人の体格から考えると腕木足木共五尺五寸が正式の寸法では無かったかと思われまます。

柱の太さ五寸四角にしても腕木の太さの巾三寸五分、厚さ一寸二分にしてもずい分太いものですが、此れは江戸時代の建築材の定寸であって刑架用として特別に製材したものは無く、柱材は末口五寸五分から六寸位な丸太を手斧で四角に削ったもので角には丸太の肌が残って居るのが普通です。貫材は「ガガ

リ」と云う大きな目の荒い鋸で挽いたもので、すから柱には波形の斧目が付いて居り、角は面に成って居りますが所々に小節が出て居りますし、横木は鋸目のままの荒木でどちらも柵材ですから角にきわると棘がささりやすい木で、けっして肌ざわりのよいものでは有りません。

現在此等に相当する材木は柱は十糎（三寸三分）角、腕木の貫材は九糎（三寸）巾厚さ一・五糎（五分）のものであつて此れでは柱はともかく、腕木の方は一寸もがけば折れて終うでしょう。

又正式寸法の磔柱では腕木は柱の表面から一寸九分（約六糎）後に有りますから、刑架に縛付られた罪人は手足を後に引付られ胴体を前に張出した姿勢に成ります。

身体を乗せる馬乗りは二寸五分角で柱から五寸程出て居るだけです。罪人を縛付けて終うと据前の中に陰れて見え無く成ります。

此の馬乗りは磔柱には腕木以上に重要なもので、此れが無いと磔柱に罪人を結付けてから穴に入れて建て、土を搗き固めたり役人の検分を受けたりして居る間に身体の重みで結縄が締って罪人が窒息又は失神してしまいますし、処刑後晒して有る間に腐った身体が繩か

らぬけて落下してしまいますから、大文字刑架だけで無く十文字型やその他の型の刑架にも必ず取付けてあるもので、特に外国の様に罪人を釘で打付ける時などは馬乗りが無いと柱を起しただけで釘の所から手の甲が裂けて刑架から落ちてしまいます。

日本では荒縄で結付けるのが古来からの定法ですから、此んな極端な事には成らなかつたと思います。此の点については以前吉田義雄氏が裏窓誌上に大変詳しく発表して居られます。しかし此れとは別に江戸時代磔柱之図として馬乗りの無い十字架に足台を取付けた画が有り、映画関係等ではもっぱら此れを根拠として同型のものを使用して居りますが、その結果は御承知の通りで、あれは江戸時代末期に処刑後の晒しが三日二晩にかぎられてしまった後のもので、いくらしっかり縛付けたとしても五日とか十日以上もの晒しに使用出来るものでは無く、たとえ処刑前にはしっかり縛って型をととのえても処刑後は身体がずり下って非常にだらしの無い姿に成りますから、多分人の悪い役人が婦人の罪人を羞しめる目的で思ひ着いた代物でしょう。

馬乗台の寸法も標準は二寸五分（七・五糎）四角ですが、角材を四十五度回して上が峰に

成る様に取付ける型式もあり、腕木材の残りを使用する事も多く、此の時は巾が一寸二分と角材の時の半分程に成りますから少し痛いでしょう。又諸藩で使用したものの中には罪人の身体をさらに安定させるために馬乗の上の面を鋸齒状に作ったり細い釘を幾本も植えたりしたものもあり、中には舟などに使う鉄道の犬釘の様に頭が折曲った釘を一本打込んだものも有ったそうです。

此等の、変型馬乗台付の刑架に懸けられると、柱を立てられると同時に木馬責の状態に成り、痛みで気がまぎれますので、失神を防止するため大変効果が有りますし、御槍を受けても此等の尖端が肌に食込んで身体をしっかりと支えますから、身分の高い罪人や、婦人の罪人のために色々工夫したものが使われました。

江戸時代末期には女には足木の無い刑架を用いて十文字形に張付ける方式が普通に成っていました。しかし磔のはると云う言葉は開き引く、と云う意味でありますから、はりつけと云えば引き開いて付ける事で有り、足を二本束ねて縛ったものでは、はりつけと云う刑名から考えても変なものですし、徳川幕府の伝統的なキリシタン禁止政策の立場から



見ても、キリスト教の象徴で有る十字架を公開の場所に立てて展覽すると云うのは真にけしからぬ話で有ります。

したがって日本の磔柱は古代は別として江戸時代以後のものは、キ字型刑架が正統で有ると私は考えて居ります。

又ははりつけの別名を機物(はたもの)と云うのは日本の古語では「機械」すなわち機能をもった装置の事を総称して「はた」と呼んだ名ごりで、人の身体を張開いて固定する刑

架そのものを指す言葉であります。

しかし刑架には此の外にも実に様々な形のものがあり、井、巾木、鳥井、A、I、T、X、Y、型などのものが日本でも又外国でも使用されて居り、此の中井字型のものは罪人の背中が露出

出来るのが特長で、名和氏の『拷問刑罰史』の串刺の項に此の型の刑架を用いた串刺張付の画が出て居ります。

又外国ではY字架の一種として、自然の立木を使い適当な枝を腕木として利用する方式がかなり流行したらしく、此の類の画は数多く見られます。しかし此の方法は最初罪人を刑架に懸ける時、抵抗する罪人の手足を丸い樹木に打付けるのは困難ですから、此の種の初めから立ててある刑架を使用出来るのは宗

教関係の罪人等に限られるのでは無いかと思います。

磔の中でも一風変わったものに逆磔が有ります。此れは公儀、諸藩共叛逆罪専用に使われましたので、実例は極く少い様ですが、罪人はいずれも一角の人物ですし連座する者も多く成りますから逆磔の御仕置と云うのは中々の見ものであったと思います。

水戸の徳川家は尊王の家系として有名ですが、幕末には二党の対立がはげしく、一方の天狗党が敦賀で全員死罪に成ったのは御存知の通りですが、その後水戸で再建され明治以後迄の主流に成りました。しかしそのために反対党への報復は極端なものと成り党の主力だった人は明治五年反逆者として水戸において逆磔に行なわれ同類の者も、それぞれ処刑されました。

公儀の磔には附加刑として生晒と引廻しが必ず附きますが、此の時は引廻しだけだった様です。刑場には中央手前街道近くに死罪用の血溜穴が掘られて居り、その奥に磔柱を建てる穴が掘って有り、その向うにキ字型刑架が置いて有りますが、逆磔ですから常の馬乗りは附いて居りません。又一方の隅には獄門や死罪に行なわれる残党や、縁座の家族が引

据えられて居ります。引廻しの馬からかつぎ下された罪人に向つて役人が名前を呼び、うなずくのをたしかめると、非人たちは罪人をついで磔柱の上に持つて行き柱の根の方に頭を向けて下すと、後手に縛つたまま柱の上に仰向に寝かします。次に足の所について居る人足が罪人の両足首を持つて普通は両手首を結付ける所にそれぞれ結付け、次に腰を柱にしつかりと結えて終います。

此れで罪人は下半身を縛り付けられたので逃る事はもちろん、起上る事も出来なくなりました。そこで今度は上半身を押え付けて居た人足たちが、後手の縛縄を切つて両腕を左右に開かせて横木にそれぞれ結付け、それから着物の両腋縫を破つて細縄で前にたばね、きちんと肌を出してから胸にたすき縄を掛けます。正位の磔では馬乗りで体重を支えますが、逆磔では支える所がありませんから、たすき縄をしつかり掛けて体重の支えにいたします。

人間は逆さまにされると、頭に血が溜つて数分位で失神し、間もなく死亡してしまいます。しかしそれでは極刑としての役に立ちませんので結び終つた罪人の額に酒樽の呑口の穴などをあけるのに使う太い鼠錐で穴を明け

てから、十四、五人で刑柱を起して穴に立て土を入れて突固めてからさらに土際の横木の上に土を入れた米俵を乗せると磔柱はしっかりと立つて大抵の事では動かなくなります。

罪人の額の傷からは、どんな血が流れますが、頭部の血圧は正常に保たれますので、意識が乱れる事も無く、視力も変化いたしません。此うして逆磔の用意がととのうと今度は、隅に引据えられて居た罪人の中から先ず逆罪人の母を曳出し、刑柱上の罪人と対面させてから柱の前の斬場で首を斬り、すでに用意の出来て居る獄門台に乗せ、次いで妻、子供、それから一類の者が斬られる所を残らず見せてから、定法通りに鍔で突きました。

何分文明開化の波の立始めた明治初年の事でしたので処刑後の晒も短く、その後間もなく此の人たちの罪状も自然消滅と云う事に成つてしまいました。

以上は大分特殊な例ですが諸藩の磔は大体此の様なもので、同犯の者の処刑を見せてから磔者を処刑した例は多い様です。

さて公儀の磔には江戸、京、大阪共必ず生晒しが付き、数日間の晒しの後さらに市中引廻しの上刑場又は罪人の住所、或は犯行の場所で磔に懸け、そのまま短かければ三日二晩

普通は五日間、捨置晒しの後、刑架を取片付け、刑場以外の場所の時には死骸は刑場に送り、捨札は一カ月間立てて置きます。

捨置晒しが普通は五日と申しますと、大分異論が出ると思いますが、有名な天和三年に行われた、おさん茂兵衛の磔の時の記録には五日昼夜と書いて有ります。又諸藩では珍しい仕置ですから大抵十日位で、一カ月以上も晒して置いた事も間々有りました。ただし此等の日数はいずれも磔柱に懸けたまま晒して置く日数の事で、磔柱を取払つた後の死骸をそのまま捨て置かれる事は他の御仕置と同様です。

さて大分話が前後しましたが磔の御仕置を始からのべますと、磔と火焙の時には囚人は先ず晒を申渡されます。しかし此の時にはすでに内々で本刑の仕置を知らされて居るのは他の死刑と同様ですから、囚人は定法の囚衣の外にも白洲に出る時着用を許されると思ふ衣服などを用意して朝の呼出しを待ちます。朝は七時過位に呼出しが有り、目附立会吟味の囚人は奉行所へ送られて申渡しを受けますが、並の囚人は牢を出ると直ぐに晒場に出る身仕度をさせられます。生晒しは死刑以外にも非人手下、奴等に附けられますし出家にも

申付られ服装は何れも囚衣本縄附が原則で、晒し方はほぼ同様でしたが日数は日本橋の晒場に三日間が相場で、磔や火焙りの罪人の様に何箇所もの札所に何日も晒される様な事は有りませんでした。又鋸引晒しの上磔の時も日本橋に三日間と定まって居りましたが此れは穴晒しの装置が大仕掛で移動が困難なためだったと思われます。穴晒し、すなわち鋸引晒しと、普通の晒し、穴晒しと区別して陸晒しと云われる晒しの方法や晒場の図は多くの書物に出て居りますから、申す迄も無いでしょう。

奉行所に礼装で曳出された囚人も罪状と何箇所において何日間晒しと云う申渡しを受けると他の死刑同様未決の囚人から士農工商の身分を放れて罪人に下り衣服を脱がされ鬻が解かれて牢屋敷にもどり、又外鞘へ曳込まれて生晒しの身仕度をさせられます。

享保年間には磔や火焙の生晒しが特に厳格に行なわれた様で此れは兇悪な犯罪や火付が非常に多くなつたせいらしく、日本橋及五箇所の札所に一日ずつ晒したり、磔では有りませんが、放火犯の女を丸裸にして日本橋に五日間晒した例も実際に有って、此れを見物した外国人が、後にその有様を画に書いて居り

ます。

此等の罪人は何れも外鞘の内身仕度をととのえ本縄を掛けられてから、足にもホダを取付けられ、番で其の日の御晒場に送られます。江戸の日本橋の晒場は橋の南西側の空地で高札場と向い合つて居り、現在は交番の前の歩道と車道の一部のあたりだったと思われます。

晒場の番人や人足はいずれも非人ばかりで朝番で運んで来た罪人を下す時など、土砂を空ける時の様にわざと地面に放り出して縄付の身体が転り落ちるのを、笑い合うのが普通だったと云います。又場内に罪人用の便所も作つて有りますが、実際に使わせてもらえたかどうか、あやしいもので奴などは小手を許されるとは云つても地面に打込んだ杭を背負つて座らされて居るので大勢の見物人や、非人たちに笑われ乍ら消え入りたいばかりの恥しい思いで座つたまま用をさせられた罪人が多く有りましたが、何れにしても此の晒しと云う御仕置は晒される者に取つては大変つらい御仕置で、当時としては最も人通りの多かった所の広場の真中に縄目ホダ付のあさましいなりで座らされ、朝早くから夕方まで毎日毎日通行人に恥姿を見物されて居なけ

ればならないのですから、士分以上の婦人が丸裸で晒されるのは火焙以上の苦行でした。此うして定の日数の晒が終ると次は引廻して今度は牢屋の白洲で「引廻しの上磔」と申渡されます。

引廻しの取扱いや服装は、大勢の見物人が見て居り、はっきりして居る様で案外わからないもので、小説などでは大家のものでもない分変な事が書いて有るのを見受けます。

引廻しは死罪以重に附けられるもので、死罪と獄門には罪状によって加重された時にだけ附けられます。念のために申しますと同じ公儀の死刑でも斬罪、切腹、下手人は閨刑と云われて、正式の処刑とは区別されて居る高級な寛典でありますから罪人を恥しめる晒し引廻し、晒首等を加えられる事は絶対に有りません。しかし、高貴な身分の人が重罪を犯した時には取調べに入る前、又は罪状が明白に成つた時に、改易を申し渡して身分を庶人に下して終いますから、その後は牢問でも拷問でも自由に使えますし、どんな御仕置でも極刑に迄行なえるわけで、此の事は又別の機会に詳しく書きます。

磔と火焙には常に引廻しが附いて居り、旗本と御家人の当主だけには引廻しと晒しを

免除した話が伝わって居りますが、それも幕末の頃だけらしく、磔と火焙りには、必ず晒しと引廻しが附いて居ると思つて差支え有りません。

御仕置に引廻しが附く時には、朝牢を出た後、そのまま刑場へ送込まれますから、罪人の服装は処刑迄変化いたしません。

此の処刑迄服装が変らぬと云うのは当前の事なのに、なぜか今迄見過されて居り、処刑文学の盲点に成つて居る様に思われます。

此の問題で一番重要な点は、縄の取扱い方で有ります。

すなわち囚人又は罪人を縛った縄は、その囚人又は罪人が完全に死亡した事が確認された場合の外は錠を下した囲の中でなければ解かないと云う事で有ります。

此の事は今後も何かに付けて、くどい程書く事に成ると思いますが、逮捕された人は其の場で縄を打たれますし、奉行所に呼出された人も入牢を申渡されると直ちに白洲で御縄を掛けられてしまいます。此うして縄付きに成った後は牢屋敷に送られても名前改めなどの間は、その縄目のままで、牢屋の外鞘の中に曳入れられ、掛りが外から錠を下してから縄を解いて衣服改めなどを受けて入牢し、牢

から呼出される時も外鞘の錠を下してから牢の戸を開けて囚人を出し、縄を掛けてから外鞘の戸を外の掛りに開けさせて囚人を曳出します。奉行所での取扱いも送られて来た囚人は白洲の外囲の内に駕籠や奮のまま、かつぎ込まれて木戸に錠を下してから駕籠の戸を開けて囚人を出し、縄を解いて袴とか女ならば帯を脱させ、礼装をととのえさせてから御白洲用の簡単な縄を掛けて呼出しまで仮牢に入れて置きます。御吟味が終れば再び礼装を脱がせて本縄を打ち駕籠に乗せ、駕籠の戸に錠を下してから外の木戸を開かせて牢屋へもどします。

此の様にたとえ役所の中であっても、外部への通路に錠を掛けて無い所で囚人の縄を解く事は有りません。

以上のごとく囚人の御縄と申すものは、非常に厳格に扱うもので有ますから、刑場の様な野外で重罪人の縄を解いて着物を脱がせたり着替えさせたりする様な事は、まちがっても起らない事であります。

所が小説などでは此の点が大変ロマン的に扱われて居るものが多く、馬から下された罪人が縄を外されると自分で着物を脱いで非人に渡したり、着物を剥がれた女が自ら刑架の

上に寝て縛付けてもらつたりして居ります。

さて本論にもどります。引廻し附きの御仕置を申付られる囚人は牢の外鞘の内です。先ず本刑の時の姿に成ります。

御仕置者の服装については、以前にも一寸書きましたが要は刑を加える部分が必要にして十分なだけ露出するのが定法です。

磔は横腹を鏝で突きますが鏝先は乳の上の肩口のあたりに出ますから一応胴体全部が受刑部に成ります。又火焙りは全身を火で焼く仕置ですから全身を露わす必要が有ります。

したがって火焙りの罪人は素肌に縄目だけで刑架に懸けるのが正式で、三都共其の通りに定められて居りました。

磔は腹部から上が受刑部ですから、特に恥部を露出させる必要は無いので二布の着用を許されるのが普通で、江戸に限り囚衣を着用させた上で必要な部分丈け切開いて肌を出させる方法が用いられましたが、此れは何代目の牢奉行が勝手に決めたのでしょう。しかし実際の運用にあたっては火焙りの罪人にも二布の着用を許したり、場合によっては八百屋お七の様に着衣のまま焼かれた人も有ります。

此等の刑を受ける罪人も牢から呼出される

時には引廻しに着用したい衣類が有れば、それを持って牢から出ます。しかし土間に出ると直ぐに礫ならば素肌に囚衣又は二布一枚にされ、今迄とは変って荒縄で本縄に縛られます。又火焙りの時は衣類は一応全部取って、荒縄で縛り上げられてから後手に縛られた身体に引廻しの時着用を許される囚衣或は私服を着せられ、縄尻は八ツ口から左右に引出します。

白子屋のお駒も上には大分派手なものを着させてもらい引廻された様ですが、身に着けて居たのは囚衣一枚で彼女は獄門でしたから御縄は荒縄でも本縄では無く、斬縄に縛られその上に自分の着物を羽織らせていたのでした。

しかし町方の人たちは牢役人に入取る手づるも割合得やすく、又金子などをひそかに牢内に持込んだり、送りとどけたりする方法を知って居る人が身近に居る場合が多く、又たとえ重罪人と成っても面倒を見てくれる人が居た様ですが、此れに反し武家の人々の場合には此等の便法を知って居る人も少く、特に婦人の場合にはその行為よりも刑律にふれたと云うだけの理由でも原則として離縁されま

す。此等の婦人たちが姦通とか放火などの罪を犯すにいたった原因には気の毒な事情が有るのが普通でしたが、一度罪を犯してしまうと、その様な理由には成らないもので牢屋へ送られた後は誰れもかまってくれません。

したがって此等の婦人は入牢の時も身一つで入りその後も、仕送りはどこからも来ませんから着て入った着物はツル金の代りに牢の古参の人たちに取上られてしまい、吟味中も身に着けるものは御仕着せの囚衣一枚にされて、腰紐も無く、御白洲に出る時にも素肌にまとった囚衣に牢屋掛りの乞食女から恵んでもらった素縄一卷の姿で髪も兵庫結びの様な引つめの毛巻と云う有様に成ります。

御仕置の時もその姿の外には粧うすべも無いので、金を持って居れば布を買って二布を作る事も出来ませんが、此等の婦人たちには手のとどこかぬ事で無禪の身体を荒縄で縛られて着古しの囚衣をはおり、馬に跨がって曳かれて行ったのです。しかし先程例に上げた素肌で日本橋に晒された人の場合は引廻しから火焙までずっとそのままでつとめたのです。

又話が少し横道に入った様ですが、以上の通り引廻しの時、着用を許される衣服は着る

のでは無く縄目の上に羽織られるのが原則で、もし手を通して着る事を許された時にはその私服のままの姿で刑架に懸けられるのであります。

引廻しについては、今一つの注意しなければならぬ事が有ります。と申しますのは江戸時代の道路についての事です。

当時の道路の幅員は現代から考えると一寸想像の付かぬ位せまいもので道幅三間(五・四米)と云うのは東海道位なものでした。したがって市中一般の道路は、ほとんどが九尺(二・七米)位なもので、二間(三・六米)の道は大通りでした。

現在私共が引廻しを想像する場合、町を走るバスや電車をながめる状態で考えがちですが、昔の道路は今申した通り大変せまいものでしたから、引廻し行列を玄関先や店先で見物して居ると、幡は軒先へ出て見上げなければ見えませんし馬上の罪人も二米足らずの所を通って行きますから、まことに身近かに見物出来、もし二階からでも見て居れば、まともに罪人と顔を突合わせ事に成ったわけです。もっとも見物して居る自分が見物される事に成る可能性も又多分に有りましたから、此等の御仕置は、文字通り身近なものであり

ました。

江戸市中引廻しと云いますと、道のりは三十軒近くに成りますから刑場に着くのは夕方に成ります。

刑場には掛りの非人足が仕度をととのえて待って居り、行列が着くと役人は場外で馬から下り歩いて場内に入りますが、罪人は馬上のまま場内に曳込まれ、矢来の内で馬から下されます。

一類の者で獄門に成った者が居る時にはすでに首がとどいて獄門台に乗って居りますがよほど特別な政治犯でも無い限り縁座の処分は数カ月後に成るのが普通だった様です。

人足たちにかつぎ下された罪人は背負って居た青竹の曲縁を外され、羽織って居た着物を取上げられてから役人の前に立たされて一応形式的な名前改めを受けます。しっかりした罪人ならばちゃんと返事が出来ませんが、大抵は後の人足が頭を下げさせるだけで、御仕置の罪人が何時の間にか別人に成って居ると云う事も先ず無いでしょうから此の名前改めはほんの形だけです。此れがすむと又人足たちは罪人を抱え上げて磔柱の所に運んで行き、縄目のまま柱の上に横たえ、両足を持って居る人足達は、罪人の腰を馬乗りに当ててから

足首が横木の両端に当たる様に引張って下半身を落着かせ、先ず足首をそれぞれの位置に結え付け、次に腰を柱に結び付けます。

此の間、罪人の上半身は本縄に縛られたままです。抵抗する事も出来ない代りに自分でしなければならぬ事も無いわけで、罪人はただされままに成って居ればよいのです。又着て居る物は囚衣にしても腰巻にしても馬乗りで、後を捲られますから前が開いてたとえ十文字磔の時でも、両足は膝の上まですっかり出ますが、前が露出する事は無いと思います。

続いて上半身に掛けて居る本縄を解きますが、縛り方は常の本縄縛りでも、御縄は常の細引では無く死刑囚用の荒縄ですから一々結目を解かず小刀で切って外せばよいので、素早く外され、後に回って居た腕はそれぞれ人足がしっかり持って左右に開き腕木に当てて手首と肘を結び付けて終います。先程も申した通り両腕は二寸位後に引かれますから、此れだけで身動きは出来なく成り、罪人が自分で動かせるのは指と頭だけです。罪人が素肌の時にはすぐたすき縄を掛けて結び終ります。が、囚衣の時には着物の腋縫を八ツ口から下に腰迄破って前に引よせ細縄で結んで腋腹か

ら乳迄すっかり出してからたすき縄を掛け、時によっては、頸も息がつまらぬ位に結付ます。

刑架は馬乗りから足木まで一尺二寸程(約三十六糎)しか有りませんから、開かされた両足はかなり痛い位で両腕も後へ引付けられたため肩口が痛み、間もなく手首からしびれて来ます。やがて十五、六人掛りで柱を穴に立てますが、江戸の刑場には磔柱用の角穴をあけた台石が定位置に埋込んで有り、一々土を掘らなくても柱が建てられる様にすっかり設備がととのって居ります。

その代り掘った穴にななめに滑り込ませて建てるのところが、一度真直ぐ立ててから、ストンと三尺四寸(一米三糎位)落下しますから柱の上の罪人が受ける衝激は相当大きなもので鼠蹊部の痛みは失神寸前の罪人を正気付けさせるのに十分なものです。

柱が立つと用意の土俵を下の横木の上に積んで根本をおさえ付けると、柱はしっかり立って、御仕置の準備はすっかりととのい、下働きの人足は横へ下って、代りに突手が出て来ます。

此の後の見せ槍だの掛声の事などは今さらくり返しても仕方が無いでしょう。名和氏の

拷問刑罰史にも、くわしく出て居りますし、本誌にも幾度も書かれて居り、其の他多くの小説にも、まるで見て来た様に書いて有ります。

鑢の突き方についても、先に挙げた吉田氏が裏窓誌に発表された鑢についての考察及び朝姫磔仔細の中で大変詳しく書いて居られます。しかし実際の突き方は吉田氏が考えて居られる腋の下の部分よりずっと下方肋骨の下、横腹から斜上方に突いたのであります。したがって罪人が感ずる苦痛も吉田氏が云われるものとは大分変わったもので、最初の一突二突の痛みは本当に腹を切り開く切腹の場合とはほぼ同様な非常に烈しいものです。

したがって御鑢を受けた罪人は動かぬ手足に力を入れて身もだえながら苦しみ、その痛みは一突毎に新に起りますけれども悲鳴は内へ引込まれて声には成らず唸りながら冷汗を流して、わずかに首ばかりを左右に動かしてもだえる有様は正に現世の生地獄の責苦と云うべきものです。

やがて鑢数が重なると共に先が深く這入る様に成り、一突が乳のあたりか肩口に、ぬける頃には心臓附近の血管か神経が切られて急速に死亡にいたりますので、止めを突いて突

止めとして役人は引上げて終います。

柱の上の死骸は左右の傷口がざくろの様に下って未消化の飯つぶ等が流れ出し腸が垂れ下って始めて見た人は、二、三日食物が咽喉を通らないと云われて居ります。此れをそのまま定めの日数の間晒して置き、終れば役所からの指図によって非人の人足たちが結縄を切って死骸を柱から下に落し、柱を取片付け死骸の着衣を剥いで一段落しますが、此の後一族の縁座が行なわれます。

磔の縁座は父と男子が獄門で妻と女子が死罪、其の他は順に一等ずつ軽く成ります。しかし罪状によっては此れより軽く、男が死罪ですむ事も有り、此の時は女たちは奴に成るわけです。

普通の仕置では十五才以下の子供は男女共十五才迄刑の執行を猶予されるか、又は大人よりずっと軽い仕置を申付られる定法ですが縁座の処刑の場合は当才の赤子でも死罪や奴を申付られれば普通の大人の罪人と全く同様に即日執行されました。此等の縁座仕置が全部終了すると「何某御調べ一件」と云う一つの事件が完了し落着と成るので罪囚本人の磔が終っても其の者の財産の欠所を行い、縁座する者の人別改めから刑の申渡しと処刑が有

りさらに縁座囚の財産の欠所が行われ、縁座を申付られなかった縁者たちの姓名も罪人の一族として牢帳に記入されて始めて御仕置終了となるのですから磔の後半年から一年位たたないと一件落着とは成らなかった様です。

以上が徳川幕府の磔ですが時代により、又所により、さらに直接監督した奉行や役人の考えによって相当変った磔が行われたらしく諸藩でもそれぞれの御国ぶりで色々風変りな磔や磔系統の御仕置が行なわれました。

此の中でもこった所では生胴で有名な金沢で行われた仕置には、市中引廻し、其の後二箇所に晒しの上河原において釜煎の上磔に掛置、と云うのが有ります。どちらが本刑だかややこしい申渡しですが、釜煎が本刑でゆで上った死骸の縄を解き手足をのばして磔の刑架に縛り直して晒した死後の晒しの特別なものでしょう。

串刺しも磔の一種と考えられるもので、此れについては名和氏が拷問刑罰史に書いて居られ、井字型刑架を使用した大変見事なさし画がのって居ります。したがって今さらくり返す必要も無さそうですが要するに串刺しと云うのは磔の鑢の突き方の一種で、何回も突く代りに磔とか又は先をとがらした木や竹の

棒を、一方から反対側に先が出るまで突通しそのまま晒して置くもので死骸を取捨てる時も、身体に串を刺通したまま放り出すか或は捨埋にするのが礼式です。

其の外古くは鑓を用いず遠矢で射殺す方法が用いられ、此れが日本古来の磔だと云われて居りますが実例は少い様に思われます。此れも映画の拷問刑罰史に出ましたから、その方法は申す迄も有りませんが、矢が当る場所にはあらかじめ知る事が出来ませんから罪人の身仕度としては一応全身の肌を出して置くべきで、外国の例では、セバスチアンが有名でよい画が数多く有ります。

磔に成った罪人の中、古代から戦国時代迄は、主として政治関係とか閥閥関係の人が多く、刑罰としては江戸時代における切腹の様な位置に有りましたが、江戸時代に入ってから、キリシタンの大量処刑に用いられて、水磔等の新しい様式が開発された反面、仕置としての格は下って親殺し、関所破り、姦通等の破廉恥罪に用いられる様に成って終いました。此等の罪人の中高貴な身分の人は日頃から心構えが出来て居りますし、キリシタンや姦通の罪人も仕置に対しては特別な受取り方をして居りますが、その他一般の重罪人た

ちも処刑にのぞんで取乱す者が少かったのは面白い事です。

死罪や獄門の罪人の中には斬場に引据えられてからも大声を上げてあべれたり、取乱して座る事も出来ない様な始末で掛りの人足を困らせたとか、動いたために斬り損じた等の話が沢山残って居りますし、切腹でも同様な話が多く、介添えの者に抱かれて首の座に着いた、と云った例はいくらも有ります。

其れに反して一般に教育程度の低い此等重罪人が割合平静に処刑されたのは身体を刑架に縛付られたためよりも、処刑に先立って行なわれる数日におよぶ生晒しと、引廻しのせいで無いでしょうか。切腹や打首等の仕置は一般に当日申渡され、直ちに刑場に曳出されますから罪人は一応の覚悟はして居ても、感情を整理する時間が無く慟転したまま斬場に出されてしまうので、見苦しい最期に成る例が多く成るのだと思います。もっとも現代の死刑は此れとは反対に考える時間が、あまりにも長すぎる様ですが。

しかし磔や火焙りを申付られる兇悪な罪人も幾日か晒場に座らされたり、引廻しの馬に乗せられて町々村々を廻り歩く中には感情も静まり死にのぞむ心構えも自然に出来る上、

肉体的には疲労がはなはだしく、馬から下される頃には、昏睡状態に陥ってしまう者もあり、普通でも支えられずに立って居られる罪人は少かったと云いますから刑場に着いてからさわいだりする罪人は、ほとんど居なかったと思われます。

此処まで書いた所へ一月号が参りました。今月号も又HK生氏の磔の画が有り、大変うれしく拝見いたしました。今度のはどう云う罪人かわかりませんが、菱縄を身体にまとったまま両腕を横木に結ばれたのは映画以外にはめずらしく、多分生晒しのまま干殺しにされるのでしょうか。

ただ、今迄にものべた通り前回、今回共頭が鬚髻を出した鬚なのは少々気に成ります。此う云う鬚は江戸中期以後のものですし、正装のまま磔にしたのは戦国時代迄です。

終りに本文をまとめるために、池辺義象著・日本法制史。阿部弘蔵著・日本奴隸史。徳富猪一郎著・近世日本国民史。柳沼沢介著・刑罪珍書集石井良助著・江戸時代漫筆、一、二、三、四、名和弓雄著・拷問刑罰史。石黒敬七著・写された幕末、及び本誌既刊各号を参照させていただきました。

女相撲物語

花の女斗美たち

(4)

奮斗士好太

／＼カット・雪崎京人提供

私たちの「初日」から十日くらいたった日でした。いつものように放課後、ヒロちゃんと二人連れ立って、部屋へ行きました。

まだ一年生は、誰も来ていません。上級生も二、三人が軽い準備運動をしているだけでした。裸になってマワシを締め、練習場へ入って間もなく、ヒロちゃんが、教室へ腕時計を置き忘れてきたことに気がつきました。

おわりの時間が体育だったので、その時に腕からはずして机の中に入れ、そのまま忘れてきてしまったというのです。

「とりに行ってくるからいっしょにきてよ」とヒロちゃんが云いました。

「イヤだわ。裸になっちゃったもの」

「でもマワシしてるからいいでしょ」

「マワシしてたって……だいいち裸のまま校内を歩きまわったりしちゃいけないって、笠原さんにもいわれたでしょ」

「あれは遊び歩いちゃダメということよ。これが相撲のユニフォームなんだもの。用事のある時は別よ。行っってとってくるだけだからさ」

例の調子でネバられて、仕方なしに一しょにとりに行っってやることにしました。

それでもやはりマワシ姿で校内を歩くのは気がひけて、ロッカーから上着だけ出してそれを裸の上へはおりましたが、ヒロちゃんはマワシ一つの裸のままですました顔で出かけました。

私たちの教室は、部屋とはちょうど反対側

の校舎にあるので、そこまで廊下をぐるりとまわっって行かなければならないのです。

まだ授業をしている教室も多いので、廊下はわりに静かですが、行きかう上級生のなかには、眉をひそめてにらむようにして見て行く人もあります。私はヒヤヒヤしてなるべく下をむいて歩くようにしましたが、ヒロちゃんは、てんで感じない顔で、彼女のクセのちよつと肩をゆするような歩き方で進んで行きます。廊下の最初の角のところで西田さんに出会いました。そして二つめの角を曲がったところで今度は笠原さんに見つかりました。

西田さんの方は、カバンを下げてこれから部室へ行くところらしく、ニコツとしただけで行き過ぎましたが、笠原さんにはたちまち



呼び止められてしまいました。

「そんな恰好で、どこへ行くの」

私はやっぱり来なければよかったのにと後悔しながら、おそろおそろ笠原さんの顔を見ますと、ふだんはおだやかな顔の笠原さんですが今日はさすがにむづかしい顔つきです。それでもヒロちゃんは、のんびりと

「ハイ、教室へ時計を忘れてきちゃったのでとりに行くんです」

と答えました。

「そう。でも裸のまままで歩きまわっちゃいけないって云ったでしょ」

「ハイ、すみません。でもあんまり急いできたものですから」

「いけないわね。そんなところをウルサイ先生に見つかったら大変よ。あなただけじゃなく、わたしや今井さんまで叱られるのよ」

「すみません、大急ぎで行ってきますから」

「まあ仕方ないわ。急いで行ってらっしゃい。あんまり堂々とした歩き方しちゃダメよ」

笠原さんがあまり叱らなかつたので、私はホッとなりました。

笠原さんが行ってしまつたとヒロちゃんは

「アハハ、見つかったちゃった」

と首をすくめて

「でもいいわ。承認されたんだから」

とかえってさっぱりしたような顔で「サア、行きま

しょ」

私をうながしてまた歩き出しました。私たち二人が教室へ入ろうとした時でした。突然うしろで

「アーラ、フンドシかつぎが二人もやってきたわよ」

と大きな声がきこえました。

まだ教室に残っていた五六人の人たちがいっせいに顔を上げてこちらを見ました。

びっくりしてふりむくと、田村さんという人がその声の主でした。

田村さんは、私やヒロちゃんと同じ中学からきた人で、ヒロちゃんとは前から仲が悪い人、時々猛烈な口ゲンカをしていたことがありました。

ヒロちゃんはその田村さんをジロツと見てフンと云った顔つきをしただけでしたが、私はすっかりあわてて田村さんの口をふさぐとしますと田村さんは私の手をはらいのけながら、なお一そう大きな声で

「のっぽさんのフンドシかつぎとダンゴさんのフンドシかつぎだわア」

と云います。

しかしヒロちゃんはそんな声を全然無視した様子でびっくりしている人たちの視線のな

かを自分の机へ行き、忘れていた時計を腕にはめながらもどってきました。

そのあとから二三人が、ものずきそうな顔でついてきます。

ヒロちゃんは田村さんの前までくると

「フンドシかつぎで悪かったわネ」

とつめよります。田村さんは

「アラ、誰も悪いなんて云ってないじゃないの。ただフンドシかつぎがきたわよって云っただけよ」

「大きなお世話よ。そんならなぜ、あんな大声出すのよ」

「べつに大声だとは思わないけど」

「アラそう。わたし宣伝カーが来たのかと思っちゃったわ」

田村さんはきらいな自分のあだ名「宣伝カー」を口にされてムツとしたらしく

「フンドシかつぎだからフンドシかつぎだと云ったのに怒るなんておかしい人だね。横綱って呼べて云うの、フンドシかつぎのくせに」

ヒロちゃんは田村さんがあまりしつこく何度も「フンドシかつぎ」をくりかえすのでとうとう本気で腹を立てたようでした。田村さんも最初はそんなにしつこくからかうつもり

ではなかったらしいのですが、ヒロちゃんがムキになってつかかって行くので少しとまどい、そして口の悪い本性がだんだん頭をもたげてきたようでした。私は本気になって怒り出したヒロちゃんをオロオロと見ているだけでした。そんな時のヒロちゃんは誰が何を云ってもおさまるものではないのです。

「フン」とヒロちゃんは鼻を鳴らして

「そんなにフンドシがかつぎたいんなら、あんたにもかつがせてあげようか」

「おことわりだわ。いやらしい」

「えんりょしなくてもいいのよ」

「誰がえんりょなんかするんですか。ひとのフンドシなんか。きたならしいわ」

きたならしいと云われてヒロちゃんはカッ

としたらしく

「きたないって、このマワシのどこがきたないっていうの」

「野ばんだからよ。女の子が裸になってフンドシしてるなんて野ばんもいいところだわ」

「ごまかすわね。かつがせたらつぶれてしまいうくせに」

「アラ失礼しちゃうわね。そんなものでつぶれたらお目にかかるわ。じゃもしつぶれなかつたら、どうするつもり。だいいちかつぐフ

ンドシがないじゃないの」

と云われてヒロちゃんは、ちよっとつまりました。なるほど田村さんの云うとおり、かつがせるにも、そんなマワシなど教室にあるわけではないのです。

田村さんは勝ち誇って

「さあ、早く出してよ。つぶれるかどうかためてあげるから」

と、とくい顔です。ヒロちゃんは

「そんなにあわてなくてもいいわよ」

と云いながら、うしろに立っている私に

「ちよっと、ここを解いてちょうだい」

マワシのうしろの結び目を示します。

私はあわてて、

「止しなさいよ、そんなこと」

とヒロちゃんの手を止めましたが

「いいのよ、この人にかつがせてやるんだから」

と止めようとせず

「いいわ、そんなら自分でするから」

うしろ手で固い結び目をムリに解くと腰にまわしたところもひと巻きふた巻きはずしかけました。ズルッと肌についた方までゆるみ

「オヤ、こんどはフンドシかつぎがストリップはじめるの」



などとまだ口の悪いのを止めない田村さんでしたが、ヒロちゃんが本気でマワシをはずしかけたのを見ると、さすがにあわてたようでした。ニヤニヤしていた彼女の目にもあきらかに恐れの色が浮かびました。そして急にソワソワし出すと

「止めときなさいよ。あんたのヌードなんか見たくないわ」

逃げ腰になって

「オヤ、逃げるの、ひきょうだわ」

というヒロちゃんの声もきこえないふりをしてさっさと行ってしまいました。

「あんな人、口ばかりなのよ、なにさ、いくじなし」

すっかり解けかけたマワシを押さえながらヒロちゃんが云いました。

私はどうなることかと胸がドキドキしていましたが、どうやらおさまったようなのでやっとな安心しました。

パチパチと手をたたく音がします。

教室のなかで見ていた人たちのうちヒロちゃんと仲の良い二三人でした。

「なかなか勇ましかったわネエ」

「ヒロちゃんのヌードを期待していたのに残念だったわ」

などと云いながらそばへ寄ってきました。そして私やヒロちゃんのマワシ姿をジロジロ見まわすと

「なるほどフンドシかつぎだわね」

「でもなかなかイカスじゃ

ないの」

「どう、お相撲っておもしろい」

などと勝手なことを云っています。

「こんな厚いのなんか締めて痛くないの」

心配そうに聞く人もいます。

でもみんなさつきの田村さんのような意地悪なはずらではないので、私もようやく落ちつくことができたのでした。

ヒロちゃんはすっかりゆるんでしまったマワシをいいかげんにグルグルと腰に巻いて、そのはしを立ミツにひっかけると、いまいましそうに

「また締め直さなくちゃならないわ、あのイクジナシのおかげで、とんだ道草くっちゃったわ」

眉を寄せて

「さあ、いきましよ」

と私をうながしました。

「チョット待ってよ」

声をかけたのは、ヒョウキン者の永野さんでした。

「ネエ、せっかくそうやってきたんだからさここで取り組んで見せてくれない？」

永野さんがとんでもないことを云い出すとそれにつられて、皆んな口々に

「そうだわ、やって見せてエ」

「やってよ、やってよ」

「ワア、ステキ、ステキ、スゴいわア」

手をたたき気の早い人もいる仕末です。

永野さんはちょうしに乗って

「ねエ、いいでしょ。わたしが行司やったげるからさ」

と云って、大きな声で行司の呼び声のマネを始めるのです。

「石の山アニィー、こなたア……」

私はあわてて、永野さんの口をふさぎました。

「ダメよ、じょうだんじゃないわ、こんなかたちでここへ来るのだって、ほんとうはいけないのよ。さっきマネジャーに叱られたばかりなんだったら」

「だって、お相撲は裸じゃない？」

「そりゃ相撲のユニフォームはマワシだけだけど、それは競技の時の話しょ。裸で街の中なんか歩いてたら軽犯罪法違反よ」

「だって、ここは街の中じゃないわ」

「街の中じゃないけど、つまり競技場の外へ裸のまま出歩いちゃいけないってことよ」

「ああ、そうか、あんたたちは、それで叱られたってワケね」

私はヒロちゃんの話を聞きながら、さっき

は裸のまま平気な顔で出てきたくせに、こんどはそのことをまじめな顔で否定しているのをすっかりおかしくなっていました。

クスクス笑い出した私に気がついて、ヒロちゃんもちょっといいさいが悪くなったのか「そのかわり、競技会の時はウンと応援にきてよ、わたしものスゴくがんばるから」

選手になったようなことを云って

「それじゃ、みなさん、たいへんおさわがせしました」

膝をチョット曲げるバレエのあいさつみたいな形をしました。

マワシをつけただけの裸で、そんなしぐさをするおかしさに、ドッと笑いが湧きました。が、それでも誰かが

「がんばってエ」

「しっかりねエ」

と声をかけてくれました。

ふたりで廊下をもどりながら

「ヒロちゃん、あんた、ほんとうにヌードになるつもりだったの？」

とたずねますと、ヒロちゃんは当然そんな顔をして云いました。

「もちろんよ」

「まあ、あきれた」

「そのかわり、あの人もみんなの見ているところで真ッ裸にしちゃってさ、わたしのマワシを締めさせてやるつもりだったわ」

「あら、かつがせるんじゃないの？」

「もちろん、かつがせるわよ。でもその前にあの人が云ってたフンドシかつぎの姿をさせるのよ」

「あんたのマワシ締めさせたら、かつがせるマワシがないじゃないの？」

ヒロちゃんはニヤッと、いたずらそうな笑いを浮かべると

「あるじゃないの」

「どこに？」

私はやっと気がつきましたが、わざと知らん顔をして云いました。

「まさか、わたしのじゃないでしょ？」

「あら、よく気がついたわね、その通りよ」

「いやーよ、だれがヌードになるもんですかゼッタイいやよ」

「わたしのピンチを救ってくれないの？」

「なにがピンチなもんですか、あきれた。こんなこと笠原さんに知れたらどうするの？」すると、ヒロちゃんは急にゲラゲラと笑い出しました。そしてしばらく笑いが止まらな



い様でしたが、ようやく静まると

「ほんとうはね、わたしがマワシを解いてしまわないうちに誰か止めてくれないかなと思ってたのよ。それだったのに、あんたなんかベソかいて見てるんだもの」

「だって、あんたが怒ったら、わたしの云うことなんかでんで受けつけないじゃないの、わたしだって誰か止めてくれないかと思って気がじゃなかったわ」

「まあいいわ。あのイヤなヤツが負け犬みた

いにこそコソ逃げてったのを見たら胸がスツとしたわ」

ヒロちゃんはすっかり気げんを直して笠原さんの注意も忘れて「堂々」と歩いていきます。するとうしろの方に足音がして

「ちよっと、ちよっと石山さん」

と呼ぶ人がいます。

立ち止まってふりかえると、さっき教室にいた松田佳子という人でした。

おとなしい人で、教室でもほとんど目立た

ないのですが私とは何となく気が合うというのか、そんなに話し合ってるわけでもないのに好意を見せてくれるのです。

二三日前の数学の時間にも、私が先生に指さされてつかえているのを、となりの机からこっそり教えてくれたことがありました。

私があとで「助かったわ」と礼を云う

と

「ウウン、ちやうど私のとくいの問題だったから」

と自慢そうな顔もしません。そんな人柄にすっかりひかれたものでした。

松田さんはそばへ来ると

「ネエ、わたしも相撲部へ入りたいんだけど

……相撲部ってコワくない？」

と聞きます。

私はこのおとなしい人が、とびっくりしましたが

「コワくなんかないわ。どうして」

「相撲の練習ってスゴクキビしいんでしょ。それに上級生がいじめないかしら」

「そんなことないわ。相撲部員はみんなもはん生です。わたしとテルちゃんみたいに」

とヒロちゃんが口をはさみました。

「とんだもはん生だわね。さっきの勇ましいところを見たら男子の高校へ行ってもだいじようぶだわ」

私が云うと松田さんもニコリしましたが「わたし前から相撲部へ入りたかったんだけど、何だかコワイみたいで、それに裸になつてやるのがみっともないと思ったりして」「わたしだっておんなじだわ。でも相撲って

スゴく科学的なスポーツだってことがわかってきたし、マワシを締めるんだってユニフォームなんだから何ともなくなるわよ」

「でもフンドシかつぎなんて馬鹿にされるでしょ、アラごめんなさい」

「ウウン、何でもないわ。どうせそんなこと云う人なんか自分がスポーツやれないからくやしがつてるのよ」

とヒロちゃんも

「この人だってわたし誘うまで、あなたとおなじことを云ってたわ。でももうこのごろは彼女は相撲の虫よ。一日一回は裸になってマワシを締めないと気持が悪いって云うんだから」

と、あることないことをならべて

「ああ、いまや彼女はわが相撲部最大のホープなのよ」

まじめな顔で云い出しますの

「大げさなことを云わないでちょうだい。通って行く人がみんなあきれて見て行くわ」

とポンと肩を軽く押したただけなのに、ヒロちゃんはまるで突きとばされたようによろめいて

「おおッ、スゴい突張り」

と、ますますふざけます。

「オーバーだわねエ」

と私が笑うと松田さんも、いっしょに笑い出して

「じゃあなたにお願いしようかしら。これくらいいっしょに行っているいい？」

と、とうとう決心をつけたようでした。

部屋へ戻るとマネジャーの笠原さんはさっき二人で出かけて行ったのが今度は三人になって帰ってきたのでびっくりしました。それでも部員がふえたのですから喜んでくれました。そして松田さんに

「それじゃ、あんたも、今日からすぐ練習する？」

とたずねます。松田さんがちよつとためら

いの色を見せていると、ヒロちゃんが

「いいわね、いっしょにやりましょう」

と声をかけました。

松田さんも同級生に声をかけられて、ちよ

つとホッとしたように

「ハイ、そうします」

と答えて

「アノ、わたし教室に鞆がありますから、とってきます」

「そうね、じゃとりに行ってらっしゃいよ、

裸にならないうちにね」

笠原さんは、ヒロちゃんと私の方をチラリ

と横目にかけながら、言葉のおわりにわざと力を入れて云いました。そして顔を見合わせ

て首をすくめるふたりに

「でも、ちようど良かったわ、注文していた

マワシがとどいたのよ」

荷造をといたばかりらしい段ボールの箱を

部屋の真ん中へ引き出してきました。

かなり大きな箱でズッシリと重そうです。

中をのぞきこみますと真白な新らしい、そして部厚な布地がつまっています。

笠原さんは、それを出して

「あんたたちも今日はいいいけど、明日からこれを締めてちょうだい」

「ワア、ステキ」

ヒロちゃんは真新らしい布地を、まるで大切なものにふれるような手つきでソツと握りました。

「こんなのを締めたら気持ちいいでしょうね」

「でもね、新らしいと堅くてうまく締まらないのよ」

笠原さんが云いました。

「からだになじむまで、じゃまな感じがして困るのよ。じきになれるけどね」

「青いのでなくて残念ね」



私が小さい声でソツとヒロちゃんに云うと
「赤いんだってないわよ」
ヒロちゃんも云い返えしてクスクスと笑い
ました。

「……………」
笠原さんが小耳にはさんで妙な顔をしまし
た

「何のこと？」

「何でもないんです」

私はあわてて首をふりました。

「でも、もったいないようね、いっぺんでも
転んで砂がつけば、よごれちゃうわね」

ヒロちゃんが惜しそうに云います。

「そりやそうよ、まさか毎日クリーニング屋
さんにたのむわけにもいかないわ」

笠原さんは笑って

「さ、今の人、なんて云ったっけ、松田さん
だったわね、あの人の戻ってこないうちに、
これを畳んでちょうだい」

ひろげたままのマワシは巾六十センチくら
いもあるのですが、それをまず三つ折りにし
そしてさらに二つ折りにするのです。つまり
前に当てる部分は三つ折りなので二十センチ
くらいの巾になり、腰に締めるところは六つ
折りで、その半分の十センチくらいの巾にな
るのです。

新しい布地は私たちが今締めているもの
よりは幾分薄いのですが、そのかわりゴワゴ
ワしているので、なかなか折り目がつきにく
く私とヒロちゃんとが折り畳む役、そして折
りたたむあとから笠原さんがぐるぐると巻い
ていきます。

ようやく出来あがったところへ、鞆を下げ
た松田さんが戻ってきました。

「そのマワシを使ってちょうだいね。締める
のはこの人たちに手伝ってもらおうといいわ」

笠原さんはマワシを見つめながら考えこむ
ような顔をしている松田さんに声をかけて

「そうそう、まずロッカーをきめなくちゃ」
端の方をゴソゴソやっていました。

「さあ、このロッカーを使ってちょうだい。

これで満員になっちゃった」

部員のふえたのに嬉しそうでした。

このあともうひとり、私たち一年生の仲間
がふえるのですが、それはまたあとで書くこ
とにします。

裸になった松田さんは、思ったより浅黒い
肌そして、中肉やや大柄というのでしうか
胸のふくらみや、お尻の張りなども平均して
いるし、脚もスラリと伸びています。全体に
バランスのとれた体格のうえに子供っぽい顔
だちなので、はなれているときほど大きく見
えませんが、そばへ近づくとかなりのポリュ
ームです。くわしく話をしたこともないし、
筋肉のつき具合などから見ても、中学時代に
スポーツの選手をしていたように思われま
せんが、動作の無駄のなさから感じられる運

動神経のよさは相当なもので、この人ならばどんなスポーツでも上手にやれるという感じでした。

「あなた運がいいわね、入ったとたんによさきに、おニューのマワシが締められるなんて、きつと幸運の女神がついてるのよ」

ヒロちゃんは、じょうだんとも本気ともつかないおしゃべりを続けます。

「わたしたちなんかね、選手用だなんてすごく厚いマワシなの、たった一日締めただけでスレちゃってピリピリ、この人なんかイタイイタイって泣声だして大変よ」

「そんなに痛いのか？」

松田さんが心配そうに聞きます。

「ウソよ、この人なんでもオーバーなのよ。

それは少しは痛かったのは本ただけで、泣き声を出したなんて全然デタラメよ」

わたしが訂正します。

「アラ、泣き声出してたの、あんたじゃなかったかしら、それじゃ津野さん？」

「そんなことより、いつまでこの人を裸のままにしておくの」

松田さんは裸になったものの、ヒロちゃんがおしゃべりばかりで、いっこうにマワシをつけようとしないので困った様子なのです。

両足をすばめて腰をうしろに引くようにし片手で前をおさえ、もう一方の手で胸を抱くようにしながら、チラチラとドアの方を見えています。ヒロちゃんはそれに気がつく

「アラ、ごめんなさい、わたしすっかりおしゃべりしちゃて。でも、そのポーズなかなかいいじゃないの、モデルみたいだわ、ホラそんなのあるじゃない、ゴッホだったかマネーだったか、フランスの画家の……」

「もういいわよ」

私に口をおさえられて、ようやくヒロちゃんのおしゃべりはストップ。やっとマワシが待ちかねていた松田さんの肌に当てられました。

「ハイ、そこをもっと上にあげて」

ヒロちゃんは、前に当てたマワシをつかんでいる松田さんの手を胸のあたりまであげさせる

「そうやってちゃ締められないわ、足を開いてちょうだい」

と、合わせたままの松田さんの太モモを軽くノックしてうながします。

「こう？」

松田さんは足をずらしします。

「もっと……もっと……もうすこし、そう……それ

でいいわ。ハイ、ひざを曲げて」

とマワシをくぐらせながら

「腰を曲げないで、もっと体を起こして」

ヒロちゃんはなかなかキビシイのです。

「むつかしいのネ、苦しいワ」

松田さんはつぶやくように云って、横に立っている私の方を、助けを求めるような目つきで見ました。

股を通したのを尻に引き上げ、右の腰から一回巻いたところで

「こんどはギュツと引っぱるから、あなたはそれに合わせて腰をひねってちょうだい。ハイ、おなかをへこませて、ちよっと呼吸を止めて」

「ますますむつかしいわ」

「いい？ハイ、一……二……」

松田さんは腰をひねり、ヒロちゃんはマワシを引きますが、私たちの時のように、気持ちよくキュツと締められません。松田さんがはじめてでふなれということもあって、ふたりのタイミングが合わないためでもあります。笠原さんの云うとおり、真新しい、まだ肌にふれたことのない布地は、すべりも悪く、からだになかなかなじまないのです。

「うまくいかないわ」

ヒロちゃんは、そう云いながらそれでもどうやら締めおわりました。そして、うしろの結び目のはしをギュツと引きあげると、そこを軽くポンとたたいて

「ハイ、どうぞ」

ちよっと上気した松田さんと顔を見合わせてニッコリ笑いました。

「ありがとうございます」

松田さんは小声でそう云うと、うつむいて

自分のはじめてのマワシ姿を見まわすようにしました。

細く折って股をくぐらせた立ミツの折りめがもどろぎみでちよっと痛そうです。腰へまわしたところも、どこかしっくりしなくて、肌とマワシの間にスキ間が残っているような感じでした。しかし松田さんはうれしそうなそして少し恥かしそうな顔で、自分のマワシ姿と、私たちのマワシ姿とを何回も見くらべ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

ているのでした。

そこへガラリと練習場の戸が開いて津野さんが顔をのぞかせました。

「あんたたち何してるの？」

ムーンとする汗ばんだ体臭が声といっしょに流れこんできました。もうすっかり私たちの臭覚にとって親しいものになってしまった練習場のおいなのです。

「さっき、あんたたちが裸のままどっかへ行ったのに西田さんが会ったって云うし、戻ってきたらしい声が聞えるのに、いつまでも練習場へ入ってこないからどうしたのかと思ってたのよ。どこへ行ってきたの？」

津野さんはそう云って、松田さんを不審そうな顔で見ました。

「紹介するわ。こちら松田佳子さん。今日から相撲部へ入ったのよ」

「どうぞよろしく。おねがいします」

「こちら津野エイコさん」

ヒロちゃんがそう云うと、津野さんは「津野ヨシエです。よろしく」

と訂正して、目をクルクルさせながらピョコンと頭を下げました。そして

「そうだ、西田さんも呼ばなくちゃ」
うしろを振りむいて

「エミちゃん、西田さん」

大きな声で呼びました

「なあに？」

西田さんは、それ以上で目でたずねながらのぞきました。

「この人、こんど入ったんですって、松田さんて云うのよ」

西田さんがニコリして、軽く頭を下げました。この人はほんとうに無口です。必要なことのほかは、ほとんどおしやべりをしませんが必要なことでもしやべらないことだってあるのかも知れません。そのかわり、顔の表情が豊かで、見ているだけで考えてることがわかるくらいなのです。

「これでみんなそろったわけね」

津野さんが云いました。

「一年生は、あなたで五人なの」

ヒロちゃんは、松田さんに向かって説明しました。

「どう？みんなおとなしくて、マジメそうな人ばかりでしょ？」

「笑わせるわ、あなたをのぞいてでしょ」

津野さんがまぜっかえました。

「わたし、大分誤解されてるらしいのよ」

ヒロちゃんが深刻そうな顔をして松田さん

に云うと、松田さんもさすがに笑いをこらえながら

「そうらしいわね、じゃさっきの勇敢な行動を説明してあげようか」

ヒロちゃんはあわててふりかえりました。

好運にも笠原さんは練習場の方へ行ったのか姿が見えません。

「どうしたの？なにかあったの」

「なんでもないのよ」

「あら、わたしたちの誤解をとくってんじゃないの？どんなことがあった？」

松田さんは、津野さんに改め立てられました。だが、ヒロちゃんのこまり切った顔を見て「さつき、わたしが親切にしたらもらったことよ」

となんとかごまかしました。

津野さんは

「ちょっと、信じられないようねエ」

ニヤニヤしながら、ヒロちゃんと松田さんを見くらべていましたが、ふと松田さんの締めている真ッ白なマワシに目を止めて

「あら、それ新らしいんじゃない？」

ヒロちゃんは、津野さんの質問がやっとそれたので、ホッとした顔になりました。

「そうよ。わたしたちも明日からそれを使う

んだって笠原さんが云ってたわ」

「何時届いたのかしらね、チツとも知らなかったわ」

「あなたたちが、練習を始めてからなんですよ。さつきわたしとテルちゃんが来たときだってなかったんだから」

「もうすこし早く届けば、わたしたちだって締めさせて貰えたのにねえ」

津野さんはそう云いながら、松田さんの腰をりりしくかざっているマワシをなでています。浅黒い松田さんの肌に、真ッ白いマワシがよく映えて、キリッとした感じですよ。

するとヒロちゃんが

「ねえ、エーコちゃん、その箱のぞいてごらん。青いのや赤いのや、いろいろあるわよ」

と津野さんをからかいました。津野さんは真にうけて。

「ええ？ほんとう？」

と、のぞきこみましたが

「まただまされたわ」

くやしそうに箱をたたきながら

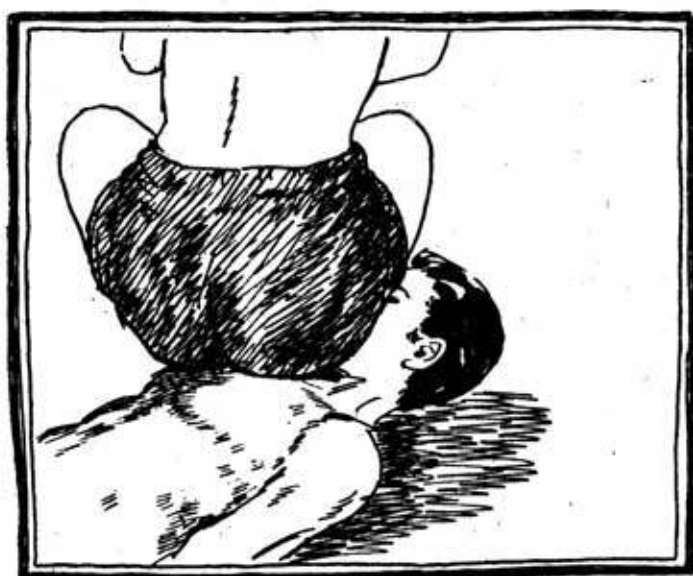
「あれでマジメなんだってさあ」

ヒロちゃんをにらんだので、ヒロちゃんをまっさきに、西田さんまでがプツと吹き出して、ドツと笑い声が湧きました。

マゾヒスチック・ストーリー

しもべ

三原 寛



ハルミは大柄な娘だったが、お世辞にも美人とはいえなかった。低い鼻、厚い唇、それにむっちりとした脂肪ののった肥満体で鈍重な感じを与えた。殊に田舎から出て来た当座は全く山出しの女中そのものといってよかった。

澄江は反対に小柄で手足も折れそうに細くいつも青白い顔をしていた。

川村理髪店、といっても床屋といった表現

の方がびったりするのだが、主人の作次郎は五十に手の届く年齢になって、所謂糟糠の妻に先立たれ、俄かに人手不足に苦労した揚句、田舎の親戚に頼み込んで、ハルミと澄江を世話して貰うことになったのだった。もともと女房と二人きりでやって来た店で、二人も来て貰うことはなかったのだが、田舎からの便りで、最初ハルミに口をかけた時、どうして

も澄江と一緒にでなければ嫌だということだったので、他に当てにする先も考えつかぬところから、止むなく、二人まとめて面倒みねばならぬ破目になったのだった。

田舎から出て来た時、二人は同い年で十五だったがハルミの方は、もう作次郎よりずっと背も高く、男の中でも背の低い作次郎は、ハルミの張ち切れんばかりの胸の辺から禿げかかった頭を上向きに見上げて物をいわねばならなかった。一体にハルミは鈍重な感じを与えるといったが、口数も少く、暇さえあると、寝そべってばかりいたから余計そんな気がしたのである。何より全然仕事をしようとならないのが作次郎の気に障った。仕事といっても最初のうちは、調髪はもっぱら作次郎の役で、慣れぬ二人には湯沸し、店の掃除、少し宛慣れて来たら、顔剃り程度から教え込んで、合間には、交代で炊事や洗濯等、女房代りの水仕事をやって貰うつもりだった。

ところがハルミの方は、作次郎や澄江が転手古舞で店の仕事をしていても、知らぬ顔で奥の間に寝そべって雑誌を読みふけったり、テレビに見入っていたりした。その代りに澄江の方は二人分の働らきをした。堪りかねた作次郎が怒鳴りつけるとハルミも如何にも仕方なしといった投げやりの態度で仕事に手をつけるのだが、そうすると直ぐに澄江が飛んで来て引取って働らいてしまうのだ。そんな

時ハルミは恰も当然といった顔で後は澄江に任せて自分はまた雑誌を読み続けたりした。そんな状態だったにも拘らず、ハルミの方を郷里に送り返そうとすると、澄江も辞めるといい出すので、澄江が二人分働らく以上、実質上は、支障もないので、何となく一年を過ごしてしまつたのだ。

この頃になると、澄江の方は相変わらず青白い顔をして、貧相な細い体で働らき続けていたが、ハルミの方はますます脂ぎって来て短めのスカートから、膝小僧より下丸出しに太い練馬大根を二本並べたような脚を、無作法に投げ出すような恰好で店の中を歩き廻ると妙に色っぽい雰囲気を出すのだった。化粧をするようになり、髪を赤く染め、眉を濃く吊り上げて、これだけは取り得たといつてよい大粒の眼につけまつ毛をして、低い鼻に、真っ赤に塗った唇、それが、何となく、西洋の音楽で使う不協和音のように男の気をひいた。

作次郎の店は、調髪用の椅子三台に、待合せの長椅子一台といった手狭なもので、床の土間から、開き戸一枚へだてて、ハルミと澄江の寝起きする三畳と便所と台所と風呂場が同居し、二階の六畳を作次郎が寝室兼居間として占領していた。ハルミと澄江は、所謂、同性愛の関係でもなさそうなのに、最初から完全な主従関係を保っていた。閉店になると作次郎が先に風呂に入って二階に上るのだが

手洗に立って階段を下りる時、障子の間からハルミが、風呂上りで横になって、澄江に足腰をさすらせているのを一度ならず目撃して理由もなく興奮を覚えた事があったものだ。

ハルミは相変わらず、働らこうとする気を見せなかったが、生来、器用なのか、澄江の方がようやく一人前に剃刃を使って顔をあたれるようになった頃は、ハルミは、ハサミとバリカンを使って調髪が出来るようになっていた。作次郎が意外だったのは、作次郎の手が空いている時にすら、態々ハルミを指名でやって来る客が増えたことだった。

ハルミ好みの如何にも安っぽい、歌謡曲調の刈り方が、この鋳物工場の多いK市の工員の兄ちゃん連中らのお気に召すのかも知れなかった。何時かハルミを叱りつけた時、無口なハルミが、作次郎の刈り方を古臭いやり方しか出来ない癖にと口答えしたことがあったが、古いか新しいかは別として、ハルミの刈り方が、この店の客達の気に入られていたのだということを感じ知らされるような出来ごとが起った。

お客は矢張り威勢のいい工員風の若者だったが、作次郎が、折角櫛の目を立ててポマードをつけて整髪したのを、櫛を叩きつけて怒鳴りつけたのだった。「馬鹿野郎、こんな頭で街を歩けると思ってるのか、このフーテン親爺！」と手がつけれないのを、ハルミが

髪を洗い直して、前髪を額の方に張り出し氣味にドライヤーで波打たせチックで仕上げてやるとようやく氣をすずめて帰って行った。

ハルミの仕上げには皆満足だった。

こんなことがあってから、ハルミは店の時間中でも、平気で出歩くようになった。男達に誘われて、映画に行ったり、遊び廻っているらしい。作次郎が小言をいうと、フンと鼻先であしらって不貞腐れた。作次郎にも、ここでハルミの氣嫌を損ねると、澄江にまで辞められるし、店の方は人氣が出て今までになく繁盛もして来たところで弱味があるのでハルミもそこを見抜いて居直った感じだった。

こんな状態が続くうち、ハルミが、外出したまま三日も店を空けた時は、流石の作次郎も意を決した。店の金をそっくり持出して行ったことまで判ったのだ。平氣な顔をして三日目の夜、店を閉めてから戻って来たハルミを二階の六畳に呼びつけた作次郎は大声を上げた。

一体何だと思っているのだ、今日という今日は絶対勘忍出来ぬから今すぐ出て行け、と声を囁らして怒鳴りつけるのに、一向に平氣で嘲弄するように見下しているの、かっとなつた作次郎が思わず手を上げようと腰を浮かしたところを急に立ち上ったハルミは足を上げて作次郎の胸板を蹴倒したのだ。不意をつかれた作次郎は蛙のようなぶざまな恰好で

仰向きにひっくり返った。首の上にハルミの足がぐいと乗っかり、じりじりと重量を加えられると、息がつまって、手足をばたつかせてもがくしかなかった。

「ふん、大きな声を出して、お前の店がはやるのも、あたしのお陰じゃないか。おいぼれの癖に主人顔していい氣でいるから笑わせるわよ。どうだい、こうして締め殺してやろうか。あたしの足に踏み殺されるんなら本望だらうよ」

作次郎が見上げると、ハルミの黒い瞳と眼が合つて、その吸い込むような魔力を感じて途端に氣力が抜けて行くのを覚えた。ハルミがこのように口をきくことなど、夢にも考えなかったことだった。ハルミはどしんと作次郎の胸の上にその大きなお臀を下して馬乗りになった。豊満な太腿でじわじわと両頬を締めつけられると、作次郎はまぶたの裏で赤い熱湯が走り抜け、一瞬の陶醉に誘われた。

「どうだい。本当にあたしに出て行かれてもいいのかい。それとも、どうしてもいて欲しいんなら、これからは、あたしがこの店の主人だよ、さ、どっちなのよ」

ハルミのお臀がずり上つて来て、作次郎の顔はぴったりと股の間にはさみ込まれた。ハルミが腰をしゃくり、ぐいぐいとお臀に重圧をかけて来ると、作次郎はすっかり上氣してしまつて、このまま、ハルミのお臀に敷き潰

されて死んでしまつてもいいような氣持にさえた。と、急にハルミは立ち上り、作次郎は陶醉は中断される。

「そら、いて欲しいんなら、あたしの足にキスしてご覧よ、どうなのさ」

突き出されたハルミの足に、まるで催眠術にでもかかったように作次郎はむしゃぶりついた。ハルミの足の裏まで、憑かれたように舐める作次郎を小馬鹿にした表情で見下し

「今度は馬」

四つん這いで部屋中を這い廻らせ、遂にはハルミの重量に堪えかねて、大きなお臀の下に乗り潰されてしまつと、土下坐させられ、しもべとしての誓いをさせられた。だから今では、この誓いにしたがってハルミが、この店の主人として絶対権力を握っている。どう考えても作次郎にはハルミに頭の上らない点ばかりで、はじめからこうなる運命だったのだと諦める以外なかった。

作次郎はおいほれといつてこき使われ、ハルミ様とよばされた。店の仕事はハルミがハサミを握り、澄江が顔剃りに當った。作次郎はその間土間の掃除をしたり、湯沸しを受持たされた。お客の前でもハルミは平氣で作次郎を怒鳴りつけ、時にはほうきの柄でどやしつけられた。

澄江の方は今まで通り無表情に働いたが時にハルミの氣紛れで、店が終つてから、風

呂場や二階に作次郎が呼びつけられ、お仕置きと称して、いろいろに責め苛まれるような時、澄江はハルミの助手をつとめ、ハルミのいう通りに今までの主人の顔に唾をかけた、手足を縛り上げて鞭打ったりすることを何の感興もない顔でやっていた。炊事や洗濯一切は作次郎の仕事となつた。ハルミが二階の一間を占領し、夜はいろいろの男が泊つて行くようになった。

澄江は今までどおり店の奥の三疊間を当てがわれ作次郎は番犬代りだといつて店の土間に寝かせられた。男を引き入れない夜は澄江と作次郎が二階に呼び上げられ、舌の奉仕を強要された。ハルミは一旦満足を得たあとでも、足の裏を舐めさせながら眠るのが好きで彼女が寝付くまで作次郎は、ハルミの足許に這いつくばつて時には何時間も、彼女の足の裏を舐め続けねばならなかった。いちいち、階段を下りるのも面倒臭いということになつて、就寝前の御神酒、朝の御芳香物、いずれも、作次郎が人間便器として利用されるようになった。作次郎の地位は益々落ち、ハルミは一層神格化して行ったがも早ハルミにとつて、作次郎は意のままにあやつれる土偶にすぎなかったし、作次郎としても、ハルミの意のままにこき使われ、その庄政の下に呻吟することが彼の眞の人生なのだと、今ではしんから思い込んでいる様子であった。(完)

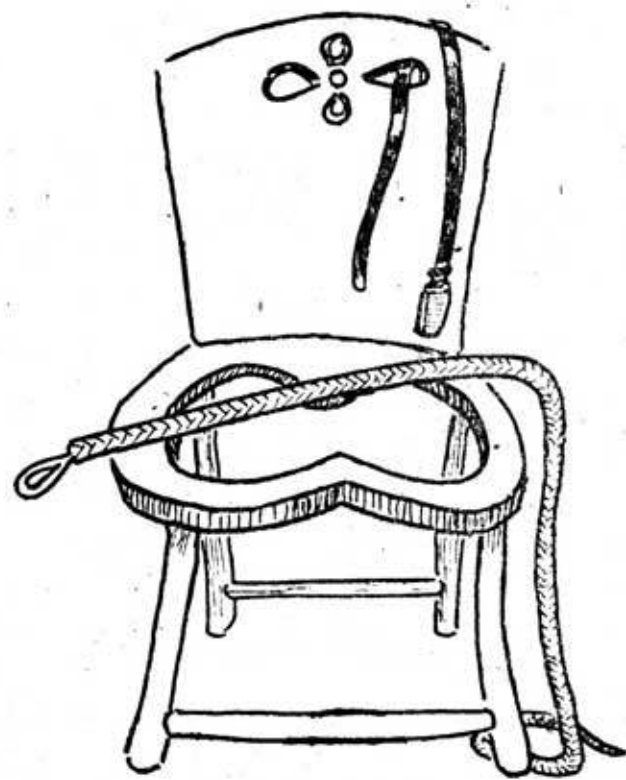
連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

△第十八章 そのかみのこと(十八)▽

(確定女囚ミシュリーヌ)

西 条 操



は未だ当たっていない。

今日は健康診断日。手錠とロープに繋がった十名程の女囚の群に混じり、ミシュリーヌは医務室へ曳かれた。拘置所の被拘禁者には、月一回の健康診断を受けさせる建前になっている。ミシュリーヌはこの健康診断が嫌だった。ジョルジュ・ダントン医師に逢うおそれが多分にあるし、それに家畜かなんかのよう取扱われるのだ。拘置されて以来、医務室へは三度来たが、幸いにもジョルジュの番に

控え室で、ロープを抜き取られ、手錠を外され、囚衣を全部脱ぐ。そして再び両手に手錠だ。以前はこうまではしなかったのだが、医務室にはいろいろと器具や刃物類もあるしこの四月からは丸裸かに手錠かけて、医務室へ入れるようになっていた。今日の担当婦人看守は、女囚達に自分で手錠を嵌めさせた。女囚達は一列に並んでドアに入る。かたわらに立つ婦人看守へ両手を差し出し、手錠の検

査を受けながら素足で、リノリューム床を踏む。嫌だといっても仕方がないが、ミシュリーヌはこの時が一番嫌だった。面倒臭そうに何やら準備する看護婦が二人、あらわなさげすみの色で迎えた。壁に背をつけて並んで立ち、順番を待つのだ。

「いやな気分ね。アウシユビッツみたい」
囁やきに気付いて見ると、ミシュリーヌの隣りにクラリスが立っていた。
「ミシュリーヌ。四年だって、ほんと？」

いかに独房に隔離し、連絡に眼を光らせていても、関心ある同囚の消息はお互いにすぐ知れる。ことにクラリスは才気喚発の女だ。

「ええ。そう決めて頂いたわ」

ミシュリーヌは答えながら、奥のドアが気にかかった。そこから姿を現わすのはジョルジュか、或いは他の医師か。

（ああ、ジョルジュだったら、どうしよう？折角今までうまく行っていたのに。泣けて来るわ。こ々な、健康診断なんて要らないのになえ）

「上告しないつもりだってほんとう？馬鹿ね、あんたは二年が相場なのよ。私は四年でとこね」

灰色の眼をした婦人看守がツカツカと前に立ち

「お黙りッ」

と怒鳴った。過まちを装おうて女囚の素足を靴で踏みつける。ミシュリーヌとクラリスは呻いて脚をよじった。

「あ、ごめん、ごめん。フッフ」

更にビンタが頬に飛ぶ。此の大柄な婦人看守のビンタは頬げたが凹む程だ。眺めた看護婦の一人がゲラゲラ笑い、これ見よがしに唇を塗り直した。準備も済み、医師を呼びに行

く前の化粧だろうが、こんなので看護婦がよく勤まるものだ。

「十人ね。一つ、二つ、三つ……」

と数を読む。

「でも、ああして縛っとく様になってから安心ね。心電のグラフ紙、替えた？」

「そんなの使やしないわ。早く呼んどので」

頬の痛みをじっと耐えたミシュリーヌは、息を詰めてドアを凝視し、現われた男を一目見てよろめいた。

（ああ、ジョルジュ!!ここへ来るのも、これでおしまいだと云うのに……）

ミシュリーヌは深々とうなだれ、崩折れる脚を必死に立てた。六年前のマルセーユの裏街、その時の彼女は美しく豊かに粧おっていたし、彼は落ちぶれてみすばらしかった。それだけは、此の姿を彼に見せるのは一しお堪え難い。ミシュリーヌは消えて仕舞いたかった。今のジョルジュは医師の貫録も一応ついて、立ち並ぶ壁の女囚達を一わたり眺め、看護婦達にうなずきながら席につく。男性が現われると、女囚達は忽ち反応を示した。医師であろうと神父であろうと、女囚達にとって

七名までがしなを作り、鼻を鳴らして眼に媚びを浮べた。こんな連中にとっては、まっすぐ前を向いて立って居なければならぬのが勿怪の幸いと云う訳だろう。

「ねえ先生、もっとよく診てよ、簡単過ぎるわあ」

小柄金髪の乳房ぶるぶるが鼻声を出し、ジョルジュの前で身をくねらす。

「ねえったら。あたし近頃、少し変調なのよお。お乳にしこりもあるし。ねえ調べてよ」

「大丈夫だよ。二年や三年はピンピンして動められるさ」

「意地悪。此の前のお爺ちゃんの方がよかったわ。でも、女医よりいいわね。ねえ、ホラこんなに動悸が打ってるのよお。心臓麻痺起したら先生の責任……」

「うるさいわあッ。お行き」

看護婦が横からきめつけ、女囚は忽ち牙をむく。

「何よ、あんたは。あたし、先生に診て貰ってんのよ。あんたはそこで先生のおっしゃることを書いてりやいいんだわ。間違えない様にねッ」

こんなのが居るから、診察中でも手錠は外せない。舌打ちして寄った婦人看守が手荒に

腕を掴み上げ、手錠の痛さに女囚は顔しかめ
たが、締らめてジョルジュに背を向けた。看
護婦ならともかく、婦人看守にかかつては口
答え一つ出来やしない。

「まるで家畜の検査ね。でも身体搜検より有
意義だわ。気狂いの真似してやろうかしら」
おどけながら嘆息して居たクラリスが事務
的に診察を受け終え、注射のあとを辛ううじ
て揉みつつ戻って来た。お次が来ないので、
看護婦が不審げな眼をあげる。女医の場合な
ら別だが、男の医師なら大抵がいそいそと来
るものだ。

「次よ。早く来て」

ミシリーヌは脚が萎えて歩けなかった。
「何をグスグスしてるんだい。えーと、お前
だよ。その、あ、七十八号か。服脱がせ
たら札つけとかかなきゃ、不便だね。早く行
きなッ」

灰色の眼を光らせて婦人看守が床を踏む、
「七十八号ッ。そのまま行きやいいんだよ、
もう服は脱いでるじゃないの。頓馬ッ」

罵倒されて、ミシリーヌは死にたいと思
った。脚が漸く動いたミシリーヌは、眼を
閉じて歩む。同時に二カ所を押えられぬ手が
悲しかった。腰を曲げ、いざる様にして漸く

辿り着いた彼女は、最後の一步をやっと歩ん
で、小さな回転丸椅子に尻を乗せた。一旦ひ
いた血が再び頭に逆流し、胸は締めつけられ
る様に苦しいが、吐く息さえも憚られる心
地だった。身じろぎもせずに、じっとしてお
れば、眼前のジョルジュが気付かずについてく
れる様な気もする。

（何も、もう恥じることないわ。刑も決まっ
たんだし、今の私には、これが当然のことな
んだもの）

そうは思っても、首にくびきをかけられた
様に身が屈む。

「番号は？」

今聞いて知ってるだろうに、看護婦が事務
的に訊ねた。

「番号を訊いてるのよッ。あんた、啞なの？

囚人番号を云うの」

「七十…八号です…」

ミシリーヌは蚊の鳴く様な声を漸く絞つ
た。

「お前、どうかしてやしない？ここはホテル
のロビーじゃないんだから、テキパキおし。
遠慮しないでいいのよ、診察料はロハなんだ
から」

看護婦はイライラして嘲けり、カルテを眺

める。

「へえ、もう半年になるのね。それなのに未
だそんなんじゃ、先々案じられちゃうわ。い
くらしおらしくして見せたって、もう無駄な
んじゃないの、お前は？」

ミシリーヌは顔を掩い、その手を男の指
が静かに引き離した。

「君、そんなこと云うもんじゃないよ」

男の声を聞き、其の手に触れられたミシ
リーヌは電撃を受けた様に身を硬張らせた。
ジョルジュはミシリーヌの手錠をずらせて
脈を診た。おそらく二倍は脈打って居るだろ
う。男の指が肩を押し胸に聴診器が触れた。

「知ってたよ、ミシリーヌ」

ジョルジュは低く云った。ややあって、女
囚が答える。

「お恥かしうございます。こんな…」

男は女囚に背を向けさせた。聴診器を当て
ややあって呟く。

「これが人生だよ、ミシリーヌ。でも、あ
なたはいつでも…立派で…美しい…」

ミシリーヌの肌に触れるジョルジュの指
先も、心なしか震えている様だった。男は、
それきり黙って診察を終えた。内科医であろ
うと拘置所の医師ともなれば耳鼻咽喉はもと

より其の他の診察も一応はするし、精神科のことだってやる破目にもなる。ジョルジュは上半身だけを診た。押えながらも、まぶしげな表情が走る。

「別に異常はないね？」

「はい。ございません」

ミシユリーヌは救われた心地で答えた。男が診ると云えばあらがう術もない身なのだ。

「もういいよ、行き給え」

ジョルジュは事務的に云った。ミシユリーヌの胸がほのぼのと和らぎ、硬直が溶けた。屈辱の嵐は過ぎ去り、ほのかな甘い感情が胸に湧く。ジョルジュは慰さめもしなかったし同情の言葉もかけなかった。それだけに却って彼の深い胸の裡がひしひしと泌み透りもする。彼は彼なりの人生を苦勞して来たのだ。(私、このひとの、愛情に応えなかったんだわ。それなのに……)

ミシユリーヌは、人間として、また女として、心温まる喜びを感じた。

「ありがとうございます」

ミシユリーヌは心からの感謝を述べ、ジョルジュは眼鏡を拭きながら

「ああ」

と云った。

「あの女、御存知ですか？ 私、あんなこと云っちゃっちゃって」

と看護婦が訊ねる。

「あ？ ああ、患者だった女だよ」

レンズをためつすかしつしながら、ジョルジュはさりげなく答えたのだった。

エメリーヌやアネットは、折にふれ時にふれ、顔を見る度に上告をすすめるのだった。

「悪いことは云わないから。ね、そんなに思い込むんじゃないわ」

「こんなこと云っちゃなんだけど、どう考えても少しひどいわ。弁護士さん呼んだげるから、ともかくもう一度会って見たら？ ね」

声をひそめて交々そう云い、接見願書を出きつけて見たりもするのだった。しかしミシユリーヌは、其の度に首を振り、感謝の色を浮べつつもキツパリ拒むのだった。ミシユリーヌはこう見えても、芯は強い女性なのだ。

拘置所長補佐官ジョセフィーヌは軽やかな夏ドレスを長身にスラリとまとい、一段落ついたデスクで紫煙を吐いた。六月下旬のひる近くともなれば、頑丈一点張りの旧式建物の執務室はかなり蒸し暑い。扇風機は来月でないと出ないし、懸案の冷房装置は何年先か見

当もつかない。

(冬はともかく、夏になると、ここはウンザリだわ。コンピエーヌはよかったわねえ、設備がよくて)

ジョセフィーヌは書類を引き寄せて電話を取り上げた。

(へえ、此の女、上告しなかったのね。一年や二年ならともかく、ちょっと珍らしいわ。でも、ほんとに罪を悔いて居るのなら、これが当然よ。保釈になると、どうしても手数をかけるわね。おち込んだきや、少々のことは締めて観念しちゃうのよ。それに限るわ。でも設備をふやさなくちゃね。移転先の敷地の交渉はどうなってるのかしら。ま、私の在任中には関係ないことだけど)

ミシユリーヌの上告期限が昨日で切れたのだ。

ミシユリーヌの独房の前で婦人看守エメリーヌが

「馬鹿ね、とうとう……」

と呟きながら、少し邪慳に手錠をかけた。ジョセフィーヌ補佐官のデスクで電話が鳴った。女子監房区画の主任看守長からだ。「……うまく行きましたわ。誰も気がつきませんでした」

「そう。よかったわ」

此の春の政界をゆり動かしたスキャンダル事件のヒロイン、キャプシーヌ・エイメが裏門からひそかに保釈されて出たのだ。ホッとしたジョセフィーヌはシガレットをくわえ、重々しい櫓の扉がノックされた。制服制帽に一分の隙もないエメリーヌ婦人看守が、腰枷手錠姿のミシュリーヌを連れて入って来た。

「七十八号囚、ミシュリーヌ・ダリユーを連れて参りました」

エメリーヌが踵を鳴らせて云った。キチッと直立した婦人看守の頭の先は、横で顔伏せる女囚よりも十センチは高い。うなずいたジョセフィーヌはやおら云った。

「ミシュリーヌ・ダリユー。お前の刑は本日確定した。懲役四年。分ったね？」

「はい」

「よって、お前の公民権は剥奪され、本日からお前は受刑者として取扱われます。そのつもりで。いいね？」

「はい」

ジョセフィーヌはゴテゴテ説教するのが嫌いだ。デスクの前に立つ女囚を眺めて、事務的に言い渡した。説教はともかく、言い渡すべきことだけは云ってやらねばならない。

「いずれ刑務所へ送るけど、それまでここで刑に服しなさい。規則は今までよりもうんときびしいから、そのつもりで反則しない様に。まじめに服役すれば仮釈放と云う恩典もあります。勿論、これからは労役を課します。なお、お前の未決拘留期間の換算は、検事局の査定あり次第通知します。分った？」

「はい。よく分かりました。ありがとうございます」

女囚ミシュリーヌは低い声でハッキリと云った。

(なかなか感心だわ。悪びれてないし。育ちがいいのね。初犯だし、これならまあ、二年もすりゃ仮釈放よ)

ジョセフィーヌ補佐官は署名してエメリーヌに手渡し、電話を取りながら合図した。婦人擁護委員会へ提出する報告書の作成を急がせねばならないし、午後は戒護規程打ち合わせ会議に出席しなければならない。

エメリーヌ婦人看守が踵をカチッと合わせ女囚の腰ロープを引張った。

ミシュリーヌは身検室で囚衣を着替えさせられた。太い赤縞が横に入った灰色の獄衣、ミシュリーヌは静かに頭からかぶって着た。

着るべきものを遂に着せられたのだ。身体捜検をし、シャワーを浴びさせてもくれたエメリーヌの態度は、いつになくきびしいし、じっと監視する眼は鋭い。獄衣の胸と背の番号は二二七号。革ロープをしごいたエメリーヌはミシュリーヌの腰を強くくびった。着ていた未決囚衣や下着を洗濯させられる。洗濯は床においた洗い桶の中、しゃがみ込んだミシュリーヌの腰に、革ロープが喰い入って苦しかった。其の腰ロープを握って傍らに立つエメリーヌ婦人看守。見下ろす監視の眼を受けて、ミシュリーヌの喉に溢れた涙が洗い桶に落ちた。

「おいでッ」

腰ロープを曳かれたミシュリーヌは洗い物を抱えて獄庭へ出た。窮屈な裾に膝ががよるける。

「やはり悲しいのね」

干しながらしゃくり上げる女囚に、エメリーヌが云う。少しやさしい声だった。

「でも仕方ないわ、もう確定したんだもの。可哀想だけど、これからは今までみたいな訳には行かないわ。少しきついからね。覚悟してるんでしょ？」

「は、はい」

震え声で答えた女囚は、喰い込む腰ロープに指をかけた。途端、其の手の甲をピシヤリと打たれる。

「戒具に触わるんじゃないのッ」

ミシュリーヌは声を呑んで喘いだ。打たれた痛みは物の数ではなかったが、やさしかったエメリーヌに初めて撲られたのだ。身に打たれた刑の重さが今更の様に胸にこたえ、眼前が暗くなる心地だった。

「少ししよげたのね。でも、お前はもう刑を執行されてる身なのよ。さ、監房の掃除よ」

ミシュリーヌは第七十八号監房の中を磨き立てた。解いてやった腰ロープを束にして持ったエメリーヌは、入口に立って監視していた。久し振りの労働に喘ぐミシュリーヌだったが、エメリーヌは眼を光らせて容赦なく追いついて、やり直しを命じるのだった。最後に鉄扉磨き。取り付いた女囚の背後から、婦人看守は又しても腰ロープを打つ。此の拘置所では、既決囚は戒具なしに監房外へは出さない。労役の時には二名腰連鎖が最低限、少し睨まれて居れば脚鎖をカマされてこき使われる。一人だけならば腰ロープをかけられるのが当然だ。

初犯囚と累犯囚との区別は、ここではしな

いのだ。

既決囚監房の鉄檻に入れられたミシュリーヌは、固い鉄製ベンチに、ぐったりと腰かけた。広い通路の突当りにある三ヶの鉄檻は、警視庁留置場のよりも更にいかめしく頑丈で刑の執行を受ける女囚を入れるにふさわしい冷厳さだ。前側の鉄格子から一米離れて平行にベンチが長々と一台。詰め合って十五、六名が腰かけられる長さだ。ベンチの背後は冷たいコンクリート床が広々とし、鉄格子に寄せて畳んだ毛布が何組かおいてある。昼はベンチに前を向いて坐わり、夜は毛布を床に敷いて寝るのだ。既決囚監房の有様は既に知って居たミシュリーヌだったが、入れられて見ると胸もふさがる思いだった。ミシュリーヌの檻は中央の檻。左は拘留刑専用で、右は刑務所送りを待つ連中を入れる。中央のは都合によってどっちにでも使われて居た。正規の労役場がない拘置所のこととて檻には常にいくらかが残って居る。全員を出してさせる程の仕事はないし、第一それには看守が不足だ。面会やら接見やら出廷やらと、一人に一人を要する業務が多いのだ。左の檻に五、六名、右の檻にも六、七名、そしてミシュリーヌの檻には三名居た。ミシュリーヌを迎えた三名

の中の一人は百番台の拘留刑女囚、両手両足を黒光りする鋼鉄で拘束されている。ベンチの端に腰かけたミシュリーヌは鉄格子戸の音を悲しく聞き、立ち去るエメリーヌの靴下の縫い目を切なく見送り、そっと横を向いて恐ろしげに眺めた。一一〇号が施されて居る戒具は、見たこともない代物だった。二十センチ程の鉄棒の両端の鋼鉄環を両手首に嵌められて居る。棒手錠と云う奴だ。両足首には重そうな足錠。革サンダルは檻の外に脱がされる規則だから鉄枷が素足に当って痛そうだ。足錠の鎖と棒手錠とを太い鎖が四、五十センチに繋ぐ。更に両手には革製の袋をそれぞれかぶせられ、締金具と錠で脱げない様にされていた。

「お前さんとうとう上告しなかったんだね。知ってるよ、四年だってね。綺麗な顔してるのに勿体ないことしやがるもんだ。陪審員に女が四、五人も居たんだろ」

隣りの二二四号がミシュリーヌに云い、何故か呻いて腰をよじる。四十近い赤毛女だ。「あたしやノビと放火で九年さ。ノビはやつたけど、火をつけた覚えはないのよ。でも前科三犯と来ちゃ仕様がねえ。ノビだけなら、いくら高かったって三年なのに、ちくしよ

う。ああ痒い、まだヒリヒリしやがる」

二二四号は手首を搔いて顔をしかめた。

「あんた、捕縄かけられたことあるかい？」

未だだろうね。一号縛りとやらで半日ほうつとかれちゃ、全くこたえるね」

赤毛女の両手首には喰い込んだ捕縄の痕が歴然としている。ミシュリーヌはおぞましげに眼をそむけた。

「ベソ搔いたって駄目さ。あんたムシヨは初めてだったんだね。懲役人となりや、もうみじめなものさ。捕縄の束つきつけられりやお手々を後ろへ回わさなくちゃならないし、日がな一日、規則々々……。でも、捕縄かけるのは面倒だから助かるよ、あんなことをしょっ中やられたら堪まらないわ。あーあ、こんだツーロンだろうね。九年だから、いくらうまく立ち回ったって六年、いや七年か。折角いい男を捉まえたのになあ。こんだ、相手探しに苦労するよ、何しろ五十面さげてなんだからねえ。あーあ、不憫なもんだ」

赤毛女囚はボソボソと呟き、其の隣りの棒手錠女囚が鎖を鳴らす。

「これかい？ この女はね、制服が睨んでるのに、威張って伸びをやらかしたんだよ。そりゃまあ、一日こうして坐ってりゃ、伸びも

したくなるだろうさ。けど、制服の顔も立ててやらなくちゃね。馬鹿だよ、此奴は」

「だって、あたい癪なんだもん。あたいより稼ぎのいいのが三十日間で、お茶ひいてたあたいが六十日だなんて……」

棒手錠の金髪が不平の鼻を鳴らす。

「そりや、お前さんの腕が悪いのさ。もっと修行おしよ。街の天使の道はきびしいよ。フフ」

赤毛に嘲けられて、金髪はふくれた。

「それでさ、あんた……えーと……」

「ミシュリーヌですの」

「ああ、おミシュちゃん。それでさ、此奴ったらこうしてこんな古くさい四ッあし鎖をかかけられちゃったんだけどさ、こんだお乳をいじくりやがったもんで革手袋をガッポリさ。要領が悪いんだよねえ」

「あんただって要領いいとは云えないねえ。

鎖のコルセット、気持ちいい？」

一番向うのブルネットが嘲ける。何しろ通路は丸見え、後ろは壁、だから少々の交話は平チャラだ。

「そんな要領でツーロンの九年が勤まるの」「ちきしょう。あんなところから見やがったとは気がつかなかったのよ。いい勉強した

わ。ね、ちよっと、おミシュちゃん。ここ触わって御覧。大丈夫だってば。制服は見てないよ、あたしが保証するよ」

赤毛はミシュリーヌの手を取って引寄せ、自分の腰あたりに触れさせる。

「小ちゃくて柔らかいお手々だこと。ホラ、ね。あたし鎖かけられてるのよ。ホラ、縦にも回わってるだろ。弱音は吐かないけどさ、でも三日目となると、ちっとこたえるよ」

赤毛はベンチでの身動きが目に余ったので獄衣の下で素肌に鎖をかけられて居るのだ。鉄製ベンチに押しつけられる鎖が尾底骨あたりに苦痛だろう。ミシュリーヌは胸ひしがれる思いだった。

「なにね、こんなのは序の口さ。ここじゃ旧式の道具しかないんだよ。アンジーにや、あんな四ッあし鎖なんて無細工なのはなかったね。もっと、ピカピカ光っててスマートだよ。あたしの此の鎖だって真黒なんだから、ひとに見せられやしない」

「ふん。アンジーなんてのはコンピエーヌに毛の生えた様なものさ。旧式は旧式でも、ツーロンの旧式お道具は凄いわよ。ま、気絶しないでね」

と云うブルネットはしたたか女らしい。

「ツーロンを知らない癖して、大きな口をお叩きでないよ。あんたとは一緒になるだろうけどさ、足に鉄丸曳き摺って煉瓦運びやらされる時の顔をゆっくり拝見するわ。あーあ、今日も娑婆見物はお流れか」

云い放って嘆息するブルネットは脅喝で三年の前科五犯、大柄グラマーのあばずれで、鎖鳴らす身を人目にさらすことなど平気らしい。

蹴り落された境涯の恐ろしさに身を縮めわななくミシュリーヌは気付かなかったが、右隣の檻のベンチでは、肥え気味の女が鼻で呻いて盛に首を振って居た。恋しいミシュリーヌに自分の存在を気付かせようと、上体を悶え足を踏む其の女囚はジゼル。おそらく交話の反則を摘発されたのだろう、嵌口具に後手錠の姿だった。

其の夜、ミシュリーヌは、既決囚の点呼が如何にみじめな思いなのか、骨に思い知らされた。どう云う風に受けるものかは薄々知って居たし、此の春から床に坐わられる様になったのも知って居た。如何に罪を悔いて居るとは云え、罪名と刑期を叫び、一日のお礼を喚くのは情けない。床に脚を折り両腕を背に、声詰まらせるミシュリーヌの姿を、若いベ

ル婦人看守が鉄格子の外から見下ろす。漸く叫び終えてひれ伏す金髪が靴先で蹴られた。

「馬鹿だね。番号が違うよ。もう一度」

「そうだ、ミシュリーヌは七十八号ではなくて、今日からは二二七号なのだ。上ずった声を振り絞りながら、ミシュリーヌは若い制服を見上げた。此の娘には散々いたぶられ恥かしめられたものだ。出来ることなら眼前の鉄格子を叩き破って、此の小娘に躍りかかってやりたい気持だった。延ばせば届く其のスカートに手をかけて、引きむしってやれたらと思うミシュリーヌだった。

「何と云う顔してんの？ 喜んで刑に服すると云う触れ込みだったじゃないの。不服ならゴムホース上げようか？」

若い制服は上衣の裏から愛用のゴムホースを引き出し、穏やかな顔の主任婦人看守がそれを制した。ベル婦人看守は不服げだ。いずれその中に痛められることだろう。ミシュリーヌはひれ伏しながら唇を噛んだ。しかし如何に思っただ見た所で、此の若い制服との間には隔絶した一線があるのだ。相手は若くとも法務事務官の肩書で刑を執行する側、そして此の身は其の刑を受ける体だ。法と規則の鉄壁の前には、所詮屈伏する他はないのだ。生

れて初めて床に寝て、ミシュリーヌは声を忍んで泣いた。

「うるさいわねえ。いつまでメソメソしてるのさ。本番はこれからだよ」

前科五犯のブルネットが舌打ちする。彼女は此の檻のボス格だ。

「ね、ミシュリーヌ、もうおやめ、今まで立派だったあんたじゃないの」

と慰さめ励ましてくれたのは、刑務所送りも間近かのジャクリーヌだった。

配食や通路等の掃除、看守室の雑用や戒具磨きは、勿論鉄檻女囚の仕事だ。翌朝六時、叩き起された鉄檻女囚達は点呼を受けて一日の服罪を誓わされ、用便もそこそこに曳き出される。檻を出て革サンダルを穿くや忽ち二名宛腰連鎖だ。番号を呼ばれなかった者はホッとした様な詰まらなそうな顔でベンチに残り、早朝の監舎内に轟ろいて鉄格子戸が閉じた。

「お前はいつになったら自分の番号を覚えるの？ トンマ!!」

返事がおくれたミシュリーヌの頬を、待ち構えたベル看守が撲りつける。腰をくびられる順番を待ちながらミシュリーヌは立ちすくんだ。背後に立ったベル婦人看守が鎖をジ

チャつかせ、ミシユリーヌは見習って両手を上げる。

「そうそう。そうすりや、あとで服を引張らなくて済むわ。お前前科があるんじゃない」

ベル看守は嘲けりながら女囚の細腰に鎖を巻いた。だぶついた獄衣のウェストがきつく締められ、後ろ腰にガチリと錠が鳴る。腕を下ろしながら、ミシユリーヌはほろりと泣いた。ミシユリーヌと繋がれるのは赤毛の二二四号囚、若い制服娘に頸をしゃくられ、嬉しげに裾をかかげた。邪魔物がずらされ、制服のポケットから鍵がつまみ出され、いそいそと寄せる後ろ腰で錠が外された。Y字形の鎖がジャラリと前に垂れ、赤毛はふうと息を吐く。もう一度後ろ腰に錠が鳴って、腰鎖が素肌から弛んだ。

「あとで掃除しとくんだよッ」

「は、はい。じゃ、もう赦して頂けるんでございますね？　ありがとうございます。そりゃもう、ピカピカに磨かせて頂きますから、ハイ」

裾を下ろした赤毛は雀躍りし、三日間かけられて居た鎖を檻のそばへ置いた。今度は獄衣の上から鎖が腰をくびり錠が鳴る。

リストを持った婦人看守がビシビシ命じ初

めた。労役の区分けだ。

「以上は配食ッ。……二二四号と二二七号、

二三〇号と二三一号……以上は清掃ッ……」

十五組三十名の女囚達は、それぞれの担当婦人看守に追い立てられて鎖を鳴らす。

「お前達は法院だよ。さ、並んで」

ベル看守が四組の前に立ち、ミシユリーヌの顔を見やりながらそう云った。二列に並んで鎖を鳴らす「法院掃除番」の女囚達の顔に或いは悲しげな、或いは嬉しげな表情が浮んで居た。法院、検事局、拘留所本館などでの労役をさせられると、恋しい娑婆を垣間見れるし、又こっちが見られもする。ミシユリーヌは情けなかったが、少しは安心して居た。こんな朝早くでは、人々の眼も少かう。そう考えて居た彼女の期待は甘かった。法院は広くて廊下は長く、庭も大きいし便所だって沢山あるのだ。それに、何しろ法院が仕事を初めるのは、ひる近くなつてからの事なのだ。ミシユリーヌ達八名には、婦人看守が二名ついた。場所が場所だから、監視は一しおきびしくなければならない。区画を遮る大鉄格子の手前で、女囚達は両手に手錠をガッチリかけられた。監舎の外では手錠姿が当然だし、規則による最低限の処置だ。掃除道具を

手錠の手に持たされ、ガランとした長い廊下を追われて、先ず便所掃除。鎖を鳴らしつつ女囚達はあたりを盗み見た。男囚の姿を求めるのだ。しかし、滅多なことではカチ合わない様に按配されて居る。辿り着いた二階の便所は二五号法廷の近く、陪審判決を待つ間にミシユリーヌも一度入ったことがある所だ。中に入って、漸く手錠を外して貰えた。もう一人の婦人看守は手錠をポケットに納めたがベル婦人看守は四個をむき出しに腰ベルトに挟み吊った。そこが済むと次だ。二階には、大小とりまぜて六カ所の便所がある。舐める様にして這い回わり、隅々まで磨き立てながら、ミシユリーヌは仕事そのものは何でもなかった。娑婆に住んでもやらねばならぬ仕事だ。しかし、絶えず腰に鳴る鎖は堪まらなかった。一米半に繋ぎ合わせる此の鎖の邪魔でみじめなこと、一歩動くにも其の長さを気にせねばならないのだ。初めてと見た赤毛女囚は意地悪く、なかなか動かなかつたり、不意に引き摺ったりする。体力に於いても氣力に於いても相手より劣るミシユリーヌは、絶えずおろおろとまごつき、あわて、そして時々よろめいて膝をついた。かなぐり捨てたい心地の此の鎖は切るに術なく、結び目には鋼鉄

の錠がかかり、そして其の錠の鍵を持つベル婦人看守が常にミシユリーヌだけを摸りつける。

六カ所の便所掃除に一時間半、ミシユリーヌは齒を食いしばって這いずり回った。手を洗い、廊下に並んで差し出す両手に手錠が打ち込まれ、ちらほら人影の見える中を監舎に戻ると八時少し前だった。鉄檻の前にうずくまって、床の上でのみじめな朝食は腰連鎖に手錠のまま。

「さ、立って。行くのよ」

打ちひしがれた思いのミシユリーヌはよろよろと立ち上った。ジャラジャラ鳴って垂れる腰鎖が石の様に重い。夜勤明けのベル看守達に代って現われた二人のうちの一名はエメリーヌ婦人看守。つと寄って鍵を取り出し、ミシユリーヌの腰鎖をゆるめてくれた。僅かな楽になった腰の後ろで矢張り又、錠が鳴る。

「何とかして上げようと思ったんだけど。いきなり法院行きじゃ可哀想だと思って。でもいずれは何だからね。我慢するのよ」

エメリーヌの耳にそう囁やいた。今度は一階の廊下磨き。ミシユリーヌの様な初心な女囚には最も恥かしい場所だ。いずれ、ベル看守あたりの采配による労役割りなのだろう。

法院の内外はすっかり明け渡り、ミシユリーヌは全身を熱くしてモップを握った。廊下は泣きたい程に幅広く長くて、人々が通る度に大きく避けねばならない。何しろ、磨かせて戴いて居るのだから、通行の邪魔をする等とは以ての外だ。其の度に横向ける顔を深々と垂れ、後ろ向きにさえなろうとするミシユリーヌだったが、二二四号は面白がって腰連鎖をことさらに引張り鳴らし、ミシユリーヌの体を前に向ける。ずれた腰鎖の結び目は、すぐに直して常に真後ろにしなければいけない。(意地の悪いひとが居るものね。留置場のひと達は皆いい人ばかりだったのに、ああ、腰が千切れるわ)

ミシユリーヌは泣きたい思いでよろめき、せせら笑う二二四号を、エメリーヌが叱りつけた。

「何故、そんなことをするのッ」

二二四号は横を向いて肩をすくめた。自分なんか足許にも寄れない程に美しく、自分より刑期も短かい鎖仲間がねたましいのだ。それに先刻は此の金髪独りだけが鎖を弛めて貰ったし、第一自分は殆ど濡れ衣の泣寝入りののだ。赤毛がヒステリー気味に意地悪するのにも無理はなかった。九時もかなり回ると、

一般の人々の出入りが繁くなる。大抵の法廷は十時が開廷時刻だから、民事法廷が多い一階の此のあたりでは、人々の集まりも次第に数を増す。だから、廊下磨きは原則として九時半には終えねばならない。

「早くおし、早く」

女囚達を督促するエメリーヌだったが、人々の群が通る度にミシユリーヌの前に立って呉れ、ミシユリーヌは其の背を拝みたい気持ちで見やるのだった。

「ちえッ。何よ、あの恰好は。帽子とドレスと靴が全然合っていないじゃないの」

「ふん。どうせ成り上がり者よ」

「あら、いい男!!抱きついてやろうかしら」

したたか女囚達は行き交う女性に眼を斜めに光らせ、若い男の姿に瞳を輝かせる。しかしミシユリーヌには眼をあげる力もなく、人々の眼が針の様に肌に刺さり、硬張る手に握るモップをともしれば、取り落としそうだった。女囚の姿を眺めてヒソヒソ囁やき合う人々は、或いは無遠慮にジロジロと眼を注ぎ、或いは眉ひそめて顔をそむけながら通った。無視する風を装おう男も居るし、汚らしい物を避ける態度を示す婦人も居る。ずっと昔には、こんな時に囚人の頭へ袋をかぶせたこ

ともあったのだが、人権を無視したことだと廃止されてしまった。どっちが人道的な扱いだか。

九時半をかなり過ぎて漸く済み、モップとバケツを物入れに納めると、其の場に並んで手錠だ。意地の悪いことに、物入れは玄関の近くに在る。婦人看守が両端から順番にかけに行く。

「あら、御覧なさいよ、あなた。仕事が済んだら、もう縛られちゃうのね、可哀想。たった今までふうふう云って働いてたのよ」

廊下のベンチに居た女性が立って来て見物した。夫らしい男が、それをたしなめる。

「そんな風に見るもんじゃないよ。知らん顔して居ておやり」

「だって可哀想ですもの。あら、泣いてるのが居るわ」

「懲役人なんだから仕方ないさ。泣いてるのも居るけど、大抵はふてくされて平気な顔してるねえ」

「でも、手錠って便利ねえ。どうなってるのかしら」

「そんなこと心配しなくていいんだよ。こっちの訴訟の方が大切だ。さ、もう一度おさらいしようよ。弁護士はおそいな。相手方のは

もう来ると云うのに」

ミシュリーヌの番が来て、差し出して待つて居た手がわなないた。エメリーヌ婦人看守がきびしい面持ちでふり上げる。縛しめを施す時には常に唇を引締めてけじめをつけるエメリーヌだが、場所が場所だけに今はことさらに、有無を云わさね態度だ。おとなしく神妙な女だが今はもう受刑囚、鉄格子の外では縛ってやるのが当り前のことだ。被告人ならば単に保安上の問題だが、受刑囚ともなれば縛るのも刑のうちなのだ。ミシュリーヌにはエメリーヌの態度が急に冷たくなった様で恨めしかった。右手首に叩き込まれた手錠に膝が萎えた。あっと云う間に左手にも嵌まってジジと歯止めが鳴る。逮捕されて以来、御厄介になり通しの手錠だが浅間しい赤縞獄衣を着て衆人環視の中に素足を見せて立ち、腰には鎖さえまとして人々の眼前に曝され、いつもやさしかった此の婦人看守にすげない態度をされて受ける手錠は、ミシュリーヌの胸にずしりとこたえてみじめだった。しかし、ミシュリーヌは、もう受刑女囚なのだ。

（これが当り前なのよ。覚悟してたことだわ）

ミシュリーヌは手首を回しながら両腕をそっと下ろしたのだった――。

「どう？二二七号。少しは労役、馴れた？」

エメリーヌ婦人看守がやって来て、詰所へ入りがけに声をかけた。今日も二二四号と繋がったミシュリーヌは詰所前の床にうずくまって居たが、声を聞いて、靴を磨く手を休めずに顔を上げた。

「はい。お陰様で少しは」

「そう。頑張るのよ。あのね」

と声をひそめ、抱えた大封筒を示す。

「手紙が来てるわ二通。明日読ませたげる」

明日は日曜日だ。ミシュリーヌは眼を輝かせた。公判の少し前に「面会・文通禁止」を解かれて以来、初めての手紙だ。尤も彼女は嘗て誰にも発信はしなかったし、受信もピエールとロシュフオーとジャンから各一通宛を受けただけだった。

「あの担当様。あたしには？」

「お前にはない様ね。何なのその磨き方は。濡れ衣だ濡れ衣だといつまでふてくされてるの？ 今更そんなこと云ってたって、自分が損するだけじゃないの」

エメリーヌはピシリと云って扉を押した。

二二四号は無実だとボヤいては居るが、その

実は何とかどうか怪しいものだ。出て来たエメリーヌを見て、ミシュリーヌは押えかねてつい訊ねた。

「あの、エメリーヌさん。お手紙、どこからですかしら？ 教えて」

エメリーヌ婦人看守の眼がキラリと光って頬が引き締まり、何事か決意した様に眉が上がった。

「お立ち。二二七号」

ミシュリーヌは、ビクツとして立ち上がった。

「そんなこと訊ねることは出来ないのよ、お前は。明日まで待てないの？」

「は、はい。すみません」

ミシュリーヌは首を垂れた。

「それから、今、私のことを何て呼んだの？ さん付けで名を呼んでいいの？」

女囚の胸はじん、と締めつけられる。

「は、はい。申し訳ございません。つい……」

悪うございました。お赦し下さいまし」

「分ってるのね。そりや、未決の時には大目に見たわ。でも、もう駄目。いつまでもここに居る訳じゃないのよ」

「はい」

「顔をあげてッ」

ピシヤリとエメリーヌの平手打ちが左頬に鳴った。続いて右頬にも。心を鬼にしてのビンタだ。ミシュリーヌにも其のビンタの慈悲が仄かに分った。エメリーヌは、決して憎くは撲ったのではなかったのだ。ベル看守あたりだったら得たりとゴムホースの五、六発が降るだろう。齒を噛みしめて次の往復ビンタを待つミシュリーヌだったが、エメリーヌの手は、それきり上がらなかった。

「分った？」

「はい。よく分りました。ありがとうございます。エメリーヌ様」

ミシュリーヌは心から云った。「担当様」と云う言葉は、まだスラスラとは口に出ない新米女囚の彼女なのだった。

翌日の午後、ミシュリーヌは詰所横の台で立ったまま手紙を読んだ、一通はジャンからスタンプは遠いカイロの消印、日付はなんと一カ月前。情けこもる文面に、ミシュリーヌは声をあげて泣いた。もう一通は、珍らしやジェラールから、読んだミシュリーヌの顔が硬張り、そして皮肉な笑みがうつろに浮ぶ。おためごかしの言葉の末には「離婚してくれろ様に」と書いてあった。「お互いのためだから」とも記してあった。同封してあるのは

彼女の署名を待っただけの離婚承諾書。ミシュリーヌは淋しく微笑んでたたみ全部封筒に戻した。

「発信する？」

アネット婦人看守が訊ねてくれたが、ミシュリーヌは佯しく頭を振った。ジェラールにすぐ返事する気になれなかったし、ジャン・ラグランジュ氏は旅の空だ。ピエールやロシュフォーにした所で、女囚からの手紙は都合が悪かるう。ミシュリーヌは静かに自己を抑えて鉄檻へ戻ったのだった。

七月の半ばともなれば、監舎の中は蒸風呂の様だ。デニムの獄衣は、冬には薄過ぎて寒さがこたえる様、夏には厚過ぎて息が詰まる様に出来て居る。たとえ如何に暑くともキチンと着て居なければならぬ忌々しい獄衣は脱ぐことはおろか裾をからげることすら許されない。房内衣とて別にはないし、汗臭い着の着のまま、これも臭い毛布にくるまって床に寝るのだ。夏には一枚に減らされるが其の一枚を必ず掛けねばならない規則。冬にはもう一枚欲しいと泣く思いの毛布が、夏には責め道具になる。刑執行者達は「衛生上の見地からだわ」とせせら笑い、少しでも寝乱れると懲罰だ。手錠位なら我慢も出来るが、

先ず捕縄と来る。ミシュリーヌも遂に昨夜摘発され、夜半叩き起されて一号捕縄をかけられてしまった。担当看守はベル、引き摺り出したミシュリーヌを愉快げに縛り上げた。両膝両足首をも括り上げ、丈夫な袋毛布に押し込んで首を閉じたのだった――。

身検室あたりの部屋々々を磨きながらミシュリーヌは昨夜の苦しみを思い返して居た。半夜しか眠って居ないので体がだるい。手首がヒリヒリとまだ痛いし、吊り上げられて転々した腕から肩が鈍く疼く。しばし監視の眼が消えた。

「どうだえ、捕縄の味は？」

訊ねる二二四号は、此頃では少し好意を持ってくれる様になって居た。

「ええ。苦しいものねえ。けど、一本の縄であんな工合によく縛れると思うわ」

「フフフ。あんな縄使いの出来るのは、ヨーロッパじゃうちの国だけだ。いやな国さ。革鞭なんても未だ使ってやがるし」

「革鞭!!」

「そうさ。聞いてるだろう。ゴムホースやロップでしばかれたっていい加減なのに、本式の鞭を素肌に喰って御覧よ、牛や馬でも云うこときいちゃう革の鞭だよ。あんたなんか一

発で気絶しちゃうね。ああ、暑いこと」

赤毛は顔を押し拭い、腰鎖の工合を直す。

ミシュリーヌも汗の痒い手首を撫でた。

「ムシヨじゃ、皆を集めてやるね。気絶したら注射で覚ましてからやるんだよ。決めた数だけは絶対だね。平気な顔して見てるけど、皆ふるえ上がっちゃうねえ。半年は痕が消えないんだから」

想像しただけでミシュリーヌは震える。

「ま、何だよ。重屏禁と革鞭と窄衣がなければ、ムシヨも恐ろしいところじゃないんだけどねえ。けど、それがあるから皆、看守の云うことをハイハイってきくんだよ」

突然水色上張りの娘が現われた。

「お前達、何をしゃべってるの!!、囚人同志、労役中に話しちゃいけないんだよ。懲役人は黙って云われた仕事してりゃいいの」と威丈高に見下ろし、ハイヒールを鳴らして立ち去った。

「ふん。何よ、小娘の癖に。ほんと癪だねえ二言目には、懲役人だ囚人だとぬかしやがって。あいつ、今度来た指紋係さ。ワッパも持っていない癖に女看守気取りで居やがる。あ、ちくしょう、シャネル五番なんかを昼日中からつけやがって」

二二四号は見送って唇を曲げた。

「バッジをつけた法務事務官様なら諦めもするけどさ、あんなのに口答えも出来ないんだからねえ。胸が煮えるわ」

ミシュリーヌも同感だ。

「けど、あんた。万事要領だよ。顔色を読むことだね。相手を見て要領よくやりさえすりゃ、少し位のこたあ大目に見てくれるさ。馬鹿正直に規則守ってりゃ、痒いところも搔けないし、息も出来やしないよ。あ、来た」

二二四号は床磨きの脚を踏張り、多勢の足音が入って来た。六名の女囚とベルとアネットだ。シャワー室を通って準備室へ行く。前科五犯のブルネットも居たし、ジゼルとジャクリーヌも居た。

「あ、そうか。送りなんだね。あたしは此の次か」

二二四号が呟いた。手錠を外す音に続いて獄衣を脱ぐ気配がし、鎖、錠が台上をこする音が聞えた。水色上張りの娘が現われ、ミシュリーヌ達に横柄な態度で云った。

「ちょっとおいで」

連れて行かれたのは二階の保管庫。途中で娘は二人の頭を小突いた。

「何故手を後ろに組まないの？」

ミシュリーヌは唇を噛んで規則通りに腕を回す。相手が制服でないだけにみじめだ。

「二人とも鎖がずれてるわ。ちゃんとおし」

腰鎖の結び目が真後ろに来て居ないと云うのだ。ミシュリーヌはおとなしく直したが、

二二四号は噛みついた。

「戒具にさわっちゃいけないのよ、あたし達には」

「馬鹿ね。正当と認められればいいのよ」

「勝手なもんだよ、ほんとに。第一、鎖の締め方がゆるいんだよ。少し締めとくれ」

二二四号は、相手が鍵を持ってないのを見越して云いたいことを云う。

「あーら、口答えするのねッ。自分を何だと思ってるの？」

娘は気色ばんだが、流石に構りもせず、腕をねじ上げもしない。その代り、此の娘が金切声をあげれば忽ち制服が飛んで来て、有無を云わさずぶちのめされること必定だ。ちょっと逆らって見た二二四号は、のろのろと鎖を直して腕を背に回わした。

「ショートパンツ穿かせて股鎖締め上げることも考えてるわ、其の筋じゃね。そしたら、気兼ねしないで鎖の引張りっこ出来るわよ。ホホホ」

娘はせせら笑い、ミシュリーヌは愕然とした。

（そんな恰好させられたら、一步も歩けないわ、どうしよう）

「あんた、気にしなくてもいいよ。そんなと出来るものかね、世間がうるさいもの」

二二四号はミシュリーヌに囁やく。身を寄せ合うと、長く垂れる腰連鎖がふくらはぎにうるさい。二二四号は再び少し離れた。保管庫の中はかび臭くてすえた匂いがした。

「こんな納い方じゃ、あたしの一張羅が台なしになっちゃう。ナフタリン入れてんの？」

二二四号はキョロキョロして毒づいたが、娘は委細構わず六個の網包みをほうり出し

「運ぶのよ」

マスクの下で命じた。

「一度に全部かい？ おや、あんたは持たないの？」

「何だって!! 労役がいやなの」

娘はマスクをとりながら睨みつけた。

「あーあ労役か。四十面さげてるのをこき使うもんだねえ。ハイハイ。此のスーツケースはどいつだい。一体何を持って来たんだろ。金の延棒でも入れてやるんじゃない」

二二四号はボヤきながらも、一番重いのを

提げた。

ミシュリーヌ達は準備室の台上に、荷物を網から出して並べ、シャワーを浴びた。送り

の連中が、素裸かの四つ這いで入って来た。腰を高くあげて膝を伸ばし、舌を長々と出した情けない恰好は身体検査兼用で、去るに当たっての最後の恥かしめだ。ミシュリーヌ

を認めたジゼルが乳房をゆずって身悶えし、突き出した尻にベル看守のゴムホースが鳴った。六名の「送り女囚」はそのままの姿で横

一列に並んだ。犬の様に垂れた舌から涎が流れ、引込めてすぐ出した女の尻にゴムホースだ。ミシュリーヌ達は命じられて、床の獄

衣と網を洗い場に持ち去った。洗濯して次の女囚に使わねばならない。

準備室では、灰色の眼の婦人看守が、四ツ

這いの六人にやおら言い渡す。

「先刻云われた様に、お前達をこれからツーロン刑務所へ護送します。何のためにどう云う所へ行くのかは、よく分ってるだろ？ お

前達は皆、初めてじゃないんだから、護送中の心得はよく知ってるだろうし、護送中の反則がどう云うことになるか、よく分ってるねッ。特に、社会の人達に対して妙な態度をし

たり、口を利いたりなんかすると……」

灰色の眼のカギ鼻は言葉を切つて脅やかした。

「よし、舌を入れて。分ったねッ」

「はい」

六名の赤裸か四つ這いは声をそろえた。

「お前とお前、床を舐めるんだよッ」

涎れを垂れた女囚は舐め取らされた。

ベル婦人看守が一人々々の乱れ髪を掴んで顔をねじ上げ、番号を云わせて確認し、次々と首紐をかけて行く。太いゴム紐を輪にしたもので、首輪の様に首にかけ、前と後ろに番号札がついて居る。囚人には番号が付きもの護送中の称呼番号だ。

「立てッ。服を着けてよろしい」

六名はいそいそと娑婆の衣服をまとい初めた。これが先ず最後の娑婆の服装、これから何年間かは縁切りだ。前科五犯のブルネットと前科四犯の栗毛とは夏だと云うのに冬のドレス。

逮捕後半年内外で「送り」になるのが相場だから、娑婆からの庇護の手がないと、こう云うことになる。二人は顔しかめて冬ドレスを着た。シュミーズ姿で歩いても平気な二人かも知れないが、そんなことは許されない。「おや、お前達風邪ひいてんの？ 凄くドレッ

シーな長袖スーツだこと。いい生地のウールねえ。首の札をチャンと出すのよ」

ベル婦人看守が夏の制服姿でからかう。

「何なら夏服貸したげようか？ 員数外のが

あるわ。すり切れてて涼しいわよ」

ブルネットは黙って上衣の布ベルトを締め栗毛は唇を噛んで胸ボタンをかけた。いくら暑くとも、あのみじめな獄衣で街を行くよりはましなのだろう。それに、明日からは嫌でもまとわされて暮らす赤縞囚衣だ。

シャワー場で洗い桶にしゃがむミシュリー又達に、鉄枷や鎖の音が聞えて来た。いつ耳にしてもおぞましい音だ。長道中を護送する戒具はきびしく入念で、受ける女囚は六名も居るのだから罵声やビンタや溜息と共に鎖錠の音は長々と響く。繋がって出て来た六名をミシュリー又は盗み見て眼をそむけた。婦人犯罪者にとっては地獄と云われるツーロン刑務所へ送り出される彼女達は、流石に打ちしおれた風情だった。両手は前でごつい護送用手錠、それは当然だが両脚に脚鎖もつけられて居た。両足首にそれぞれ嵌められた鋼鉄環から鎖が一本宛上へ伸び、手錠の短い鎖に結合されて居る。腰をくびる分厚い革ベルトに通された滑り金具、前側中央に持って来ら

れた其の金具には、回転軸を水平に鋼鉄半円環が取り付けられ、その鋼鉄環を二本の脚鎖が潜る。手錠が鋼鉄環にせかれるまで下ろして、脚鎖に少し余裕が出来る仕掛。坐われば両手をかなり上げることが出来るが、立ったままなら胸のあたりまでが精一杯か。護送中は絶対に拘束具を解かないのが規則、体の自由は最大限に奪っておいて、そのまま身の回りのことを、させようと云う巧妙な仕掛だ。従前は鎖の長い目の手錠に腰ベルトが通常で、こんな仕掛は余程の兇悪囚にしか使用しなかったのだが、此の春からは累犯囚には一律に両脚鎖もかける様になって居た。六名の「送り女囚」達は、勿論更に連鎖されて一まとめに繋がって居る。普通の手錠が結合具に使用されて、腰ベルトの鋼鉄半円環と連鎖とを連結し、女囚達を一米半ずつに繋ぎ合わせて居るのだ。腰の革ベルトと連鎖とが黒々とし、其の他の拘束具はすべてクローム鍍金が冷たく光る。一步毎にドレスの両腿の前側あたりで二本の脚鎖が、そしてスカートの前中央に垂れる結合用手錠と、それに吊られて横に走る連鎖とがジャラジャラ鳴って揺れ、素足の両足首の鋼鉄環が痛そうだ。六名の女囚はすべて汚れたハイヒール、久し振りの

に首の苦痛で、さも歩き辛そうな足の運び、時々脚をもだえてよろめく。両足首を繋ぎ合わされて居ないのがまだしもだが、この脚鎖だけでもう、走ることなど思いも寄らないだろう。腰ベルトの前で押えられた手錠の両手に荷物を持たされ、悲しげに顔歪めて追われて行った。身に打たれた刑期をそれぞれに想って、流石に悲哀が胸に湧くのもあろう。刑務所へ送られて行く時は、どんなあばずれ女でも大抵はシュリーヌとするものだ。

「あいつ馬鹿だよね初めてじゃなからうに」
二二四号が嘲けて見送る小柄なブルネットは、重いスーツケースを持ち難げに提げて泣き顔をして居た。四番の首札をつけたジゼルはミシュリーヌを見て腹の所で指を振り、六番のジャクリーヌは片眼をつぶって脚鎖を膝で蹴り鎖をあちこちで鳴らして曳かれて行った。きびしい眼を注いで追い立てる三人の婦人看守は、獣の群をでも追う態度だ。灰色の眼のカギ鼻とベルは些かの仮借もない冷酷さ、アネットすらも同情の色はなく、吊ったシオルダーバッグを肩にゆすって眼を光らすのだった。

「あんなにされたままで、ツーロンまでずっと……」

見送ったミシュリーヌは、胸がつぶれる心地だ。

「そうさ、泣いたって喚いたって、なんともなりはしないさ。荷物をさげて立たされてる」と肩が抜けるよ。娑婆の奴等は笑いながら見物しやがるし、いまいましいたらもう……。けど脚鎖つける様になっちまったんだねえ、どこのどいつが決めやがったんだろ？みんなピカピカ光ってて真新だったじゃないか。ところで、これはあのおぶよぶ女が着てたんだね、脂が落ちやしない。ちくしょう、こんな他人の物を洗わせられて。汗臭い自分のを洗いたいよ」

二二四号はジゼルの囚衣を揉みながらボヤク。

「ふふふ。お前さん、シヨゲたのかい。でもお前さんは初めてなんだからあんな風にまではされないさ。ワッパだけで、車で送ってくれるよ。あたしはそうは行かないけどね」

ミシュリーヌはホッとする心地だった。

ミシュリーヌは全身を熱くして涙をこらえ法院の鉄柵の外を掃除して居た。刑が確定してから今日でかれこれ二週間、赤縞囚衣と腰連鎖姿を社会の人々の眼に晒して労役させられるのも何度目かだ。泣こうが喚こうが、も

う如何ともなりはしない服役女囚の身ながら街路に鎖を鳴らすみじめさは骨に沁みる。眼頭を押える哀しい仕草も忽ち見咎められ、しわ一つない制服が靴光らせてツカツカと近寄り街行く男女の前もあらばこそ、大声で囚人番号を唸鳴って鋭く叱りつけるのだ。社会の人々の眼前では笞もゴムホースもないが、お尻を撲られるのはしょつ中だし、時には構うことなくビンタ位はされる。女囚を撲る婦人看守を見ても、咎め立てしてくれる人は先ず絶対にならない。撲られる様な囚人は、囚人の方が悪いに決まって居るのだ。

「二二七号ッ」

大声で呼ばれたミシュリーヌは、ビクッとわななき

「は、はい」

かばそく答えて溝から顔をあげた。通りすがりの軽やかなスカートの裾とナイロン靴下が眼の隅に飛び込み、微かにあげた顔を深々と再び垂れる。呼んだのは、中からやって来たベル婦人看守だった。ツーロンへの護送業務から帰った彼女は、あてにして居た休暇を飛ばされて、この所ずっと御機嫌斜めだ。此のイキのいい娘はどんな場所でもビンタ位は平チャラで喰わせる。社会の人々の前で

のビンは口惜しいが諦めるとしても、それ位ならとナメて居るとひどい目に逢う。社会の人々の眼から隔離された鉄格子の中、嫌応なしに連れ戻される其の壁の中で、不足分を支払わせられてネを上げさせられるのだ。

「二二七号。検事局へ出頭よ」

制服の娘は腰に手をやる。

「何を震えてんの？ 隠してる余罪でもあるのかい。何の用か、行きや分るわ。手をお出しッ」

ミシュリーヌは、わななきながら手錠を受けた。余罪などある筈もないが、検事局と聞くと身がすくむ思いだ。それに、此の若い婦人看守の仕草の小憎らしさ。わざわざ道に引き出して、振り上げた手錠を音高く叩き込む。

鎖仲間の二二四号は腰連鎖を腰に喰い込ませながらも、労役の手は要領よく休めない。かけられた手錠のきつさにミシュリーヌは顔をしかめた。エメリーヌやアネットなら、こんなことはしないで人目から庇う様にして、そっとかけてくれるし、規則通りに手首が回わせる程度以上には緊めない。

「ホホホ。少しきつい？ 検事局へ行くんだから辛抱おし」

ミシュリーヌの腰から解かれた鎖は、近く

の組の不運な一人の腰に締められた。ミシュリーヌには、更に路上で腰ロープだ。公民権のある人間だったら、逮捕状なしに手錠を片手にでもかけたりすれば、人権の何のと忽ち大ごとになる。しかし、ミシュリーヌは既に服役中の身、そして此の娘は法務事務官、手錠であろうと捕縄であろうと、いつ如何なる場所にも於ても嫌応なしだ。深々と首を垂れて、されるままになりながら、ミシュリーヌは閉じた喉に涙を滲ませるのだった。

打ち振られる革ロープ、尻に二、三度打ち据えられながら、曳かれて行った先は検事局執行課だった。革ロープを喰ったふくらはぎに残る痛みをこらえつつ、ミシュリーヌは若手婦人課員のデスクの前に立たされた。

「ミシュリーヌ・ダリユー」

久し振りに名を呼ばれたミシュリーヌは眼をおずおずとあげ、デスクの女性の紅い唇を盗み見た。

「お前の未決通算が決定したから言い渡します。未決通算日数九十日」

クリーム色のスカートの淡青色ブラウスを涼しげに着た婦人課員は、事務的な口調であつさりと言ひ渡した。此の決定には、異議の申し立ては許されない。約二百日間の未決拘

禁だったが、刑期に算入して貰えたのは半分にも足りないのだ。

(ひどいわ。一日は一日なのに)

ミシュリーヌは悲しかったが、致し方ない。胸に数えれば、刑を受け終えるのは四年の早春の頃か。

(分ったわね?)

「はい」

ミシュリーヌはうなだれて答えた。これで刑は最後の一点まで確定したのだ。

「あ、そうそう。ブランシェ検事が、連れて来る様に云ってたわ」

「はい。分りました。電話しといて下さい。さ、おいでッ」

ベル看守に曳かれてしおしおと去るミシュリーヌの背を、デスクの女性は無表情に見送り、電話を取り上げた。ジョセフィーヌ補佐官の室から曳かれて出た若い女囚が、未決囚衣の肩震わせて前を横切った。啜り泣く其の女囚は、刑の確定を言い渡されたばかりなのだ。デスクの女性はそれをも無表情に見送り今日発送する予定の収監状二通を持って席を立った。然るべき上司のサインを貰わねばならない。これを受け取った女は蒼ざめて泣くことだろう。しかし、そんなのやこんなのに

いちいち同情して居たら、とても勤まらない職務だ。廊下にハイヒールを鳴らす彼女のスカートの腰や脚を廊下磨きの赤縞男囚達が横眼で喰い入る様に眺め、忽ちビンタを喰って喰って居た。

検事局の廊下を曳かれるミシユリーヌに、

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月分一冊三〇〇円、三月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一十二冊三、六〇〇円です。今後誌

人々の眼が一きわ集まった。私服に手錠姿の男女までが、どうせおそかれはやかれのことなのに、おぞまじげな眼付きだ。ミシユリーヌの美貌に気付いた男達は、一度そらせた視線を再び戻してジロジロと眺め回わした。

三階のブランチエ検事の取調室。ミシユリー

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何月号分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

ーヌにとっては、恩も恨みもないブランチエ検事だが、何の用かと思うと矢張り身が硬張る。検事は年増の金髪を取調べて居た。容貌のせいでそうなるのか、彼は女性被疑者を担当することが多い。

「なにい? じゃ、何故ラウール・カルダンの車のキイがお前のハンドバッグに入ってたんだ。え? おい」

検事はベル婦人看守に手で合図しておいて金髪女をビシビシ追求した。みなりの様子では、被疑者はかなりの富裕階級の女、若い情人と共謀して良人を殺害した容疑らしい。ベル看守はミシユリーヌを立たせたまま、同僚の横へ腰掛けた。仮借ない札明に身を揉む金髪女は、絶望の鳴咽に背を丸め、すがりつく様に指をデスクにかけ、頬を腕に埋めた。

「水、水を飲ませて!」

「なにい? 納得の行く説明を聞いたら飲ませてやる。こら、しななんか作ってないで、ちゃんと坐わってるんだ。」

検事は又も煙草をくわえ、室の隅へ合図した。水色上張りの娘が冷水器からコップを運んで来て、女を眺めつつ検事の前へおいた。「しばらく待ってろ。その間によく考えるんだ。おい、君」

コップを干した検事は婦人看守に何かを合図した。スカートの膝に弄んで居たものをべル看守にあずけた婦人看守は、立って壁際から椅子を一つ持って来た。仮監担当の彼女は一きわ大柄だ。全部桎材で作った頑丈そのものの大きな椅子、背に垂直で非常に高く、どんなノッポ男でも頭上五時は余す程、そして腰掛台は並外れて前後に深い。単なる椅子だと云い逃がれ得る様には作ってあるが、その実はこれは拷問道具だ。仕立のいいドレスの背を波打たせる被疑者は、腕掴まれて引摺り立たせられ、其の椅子に掛けさせられた。椅子の脚は高くて爪先は床に浮く。ベルが手を延ばして、あずかったものを手渡し、婦人看守は被疑者の片腕を椅子の背の後ろにねじ上げた。ヒーと呻いた金髪が腰をよじり、背中をびったりと椅子の背につけた。分厚くまっすぐな背板の左右は更に当て木されて厚さ七、八センチ。その背板を背負わされての後手錠だ。殺人の被疑者には、この拷問具も暗々裡に容認されて居る。背板に押当てた金髪を振って、忽ち苦痛の呻きが洩れた。肩幅の広い男性でもかなりこたえる背板の横幅、女盛りの金髪が泣き出すのも無理はない。書記役の若い事務官があくびして出て行った。

「ちゃんと坐わってられないらしいからな。そうすりゃ、いやでもまっすぐしておれると云うものさ」

「か、かんにんして。く、くるしいわ、腕が痛い……」

哀願する金髪の足がバタバタ宙にもがいて布スリッパが素足から脱げ落ちる。

「うるさい。黙って考えてろ」

検事は煙草を揉み消して合図し、ミシュリーヌはデスク横に連れ行かれた。勿論腰掛けさせて貰えないで立たされたまま、被疑者用丸椅子にはベル婦人看守が坐わって腰ロープを引き絞る。責め椅子に喘ぐ金髪がミシュリーヌの姿を見て、歪めた顔に絶望の色を走らせた。うなだれたミシュリーヌは、きつく嵌められた両手の手錠を見下ろして立ち、ブランシェ検事の冷酷な視線を全身に感じながら、不思議と平静な心地だった。嘗て此のデスクの前で受けた胸搔きむしる様な取調べを思い出しても、恨めしい気持は起らないし又、みじめな思いに駆られもしない。

「二二七号。黙って突っ立ってないで、御挨拶したらどうなの？」

ベル看守が腰ロープを引張りしやくる。

「はい。あのいろいろとお手数かけました」

ミシュリーヌは静かに云って、ちらとあげたまつげをすぐに伏せた。相手は肘付回転椅子にふんぞり返る。

「ふむ。で、御気分はどうですか、元伯爵夫人。服役生活は快適でしような。ドレスと腕輪がよくお似合いだ」

ミシュリーヌは唇をそっと噛んだ。恥かしめるために呼び出したのか。

「あの何の御用ですの？」

女囚は思わず怒りを滲ませて訊ね、検事は紫煙を吹き上げた。

「これは手きびしい。少し世間話でもしてからと思ったんだが」

ベル婦人看守が手荒く腰ロープを引張り、女囚はよろける。

「では、用向きに入りましょう。いやね、ホラ、ここにあなたの刑執行指揮書があるんですがね」

検事はデスクの紙片を取上げて女囚に示した。仮指揮書ではなくて本式の執行指揮書、収容するべき刑務所の欄がブランクになって居る。執行担当検事が処理する指揮書が、何故このブランシェ検事の手許にまで回って来て居るのか。あの紙片一枚で、ミシュリーヌは刑務所送りだ。

「ちょっと考えがあつて押えたので、僕の所に回つて来てるんですがね」

彼の口調は薄気味悪いほどに鄭重だ。

「あなたの故郷は、たしかアルルでしたな。で、その近くにツーロン刑務所があるんですがね。ひよっとしたら、ご郷里のお近くの方がお望みなんじゃないかと存じてな。御希望に添わせて頂きますよ。アハハハ……」

ミシュリーヌの頬に血が昇った。

「御用はそれでしたの？ お心使いは有難うございます。でも、私、どこでも結構ですの。連れて行つて頂ける所で刑に服しますわ」

ブランシュの顔に微かな失望が浮んですぐ消えた。執行担当でない彼が、受刑者本人の希望もないのにツーロン送りを指示する訳には行かない。

（鉄格子の中で半年も暮してりゃ、此の女だつてツーロンのことは聞いただらうて。ま、未決通算も値切つてやつたし、執行担当の女史が俺のそこへ、こうして回わして見てくれただけでも儲け物だて。しかし、やつれればやつれたで、憎らしい程に綺麗な女だなあ。精々コンピエーヌで二年半でとこになるだろうが、それでもまあ、かなりこたえるだらうて。じゃ、少しいたぶつてやるか）

貴族階級に対するブランシュの憎悪と反感は根強く執拗だ。

（それに較べりゃ、あの女なんか、いじらしいもんだ。真剣に体を張って大金持を射止めた踊り子なんだからな）

ブランシュは、責め椅子に呻く金髪を眺めそして女の子に合図した。

「あ、きみ、此の縞ドレスの御婦人に水を差し上げてくれ給え」

水色上張りが冷水を満たして室中央あたりの床においた。流しの片隈に転がしてあった深いアルミ製コップで、少しひしゃげて薄汚れて居る。被拘禁者にガラス食器は禁物だ。

「お仕事と呼び出して何でしたな。ま、冷たい水でも如何です？」

曳かれたミシュリーヌは、床のコップの前に立つて唇を嚙んだ。

「折角検事さんが、おっしゃって下さるんだからお飲み。おや、飲まない気なの？」

ベル婦人看守が意地悪く云い、水色上張りの女の子も、そばに立つてニヤニヤ眺める。

「冷たいお水なんても、これから何年間かは飲めやしないわよ」

責め椅子の金髪担当の婦人看守もからかった。定められた時間に定められた量だけ与

えられる生ぬるい湯ざまし水、それ以外は一滴の水たりとも自由には飲めない囚人の身にはコップ一杯の冷水は泣きたい程の誘惑だ。

殊に、今日は朝から、夏の陽差しを浴び、屈辱の思いに全身を熱くしての街路上労役を課されて居たのだ。

「飲まないのッ、二二七号。それならそれでいいけど、今日は水をやらないからねッ」

ベル婦人看守の若々しい一喝に、女囚の膝が折れて床に落ちた。思わず制服の娘を見上げるが、縛しめを解いてくれる気配もない。

ミシュリーヌは漸くの思いで両手の指先にコップを持った。コップの表面は露に濡れ、指に伝わる其の冷たさの快よさ、我れながら浅間しいと抑えても咽喉が鳴る。一口啜った女囚は、こみ上げるみじめさに肩震わせた。きつい手錠が手首をこじ精一杯に持ち上げた革ロープが腰に喰い入る。半ば以上を残して啜れなくなったコップを胸の前に捧げて、ミシュリーヌは、それをぶちまけたくなる心地だった。

（ああ、もう、こんなこととしてまで欲しくないわ、お水の一杯位。あの女の子、どうしてあんな風に笑うのかしら。何が、何がそんなにおかしいの）

ミシュリーヌの哀れな姿に頬綻ろばせたブランシェ検事が席を立てて来て見下ろした。「きみ、腕輪がお邪魔な様だ。お楽にして差し上げ給え」

制服の娘が鍵を取り出した。法務事務官は検察官の指示には従わねばならない。腰ロープが解かれ、手錠もはずされ、ミシュリーヌはコップを抱いたままホロリと泣いた。しゃくり上げながら飲み干す冷水は咽喉に泌み渡り、もう一杯飲みたい。しかし、そんな大それた願いを口にする勇氣もないし、叶えられる筈もなからう。哀願して嘲けられ、みじめな思いを味わうのがおちだ。ミシュリーヌは唇を舐めて、コップを床に戻した。

「ありがとうございます」

育ちのいいミシュリーヌは、ブランシェに礼を云うのだった。

「もう一杯如何ですか」

「は？ はい、お願い致します」

女囚は飛び立つ思いで声を弾ませた。

「じゃ、此の娘さんに頼んで見るんですな。

きみ、もう一杯都合して上げてくれないか」

検事が娘に眼配せしたのに気付かない女囚は、跪まずいた背を更に丸めておどおどと頼む。

「あの、お水もう一杯頂けません？ お願いします。すみません」

しかし、水色上張りの娘は嘲笑って顎突き出した。

「駄目ね、面倒臭いわ。第一、その頼み方が気に入らないわね。わたし喫茶店のウェイトレスじゃないことよ」

ひれ伏して額を床にすりつけろ、とでも云うのだらう。ミシュリーヌは齒がみした。そんなことまでして恵んで貰わないでもいい。

「はい。では仕方ございませんわ」

ミシュリーヌは静かに云って、両腕を背に回わした。自ら両手を背に組んで屈従を示す姿にも馴れて、あまりみじめさを感じない。

（ふん。もっと哀願するかと思っただが、

やはり未だ気位は高いと見える）

一杯の冷水の恵みを乞うて床にひれ伏す元伯爵夫人の姿を期待して居たブランシェ検事だったが、はぐらかされて忌々しげだ。

（干し上げて、もう一度からかってやるか。

しかし、水や食事はうるさ方がやかましいかな。君子危うきに、か。まあ、よそう）

彼はガラリと口調を変えた。

「おい、こら。まじめに服役するんだぞ。しおらしいツラしてるが、やらかしたことは図

太いんだからな、お前は。みっちり、性根を叩き直して貰って来い。分ったな？」

罵倒され、きめつけられて、ミシュリーヌの胸に初めて憎悪の念が萌した。けれども、何と云われようと仕方ない身だ。革ロープと手錠を持つ制服の娘が鋭く睨み、女囚は観念して首を更に垂れた。

「はい。よく分りました」

「ほんとに、強情ばかり張りやがって。全く手間を取らせたよ。貴様と云う女は。素直にしてりゃ二年か三年で済んだものを」

素直にした所で彼の手にかかれれば五十歩、百歩だったろう。それに、彼の云う「素直」とはどんなことを云うのがよく分らない。それでもミシュリーヌは静かに低くはつきりと云った。

「はい。申し訳ございませんでした。いろいろと御面倒おかけ致しました。お陰様で……お裁きを受けて……刑を決めて頂くことが出来ました。ありがとうございます」

ブランシェ検事は微かにてれ臭げな表情を浮べて顎を撫で、ベル婦人看守に合図した。

「さ、立って」

忽ち手錠が喰い込み、革ロープが腰をくびる。水色上張りの娘は詰まらなさそうに席に

戻って爪などを磨き出した。囚人が縛に就くさまなどはもう見飽きて居る。此の娘が油を売ると、とどの詰り、はみ出した被疑者がお茶を引く破目になるのだ。

「きみ、その女の服役態度はどうだね？」

「そうですわねえ。まあ並みですわ」

ベル婦人看守は検事にそう答え、女囚の腰ロープの錠金具を鳴らした。

「さてと。おい、ちっとは気の利いた返事を考えただろうな、え？」

デスクに納まったブランシェ検事はマツチ

をこすり、責め椅子の金髪が喘ぐ。

「も、もう……かんにんして。肩がもげるわ。」

手首が千切れそう……ああ……」

「そうかい。そりゃ結構なことだ。早いところ

あななった方が気が楽になるぜ。え？おい」

ミシユリーヌの姿に顎をしゃくる。

「ま、そうして話しようや。その方が顔を

見れるからな。ところでデュバル君はどこへ

行ったんだい。仕様がな、書記が居なく

ちゃ」

ベル婦人看守がカチツと踵を鳴らした。

「では、連れて行きますわ」

「ああ、御苦労さん」

曳かれて戻るミシユリーヌに、廊下でベル

看守が云った。

「ちょっと何だったわね。けどお前、なかなか神妙だったこと。感心したわ」

こんなことは滅多にはないと云うことを、

此のベル婦人看守も知って居るのだ。勿論、

上司のすることを、かれこれと当の女囚に云

うことはないが、それでもミシユリーヌにか

けた手錠は先刻の様にはきつくなかった。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

木馬責め

三枚一組 略号(もと)
後手高小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――

海老責め

三枚一組 略号(もに)
両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め――

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)
白州の粗砂に引き据えられた女囚は高小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)
白紙で目かくしされた女死囚は土壇に仰向けに横たえられて、白刃一閃、哀れ女囚の腹は――

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)
柔かい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ――

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)
白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)
腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)
均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚――

サジスチック・ストーリー

ぎん子の靴下止め

佐原陽一郎

ぎん子の靴下止め

ぎん子は鏡台の前で、双肌ぬぎになり、さつきから化粧に余念がない。

◇
本当の年齢は三十二だが、むっちりした首筋から肩へかけての肉付きは、まだ子供を生んだことのない女に特有の色気に満ちているし、心持ち目尻に出かけたシワは、化粧でごまかせる。だから、ぎん子はいつも自信たっぷり「私は二十七よ」ということで押し通している。

旦那の木谷は、いつもむっとりして、やるだけのことをやってしまうと、さよならでもまた来るでもなく金だけ置いてさっさと帰ってゆく。

「あの人ったら、私を抱きながら仕事のこと

を考えているんだわ」

十四の時に両親に死なれ、義理の姉に育てられた手前、てっとり早く金をつくるには、こうる外になかったんだと自分に言いかけながら、大して好きでもない五十男に身をまかせるのが習性のようになってしまった自分がうとましかった。

最初から数えると、木谷は四人目の旦那で船会社の重役とか聞いているが、まあ金払いは悪くなし、床に入ってもそんなにいやらしい姿勢を強いるわけでもないし、いい旦那の部類に入る人なのだろうが、いつもむっとりして、ぎん子の身体がよかったのか、わるかったのか、まるで反応がないからぎん子は不満なのだ。

「金もできたし着物もできた、そろそろ旦那と別れよう」

半玉のとき、みっちり仕込まれたからいいノドをしている。胸元にポンポンお白粉を叩き込みながら口三味線でツンテンといったとき、客間の電話がけたたましく鳴った。

「はい、はい、満川ですけど——」

どうせ又、旦那からだと思うから切口上になる。しかし木谷からではなかった。

「ああよかった。助かりましたよ」

歯切れのよい若い男の声が、受話機にびんびんびびいて来た。

「あの、いったい何のことですか」

「いやあ、実は友達と賭けをしましてね。ぜんぜんでたらめの電話番号を回して、女性が

でたらボクの勝ち、男がでたら負けだったんです」

「まあ、あきれた」

「すみません。でも悪気があつてのことじゃないんです。許して下さい」

「それはいいけど、でも、どうしてそんな賭けをするの」

「要するに、ボクたちは退屈なんです。何をやっても夢中になれない。だめなんです。ボクたちは——」

ぎん子は受話器をにぎったまま、思わず「タ・イ・ク・ツ」とつぶやいた。

縁側に目をやると、淡い午後の日射しをあびて鉢植えの秋海棠が小さな花を散らしている。かすかに郊外電車の音がきこえるこの家に住みついて、もう六年以上になる。

私もやはり、この変な電話をかけてきた青年と同じように、心の奥にひそむ倦怠感をどうしようもなく生きていくんだわ、とぎん子はほっとため息をもらした。

「あなたの気持は私よくわかる気がするわ。でも忙がしい人のところへ

かかったら叱られるかも知れなくてよ」

相手が年下の男とわかると、ぎん子の口調はどこか姉さん気どりになる。

「ハイ、すみません」

素直にハイといわれると、なにか可愛らしい気がしてぎん子は思わず笑ってしまった。

受話器がことりと、何かにぶつかる音がして、青年が口ごもりながら「あのう！」といった。

「あのう、またお電話していいでしょうか、

怒ったりしませんか？」

「もう賭けはいいんでしょ」

「いや、そんなんじゃないくて、ボク、お話がしたいんです」

「そう、いいわよ、でも夜おそくはいやよ」

ぎん子は、この図々しいようで、また素直そうなところもある得体の知れない青年に、あらためて電話番号を教えてやった。

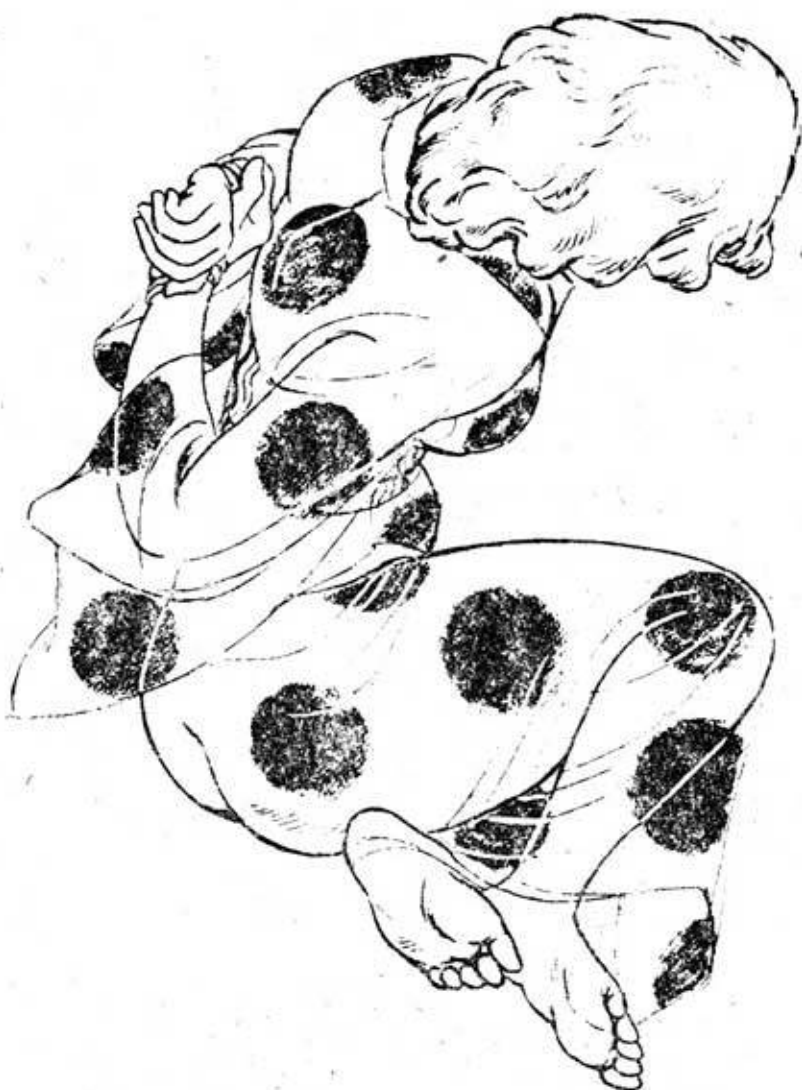
その夜、床に入ってから、ぎん子はなかなか寝つかれないまま、昼間の電話のことを考えていた。

木谷のかすれた老人じみた声にくらべて、何と若々しいしゃべり方をするのだろうか。ぎん子はもうずいぶん長いあいだ、若い男の声を耳元で聞いたことがないように思った。

（あの子、あんなこといって、本当に電話してくるかしら）

（電話の賭けなんて、いまどきの若い人って、いろんな遊びを考えるものね）

（ウフフ、電話の浮気か。木谷のおじいちゃんが聞いたなら、何て言うかしら。でも電話だけなら文句もないでしょう）



一人ごとをいいながら、蒲団から自分の太股を出してみた。小さい時、よく近所の人にきれいな白い脚をしていると、ほめられたことがある。

少し太り気味だが、三十女の脚にしてはまっすぐすらりと伸びて申し分なかった。
(私だって、まだまだ若いんだわ。肌だってこんなにきれいだし)

蒲団の中で、子供のように寝返りを打ちながら、ぎん子はいつの間にか身体中がほてってくるのを感じていた。



電話は、それから三、四日して昼過ぎにかかって来た。

「あら、いまだここにいるの」
思わず声はずんでしまつて、はっとした。

ぜんぜん顔も知らない相手なのに、少しなれなれしいわとも考える。

「テレビ局なんです。これから仕事があるの
で」

「まあ、私って、あなたのこと学生さんとかかり思っていたわ。じゃあテレビタレントなのね」

「いいえ、タレントだなんてとんでもない。

スチール写真のカメラマンなんです」
「そう」

ぎん子は目をほそめて、遠くを見るような表情をした。

望遠レンズをつけたカメラを、いくつも肩に下げて、いつも忙がしそうに動きまわっているカメラマンという若い群像が、ぎん子の頭の中に大きくクロースアップされてきた。

どうせ世間の表街道からは、はずれた裏道を歩く困われ者だから、近所のマーケットへ買物に出るのさえ気がひけるように考えているぎん子だ。パトロンの木谷に、歌舞伎見物ひとつねだったことはない。

こんなに家にばかりくすぶっていても、いまに根が生えてしまうわ、とぎん子はよく一人ごとを言う。冗談でなく、ぎん子は本当に見るもの聞くものすべてが、単調な色彩のないものに見えてならなかった。

「すばらしいわ、ぜひあなたの仕事しているところを見たいわ」

と思わずつぶやいてしまったのも、あなたが、その場の成りゆきばかりとは言いきれない。ぎん子は、その時やはり何かこの退屈さを救ってくれるものを求めていたのだ。

「仕事に興味を持っていただけなんて光栄

です。それじゃ明後日の午後六時から七時のあいだ、パレスホテルのロビーでお待ちしています」

ぎん子が何か問いかけるのを、逃れるように相手の受話器が切れる音がきこえた。

ずいぶん自分勝手な、女性を無視したような男だわ、とぎん子は苦笑した。

しかし、後に残ったものは、さりとていて不快なものではなかった。明後日は木谷の来る日ではなかった。意識の上では、電話の青年に反撥を感じながらも、ぎん子はやはり明後日になれば、盛装して指定の場所へ出かけてゆくことを回避できない自分を強く感じていた。

その夜木谷がタクシーで乗りつけてきた。まだ宵のくちというのに、酒の入った額をてらてらと光らせて、申しわけのように「忙がしい、忙がしい」を連発した。

ぎん子は、熱いおしほりを木谷に渡しながら、この四十男の毛穴の浮いた顔をつくづくとながめた。

唇が厚く、全体が丸い上に額の生えぎわが大分上の方まで薄くなっているから、ますます顔が大きく見える。

鼻の穴が丸く、上向きなのは淫乱の人相だ

と週刊誌で読んだが、木谷の鼻はまさにそれだわ、と考える。

木谷は洋服も脱がず、ぎん子にのしかかってきた。

興奮して、待ちきれなくなるといつも駄々っ子のようになるのが木谷のくせである。

それを、わざと誘うように赤い蹴出しをちらつかせながら、ぎん子の気持は少しも燃えて来なかった。

いつもなら、木谷の節くれだった太い指で乳房をつかまれると、自分でも恥かしいくらい、身体中があつくなくて、思わずうめき声を上げてしまうのに、ぎん子の心はつめたく冷えきって、力いっぱい両手で木谷の重い身体をつき放したい欲望だけが全身を駆けめぐるのがあった。

「おい、ぎん子、どうだった？」

木谷は、きまってぎん子の耳に口を寄せて淫らな笑いを、顔中にふくませた問いを投げつける。

「すごいわ、あなた。まだまだお若いのね」
だまっていると、しつこくからんで来るから、ぎん子がいにかげんな合いづちを打っておくと、木谷は「うふふふ」といかに満足そうに笑って、そのままぐったりと大の字に

なつて寝てしまうのだった。

「ふん、何さ、あとは高いびきのくせに、このくそじじい」

無神経な中年男に、ぎん子はくると背を向けて目をつぶった。するとひとりでに、涙がじわじわにじんできて、ぎん子の頬に流れってきた。こんな男たちのために、ぎん子の貴重な青春は、踏みにじられてしまったのだった。

金のためとはいえ、男の言うままに、人形のように身体を汚されて、その上世間からはうしろ指をさされるいまの生活が、ぎん子をつくづくいやになっていた。



車は快適な排気音をマフラーにひびかせて第二京浜国道を下下していた。

若者は、ひんばんにギアを入れ換えながらさつきから無言である。

色の浅黒い、ひきしまった口元をきゅっとむすんで、前方の闇を見つめている青年の横顔をぎん子は放心したように凝視していた。

ホテルの回転ドアを押そうとしたとき、駐車場の暗い片すみから、フルートのような外車独特の警笛がきこえ、二条のヘッドライトがぎん子の全身をくつきり浮かび上らせた。

めずらしく洋装で、黒いスーツを着こんで

きたぎん子は、高いヒールの足もとが思わず乱れがちになって立ち止ると、真紅のスポーツカーが音もなく近づいてきて、この青年が白い歯をみせて降りてきたのだ。

「一目でわかりましたよ。だって、とてもシックなコスチュームだし、歩き方がきれいだった」

「まあ、そんな」

まるで、きちんと綿密に計算されたように若者の言葉はぎん子を魅了した。

いまはやりの、アイビールックとでも言うのだろうか、細身のズボンが長く伸びた、しなやかな脚にぴったり合って、ボタンダウンのシャツに、チェックのネクタイが、青年の胸を飾っていた。

「すばらしいわ。なにか夢を見ているような気がするわ」

車のフロントに、水滴がぱつと散らばって見るまに一筋、二筋ななめに流れだした。

「降ってきましたね」

青年はワイパーのスイッチを押し込んだ。リズムカルなワイパーの動きが、フロントの水滴をはじきとばして、対向する車のライトがにじんでは消えて行った。

「あたし、まだあなたのお名前も知らないのよ。それなのに、こんなすてきな車で夜のドライブをするなんて、変じゃない」

「そんなことはありませんよ。人間の名前なんて一種の符号みたいなものですからね。知っていたって知らなかったって、大したことがありませんよ。名前を知っているから、仲の良い友人だというものじゃない。名前なんか知らなかったって、とても気の合う仲間というのがあるものです。名前を知ってから、はじめて交際するなどというのは、古い考え方ですよ。現代に生きる者のつき合いは、もっとスピーディに、そしてスマートであるべきだと思いますね」

「でも、あなただけが私の名前を知っているなんて不公平ですわ」

「そうですか、それじゃボクのことサタンと呼んでください」

「サタンですって」

「ええ、悪魔のことです」

青年は、ぎん子の方をむいて、少し眉にしわを寄せいたずらっ子のように笑った。

ギアをシフトする青年の指が、ナイロンの靴下の上から軽くぎん子の脚に触れた。

つめたく、ひんやりとした感触だった。ぎ

ん子は、タイトスカートのひざをゆっくりギアレヴァーの方へ持っていた。

スポーツカーはどうしても、ギアを入れ換える度数を多くしなければならぬから、ぎん子は両脚で青年の指をはさむような恰好になった。

短かい丈のタイトスカートだから、横座りになったぎん子の脚は、車の動揺につれて、すぐ太股まであらわになってしまったが、ぎん子は黒いスリッパもむき出しのまま直そうとはしなかった。

ぎん子の太股は、いつの間にか熱くほてっていた。

車は雨の幕をつきやぶるように、時おり警笛をならしながら、多摩川大橋を渡り急に右折して工場地帯の暗い道を走りぬけて行く。

高いコンクリート塀に囲まれて、忘れられたような緑地があり、四、五本の落葉樹が雨にぬれた黒い幹をのぞかせているところに小さな神社があった。いや神社というよりも祠（ほくら）の方がぴったりするような荒れようだが、奥には人の住めそうな屋敷があるらしく、ぼんやりした灯がもれている。

青年は勢いよくエンジンをふかして、社務所の方へ車を乗り入れた。

「こんなところで撮影をするの」

「ええ」

青年は短かくこたえたと、ぎん子の手をとって車から降ろし、入口の戸をコツ、コツと叩いた。

しばらく間があって、中からかすかな足音が近づき、ことりと板戸が開いた。

ぎん子は思わず、あっと声をあげそうになった。白装束に緋の袴の巫女が、手燭を持ってぬっと顔を出したのだが、その顔がまるでのっぺらぼうで目鼻がないのだ。

「あははは。おどろかないで下さい。能のお面をつけているのですよ。この神主が妙な趣味をいろいろ持っていて、はじめての人はびっくりするんです」

巫女は無言で、二人を中に導びいてゆく。

内部は意外に広く、板の間の廊下が長く奥まで続いている。

「ここは貸しスタジオになっていて、いろいろな面白い人が集まってくるんです」

「まあ、どんな人がくるの」

「いや、面白いといっても、有名人が来るわけじゃありません。つまり、同性愛とか女装をしたい男性とか、一般の社会には受け入れられないような性傾向を持った人が、夜にな

ると集まってくるのです。今夜はまた、その中でも特に勢力のある人たちのパーティなんですが……」

「あたし、もう何が出てきても、おどろかないことよ」

「そうですか。それを聞いて安心しました。それじゃ、中へ入りましょう。その前に、このしきたりで、しばらくの間、この布で目かくしをさせてもらわないといけないのですが、いいですか」

「ええ、どうぞ。なんだか、かくれんぼみたいで楽しいわ」

青年は黒いサテンの布で、きつくぎん子の目をしばった。

足の裏の冷えびえとした、板の間の感触が身体中を駆けめぐって、ぎん子は思わず身ぶるいを感じたが、それは決して恐怖感ではなかった。目の自由をうばわれた以上、これからどんなことが起こるのか、おとなしく言われるままに従う以外はないのだと、ぎん子

は自分に言いしかせた。

「はやく歩くのよ」

とつぜん、ぎん子の背後で鋭い女の声が出た。それと同時に、ぎん子の両手首に金属性の重い痛みが走って、きつく締めつけられるように動けなくなった。

「婦人用の手錠なの。あばれたってだめ」

女は歌うような調子でそう言いながら、ぎん子の腰を勢いよく突きとばした。

手錠には捕縄がついているらしく早く歩き過ぎるとぎん子の身体は後へ引き戻される。

ぎーっと重い扉がきしむ音がして、ぎん子は何かにつまづいたまま、うつ伏せに倒れ込んでしまった。前手錠がかかっているから、なかなかうまく起き上れない。

部屋の中は、きつい葉巻の匂いや、グラスのふれ合う音が交叉して、かなりの人数が何かを、話しあっている低いざわめきが聞こえた。

脚をばたつかせながら、ぎん子は、刺すような男たちの視線が、自分の全身にからみついているのを感じていた。目かくしをされているだけに、ぎん子は自分の姿勢が、どんな淫らなものかわからないので、よけいに恥かしいような気がした。

◎本誌二〇〇号突破記念◎ 原稿募集▽

▽内 容△

一、特異なる風俗文獻誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文獻的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェテツシュ、切腹、女斗美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規 定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限り、引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
一、〇以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

△奇ク編集部▽

「無理に起きなくてもいいのよ」

ぎん子をつれて来た女は、捕縄を巧みにさばいて、ストッキングの上からぎん子の足首を一巻きすると、天井から下がっている鉤に引っかけて、ぎん子を片脚吊りにした。

「ああっ、やめて、痛いわ」

ぎん子は、はじめて声を出してもがいたがスカートがますます大きくめくれて、赤い靴下止めが太股にびっちり食い込んでいるのが明るい照明の下で空しくゆれ動いた。

しかし、もがいているうちに目かくしが外れて、ぎん子は部屋の様子を見ることができた。

部屋は二十畳ぐらいの広さで、一方の隅に祭壇があり、灯明がゆらめいていた。

その前には一基の低い台が置かれ、ぎん子はその上に乗せられているのだった。

二十人ほどの黒いマスクをした男たちが、まわりの一段高くなったところに座って、ぎん子を見下ろしていた。

ぎん子は必死になって、サタンと呼ぶ青年の姿を求めたが、みな黒っぽいガウンを着けているので見わけることができなかった。

巫女姿の女が、よくしなう長い竹の鞭で、ぎん子の顔をこじり上げながら

「サタンが連れてきた女です」

と男たちによく顔が見えるようにさせた。「よろしい。いずれ皆の趣向にあった責めを受けさせるが、とりあえず、お前が得意の竹の鞭を使って衣類をはいでくれ」

神主らしい男が、うやうやしく立って、ぎん子の身体の上に御被いをした。

能の面をつけた巫女の表情はわからなかったが、うれしそうにうなずくと鞭をしごいて力いっぱいぎん子の腰に打ち下ろした。

ぎん子の全身は、苦痛で海老のように反り返った。

スカートはたちまち破れ、ぎん子の裸身が捧げもののように台の上にのたうちまわるまでに、そんなに長い時間はかからなかった。

ぎん子の汗と脂で、檜の木でつくった台はきれいにみがきをかけたように、ひかっていた。毎夜この台の上で、鞭打たれる数多くの女の悲鳴がしみ込んでいるような異様なひかり方だった。

片脚吊りは、ようやく許されたが、ぎん子が身につけているものは両方の太股に、申しわけのようにへばりついている赤い靴下止めだけになってしまった。

ブラジャーもパンティもストッキングもと

られたぎん子の白い身体に、赤い靴下止めだけがくっきりと浮き出して見えた。

ぎん子が起き上がるうとしたとき、後手に荒縄でぐるぐる巻きにされた、男がどきりとぎん子の傍にころがってきた。

「ぼくですよ」

サタンという青年だった。サタンはぎん子の乳房に顔をうずめるようにして

「ぼくは、男のマゾなんです。こうして責められないと、だめなんです。ゆるして下さい。ぼくは、いつも、ここで道化師の役なんです」

ぎん子は声がかすれて、何も言うことができなかったが、手錠のかかった不自由な両手で、青年を抱き寄せると目をつぶった。

変な電話から、ここに連れて来られるまでそこには何か計算されたワナがあったような気がしてならなかった。しかしぎん子は決して後悔はしていなかった。

明るいライトの下で、大ぜいの男にとりまかれながら、ぎん子は生まれてはじめて肉体の奥からつき上げてくるような快感にしばれていた。

(完)

アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成!

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号 「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

〔出演モデル〕 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまでの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売切れですが、「美4」/「美5」/「美6」は只今在庫しております。引続いて「美7」/「美8」の企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌にまとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をはだけ (山原)
荒縄と荒蕪で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しばかり (山原)
赤いオシメカバー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカバーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中への刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)	手摺りに開股責め (梨花)
両手吊りに耐えぬく (玉田)	裸身の開股縛り (大塚)
後手吊り麻柱晒し (山原)	お茶目ぶり発揮 (長野)
ネットをかぶらせる (梨花)	猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)
山の木に曝す (絹川)	高島田の全裸の縛り (山原)
庭前に見せる艶姿 (山原)	裸身にハイヒール (大塚)
高小手足首縛り (大塚)	ブロッコリの石抱き (木村)
手ぐさり足枷 (絹川)	生ゴムの猿ぐつわ (大塚)
裸身に光と影の綾 (大塚)	緊縛の悦慮表情 (梨花)
後手は高々と吊り (梨花)	後手に縄はきびしく (刑部)
木馬に跨がる乙女 (大塚)	豊満に挑戦する縄 (東浦)
逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)	黒紐は白肌に映える (絹川)
デニムの拘束衣 (大塚)	裸身を踏まれる (大塚)
海老縛りに耐える (東浦)	破られたシュミーズ (梨花)
女囚第六十三号 (梨花)	六尺禪は白く映える (大塚)
吐きだした布片 (絹川)	いたぶられる足 (梨花)
白肌にフンドシ縛り (大塚)	蕨の中の緊縛肢体 (大塚)
後手の背面さらし (山原)	鼻責めにあう晃子 (鈴木)
柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)	責めに酔う恍惚境 (東浦)
後手吊りに浮かぶ女 (梨花)	逆エビにもだえる (山原)
鎖に吊られた両手 (大塚)	椅子責め媚態 (大塚)
黒革製の猿ぐつわ (新井)	見事な臍窩を晒す (大塚)
スダレの中の晒し (玉田)	豊満を割る縦縛り (東浦)
巻煙草責め (大塚)	足下にもがき苦しむ (新井)
日本髪腰巻しばり (山原)	黒革のフンドシ縛り (大塚)
後手高小手しばり (絹川)	浣腸器の恐怖 (大塚)
立木縛りムチ打ち (桜井)	美肌は縄に酔う (長野)
エビしばり苦悶姿 (梨花)	吊られ吊られて (木村)
高島田着物あて姿 (山原)	白禪の後手しばり (大塚)
臀部誇張股間縛り (大塚)	責めに愉悅する女 (山原)
強烈な後手と乳房 (梨花)	マゾの境地露呈 (木村)
脱げかけたズロース (絹川)	プレイに疲れはてる (絹川)
柱に後手しばり (玉田)	乳房は光り輝やく (大塚)
強烈な鼻ひねり (大塚)	全裸美プラス縄目 (長野)
足挙げ椅子しばり (東浦)	

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 渕 嬰 一

ビブリオテークー さいへんせい
／希臘神話の再編成＼

イシユタール

ビブリオテークー
希臘神話において、ディオニソス葡萄酒神は主神ゼ

ウスがテーベ王カドモスの娘セメレーに生ませた子供という事になっている。例に依って神々の女王ヘラが嫉妬から迫害を加え、セメレーは欺かれて死に、子供は六箇月で流産した。ゼウスが、その子を拾ってニヌフに預けた。新しい神として葡萄酒神が出現したのはアジアであり、東方起源を明らかに印象づける。

ディオニソス
葡萄酒神は葡萄樹の栽培と葡萄酒の製造を教えながら諸国を巡り、エジプト、インド、シリア、トラキヤを廻って最後にギリシヤに入り、教義を拡めて行った。ナクソス島はギ

リシヤの中で最初に葡萄酒神の信仰を受け入れた地とされている。

ビブリオテークー
希臘神話で葡萄酒神はヘラ女神から虐待の限りを被った事になっている。多分既成宗教と相容れない教義を持っていたのだろう。

ディオニソス
諸地方の王も葡萄酒神とその信者を弾圧し、牢に入れたり拷問したりした旨記されているが或は王達にとって何等かの危険思想を、その要素としていたのではあるまいか。

ディオニソス
葡萄酒神は外来神にも拘らず、後代に至り完全にギリシヤ諸神の中に吸収され、オリンポス十二神の次位という別格の待遇を与えられて酒と平和を分掌する事になった。これは一種の墮落であったかもしれない。

ビブリオテークー
希臘神話では葡萄酒神を虐待したりユク

ルゴス王が臣下に依って馬裂きにされたり、信徒を弾圧したペンテウス王やラプダコス王が狂乱女達に四肢を引き裂かれたりした説話が伝えられている。女達に裂き殺される国王を奇巧的と表現する事は筆者には出来ない。一方、同じ葡萄酒神は陶醉と愛と融和を象徴している。酒の持つ二面性をその俚人格化したようでもあり、人間的な神々の多いギリシヤ諸神の中でも殊に親近感を持てる。

ディオニソス
併し、発生初期の葡萄酒神は原始キリスト教か、釈迦在世時の仏教に近いものだったのではあるまいか。筆者は希臘神話の簡単な記述から、葡萄酒神と狂乱女対アケーヤ諸王を原始キリスト教と奴隷階級対ローマ帝国に較べたくなる誘惑を覚える。葡萄酒神は社会

の底辺を救済する大理想を抱いて出発したのではないだろうか。

クレテ王国は別として、当時の世界は思想も経済も未発達だった。社会階級も固定していなかった。絶対善の観念や因果律の悩みは現れていなかったし、一神教的思索は何処にもなかった。ローマ帝国のような強力な圧力も未形成だったし、既成宗教の腐敗どころかギリシヤ諸神自体が形成期にあった。時期尚早にして事、志と違い「踊る宗教」の一種に化してしまったが、本篇に於いてアリアドネが接した^{ディオニソス}葡萄酒神は極めて純粋なものだったと思われる。

アケーヤ人が宗教的救済を必要とせず、その後急速に所謂ギリシヤ文明を開花させたのは、本篇の紀元前千五百年頃を境として、一挙に富裕となり、世界的発展を遂げたからであらう。

アリアドネは^{ディオニソス}葡萄酒神の巫女として教団の組織化に働いた。コルクユネは^{オケウソス}海神の巫女当時のアリアドネをよく知っていたが、クレテ風の衣裳を着飾り、多くの奴婢を従えて祭祠した頃よりも、襤褸を纏った現在の方が生気澆漓していると思った。アリアドネは無秩序な信徒に戒律を与える目的でクレテ式の祭

礼を導入し、踊りに旋律を加えた。自身の持つ医療、製陶、冶金の技は無償で提供した。

一方、アリアドネも信徒から多くの教訓を受け取った。^{マイナデス}狂乱女達は踊り狂っても朝になると実によく働いた。如何なる権威にも屈せず、自己の集団を堅持した。

アリアドネは一箇月程ナクソス島で観測を続けた。そしてエウローペ王太后の予言を確認した。金牛宮中の彗星は少し宛東方へ運行しつつあり、その速度は次第に早く、光輝は増加しているように見えた。矢張り赴くべき方向は東方でなければならぬようだ。

オーナロスがトラキヤ布教を言い出したのは丁度この時だった。アリアドネはジレンマに悩む事を免れた。トラキヤは遙か北の蛮地だが、ナクソス島よりは東に寄っている。

紀元前一四九七年七月初、オーナロスはマリア等二十人を伴って先ずレムノス島に渡った。此の島には既に数十人の信者集団が出来ていた。此処でも信者の大部分は女であり、教祖不在にも拘らず風紀の乱れはなかった。

アリアドネはトラキヤの状況を聞いて、布教自体に余り賛成を称えなかった。敢て反対もしなかったが、^{ディオニソス}葡萄酒神の教義を受け容れ易いのは南方の文明国の奴隷階級ではないか

と思った。

^{ヒトリオデーケー}希臘神話はトラキヤのストリュモン河流域でエドノス人を治めるリュクルゴスを、^{ディオニソス}葡萄酒神に対する最初の迫害者と記している。

エドノス人はギリシヤ人の類縁民族で、狩猟漁撈と原始農業の未開生活をしていた如くである。部衆は多分千人位。常に近隣諸族と争い、概して優勢を占めたから、部族内には他地方から奪って来た婦女も多数いたと思われる。^{ディオニソス}葡萄酒神を受け容れるには野蛮であり過ぎたが、それにも拘らず何十人かは教団に入ってきた。アリアドネの神秘的な舞が先ず衆を幻惑させ、オーナロスの雄弁が感動を呼び、^{マイナデス}狂乱女の雰囲気すべてを巻き込んだ。入信の女達は^{マイナデス}狂乱女の一部になり、獣皮を着た男達は半獣人と呼ばれた。

リュクルゴス王は外来の危険思想を弾圧する決意を固め、兵を踊りの場へ派遣した。

^{ヒトリオデーケー}希臘神話のリュクルゴス王からは専制君主的主的なものが感じられない。寧ろ弱い性格のように見える。兵士も中世の傭兵的な悪役でなく、男性一般と解釈すべきであらう。部族内の下層民を連れ去るような者はそれが宗教団体であっても部族の敵に相違なかった。

^{ヒトリオデーケー}希臘神話は^{マイナデス}狂乱女と^{サテュロス}半獣人の多数がリュ

クルゴスの兵に捕えられた事を記している。襲撃は迅速だった如く、^{ディオニソス}葡萄酒神自身も辛うじて遁れ、海老人の娘テュテスに助けられて海底に隠れたと伝えられる。テュテスはトロイ戦争で有名なアキレスの母である。この伝承は果して何を意味するのだろうか。

オーナロスは年令も進み、水泳は余り上手でなかった。彼を助けて沖合の島迄泳いだのはアリアドネだった。アリアドネはオーナロスに帯を握らせ、曳くようにして外海を泳ぎ切った。愛の新興宗教は漸く絶滅を免れた。

リユクルゴスの館では、二十人の^{サテユロス}狂乱女と五人の半獣人が拷問されていた。柱を背負って棒のように縛られている者。磔柱に高々と懸けられている者。後ろ手に縛られた上で鳥居形から吊られた者。ギリシヤ風の車輪に大の字に縛り着けられた者等々。タールの大桶に首迄漬けられている者もいた。外からは見えないが縛られただけでなく、重錘を足に附けられているのだろう。

マイアも後ろ手に縛られ、余り柔軟でない体を後方に一杯曲げるように締められ、斜交した柱に吊られていた。コルキユネは二十人の中で比較的年令が進んでいたもので、幾分穏当な扱を受けているらしかったが、それすら

立姿の俛で太柱の中段に固く巻き締められていた。

「邪教を拡める首謀者は何者だ」

リユクルゴス王が怒鳴った。信徒一人に各二人の兵が付き、鞭と棍棒を交互に振っていた。皮を撻つ音と絶叫が広場に渦巻いた。

「教祖は何処へ逃げた。踊っていた巫女は何処へ隠れた。誰も言わないと全身にタールを塗って火を点けるぞ」

タールの容器は既に続々と運び込まれていた。炬火を持った兵士がその傍に並んだ。

突然、並べてあったタール桶の一つが火を噴いた。溢れた火が地面を這い廻った。数人の兵が、消火に駆け寄り早く、火の中から白衣の少女が湧いて出た。そのように見えた。アリアドネだった。

火種を結んだ小石に眼にも止らぬ程の初速を与え、それを柵外から遠投して桶の口へ正確に擲射出来る腕を持った者はアリアドネより他に居なかった。当のアリアドネは一瞬の動揺を縫って柵を跳び越え、建物の屋根から広場の中央に舞い下りていた。

「リユクルゴス王。わたしは^{ディオニソス}葡萄酒神の巫女です。貴下が迫害された神は海底へ身を隠されました。この上尚知りたい事があれば、わ

たしが答えましょう。信者達を放すなら穏しく捉ってあげます。如何ですか」

迷信深いエドノス人は、突然出現した美少女に神秘的な畏怖を覚え、暫し顔を見合わせていた。併しリユクルゴス王が励すと、洪々群り寄ってアリアドネの両腕を逆手に捻じ上げた。アリアドネは平然と縛られた。

蛮族達はアリアドネの手首や腕に触れ、此の神秘的な少女が矢張り人間の肉体を備えている事を覚知した。それにも関らず、心内の恐怖が縛る厳しさを倍加した。鞣してない皮の紐と、強靱な蔓性の繊維が幾重にもアリアドネの白い腕を締めつけた。アリアドネの美しい顔が吐息と共に歪んだ。実の処アリアドネの豊富な(?)経験中には男の手に依る被縛が存在しなかった。アカレーがクレテ随一の女勇士であったにしても、^{マイナデス}狂乱女が極度の興奮状態に於いて縄を打ったとしても、共に女であり、何処か柔らかさが感じられ、且つ同性の安心感もあった。女ばかりの交際社会しか知らなかったアリアドネが、此処で始めて男の集団に投げ込まれ、男の粗暴と、体力と、未だ経験した事のない雰囲気とを思い知らされた。

アリアドネは縛られながらも、最初の内は

何時ものように緊縛度の測定を、怠らなかった。確かに固い。併し巧妙な縄目とは言えない。胸の縄は右側に引けば緩む。肩のは左指先で揺すったら外れそうだ。等々。幾十重の縄目を一巻き毎に記憶し、正確に立体図を頭に描き、対策を立案した。アリアドネの精密な頭脳と、柔軟且つ強靱な身体は網の目のような拘束からでも自力脱出を可能にする筈だった。併し今日は調子が変わった。途中から感覚が狂った。こんな筈はない。アリアドネは狼狽した。原因が解らなかった。慌てるに一層頭が混乱した。遂に、縄目の順序も方向も解らなくなった。アリアドネは男の体臭と触感に酔ってしまったのだった。

朦朧となった頭の中にテセウスの顔が浮び上った。アリアドネはテセウスに責められているような錯覚を起した。意識を失ったわけではないのだが、虚脱状態の脳細胞は只一つの機能の他は活動を停止した。陶酔だけを残して。

気がついた時、アリアドネは頭から足先迄薪束の如く縛られた身を牢舎の中に転がされていた。牢舎の建物は頭の中で緩やかに回転していた。

「アリアドネ様」

陶酔を破られてその声の方へ身を振ると、傍にコルクユネが居た。両手を背後に縛られ縄尻を牢の柱に繋がれていた。足首も揃えて縛られている。それ以上の拘束はなかった。併し余り柔軟でないコルクユネの自由を半永久的に奪うには、これで充分だった。

「コルクユネ。何うしたのです。リユクルゴス王は、わたしを捕えておきながら、皆を釈放しなかったのですか」

アリアドネは叫んだが、胸も咽喉も締めあげられているので声が途切れた。

「^{マイナデス サテユロス}狂乱女も半獣人もすべて許されました。ストリユモン河流域地方に二度と足を踏み入れないという約束で解放されました。皆、アリアドネ様に感謝しながら去って行きました。そしてわたしも一旦は放免されました。でもアリアドネ様を、一人でエドノスの蛮人の中に残して行く事は出来ません。わたしは自分から望んで此処に留ったのです」

アリアドネは撓ね起きようとした。併し厳しい拘束の為に、自分で体を地面に叩きつける結果となった。手首と足首から別々の縄尻が延び、末端は二本の柱に繋いであった。

「何故そのような事をしたのです。わたし一人なら何んなに縛られても必ず解いてみせます」

す。縄が解けたら絶対に逃げ終えます。この体の柔かさ。この足の早さ。わたしの実力はコルクユネがよく知っている筈ですよ。オーナロス様とも充分な打ち合わせが出来ています。あの方の体力と気力が恢復したら、酒宴か何かの機会を狙って此の館に近寄り、王や兵士に幻を見せて騒動を起させ、その隙にわたしが出脱する手筈になっているのです。コルクユネと一緒に思うように走れません。何うして、わたしに任せておかなかったのですか」

だが今日に限ってコルクユネの方が理性的で然も落ち着いていた。

「そのような目算でアリアドネ様が一時の犠牲を買って出られたのであろうと推量して居りました。それで、わたしも最初の間は万事お任せする心算になり、オーナロス様の所へ去る方が良からうと考えました。でもアリアドネ様が縛られているのを見てみると、常と違う事に気が附きました。何時も仰言って居られたように、縛られた縄目の構造を全部覚えておいでですか。指先が自由に、思う通りに動きますか」

アリアドネは思わず顔を赤くした。

「コルクユネ。貴女の言う通りです。時間は

幾らも経っていないのに全身が痺れてしまいました。こんな事は始めて。頭の方も変なのです。何うしたというのでしょうか。でも何故そしてコルクユネには、それが解るの」

アリアドネは体を転じて出来るだけコルクユネに近寄ろうとした。併し二人の間には、縄尻を一杯に引張っても腕一本分の距離が残った。

「アリアドネ様は素晴らしい方ですが今迄男を御存知なかったのです。と言う事は世界の半分を知らずに成長されたわけです。そして心内には女性の本能が眠った儘で保存されていきました。今度始めて男に縛られ、然も男に何の先入観も持たれず、恐いとも汚いとも思っ居られなかった為に女の性を呼び醒され、酔ってしまったのです」

アリアドネは自分が完全に無力化している事を悟った。アリアドネのような天才は本来微妙に出来ている。精密構造の一部が狂うと全体系が機能を失うのだった。自信が崩れると、神秘的な超人格は跡形もなくなり、十七才の繊弱な少女だけが残った。

同様に自由を失っているのにも拘らず、三十五才のコルクユネが急に大きく見えた。

「コルクユネ。助けて。いいえ。助かる方法

を教えて頂戴。何うしたら、わたしの力が元通り出せるようになるでしょう。わたしの何処が悪かったのですか」

コルクユネとて策の有る筈もなかった。

「アリアドネ様が、悪かったのではありません。起るべき事が起ったのです。余り体を揺すらない方がよろしうございます。体力を消耗するばかりですから。男は恐い動物ですが、扱い方次第では何うにでもなる単純さも持っています。機会は必ず来ます。わたしに出来る事はアリアドネ様に危険が迫った時に身替りに立つ事だけです。男に対する知識は幾分か持っていますから何とか御為になれると思います」

コルクユネの言った危険の意味を、純情なアリアドネに理解しなかった。コルクユネも改めて説明する隙がなかった。牢の扉が開き兵士数名を従えたリユクルゴス王が現われてアリアドネを見据えた。

ヒプリオデーケー・マイナデス
希臘神話は狂乱女達がリユクルゴス王の

処から釈放された事を記している。又、後日談として、リユクルゴス王が神罰を被り、発狂した臣下に捕えられ、馬で引き裂かれた旨をも伝えている。

マイナデス
オーナロスは狂乱女の一団と共にリユクル

ゴスの館に忍び寄った。幸にして館中は酒宴の最中であり、兵士は暗示にかかり易い状態になっていた。アエリアヌスに依ると「世界一（最悪）の酒飲みは葡萄酒神教発祥の地トラキヤの住人」だそうであるが、リユクルゴス王さえ居なければストリユモン河流域のエドノス人はオーナロスの教義を受け容れて陶醉する最適の人種だったろう。集団幻覚を見せられて兵士達は一斉に発狂した。併し此の幻覚は永続しない。マイア等が素早く牢を破った。併しアリアドネとコルクユネは発見されなかった。オーナロスは憤怒を復讐に変えリユクルゴス王は希臘神話に記されたような最期を遂げた。

結局判明した範囲ではアリアドネもコルクユネも外国に売られた如くだった。併しその行方は解らなかった。

リユクルゴス王にとってアリアドネは幾分薄気味悪い存在だったらしい。死刑に処する事は崇りが恐しかった。無罪放免するには罪と危険が過大だった。蛮族の社会に禁錮刑は無い。奴隸的使役が懲役刑に相当するが、リユクルゴス王は此の妖しい少女を部族内に置きたくなかった。

丁度此の時、フェニキヤ人の密貿易船がス

トリユモン河を溯って来た。エドノス人は亜麻織物や染料が欲しかった。アリアドネとコルキユネは代償として此の連中に引き渡された。脱走の能力を喪失したアリアドネは悄然と運命に従い、コルキユネと共に縛られた身を船底に幽閉された。

当時のフェニキヤ人は漸く沿岸航海に乗り出したばかりだった。クレテ王国は余りにも強力で、地中海全部を領土同様に考えていたから、大船を以て遠洋貿易を試る者があれば悉く領海侵犯の扱いを受けた。エジプトは対等の立場だが本来陸上民族で、航海はクレテ人の独占に譲って異議を称えなかった。造船と航海の技術はクレテ人が厳秘に附して漏洩を防ぎ、フェニキヤ人は粗製小型の沿岸船舶しか所有せず、此の船は航洋性も積載力も少なかった。

併しフェニキヤは商業立国を必然とする諸条件下にあった。フェニキヤ人の居住する地は南北二百哩。東西三哩乃至十四哩。西は長い海岸線を以て地中海に臨み東はレバノン山脈の急斜面に遮られ、土地は肥沃だが狭少で増加する人口を永く養う事が出来ない。事実、本篇の次の時代に起った世界的民族移動に際して多数のセム人が此の地方に流入した

が、既に高度の航海技術を獲得していたフェニキヤ人はシドン市民を中心とする第一次植民を行ない、キプルス島を始めエーゲ海諸島に新市を建設した。又、ヘブライ人がカナーン地方を占領した時にも、即ち紀元前千二百年頃の民族移動期にも第二次植民を行ない、カルタゴ、イベリヤ、シチリヤ等に植民市を作った。本篇の紀元前一四九七年当時は未だ本土に留っていたが、既に人口増加の傾向も見え商業資本の蓄積も進み、第一次植民開始の前夜とも言える状態にあった。

レバノン山脈は船材に適する良質の杉を産し、平野は橄欖樹、無花果等の商業作物に適し、諸市は織物、象牙細工、染料等、軽量高価な商品を製造した。且つエジプトとメソポタミヤの中間という好位置は中継貿易に適した。本篇の時代のフェニキヤ人はメソポタミヤ、アラビヤと陸路通商し、クレテ王国とは自国港湾で取引し、エジプトやエーゲ海諸島へは初歩的航海商業を営んでいた。(フェニキヤ人がアカバ湾からペルシャ湾一帯へ航行したのは紀元前千年のソロモン時代である)アリアドネを買い入れたのは、此の密貿易業者だった。

フェニキヤ人はアリアドネの身体を精査し

美貌に加えて未だ傷のない事を発見した。これは極めて高い価値を意味する。フェニキヤ人は昔から色欲よりも物欲を重視したから、商品価値を損壊しない為に、各自の神に誓言してアリアドネの安全を相互監視した。

斯う書くとは古代フェニキヤ人がシェイクスピアのシャイロックかスコットのアイザックのように見えるが筆者は正にその通りだと思う。「強欲なユダヤ人」がキリスト教徒の誇張であるか否かは別として、それはパレスチナ出身の「ダビデ・ソロモンの後裔」である牧羊者や農民の子孫ではないだろう。同じセム人種でもフェニキヤ人こそ先天的商業民族であり、ローマ帝国がキリスト教化した際、反抗的にユダヤ教へ改宗したのはカルタゴ等の遺民だった。所謂ユダヤ人はユダヤ教徒と呼ぶべきであろう。

アリアドネの身体は害を被らなかったが、その為にコルキユネが二倍の犠牲を払った。これは当人が隠蔽の限りを尽くしたにも拘らず、遂にアリアドネの知る処となった。暗い船底でアリアドネは乳母を抱いて泣いた。

この中にも唯一つの救いがあった。エーゲ海を南下した後、舳は東を向いていた。エウローペの予言が正しいなら、愛と平和の神は

その方向にこそ見出される筈だった。

多難を極めた紀元前一四九七年が漸く暮れようとする十一月末。アリアドネとコルキユネはシドン市に於いてイシュタール神殿に奉獻された。これを行なった船主と商人には莫大な銀が下賜された。

フェニキヤは統一された国家ではなく、シドン、チルス、アツカ、ビブロス、アスカロン、ベルタス、アルバト、シラ、マラス、サレブタ、ドー、ヤツファ等の都市国家が群立し、各市がエジプトに臣従していた。即ち商業利益の一部を貢納して都市の安全を買い、エジプト第十八王朝の軍事力を自己の為に利用していた。此の政策は以後一千年間フェニキヤの基本方針となった。但し当時のフェニキヤは未だ有力でなく、シドンを除けば漁港か村落の程度を余り出していなかった。フェニキヤ諸市が急膨張したのは本篇の次の時代である。

フェニキヤの意味は解らない。エジプト人が造船者と呼んだ為とも言われるし、ギリシヤ人の言う「東方の人」かもしれない。

「エウローペ様」

アリアドネは思わず叫んだ。イシュタール女神の女神官は、それ程エウローペに似てい

た。併しそれは他人の空似だった。

「妾はタイア。貴女の言うエウローペは叔母に居りましたが六十年も前に何処かへ連れ去られました」

よく考えればエウローペである筈がない。

エウローペは枯枝の如き体に総白髪だが、眼の前の女神官は五十才前で漆黒の髪をしていた。その体は脂が乗り、薄い亜麻の服は膚を透かせていた。アリアドネは漸く、エウローペの故郷が、フェニキヤだった事を思い出した。エウローペが愛の神を東に於て求めよと言ったのは幼時の記憶ではあるまいか。

イシュタール女神の女神官はアリアドネの技能を質問した。アリアドネは女神官に深い親近感を覚えていたから、一切を包み隠さず正直に答えた。二人の美少女が粘土板と尖筆を持って傍にあり、アリアドネの口述を筆記した。巫女兼書記官らしい。

舞踊、天体観測、医術、製陶、冶金、薬物調査及びセム語の理解力は各専門家に依って試験された。その結果アリアドネの天才はすべての教師を凌駕している事が明らかになった。二人の巫女は驚嘆と羨望と嫉妬の混った表情を隠さなかった。そしてアリアドネの万能性は高く評価された。

十二月になるとアリアドネはイシュタール

女神の神殿附属学校に入れられた。絶大な期待が此の天才少女に寄せられた。コルキユネが特に身辺附添を許されアリアドネと同年輩の少女巫女二人が先輩格で指導に当たった。当時の神殿は学校、病院、銀行を兼ねている。故に卒業後は富裕なイシュタール神殿の巫女として高貴安楽な生活が約束されていた。

修学期間は一年と予定された。最初の二箇月は神学を教えられた。此の学問はシュメル文化以来メソポタミヤで三千年間洗練を重ねられたものであり、現実主義的なクレテ王国には見られない理論だった。総明なアリアドネは直ちにその教義を理解し、且つ単純に感激した。天界の女王、万物の母、生産の保護者愛の権化イシュタール女神は、それ程に素晴らしい神だった。

イシュタールは聖書のアシタロスでありヘブライ人には評判の悪い神である。併し裏返して言えば純一ならんとする一神教徒を誘惑して止まない位に優れた理論と性格を備えた魅力的な神だった事になる。

女神官は洪水神話を借りて愛の教義を説き聞かせた。

「凡ゆる悪が人間の中に漲りました。人は神

を敬わず、互に信じないようになり、相争い奪い合いました。神々は大洪水を送って人間を亡そうと決議しました。只一人これに反対したのは愛の神イシュタル女神でした」

其処には、絶対神や原罪の観念は出て来ない。多神教の背景下に作られた人類愛の物語が温く描かれていた。

「人間の中には悪い者も居ます。併し大部分は善人です。一部の悪人の為に全人類を罰してもよいという権限は神と雖も持っていない筈です」

偉大なる愛の神は全部の神々を相手に堂々の雄弁を振う。而してその結論こそは無限の

人類愛を籠めた感動の名句である。

「罰は罪人にのみ与えるべきです」

聖書は遂に斯くも崇高な理念に達する事が出来なかった。

アリアドネは心臓の躍動を感じた。そして信じた。イシュタル女神こそ捜し求めていた愛の神だ。この神に生涯を捧げよう。

だが、イシュタルがエウローペの言った神なら、何故、フェニキヤでイシュタルに仕えよと直接指示しなかったのか。東方へ赴き愛の神を求めよと、莫然と命じたのは何の為か。アリアドネは当然此処に着目すべきだった。而して理想は現実の前に脆くも破れ去

った。

「アリアドネ様。近頃何かと嬉しそうで、クレテ島に居られた頃より、ずっとお美しく見えます」

汗に濡れた下着を着替える時、それを手伝いながらコルキユネが言った。

二月からの学習には「神の秘儀」と称する技能訓練が加えられていた。これは極度の柔軟性を要する体技だが、アリアドネの身体はこれにも適していた。

「神と人が融和する境地に達しようという術だそうです。わたしには、よく解らないけれど、二人の巫女から教えられた通りに動作しました。もうすっかり憶えました。勘が良い上に柔軟で、二人の先輩よりも上手だと褒められましたよ」

アリアドネは実演しながら更に言った。

「こんな風に体を曲げてくねらせるのです。本当は二人で行うのだそうですが」

コルキユネは先ず真赤になり、次に蒼白に変わった。純情なアリアドネは教えられた技術の本質を理解せず、単なる動作として正直に覚え込んでいた。

「神学校はそのような事を教える所ですか。それは男を喜ばす技巧です」

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献特集号

直接発行所へお申込を！ 定価 五〇〇円 (〒20円) 略号〔文献〕

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女相撲、女体切腹、女体浣腸とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今度二度再びこのような内容は集録出来ない特殊文献を満載いたします。今、街の古本店では一部千円以上で取引されています。こういった値段では、これからは到底入手できません。

三十八年に発売以来、相当部数直接購読者用として保有しておきましたが、愈々残部が僅少となりました。売切れますと補充はつきませんし又、二度と発刊も出来ません故、未入手の方は今のうち、お求め下さるようお願いいたします。ここ二、三カ月で売切れになる予定です。

アリアドネに真相を納得させる為には更に直接的な説明が必要だった。アリアドネは遂に悟った。イシュタール女神の「愛」は性愛を意味し、教義と実際は遊離して、神聖なるべき神殿は「巫女団」が「秘儀」を売り、男達から「浄財」を巻き上げる場所に墮落している。

「午後の授業を始めますよ」

巫女の一人がアリアドネを呼びに来た。アリアドネが理性を失ったのは、これが始めてだった。コルキユネは壁に耳を当てて隣室を窺った。

「アリアドネ。貴女のように素質と学識を兼ねた女は濫りに庶民の前に提供されたりはしません。貴女の相手は王侯貴族、大臣武將に限られます。莫大な報酬の半分が貴女自身の所有として認められ、何年かの間に貴女は他の羨む程の財宝を」

アリアドネの声は低くて解らなかった。女神官の声は幾分狼狽しているようだった。そして突然すべてが静かになった。

「アリアドネ様」

コルキユネが教室に踏込むと、正にアリアドネの後姿が一閃して消える処だった。アリアドネは三階の窓から街路に向って飛び降り

た。慌てて窓に駆け寄ると、真下に麦の大袋を満載した牛車が見えた。アリアドネはその上で手を振っていた。何か言っているようだが、既に群衆が騒しくて聞き分けられなかった。一瞬の後、アリアドネは風を捲いて東の方へ駆け去った。だがコルキユネには気のせいかアリアドネが幾らか跛を曳いているように見えた。

神殿の一室には、女神官と巫女二人が残されていた。巫女の一人だけが意識を保っていた。三人共各自の腰帯で後ろ手に縛られ、衣裳を裂いた布片を口中に詰められ、振鈴の綱で足を一束にされて天井から逆吊りにされていた。傭兵の一隊は直ちにアリアドネを追跡したが発見出来なかった。

コルキユネは神殿を出なかった。アリアドネの足は追隨出来るものでない。又、コルキユネには脱出の自信を裏附ける脚力が不足していた。アリアドネを通す為には後を追わない方がよい。

アリアドネの速度には、充分な信頼が置けた。故に三人の犠牲者を解放する手続きは故意に遅延させる必要もなかった。コルキユネはその通りにした。それなのに脱走幫助の嫌疑で捕縛された。二人の巫女が無関係を証言

したにも拘らず投獄され、且つアリアドネの行方を厳しく拷問された。併し遂に一言も答えなかった。

だが、当のアリアドネは一晚隠れていただけで絶対確実な脱走を諦め、悄然と自首して出た。それはコルキユネの所へ帰って来たという方が妥当だった。飛降りた高さはアリアドネの四肢を以ってしても過大で幾分かの振挫を生じ、長距離の逃走が出来る状態になかった事は確かだが、コルキユネを置いて行けなかったのが最大の原因らしかった。

「コルキユネと一緒に居る事だけを許して戴けるならもう逃げません。何でも致します」
気丈なアリアドネが嗚咽しながら、進んで自由を抛棄した。

監禁数日の後、アリアドネの処置は懲役に決定した。イシュタール女神の女神官は自ら被害者であるにも拘らず、アリアドネの得難き才能を最下層に葬る事を惜しんだ。結局アリアドネは足の恢復を待って、イシュタール神殿が経営する染料工場へ勤労奴隷として貸与された。

染料製造は重労働と不潔を極め、アリアドネのような女には耐え難い苦痛になるだろうと考えられた。此処で一定期間酷使すれば、

その次にはイシユタール神殿での秘儀も寧ろ喜んで勤めるようになるだろうという計算が背後にあった。

アリアドネが自ら戻って来たので、コルキユネは罰を被らなくてもよい筈だった。併しコルキユネは自ら望んでアリアドネと同じ待遇を甘受した。

フェニキヤ特産の紫紅色染料チリアン紫は古代から中世にかけて西方世界に最も高貴な色沢を誇った。ローマ帝国に於いて「紫衣を着る」というのは皇帝になる事を意味する。帝政以前でも紫紅色の絹は高貴を表した。フェニキヤが貿易国として飛躍する基礎は此の染料に依って築かれた。

☆男性モデル募集☆

左記の要領にて△男性モデル△を募集いたしますから、ご応募をお待ちします。

一、ご希望の方は、年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所(電話番号)など記入の上、お申込み願います。

一、禪美、男性ヌード、同性対象M、異性対象M、女装扮装モデルなど、なるべく若い方で昼間出演可能の方を求めます。
一、採用決定の方には、撮影の日時場所など詳細連絡の上、打合せいたします。

△編集部△

チリアン紫はその生産形態からして極めて原価の高い商品だった。此の色素はフェニキヤ沿岸で採取される悪鬼貝ミユアレックスの内臓から抽出される微量成分である。貝千二百箇から一・四グラムしか製造出来ず、作業の大部分は人力に頼り、労働は苛酷と汚染を極めた。斯くも稀少なるに拘らず、その販売価格は地中海全域から殺到する需要に支えられ、フェニキヤの独占的水準が維持されたから充分な利益が残っていた。此の事業は王室、大神殿、大財閥に依り、原料採取から製品販売迄一貫する形態を以て行われた。

今日では、此の神秘的な色彩もインジゴブルーの臭素誘導体である事が判明し、安価、容易、衛生的に同種色素の工業合成が出来るようになったが、約三千年間はすべてが奴隷の労働と天然資源に依存していた。

悪鬼貝ミユアレックスの採取は主として若い女奴隷に賦課された。此の労働を二十年分として終えた者には自由を与える恩典があった。水中労働に適しない者や老年の女奴隷には脱殻、内臓摘出の仕事が与えられた。貝の内臓を挽臼で挽いたり大釜で煮たりする労働は男の奴隷の分担だった。老年の男奴隷は原料、副資材の搬入や廃物の処理に使役された。抽出成分を精製

するのは特殊な技術者に委された。出来上った染料の一部は直ちに亜麻絲の染色に使用され、一部は水溶性染料や保存の効く蜂蜜染料に加工されて輸出された。

アリアドネとコルキユネは具採取の作業に入れられた。女奴隷には毎日の基準責任量が課せられ、それを満たさない者は鞭の刑が与えられ、能率の良い者は超過量を累積計算して自由を与える制度になっていた。但し此の基準量は普通人の二十年分に相当したから、熟練と老衰の度合が等しいとして、如何に能率良く働いても拘束期間が数年短縮されるに過ぎない筈だった。

アリアドネとコルキユネは腰に鎖を付けられて水に潜った。これは拘束具と命綱を兼ねた。日の大部分は海底で過さなければならなかった。だがアリアドネは此の苦業を天職であるかの如くに勤めた。自由を得る為の基準量を正直に解釈した。法治国クレテに育った者として、これは止むを得なかった。アリアドネは水中で自己の採取分の半量をコルキユネに譲った。然も二人の平均作業量は普通人に数倍した。三箇月を経過した頃には、二十年の予定が僅か数年に短縮される形勢が明瞭だった。これでは懲役の意味を成さない。

紀元前一九四六年の六月に入る頃、アリアドネは加工工場に廻された。時に十八才。その皮膚は海浜の直射日光に曝されたにも拘らず、依然として天然の美を保っていた。コルキユネも例に依ってアリアドネに従い、自ら最下等労働に配置を望んだ。

アリアドネはシドンの海で浮遊屍体を見た事がある。それは漂流状態から見て水死体ではなく、明らかに、死後投棄されたものだった。全裸に近かった。皮膚は頭から足先迄、紫色を呈していた。死斑ではない。全身紫色で、毛髪すら例外でなかった。アリアドネの博識を以ってしても紫色の人種は思い出せなかった。北辺の寒冷地に住む野蛮人は白色で金髪。南冥の酷暑地方の住人は黒色で捲毛。地中海沿岸や大河流域の天恵地帯に居る文化人はブルネット種で褐色乃至暗白色、長髪。アリアドネは此の三人種のみを知っていた。紫色の人種は何処の住民だろう。

アリアドネは今こそ紫色人種の発生原因を思い知らされた。紫色は後天的色彩であり、アリアドネの知識は誤っていなかった。これこそチリアン紫製造工場で死ぬ迄働かされた奴隷の末路だった。髪、爪、皮膚から内臓迄紫色に変色し、重労働と汚染に耐えずして死

亡するとその俚海中に投棄されるのだった。アリアドネとコルキユネは地下の工場で挽臼を挽かされた。此処は女奴隷の来る所ではない。女は二人だけだった。

幸にして、筆者はアリアドネとコルキユネの「服装」に就いて言及する義務を免れている。紫外線と酸素を嫌う染料は暗黒の地下室で製造された。温度は華氏百度を越え、湿度は飽和点に近かった。果して女性に対しても一絲が与えられたらどうか。

目の内臓が煮え沸る。汚汁が吹き溢れる。そして挽臼の横木を押す奴隷に視力は不要だった。奴隷の大半は故意に片眼を摘出され、両眼共奪われた者も少くなかった。太陽の光と、新鮮な空気と、生存の希望を悉く失った奴隷達が、裸美女二人の存在を意識したか否か。そのような隙もない間に奴隷達は消耗して行った。然も時代は紀元前千五百年頃のフルリ民族移住期に当る。労働用奴隷の獲得は比較的容易だった。

「アリアドネ様。お痛わしい限りです」

だがアリアドネは同情を拒斥した。「此の労働はわたしだけに課せられたものです。コルキユネに迄苦勞をかけて済まないと思っ

殿で汚れた富貴に生きるよりは、紫色に染っても此処で清く死ぬ方を選びたいのです」

アリアドネの焦茶色の髪は紫色に染り、純白の皮膚も紫一色に変わった。それでも、紫色の蠢き廻る動物達の中で、鞭に追われ、喘ぎながら働いた。そして、夜になると新しい神の彗星を眺めた。

観測機械を失っていたから精密な測定は出来なかったが、彗星は機械を必要としない位の大きさに成長し、明らかに運行速度を早めていた。位置は次第に東へ移り、双女宮の端にかかり、妖しい尾を金牛宮の境に伸ばしていた。その尾は尖端が二つに分れ、牛の双角の如く、本体は血紅色を呈し、天の一角に不吉な姿を晒して見えた。

アリアドネはコルキユネに言った。

「エウローペ様から授けられたわたしの観測技術が誤っているのではないなら、此の調子であの彗星が大きくなって行けば、必ず世界中に大きな天変地異が起ります。その時期はあと一年。そして古い秩序は悉く破壊され、愛の神が降臨されて新しい世界を作られるでしょう。わたし達は此の時代を生き抜いて、新しい神を迎えなければなりません」

(続く)

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13型) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	厳重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	臍そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外的後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しぼり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビに反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしろられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ(東浦)

小説新解体新書 (下)

高野原美

(四)

前野良沢の養女お絹は夜遅く一人で、その若々しいむっちりとした肉体を深々と浴槽につけながら何か物思いに耽っていた。養父良沢らの前途に困難が横たわっているオランダの解剖学書の翻訳事業について、女ながらも気にかけていたのである。毎日辞書を片手に難解なターヘル・アナトミアと首をつき合わせて、論議を重ね、一日に一頁も進まない遅々とした仕事の進展振りには秘かに心を痛めていたのであった。

今日、仕事場に決まっていた庭の奥の洋風の建物に、お茶を運んで行ったとき、真中の大テーブルを囲んで五人の医学者が筆を置いて悩んでいた。周囲の壁には墨痕鮮かに和紙に描かれた人体の内部構造の絵がかけられ、違

い棚にはブドウ酒と当時では珍しいガラスのグラスが並べられ遠眼鏡や地球儀があるのはさすがに蘭学を志す人の部屋である。建物に一步足を踏み入れたお絹は聞いた。養父良沢の声である。

「どうかならないものだろうかな、玄白殿。このままでは完全に行きずまってしまうそうだよ。お上にもう一度囚人の腑分けを申請してもらえないですか……」

「いやあ、私も藩の役人を通じて再度の腑分を願いでてあるのですが、二度目と云うと仲々難しいのでしょうね。許可がおりないのですよ」

溜息まじりの玄白の声が聞えてくる。

「それにしても私達のからだというものは複雑なものです。この不思議な神秘のからだ

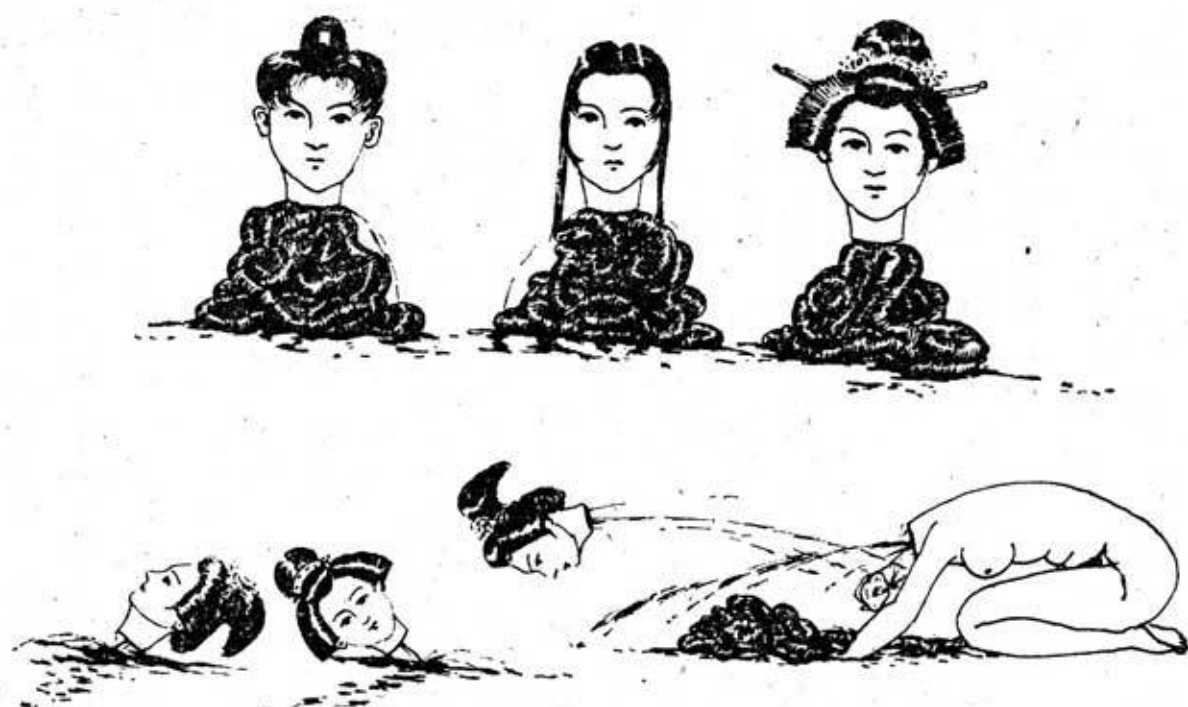
を造った造物主は偉いものです」

「そうだな、からだの内臓には無駄がなく、実に合理的に配置され造られているものですよ」

「それにしても胃のところにある、あの脂肪の塊りのようなものね、あれは何だろうな。何か人体の機能面で重要な作用をしているものではないのですか」

「そうですね、腸の起始部のところに管の口が開口していると記載されていますからね。脂肪が変化してきたものだろうか」

ただ一度の女囚の首斬り屍体の腑分を見学しただけで、あとは辞書を片手にして困難な翻訳である西洋医学の進んだ解剖学書は未知の世界であるだけに私達が難解な哲学書を読む以上に難解であった。自然科学は実験によ



ってこそ進歩し理解されるものである。人体を目の前にせず書物だけを見るのであるから理解に苦しむことが次々と出てくる。

お絹は「ご免下さい」と声をかけて室内に

入った。

このお絹の出現は、彼等の気持ちをえ、気分を安らかにする働きがあった。十九才になつたばかりの豊かに発育した美しいお絹は室内に花を咲かせた。

伏目がちに羞らいを含んで、白いその手は真中のテーブルを少し片付けてお茶を配っていった。

「毎日、御苦労様でございます」

優しく女らしい思いやりの心をこめて労をねぎらうのであった。

めっきり最近には頭に白髪がめだちだした養父に

「お養父様も、少しお休みになって下さい。

お疲れでしょう」

お絹は、毎日こうしてお茶を入れて室内に歩を入れているたびに人体解剖の図には慣れたとは云うものの、やはり若い娘の身であった。自分の内部がのぞかれるようで羞恥を覚えた。当時の娘としては、他人に肌を見せると云うことは想像もつかず、二の腕を見られるだけでも羞恥に身を震わせるぐらいであった。その娘の前に、神秘的な内臓や骨、血管などの絵が散乱しているのであるから、何か自分の体内がのぞかれているようで、自然と

顔が赤らむ思いになるのは、当然のことであろう。

「どうですか、少しずつお仕事は進んでいるようですが」

「いや、それが行きずまってしまつて、どうにもならないのだよ。西洋医学の偉大さを見じみと痛感させられるよ。今も、もう一度腑分をお願いしてみようと話していたところだね」

「大変ですね、人間のからだの中のことですからね」

「そうなんだよ、外から見られる部分は、どうにでもなるのだけれど、腑分しないと見えない内臓のことだから」

「こうなったら行き倒れの屍体でも、夜間にこっそり運び込むより仕方がない」

「それは不可能だよ、もしお上にしれてごらん、これだよ、首と胴が離れてしまうよ」

玄白は手を首に当て斬られる動作をする。

「丁度いいじゃないか、その屍体なら自由に腑分できるよ。先生方に、それでは提供しようかな、ハッハッハ……」

これ程、極端な言葉がとび出すほど、この事業は行きずまっているのである。書き散らされた解剖図を見ながら、この切迫した真剣

な言葉を耳にしていたお絹は、そのうちの一枚の絵を見て全身が真赤になるほどの羞恥をおぼえ、思わず太腿に力を入れ股をきつく締めつけていた。

それは拡大してかかれた女性の外陰部の図であった。骨盤部分即ち下腹部と太腿が描かれていた。お絹は伏目がちに怖いものでも見るように、それでも見つめていた。医学と云うものは非情なものだわ、女のからだを隅々まで観察し、その上、胸やお腹まで断ち割って内部を究める。人間が自らのからだを神の意志に反して究めようとする医学、大変な学問だわ。

こんなことを考えながら、その構造図を真剣に見ていたのであった。初めて見た自分のからだの秘密構造である。しかし、名称はまだ入れられてないために知識のないお絹には充分理解ができなかった。

○

風呂の澄み切った湯は湯気を上げて白くむっちりした乳房まで浸していた。

どうにも、今日の言葉が耳にこびりついて離れないのであった。

「腑分け、腑分け……」

お絹は、目を閉じて小さくつぶやくように

云った。

「この肌の内側を調べておられるお養父様ら肌内部、内部の構造……腑分け」

走馬灯のように次々と腑分と解剖学書、そして室に散乱している解剖図が浮んでは消えて行くのだった。

「私の、このからだを、このからだを提供すれば、いいのだわ。きっと喜んでいただけるわ。それがお養父様に対する最大の親孝行になるのだわ……」

お絹は、養父に対し、むしろ医学の発展のためと云うべきだろう——自分の肉体を生贄に捧げようとするのである。花羞しい処女が無垢の肉体を腑分の席に横たえると云うことは大変な決心である。しかも、その肉体は無惨にも切り刻まれ胸を割られ、腹を切り裂かれ、血まみれとなって悲惨な場面を描くのである。

「しかし、私はどうすればいいのだろう。お養父様に話しても叱られるだけで取りあってもらえないだろうし……。でも、私のからだ、あの方々の前に横たえられて隅々まで見られるのだわ。今日のあの絵のように描かれ多くの方々の眼に……」

考えれば考えるほど羞恥心が沸々と湧きお

こり、湯がざざ波を立てるほど胸は高鳴り震え、カッと暖かい血が頭に上るのだった。

「私は……このからだを、捧げねばならない……」

処女の胸は覚悟を決めたとは云え、容易に解答がでず、心は千々に乱れ考えがまとまらなかった。

「医学のために……親孝行……腑分……全裸の死体で……羞恥……」

この様な言葉が頭に浮んで消えていった。しかし遂にお絹は決心したようであった。

「私のからだを捧げるのなら、一日も早い方がいいわ。明日の朝、そうだわ、私は自害して……」

こう覚悟を決めると、やや落着がでてきた。

明日は無惨な腑分に捧げるからだだと思つと、急に自分のからだを愛しくなり浴槽から上るとしみじみと眺めるのだった。

美しく張り切った処女の白い肌である。丸くむっちり盛り上った乳房、豊かな膨らみの腹、厚く広いつたりとした腰、厚い脂肪の膨らみの引締った臀部、むっちりとした丸い膨らみを見せる太腿、桃色に輝く艶やかな餅肌、すらっと伸びた均整のよい脚、全てが愛

すべきものであった。

お絹は、清く美しい姿で腑分されたいという気持ちで、念入りに肌に磨きをかけるのであった。

私のこのからだは、これで見おさめになるのよ、明日は、あの方々のメスで切り裂かれ無惨な姿で横たわるのだわ。昔から処女は多くの人々が、その美しい純真無垢の肉体を生贄として死ぬことに悲しみよりもむしろ喜びをもって死んで行った。自分の美しい肉体が多くの人々の前で讃美され、処女の鮮血を流して死んで行く、その異常な悲壮美に人々は酔い生贄を讃えるのである。観衆の祝福を受けながら死んで行ったと考えられる。

胸を刺され心臓を太陽神に捧げた女、その鮮血を皿にとられて祭壇に捧げられた女、腹を断ちわられ子宮を捧げた女、処女の生贄はその裸身を観衆の前に見せ羞恥と讃美を土産として生体解剖の苦しさに身悶えつつ死んでいったのである。しかし、お絹の場合は、からだの隅々まで男の眼に触れ、多くの生贄が歩んだ以上の羞恥と屈辱をのりこえねばならなかったのである。

現代ならばいざ知らず、肌を人の眼に触れさせることに極端なほどの羞恥を感じていた

娘が、死後とは云え柔肌を剥がれ、内臓を取り出され、その上、詳細に観察されることを自ら希望したのである。そのいじらしい心根は察して余りあるものがあつた。机の前に正座したお絹は、自害の方法について思い悩んだ。

首を吊ると云うことは最も簡単である。首吊り……と考えた時、その美しい眉にシワを寄せ頭を横に振った。お絹は隅田川の川端で朝早く女の首吊り死体を見たことがあつた。その時の見苦しい印象が強烈によみがえつて来た。

顔は苦悶にゆがみ鼻汁や唾液をたれ、そのうえ半開きになった口から赤い舌がのぞいて見ていられた。あつた。

お絹は自害を覚悟したもの、その方法についてでも思い悩むのだった。

自殺者は誰でもそうだろうと思う。自殺するまでその方法をあれこれと考えて自ら楽しむと云う。自殺は自己否定であり同時に社会をも否定する時に成り立つ、そのため自殺は一度しかできない楽しい自虐でもあり人色々と方法を考える。美しく死ぬもの、醜い無惨な姿を曝そうとするもの、死ぬまでの苦痛を楽しもうとするもの、一瞬の死を求めるもの

その人の考えによって手段が選ばれる。簡単に首を吊り、刃物で腹を切り、水にとびこめるものではない。

お絹の場合は、自害すべきその美しい肉体を腑分けのために捧げる生贄として自害しようとするのであるから真剣に考えた。彼女としては生きたままの美しいからだを生贄に捧げたかった。しかし、それは許されるものではない。そうだ、生贄は生きたまま鎖で大理石に縛られ生体解剖されたのだから私も立派な生贄として生体解剖を選ぼう。自らの手で行なう生体解剖―切腹を決意した。

そう決心して、風呂から上って自分の居間に戻ったお絹は、長持ちの底から一振りの懐剣を取り出した。赤鞘に金色の模様の入った立派なものである。正座して、その懐剣をスラリッと抜いた。ゾクツとする程の妖しい光を放った。燭台の光を受けて細身の刀身は冷たい光を放っていた。お絹は、その刀をじっと見凝めた。この冷たい光を放つ刀は、お絹の暖かい弾力のお腹に非情に突き刺さり、処女の血を吸うのである。

(五)

翌朝、まだあたりが明るくならぬ前に眠りより覚めたお絹は薄化粧を施し、最後のよそ

おいをすると白装束に着かえて、切腹の用意にとりかかった。

居間の正面、床の間に香壺をおいて香をたき、屏風を立てて切腹する席を囲んだ。畳の上に純白のシーツを敷くと、正面に守り刀をのせた三宝を置いて準備がなった。屏風の中を燭台の光が薄く照らし出していた。

お絹は屏風の内側の切腹の場所についた。

正座して、やや暫く黙想していたが、ぱちぱちりと眼を開けると、白装束の帯を解き丁寧に折り畳んで傍らに置いた。続いて腰紐を解くと、豊かな太腿を中腰になって着物の上からしっかりと縛った。切腹の苦痛に悶えた時に太腿まで露出するのを羞じる女のたしなみである。

お絹は、ぐっと襟元を両手でつかみ大きく胸前を拡げ、そのまま下腹部までぐっと押し広げて行った。大きく拡げられた着物の間から、お絹の清純な白い肌が、燭台の光に浮き上った。

むっちりした半球形の形よい乳房が顔を出し、その先に桜色の乳首が蕾の美しい姿をつつましやかにみせていた。それに続く胸から腹への曲線は、処女の甘酢い香りを放って、ふっくらと脂肪がのり豊かな起伏をみせてい

た。

お絹は、身につけているものとしては、この白装束一枚きりであった。腰巻すらも付けていないのであった。お絹は、死衣装についても考えた。羞恥心の強い娘として、肌も露わにして死んで行くことは耐えがたいものがあり、当然腰巻も身にまといたかった。しかし、お絹が死ぬ目的は、その肉体を腑分に供することであつたので、そのためには死後他人の手で裸にされる運命にある。一枚一枚、死後のからだから着衣を脱がされて行くのは耐えがたかつたのである。そのために簡単に裸にできるよう一枚の白い着物だけにとどめたのであった。

やがて右手をつとのばすと、三宝の刀をとって鞘をはらった。背筋にゾクツとするほどの冷たい光を放った、その刀の刃に、三宝の奉書をとって巻きつけると、しっかりと逆手に握った。

おもむろに、その刃先を左脇腹にあてがつた。右手にぐっと力を入れて力強く突き立てた。弾力のある柔肌は、大きく窪みをつくって短刀の刃先を、ほんの少し受け入れただけであつた。

それでも

「痛い」と、お絹は眉根にシワを寄せて悲鳴を上げた。

女の力である。その上、若い女の下腹部の脂肪は容易に刀を受けつけるものではない。お絹は、小さく血のにじんでいる下腹部をみた。

「刺さらないわ」とつぶやくように云った。

「私は切腹しなければならぬ。怖れず勇気を出して突くのだ」

お絹は、背筋を伸ばし下腹部をじっと前に突き出すようにして、大きく息をすって力を入れた。膨れ皮膚が緊張したのを眼で確認すると、左手を柄頭に当てがい全身の力を両手に集中するようにして、ぐっと突き立てた。

ブスッ、鈍い手応えがあつて、皮下脂肪から筋肉まで深々と突き刺さった。頭の心までズシッと響くような強烈な痛みが稲妻のように走り、痺れるような疼痛がおそう。

思わず「ウーン」と呻き声を立て、お絹は早くも、大きく肩で息をし、顔面は蒼白になり額に汗がにじんでいた。

刀は、肌にしっかりと喰い込み、大きい呼吸とともに、ゆるやかに動いていた。

暫くは襲いくる激痛のために、刀を持つ手まで痺れるほどで眼も血走らせ大きく息をつ

いて、ただ荒波にもまれる小船が波間も高く低く上下しながら漂うように、腹一面に拡がる激しい疼痛に身をまかせざる有様であった。

彼女はやっと気を取り直し

「これ位のことです。私には、自分のお腹を切り開いて内臓をこの眼でしっかりと確かめねばならないのよ。この肉体は、もう私のものではないのだ。腑分に捧げた生贄ではないか、頑張るのよ……」

心の中で励ますと、左手を右脇腹にあてがい、右手に力を入れて右に引廻そうとした。しかし、腹壁を突き破った刃は、しっかりと厚い皮下脂肪と筋肉に喰い込んでいて動こうとはせず、腹の皮が右に少し移動したにすぎなかった。

白いお腹に血が流れ、苦痛が激しくおそうのに耐えながら

「切腹って大変だわ。これほど苦痛が激しく困難なものとは思わなかったわ。簡単に行かないだけに、切腹って云うのは価値があるのだわ」

今度は、左手を添え、腹壁を緊張させると両手に力を入れて右にぐっと引いた。

プリプリッと無気味な手応えを感じて、豊かな皮肉が切り裂かれて、どっと血が噴き出

す。

その弾力に抗して歯を喰いしぼり大きく脛のあたりまで、一息に切り裂いた。切り口はパツクリと大きく口を開けて、黄色い粟粒のような皮下脂肪が押し出されるように盛り上って、その奥から溢れるように血汐が噴出して着物を赤く染め、白布の上にとび散っていた。

「ウーム、ウーン」

呻き声は次第に悲痛さを帯びて高まり、額からは脂汗が流れ、唇を固く閉じて頬が緊張のために痙攣する。

もう夢中になって切り廻しはじめた。ぐぐっと刀に力を入れると刃先は腹膜まで切り裂いたのであろう。

失神せんばかりの激しい疼痛が全身を貫き咽喉の奥から嘔吐感が、激しくこみ上げて来た。

切り傷の少し上の形よく窪んだお臍は、切腹前のそのままの美しさを見せて可愛い慎しい姿で、その悲愴美を眺めていた。

咽喉はカラカラに乾き、胃の奥の方から嘔吐感がこみ上げ、やたらにねばい唾液がでて来る。腹全体は痺れんばかりの激痛で、ひっきりなしに襲いかかり、その度びに腸はゴボ

ゴボと腹圧によって、そのぬめぬめした姿を露出して来た。

お絹は、必死になって刀を右に引廻していた。もう正常な意識も、感覚もなく、唯、立派に切腹するのだと云う執念のみが刀を握る手を支配していた。

「うーん、うーん」

その苦悶は絶頂に達した。眉根にシワを寄せ、両頬を強直させ唇は痙攣していた。

苦痛にゆがんだ顔、苦悶に震える肉体、血汐にまみれ腸を露出した下腹部、周囲の白布から屏風まで鮮血はとび散り、切腹の―女体切腹の美の極致を描き出していた。生地獄と云うものがあるとするならば、このお絹の状態を云うのであろう。

次第に、顔は血の気を失ない死が近づいて来たようである。お絹は目の前が暗くなるのを感じた。その時お絹は刀が見事に自分の下腹を一文字に切り裂いたのを知った。おぼろ気にそれを知ったお絹は刀を抜いて膝の前に置いた。

左手を前につき、前からだを屈めて見事に切られた腹部と柘榴のようにパツクリと開いた切り口から溢れ出ている腸を確認した。「これが腹わたなのだ。私のお腹の中の正体

はこれなのね……それにしても、見事な切腹だわ、女の身で……うれしい……」

意識はとぎれがちで、もうろうとした頭でお腹を見つめていた。

次第に意識が薄れ行くなかで、腹わたが掻きむしられ頭の心まで痺れるばかりの疼痛に身をねじり、くねらせ、爪は畳をかきむしりながら死を待った。

自らの手で胸を突き止めを刺す気力はなかった。もう全身の力もなく、幻影に悩まされ血の海の中で七転八倒の苦痛にのたうちまわっていたが、その均整のとれた若々しい肉体を痙攣させ、四肢を二、三度痙攣させると花の生命は消えて行った。

その肉体を医学の発展のために生贄に供するとは云え、余りにも惜しまれる清純な花のようなからだであった。その肉体が、今ももう生命を失ない物体となって血の海の中に横たわっているものであった。惜しい、余りにも惜しまれる切腹死であった。

(六)

夜が明けて良沢は眠りから覚めると不吉な胸騒ぎがした。

昨夜は、翻訳の仕事が思うようにはかどらないために、寝付きにくく、悪夢にうなされ

たせいでもあらうと思った。

昨夜の夢と云うのは、良沢が一人室に籠って翻訳していると音も無く扉が開いて二十前後の美しい女性が入って来た。「見なれぬ女だな、一体どうしたのかな」良沢はいぶかつて、黙って女を見ていた。

女は沈黙を守ったまま、良沢に一礼するとスルスルと音を立てて帯をときだした。帯を足もとに落すと腰紐を素早くとき前をはだけると肩を滑らせた。その下の緋の長襦袢も足もとに脱ぎすてると、大胆に良沢の方を向いたままの姿で湯文字の紐をとくのであった。

良沢は、しきりに何か云おうとするが声にならず、身体も金縛りに会ったように動かない。ただ女のなすがままの脱衣を見るのみであった。

腰巻もとり、足もとに積み重なった衣類の山から足を抜いて、女は少しの羞らいもみせず良沢の前に立った。そのからだは適度に脂肪がのって引締っており、白く輝く滑らかな肌はつきたての餅の形容そのまま、肌理細かなむっちりとした美しさを誇っていた。

良沢は年甲斐もなく、その余りにも見事なこの世のものとも思えぬ女体を、見凝めていた。

その時、女は玉を転がすような澄んだ美しい声で云った。

「どうぞ私のこのからだを腑分して下さい。私は貴方様の仕事の生贄となって、このからだを捧げるために来ました。どうぞ、私の願いをいれて下さい」

「え、え、そのからだを……腑分に！」

良沢は驚いていった。いくら仕事のためとは云え、これ程美しい女のからだを、それも眼の前で息づいて生命のあるからだを、どうして腑分などできようかと思った。

「思う存分に切って調べるのです。隅々まで……」

良沢はためらった。

「私の願いを聞いて下さい、腑分して下さい。私は生きては帰らぬ覚悟で、ここに来ました。私の決心は固いのです」

良沢はそんなことが出来るか、何んとしても帰らさねばならないと思いつつも、催眠術にかかったように刀をとると鳩尾に刀を当てがった。

良沢は、この若い女を生体解剖に取りかかっている自分を意識して慄然とした。その時眼が覚めた。全身汗びっしょりであった。

良沢は、鮮明に残っているこの夢を思い出

してゾクッとしながら朝の冷たい空気を吸い洗面のために中庭の廊下を渡った。この時、お絹の部屋の前まで来ると何かしら異様な様子で胸騒ぎを覚えた。

きっちり閉ざされた襖の奥から血生ま臭い匂が漂って来る。良沢は、はっとして「お絹」と外から声を掛けた。

いつもなら返事が聞えるのに静まり返っていて答えがない。良沢は襖を思わず開けて、「あっ」と声をのんだ。香をたきこめた室内一杯に血生ま臭い匂が漂っていた。

急に胸が高鳴り、昨夜の夢が頭の中を駆け廻った。足早に室内に入ると屏風を除けた。

屏風の中は凄惨な場面を展開していた。あたり一面血の海であり、屏風にも血汐は飛び散り、その中にお絹が横たわっていた。思わず駆け込んで、血で着物が汚れるのも構わずお絹のまだ温かみの残っている悲惨なからだを仰向けに抱きしめた。

何んと無残な姿であろう。美しい柔肌をむき出しにして全身朱に染め、下腹部を大きく一文字に切り裂いて腸まで露出して見事な切腹をしているのである。介錯も無しで最も苦痛の激しい切腹を行ない絶命するまで、どれ程苦痛に身悶えし苦しんだことであろう。医

者である良沢は、その七転八倒の苦しみが充分にわかった。

お絹は、激しい苦痛に耐えたそのあとを表情に残していた。

「お絹、どうしたと云うのだ。女の身で切腹して果てるとは……」

血に染んだ亡骸を抱きしめ良沢は涙を流していた。

いまは虚しい亡骸と化したお絹は、良沢の胸の中で腑分を待っていた。腸のみが未だ生命ある様に血に塗れて動いていた。

お絹を寝かせると部屋の隅の机の上の遺書に気が付いた良沢は、震える手でそれを開いた。読んで行く内に良沢の眼には涙の玉が光り一条二条頬を伝って流れた。「これ程迄にお絹は心配していて呉れたのか、済まない、悪いことをした、お絹にあんなことを知らさねばよかったのだ。まさか、自分のからだを腑分に捧げるために自害しようとは」悔んでも、もう遅かった。

可愛いお絹は、自ら花の生命を絶って腑分を待って静かに横たわっているのである。良沢は遺書を置くとお絹に手を合わせた。

奥の仕事部屋に使っている洋室の前の庭の樹蔭に畳を二枚重ねて、その上にお絹の亡骸

は置かれていた。お絹の朱に染まった着物は脱がされ、全身が酒精でぬぐわれ、はみ出した腸も腹の中におさめられていた。

学問に対する情熱は人情をのりこえた。こうして、お絹の清められた亡骸は庭の片隅に白布で覆われ腑分を待って横たえられたのであった。

(七)

早朝からお絹の死は玄白らに伝えられた。お絹のあまりにも思いがけない勇敢な行為に驚いたが、そのあとで養父である良沢が故人の遺志を尊重し、切角の自害を犬死にせぬため腑分をすると云う伝言に、胸を強くうたれるものがあつた。良沢の屋敷には玄白をはじめ淳庵ら六名が顔を見せた。全員が畳の上に寝かされ腑分を待っているお絹に黙祷をささげその霊の安らかに眠ることを心から祈るとともに、今日の腑分の機会をつくってくれたことを感謝した。

良沢は、お絹の亡骸の上にかぶしてあつた白布をとりぞいだ。若い花の蕾を自らの手で切り裂いて死んでいった悲愴な姿で横たえられていた。

「女の身でありながら立派な切腹をしたものです。あのお絹さんに、これほどの勇気が

あるとは……」

「立派だ。男でも、これほど立派な切腹は、そう簡単にできるものではないですよ。介錯人もなしで切腹をするなんてね」

玄白らは、外科医として生身を切り裂く激しい疼痛と苦しみを充分に知り尽しているだけに、眼の前のお絹の立派な切腹には感じいていたのであった。

良沢は、それらの言葉を聞きながら、お絹の亡骸に手を合せていたが、

「それでは腑分を行ないましょう。玄白殿、お願いします」

解剖の執刀を玄白に頼んだ。

「光栄です。それでは私が腑分をさせていただきますので、よろしく」

用意のメスを右手に取った。

もう厳正な医学研究が初まるのである。徒らに感傷に浸ることは許されず、お絹の亡骸は、物体として次元の違った造物として扱わねばならなかった。

先ず外見検査から入った。

お絹の美しい白肌の上を、十六の眼は走り「ターヘル・アナトミア」の原図と比較しながら詳細に調べられた。測定のための折り尺は、肩や乳房、お腹、腰、臀部とあてられ、

からだの各部分が詳しく実測されて記入されている。測定と云うことは、解剖学のもっとも基本である。

外部からは、口腔と恥部が見られる。桂川甫周は筆たつぷりと墨をつけ巧みな筆さばきでスケッチして行く。

今は冷たくなった柔肌を観察すると、玄白はメスを咽喉もとに当てがいグサツと突き裂すと、そのまま、むっちり丸いふくらみを見せている乳房の谷間をとおり若い女の弾力ある抵抗を感じつつ、正中線を切り下って行った。

白い肌が真二つに左右に切り裂かれると、黄色い脂肪がその厚い層を見せ、その奥に赤い筋肉がのぞいている。次第に切り口は大きな口を開き初める。下腹部の切腹の切り口まで一気に切り裂いて、玄白は一息ついた。胸から腹部にかけて逆T字型に大きく柔肌は切り開かれた。

厚い凝脂―お絹の美しい曲線美となだらかな起伏をつくっていた皮下脂肪をつけた皮膚は左右に開かれた。その下に赤黄色の筋肉が内臓を保護して、筋膜に包まれ光を放っている。

玄白は、内臓に傷をつけない様に、正中線

に添って切り裂き、皮膚に重なるように左右に開くと、その下の内臓がパツと陽の光の中に姿をみせた。

これが人間の生命の源泉なのである。美しく清らかなお絹の生命の火をともし続けて来た神秘的な内臓が、いま十個の妖しく輝く真剣な眼の下に、その全容を見せたのである。

切腹の苦痛に身悶えし、美しい顔は歯を喰しぱり生贄の苦悶を表情にあらわしているが自分の胸や腹の内部が遂に医学者の眼の前に隈なく、その姿を曝し満足に思っているのであろう。

腑分に魂を奪われ無情の刃を、お絹の柔肌に当てていた玄白は、ふとそれに気づき、傍らにあった白布を優しくお絹の顔面に被せてやった。

小塚原刑場における腑分時とは、解剖学的な知識も小学生と高校生位の差がある玄白らであった。「ターヘル・アナトミア」を傍らにして、内臓はとりだされ、次々と調べられて行った。翻訳によって得た知識は、内臓を調べる要点を自然に教えてくれていたのであった。

手際よく切り取られていった心臓や肺、胃腸、肝臓等々が用意の盆に盛り上げられて行

く。庭一面に、血と内臓の生臭い匂いが漂い
台の上に横臥えられた全裸の処女を取り囲ん
で無惨な腑分の図を当時の市民が垣間見たら
きつと驚いて腰を抜かしたことであろう。仏
教で云う地獄そのものの図であった。

良沢の広大な屋敷のよく手入れの整った樹
木の生え茂った庭の片隅、この美しい緑に包

まれた大自然の中でお絹は医学者の手で腑分
されつつあるのだった。血の氣を失った白い
柔肌は緑に映えて美しく、胸腹部だけが次第
に赤い虚しい空洞を形成して行き、痛ましい
姿を見せはじめた。

内臓が盆に盛られると手分して重さを測る
もの、長さを測るもの、スケッチする者等々

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mファン待望の超傑作集

Mフオト
最新作

M場面決定版

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組
八組全部にて

二〇〇〇円
一三〇〇〇円

裸女二人の尻の下

略号
(まふ)

遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗っ
かってゆく、全裸の美女二人から責められ
る幸福なるMモデル男の生感。

二女の戯むれと男

略号
(まも)

美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷
いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻
の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

略号
(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に
跪いたM男は、必死の抵抗も空しく縄で厳
しく縛られてゆく甘美な過程。

男馬を乗り潰す女

略号
(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイドゥ
ドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、
勝気な二人の美女から辱められる。

痛烈ムチのご馳走

略号
(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女
にとつては恰好の弄び道具である。男の肌
にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

略号
(まむ)

いくら痛めつけても喜んでいゝM男に対
しては、最後の止めとして遅ましい太股に
よる首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

略号
(まり)

女の肌にかくにつけていたパンティを頭
にかぶせられ、口に押し込まれても、縛ら
れている男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

略号
(まみ)

肉づきのよい二女の臀の下に押し潰され
た男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をい
やという程嗅がされている。

と忙しさを増してくる。一週間も十日もか

らなければ究めつくせない人体構造を一日た

らずで調べようとするのであるから、休む暇

もなく先が急がれた。今日ならばホルマリン

やアルコールなど適当な固定液に入れて保存

し、後程ゆっくり調べる事ができるが、当

時はそんなことは想像も及ばなかった。しか

し、首絞を保存するために首桶に酒精を入れ

ると云うことは早くから行なわれていたので

保存法を知らなかったと云うのではない。人

情としても、当時としては保存するなど云

うことは忍びなかったのである。

短時日で行なう腑分であり、解剖学が進ん

でいなくなったので神経や血管はどうしてもお

ろそかになり、内臓に重点がおかれたよう

である。

玄白は腎臓が露出されると、いよいよ下腹

部に移った。

とりだされた弾力に富む子宮や卵巣、そう

して花の蕾は、玄白の手で盆の上に安置され

た。淡紅色の可愛い臓器は恥し気に、しか

し、その愛らしい姿を誇るかのように長々と

光沢ある姿を横たえた。

その姿を見ながら、いまは亡きお絹の清ら

かな姿を思い浮かべ、愛情のこもった優しい

その態度や言葉を懐しみ、万感胸にこみ上げるものがあつた。その女としての本体が、お絹の女としての全ての面をつくっていた根源が眼の前に静かに横たわっているのである。

こうして、お絹の生活現象を支配して来たすべての内臓が弾力にみち、張り切った白い柔肌から脱して冷たい盆の上に並べられているのである。もういまや、その面影はどこにも認められず虚ろな空洞が不気味な姿を見せていたのである。

この場合の解剖においても、お絹の原型もとどめぬほどの詳細な解剖はなされなかつた。美しい顔や身体の輪郭も消失してしまうような筋肉や脈管、神経の研究は遠慮され、腕や脚、臀部等も縦に深い切開創がいれられその切り口から内部の模様を見る程度におさまられた。

朝から昼食も抜いて夕方まで解体研究が続けられ、現在の解剖学から見れば余りにも不完全な粗雑な解剖が行われた。しかし、当時の玄白としては満足し喜びに満ちた収穫の多いものであつた。

解剖が終ると内臓は、もとの位置におさまられ、玄白の手で切り口は縫合された。お絹の役目を果した貴重な肉体は、良沢の手で白

装束を着せられ花にうずまつた。

あとがき

このお絹の解剖は、翻訳事業を行なう玄白らを力づけ前途に光明を与えた。女の身で立派に下腹部を掻き切り、切腹死することにより、その身を解剖に捧げて死んでいったお絹の気持ちを察すると余りにも痛ましく感じられ、その死を無駄にしたくないと云う気持ちで先が急がれた。

この翻訳の最大の功労者である前野良沢はお絹の肉体を解剖すると云うショックな事件以来、人との交わりも絶って、その日々の生活の樂しを翻訳に捧げつくすほどの執心ぶりを示した。その成長を樂しみにして愛しんできた唯一の養女お絹の死は、彼から一切の樂しみを奪い去つたのであるから無理もなかったであろう。

安永二年（一七七三）の一月、玄白はひとりで「解体約図」を出版し、このなかでオランダ解剖学の大要を述べている。これもお絹の死を無駄にしたくない、少しでも早く訳書を世に問うて医学の発展のために役立たせたいと云う心の焦りもあつたのであろう。

安永三年「ターヘル・アナトミア」の翻訳

事業は完成を見た。玄白は、その間に原稿を十一度も書き直し、読み易く、また記述に間違いのないものにするための徹底を期したのであつた。「解体新書」は全四卷二八編に細分され、各編の表題は解体大意・形体名目・格致・骨節分類・骨節・頭及皮毛・唇口・腦髓及神経・眼目・耳・鼻・舌・胸及隔膜・肺・心・動脈・血脈・門脈・腹・胃腸・下隔膜及液道・大機きり里爾・脾・肝胆・腎及膀胱・陰器・妊娠・筋からなっている。

解剖図は、小田野直武により毛筆で克明に複写された。この訳本の作者については、第一に前野良沢の名をあげねばならないが、訳者としても名をあげてを辞退したために良沢の名前は出てこず、玄白が訳書として後世まで名を残すこととなった。即ち杉田玄白の訳、中川淳庵の校、石川玄常の参、桂川甫周の閲ということになっている。

「解体新書」の刊行なり、墨の香も新しい翻訳書がとどけられたとき、翻訳事業に参加した者全員が良沢の家に集まり長い間の苦勞をねぎらい刊行を祝い合つた。この部厚い解剖の書物は、真っ先にお絹の仏前に供えられ、無事大事業の完了した喜びを報告し、お絹の冥福を祈つたことは云うまでもない。

〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身厳重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しほり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しほりと浣腸器	(玉田)
G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しほり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しほり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)
G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカパー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胸絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)
G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に厳重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺禪巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

賈作芳野眉美氏の優雅な生活

芳 野 眉 美

L

芳野眉美氏とコマネズミとマミとサクラがザコネをしていると、ホントはよくばりな彼がマミとサクラを両側に抱いて寝ていたのだけど、礼儀正しいコマネズミはベッドの下で寝ていたのだけど、そこへ、なんということであろうか、芳野眉美氏の愛人（イトシイヒトと読んで下さい）のお萩が訪問したこと。そのショッケな事件に就いて。

午後の五時に、午前じゃないよ、午後の五時に、ヨモラ朝刊をひろげて、夕刊じゃないよ、朝刊をひろげて、政治面——といえば、平凡パンチに、世界のおパンティ四十枚のフ

オトがあったでしょう。あれ、よかったな。さっそく壁にはった。平凡パンチはヌードフオトがあるから、それだけ買うのだけど、彼は何よりも誰よりもヌードが大好きだから買うのだけど、そのヌードフオトの裏側のフオトがおパンティだったのさ。ヌードばかり見ているから、裏面はあまり気がつかない。彼は、裸女といえば、かならずヒックリカエス良い癖があるから、いつでも、ヌードフオトのうしろを覗いては、ラクタンしているのである。

そこでだ、何故政治面を読んでいた彼が、パンティを連想したかというと、これはかならずしも政治学的問題でも、哲学的問題でもないのである。女性のおパンティは、男性と

違って、前が、ネ、割れていない。割れているのは、おパンティでなく、ネ、その下なのである。

ところが、である。四十枚の世界のおパンティのうち、なんとしたことか、神のいたずらか、一枚だけが、その重要な部分において、右と左にバイバイをしているのである。

ベトナムのおパンティ。ホント。

なんとヘソまがりな——そうだ、ヘソといえば、おヘソに保険をかけている美女がいるんだね。その名はソニア。ヘソ踊りで有名なエジプトのダンサー。保険会社はイギリスロイド社。毎日新聞の外信部は、テレビの国際事件記者でもおなじみだが、ケンイがあるからこれは正確な記事である。

例えば、ビートルズの声は、声ですよ、なんと十五億円である。

ソニアのおヘソのゴマをとって、指輪にしたい。ワンカラットはあるであろう。

彼はヨモラ朝刊をひろげて、政治面は読んだことがないから、すぐ社会面をひろげてそれでも生意気に東京大学の学生なみにマンガを読んでいると、誰か、アパートのドアをノックする音がして、

「あなたあ」

という鼻にかかった甘い声がした。

これでいい、やっと本文になった。ウン。

「あなた、あけてよ」

「どなたですか」

彼は女人には弱いのである。

「どなた、だって、いや」

「いや、っていったって、誰だかわからねえよ」

「いじわる」

「早くいえ」

「あなた、可愛い愛人よ」

「俺には愛人がたくさんいるんだ」

いそがしい師走だっているのに、こんなノンビリしたのを書いてるんだから、彼は、まったく幸福な男だよ。

「萩子よ」

「えっ」

「ねえ、あけて」

「大変だ」

と彼は叫んだ。

「サクラ、起きろ」

サクラはスキヤンダルを着て寝ていたのだけど、これはシャネルの五番を着て寝ていたマリリン・モンロウの真似なんだけど、冬でも裸のほうがあたたかいからといって、スキヤンダルにしているのだけど、年中裸じゃねえか、とにかくサクラは、スキヤンダルが好きだから寝るときは、いつでもスキヤンダルなのである。スキヤンダルは十五ccで七千五百円、ウイスキーのストレートダブルのグラスが六十ccだから、高い香水だな。ああもつたいない。そもそも香水の最高のつけ方は、始めチョロチョロ中パッパじゃない、肌に直接ふきつけることで、全身につけるのがより効果的であることはいままでもないが、特にだ、ネ、女性の神秘的な泉にふきつけられ、だ、体臭と香水がミックスして、その人特有の匂いが発散されるのである。

ルイ十五世の愛を奪ったマダムデュパリや玄宗皇帝を破滅させた楊貴妃は、リュウゼン

香でセンジョウしていたというではないか。男は女性の上品な美しい匂いには弱いのである。性的に昂奮するのである。しっぱなし。

サクラの体臭もすばらしいんだ。特に下はいいなあ。いつまで鼻をピクピクさせているんだよ。だから、キャバレーに行っても、お鼻のお穴が大きいわねっていわれるんだよ。おめえ、布団にもぐってばかりいるんじゃないか。だからヘアー・スタイルが短いんだって。アブラは嫌いだから、八百円もかけてアイパーをかけているんだと。枕はこっちだよ。とにかく、彼は叫んだ。

「サクラ、萩子だ」

「サクラとハギで、ブタよ」

彼の右手と右脚を占領していたマミが、のんびりした声でいった。

「あら、サクラとフジが、ブタよ」

と彼の左足と、その、ネ、まあ、書かなくてもいいよね。わかるよね。

「藤じゃない、萩だ」

彼はどなった。

「いつまでたっても、おぼえないヤツラだ」

「朝食はブタかい」

とコマネズミがベッドの下から鎌首をもたげてチョロと舌をだした。

「ポークソティにしてよ」
「違う」

と彼は三度、みたびどなった。

「ブタじゃない、お萩だ」

「オハギか、今日はオボンかな」

「違う」

「違うって、今そういったじゃんか」

「オハギ、好き」

とサクラが彼にキスしながらいった。

「マミも、オハギ、大好き」

とマミがのんびりした、甘い声でささやいた。

「わからねえヤツラだ」

「そうかしら」

「フアフアフア……」

「なによ」

「キスするのやめろ、話せねえだろう」

「だって」

「俺はだ、お萩が来ていると、いっているんだ」

「なんだ」

「大変だろう」

「何が」

「お萩は、俺のことを、愛人だと思っているよ」

「サクラも、あなたの愛人だと、思っているわ」

「マミも」

とマミが……

「シララップ」

いそいで毛布で身体を包んだコマネズミが山高帽子をかぶって、ドアの鍵をあけた。コマネズミは、毛布の下はサクラのダテマキを改良したおエッチチュウだけである。これは、あまり優美なカッコではない。

「どうぞ」

「おじゃまします」

衿と袖口のカフスにミンクを配した、深みのある紺のスエードのゴージャスなコートを着て、おしとやかな上品な萩子がしずしずと入って来た。

「お早う御座居ます」

萩子はキャバレーのホステスである。

その時、彼は、いばって、

「馬上にてゴメン」

というとしたのだけど、よく考えてみると、いちいちゆっくり考えるのが彼のヨイトコロで、馬上でなくて、馬下だったので、つまり、だ●サクラが馬上だったんだな、で、サクラの偉大なオッパイで胸を圧迫されて、

苦しい息の下で、
「紹介します」

と萩子を面々に紹介しようと思ったのだけど、

「ダーリン」

いきなり萩子にキスされて、彼は、息苦しくて失神したのである。

彼は、絶対モテナイ男だから、こんなウソパチばかり書いて、一人で喜んでいるのである。これは悲しむべき現実である。

「親愛なるコマネズミ君よ」

と彼はその毛布の男にいった。

「お願いがあるんだけど」

「はあ」

「せめて、お茶ぐらい、飲みたいのだけど」

「あの……」

「お金だろう」

「ええ」

「サクラのおパンティの中にあるよ」

「おパンティ」

「そう。サクラは、おパンティにチップ用のポケットをつけてある」

「あら、いやだ」

と萩子が顔をあからめた。

「カマ金魚」

とサクラが眼をむいて萩子に囁みついた。
そろそろあぶなくなってきたな。

「何処にあるの、そのスペシャルパンティ」

「おパンティはベッドの中に決まっている」

と彼はイゲンをもって答えた。

「サクラの足のあたりを、さがしてみな」

「いや」

とまだ彼からはなれないマミが、のんびりした声で叫んだ。

「それ、わたくしのよ」

「失礼」

「サクラサンのは、もっとオオキイわよ」

「あれ、マミは、いつ、脱いだんだ」

「いやだなあ」

とマミが頬を染めて答えた。

「脱げ、脱げ、っていったのは、だあれ」

「俺か」

「そうに決まっているじゃない」

「そうかねえ」

「おぼえていないの」

「おぼえてねえな」

「じゃマミを抱いたのも、おぼえてないの」

「酒を飲みすぎていたからな」

「あら」

マミがコマネズミを振り返って、

「マミを抱いたの、コマネズミサン」

「へへえ」

「何がへへえだ、この野郎」

「申し訳ない」

「おめえは、マミ処女保存会の会長だろう」

「うそつけ」

「ホント」

「信じない」

「あなたと違います」

「ホザいたな」

「何もしてないわ」

とマミがまじめな顔をしていった。まじめ人間の顔は、きつとこんな顔のことをいうのだろう。

「コマネズミサンは、そういう人よ」

「そういう人か」

「そうです。ペッティングだけです」

「どの程度」

「プレイベートな問題に関しては、お答えすることは出来ません」

「勝手にしろ」

「これを称して、ブルーセックスという」

「わかった。信じますよ」

「イッチョウ、ヤルカ」

とサクラがにっこりしていった。サクラは

萩子を前にして、モウゼンとハッスルしたくなったらしい。くだらねえシットをしているより世の女性はすべてこうありがたいものである。彼が結婚したら、ツレアイをサクラのように教育することであろう。そんなことで、きつこないよ。反対に教育されるのがオチだ。とにかく、彼はやさしくて馬下なんだから。

「またするの」

とコマネズミがサクラのおパンティを手にぶらさげながらいった。

「イッパツヤルカ」

「アホタレ」

やっとこ、彼とサクラとマミとコマネズミは、四人共飛び起きたのである。起きないことには、萩子の坐るところがないのである。

M Phallus Vrugulasus.

それが唯一の彼のズボンであるところのよれよれのGパンにすんなりした両脚を押し込み、ボディビルできたえたことのないやさしい肉体にめずらしく新しいピンクのセーターをひっかぶり、靴下なんていう高級品は持っていないから素足にアパートのトイレからおそるおそる盗んできた木のサンダルをひっかけた彼のあとを、マミにサクラにお萩に、それと、黒の燕尾服に身をかためた山高帽子のコ

マネズミが、金魚のナントカ（彼はオソダチがとて面白いそうだからビロウな言葉は使ったことがないのである）よろしく、ウインナソーセージみたいにつながって、スモッグの夜の街を歩いていた。

彼の細長い綺麗な左手の小指には、俗説によると彼の小指は短いのであるが眞実は今書いた通りであるが、プラチナ台のダイヤモンドの指輪がしてあると思ったのは間違いで、カーテンの細い輪がひとつ、はめられてあった。ダイヤモンドはお萩の中指であった。質屋に持っていたらいくらかすかな。

お萩がミンクをあしらったゴージャスなコートなどを着込んできたものだから、カチキなサクラは、ボデーにぴったりした厚手のシルクのカクテルドレスをまとい、ダチヨウの羽毛のついたまっ白なストールをあざやかに流し、黒のストッキングと黒のハイヒールの配色も悩ましく、彼の左手をグッと握っていた。サクラって、ホントにニギルのが好きなんだ。

濃紺一色にまとめたお萩は、彼ハ私ノモノヨ、てな顔で、つつましくやさしく彼の右側に半歩おくれ寄添っていた。

そのうしろを、コマネズミと肩をフレなん

ばかりにしてポコポコ歩いているのは、マミなんだけれど、そうなんだけれど、揚げ羽のちょう結びにした袋帯に、ケンランゴウカな長振り袖に、これまた時代がかったポックリで七五三と間違えているんじゃないかな。

かくして五人の男女は、これから、お萩の友人の結婚式に参列するのではなく、たんなるありふれたバーに行く途中であった。

そこへワンマンカーが来たから、うしろのドアから彼が乗ると、四人のソーセージも乗ると、お客さん前から乗って下さい、というから、一同、あわてて降りて、前のドアに廻ったら、一人二十円いただきます、というから彼はうしろを指さして、マミもうしろを指さして、お萩もうしろを指さして、コマネズミもうしろを指さして、サクラもうしろを指さして、結局、知らないオジサンが、五人の分百円を払ってくれた。サクラがその豊満なおっぱいをちらっと見せたに違いない。

次のバスストップで彼等は降りた。だからそんなに遠くはなかったんだ。お萩の入ったバーは「アジサイ」とあった。断じて「よし」ではない。

カウンターに坐るなり、といったって、カウンターに坐ったのではなくて、カウンター

の前に並べてあるストールに坐ったのだよ、日本語は省略が多くてむづかしいね。

「ママの名前、あててみましょうか」

コマネズミの調子のいいこと。ママが美人だと意外に雄弁になるのは彼ではなくて、実のところコマネズミ氏なのである。彼は内気でママの顔すら見られないのである。だから話をするなどとはもってのほかである。彼はバーの床ばかり見ては嘆息をついているだけなのである。

「あたるかしら」

と美人のママがビールを注ぎながらコマネズミにいった。

「お滝さん」

「残念でした」

「違った」

「ミツコ、よろしく」

「九千四百円」

「ママがかい」

と彼がそっとコマネズミ氏にささやいた。

「そう」

「ヒトバン」

「——」

「ホテル代も含めて」

「馬鹿だな」

「なんでよ」

「ミツコって、フランスのゲラン社の香水だよ」

「早くいえ、バカ」

クスッとママが笑った。

「ミツコは、三十ccで九千四百円もする」

「お相手しましょうか」

とマダムミツコが静かな微笑を浮かべて彼にささやいた。

「よろしく」

その瞬間、

「イテェ」

彼はストールから飛び上った。

「あら、どうしたの」

「いえ、別に」

サクラが彼のモモをいやというほどツネったのである。彼の肌は生まれつき弱いから、ツネられると青いアザになり、一カ月は消えないのだ。彼のま白きモモはアザだらけである。キスマークも右に同じ。ホント。

「どうしてわたくしがお滝さんなの」

とママがコマネズミにきいた。

「ママ、アジサイが好きなんですよ」

「ええ、大好きよ。だから、バーの名前にしたの」

「アジサイの学名ですよ」

「学名」

「ええ」

「お滝さんがかよ」

と彼がまたちょっかいをだした。

「ウイ」

「もう酔ったの」

「違うよ、イエスだ」

「クリスマスは終わったよ」

「とにかく」

とコマネズミ氏は叫んだ。これはめずらしいことである。いつも腹がへっているからあまり大声をだしたことはないんだけどな。

「アジサイの学名は……」

「お滝さん」

「そう。H. M. Var Otaksa」

「へえ」

「命名者であるところのシーボルト先生の愛妾がお滝さんだったんだな」

「二号の名前をつけたの」

「そうだ」

「イキだねえ」

「キツネノタイマツ、というキノコ、知っているか」

「知らねえな」

「その学名をおまけに教えてやるよ。――」

Phallus Vriularius」

くすつとマダムミツコが笑った。ミツコのこのラテン語の意味を知っていたらしい。俺は知らない。誰か教えて下さい。ママが笑ったので、お萩がハンカチで口をかくして、ホホ、とつつましく笑った。

「キノコがたべたいなあ」

とママがのんびりした声でいった。

サクラがゲラゲラ笑いだした。

まったく、この五人は、各々勝手なことを考えていて、よくもまあまとまっていられるものだ、と、感心するのである。

彼の左側にサクラ、右側にお萩が坐り、マミは、彼の膝の上に、チンマリ腰掛けてバナナフィズを飲んでいた。とにかく、だ、彼はいつでも三人の美女集団の中心にあった。これは、トモイイキモチである。サクラサンはサクラフィズを飲み、お萩さんは、なんでもいいから飲んでくれ。何を飲んでも、彼が支払うことは絶対無いのである。ケチな彼はスポンサーがつかないと飲みに行かないのである。

ところで彼は、他人の金であるから、高価なオールドペアのストレートを飲んでいた。

左手はサクラの、右手はお萩のやわらかいし
つとりとした手を握っていたから、ときどき
テキトウな頃に、マミがウイスキーグラスを
彼の口に運んでいた。この点、マミは実によ
く気がついてよろしい。

彼は、オールドペアじいさんが大好きであ
る。この老人、百二十才でうら若き娘を強姦し
と書いたって、彼が強姦するのが好きなんじ
ゃないよ。法律に触れることは絶対やっては
いかんのである。これは、法治国の市民とし
てのギムである。老人、つかまって刑務所に
十八年ぶちこまれ、死んだと思ったら生きて
いて、百二十才で美しき乙女と結婚し、あき
れたことに子供までつくりやがって、その後
末永く若い女房のお尻を撫でながら、やっと
百五十二才で昇天した。精力の権化みたいな
老人なのである。この生命力は手本にしなけ
ればならない。

彼の膝上でマミが可愛いお尻をモジモジさ
せながらささやいた。

「えっ」

「——」

「なんだよ」

「——」

「はっきりにえよ」

「マミはおトイレに行きたいのよ」
とサクラが代って彼に説明した。

「行けばいいだろう」

「それがだめなのよ」

「なんで」

「坐われないのよ」

「ああ」

ケンランゴウカな長振り袖で身体中を締め
つけられているので、マミはかがめないの
である。

「吸ってあげたら」

とサクラがいった。

「オナカが一杯なんだ」

「えんりょしなくてもいいのよ」

「馬鹿、ママに聞えるじゃねえか」

「吸うって」

とマダムミツコが彼にきいた。

「マミちゃんの、何を吸うの」

「オッパイ」

「違いますよ、ママ」

とコマネズミが……

「シャラップ」

「マミ、でちゃう」

と泣きそうな顔でマミが彼にうったえた。

「しょうがねえなあ、来いよ」

彼はマミを抱きかかえると、重くて床に坐
りこんじゃうから、マミを促してトイレに入
った。

「裾を持っていてやるから、中腰でやれ」

キキイッパツであった。マミが彼のいいつ
けを守って、おパンティを穿いていなかった
からよかったものの、おパンティを穿いてい
たら、それこそ水びたしになったであろう。
よかった。よかった。まったく、おパンティ
はじゃまだよ。

「紙」

とマミが手をだした。

「フッテオケ」

「はい」

トイレから出ると、

「おいしかった」

とサクラが云った。

「飲みやしねえよ」

「ママの、吸ってほしいわ」

とマダムミツコが、静かな微笑を浮かべて

彼に云った。

「そんな愛情のこまやかな人に、会ってみた
かったの」

「——」

「もう一度トイレにいらして」

マダムミツコの女体は、それはそれは、すばらしかったよ。これはあとの話だけど、ミツコ、その瞬間に、

「おハギに悪いわ」

って云っていた。ウン。

樹液が豊かで熱くたぎっていて、忘れられない。

——いまごろ、どうしているのかしら

せつない想いに ゆれる灯かけ

西田佐知子の八赤坂の夜は更けてVいいねえ。

——恋しい人の名を 囁けば

逢いたい気持は つのるばかり

「ママね」

とマダムミツコがお萩に云った。

「この頃、便秘なのよ」

「あら、美容によくないわ」

「そうなのよ、困っているの」

「便秘用の食事を、お教えしましょうか」

とコマネズミ氏がおもむろに云った。ヘンなことをよく知っているヤツだ。

「パンに蜂蜜をぬってね」

「パンはあまり好きじゃないわ」

「がまんしてたべなさい。美容のためです」

「そうしようかしら」

「その上に、りんごや、焼きいも……」

「ヤキイモは、おめえが、好きなんじゃないか」

「いやだわ」

「静かにして下さい。二人とも。ちっとも話が先に進まない」

「進まないのが、このヨミモノの特色なんだろう」

「いいから、だまって。とにかく、焼きいもの薄い輪切れをのせてたべれば、たちどころに、イッパツ」

「そりやイッパツだろうよ」

「信じられないわ」

「信じて下さいよ」

「便秘って、重くて、いやあねえ」

「いいですか」

とママネズミは、またまた大声をあげた。

「パンとハチミツとヤキイモですよ」

「それと、リンゴね」

美女が便秘の話をするのは、ホントに美しいことである。

お萩をバーに残して、バー「アジサイ」を出ると、すでにスモッグは夜の街をすっぱりと包んでいた。

「スモッグ」

彼は感嘆したように叫んだ。

「先に帰っていてくれ」

重々しく三人に云った。

「俺は、もう少し、一人で歩きたい」

「早く帰って来てね」

サクラが、うっとり彼の顔を見つめながら云った。

「寝ないで待っているわ」

「お風呂にいつて待っているわ」

「うむ」

スモッグにけむる夜の街を、にぶくにじん

だライトが幾重にも交錯していた。

N 芳野眉美氏の尾軀骨は、お萩のピテ

イコツより大きいということと、し

かしながら、芳野眉美氏はオサルサ

ンより美男であるということ。これ

は重要なことである。

三人にないしょで、待ち合わせていたホテルでお萩と逢うと、始めから、そのつもりだったのだけで、

「副腎がしびれる」と絶叫した。

「おい、今、なんていった」

「わたくし、何か、いったかしら」

「フクジンがなんとか……」

「あら、やだ」
それからまもなく、また、再び、お萩は絶叫した。

「副腎が流れるわあ」

「ちよっとお聞きしますけどね、その、しびれたり流れたりするモノはなんだよ」

「アドレナリン」

「ますますわからない」

「ダーリンに抱かれていますとね」

とお萩が気持良さそうに答えた。

「わたくしの副腎からアドレナリンが激しく分泌されるのよ」

「そういうものかねえ」

「なあ、甘美なアドレナリン」

「そのアドサンが流れるといいの」

「わたくしに喜びをあたえてくれるわ」

「エクスタシーね」

「そうよ。アドレナリンの別名は、喜びのホルモンというのよ」

お萩は、何も着ていないお萩は、一糸もまとっていないお萩は、全裸のお萩は、クドイネ、彼の馬上にて絶息した。

彼って、女の上になったことがないらしいな。いつでも女が上じゃねえか。ねえ。十分間休憩。水を飲む。うまい。

ところで、彼は、せっせと浮気をしているんだけど、大砲を盛んにブッパナシしているのだけど、人の奥様にせっせとラブレターを書いているのだけど、まだ誰からも、

「あなたの子供よ」

といわれたことがないのである。

彼は、無精子かなあ。心細くなったな。誰かためしてくれないかな。

さて、三回目の進行中、

「あれ、あった」

とお萩がお萩にお萩お萩と聞くと、

「ないわ」

「できたか」

「そんなにニンシンが気になるのなら、いっ

そのこと、結んでしまったら」

こともなげにお萩がいった。

「結ぶ」

「パイプカット」

「――」

「精管結緊よ」

「注射されるくらいなら、死んだほうがよっぽどましだ」

「弱虫」

「大丈夫。俺は無精子だから」

「そんなの、いばれないわ」

彼はアパートでお萩の顔を見たたん、お萩がメンス前後の興奮状態であることを見抜いていた。こんな感は、彼はすぐれている。

「ダーリンの子供が生みたい」

「よせよ」

お萩は赤い舌をペロッとだした。

「うそよ」

彼はお萩と逢曳きする時は、いつでも、先に二人でゆっくりお風呂に入ることになっている。オマンジュウはフカスものである。おわ

かりかな。

今夜は、二人は、スモッグの夜を楽しんでいるのであるが、二人の関係は、夜より、むしろ昼のほうが多いのである。

お萩のアパートは舟底平らの天井といい、落としがけを省略した床の間といい、なかなかモダンな和室なのだが、その上、南向きで日の光が部屋中に照りつけ、冬でも暖たかいのである。

寝ているときは、雨戸を閉め、窓のカーテンもしめて、なかなか用心深いのだが、奇妙なことに、昼、彼を迎えようと、お萩は雨戸を開け、カーテンをさーと寄せてしまうのである。そして、明かるい部屋の中で、お萩はスッパダカになるのである。

「あべこべだな」

と彼が笑うと、

「科学に弱いのか」

ときた。

「SEXは、日光の下ですべきなのよ」

「そうでしょうか」

「日光が強くなるとね」

「アツイですね」

「馬鹿、日光が強くなるとね、紫外線や可視

光線で、脳下垂体が刺激されて、ホルモンの

働きが活発になるのよ」

「それは知らなかった」

「早く、服を脱ぎなさい」

「はい」

お萩の尾骶骨は、彼のより小さいな。

やせてほっそりした身体に似合わず、お萩

の乳房が豊満なのは、決して彼の子供をニン

シンしているのではなく、流行のバストビル

のせいである。即ち、豊胸術。

切開手術で、ラバーシリコンを挿入したの

だが、大きく美しい。日本の整形外科は世界

一である。小さくしたいと思えば、このラバ

ーシリコンを取り出せばいいそうだ。

お萩は高価な代償を払って、ひらたい少年
のような胸を、見事な豊胸にしたのである。

そして、豊満は乳房を武器に、キャバレーの
ナンバーズにのしあがった。男性のゆた
かな胸に対する憧憬はつきない。

彼は、お萩の政治力と、たくましく生命力
に、心から敬服しているのである。

敬服したところで、彼は、お萩の胸に抱か
れて、スヤスヤ寝息をたてていた。

神経性尿意頻数症

翌朝、お萩は昼過ぎにホテルを出たけれど
彼は、夜明けまでお萩に責められて、眠くて

しょうがないから、その前の夜もサクラに朝
方まで責められていたから、とにかく、デメ

金と間違えられてばかりいる眼が、いくらノ
ックしてもあけてくれないので、あきらめて

日が沈むまで寝かせてもらうことにした。

一人になると、すぐビールとウナギのお重

が三人前と、九竜虫が一ダースと一匹とどけ

られたが、これはお萩がいかによさしい心の
持主であるかを証明するものである。けれど

ね、どうして、こんなに腰や首が痛いのだろ
うね。

お萩は美容室に寄ってからキャバレーにで
るらしい。

さて、彼はおそるおそる朝帰り、じゃない
夜帰りしたのだけど、途中で本業のサンドイ

ッチマンをしているコマネズミ氏に会い、サ
クラがまだいるかどうかを聞いたところ、サ
クラはとうの昔に、といっても二、三十分位
前なんだけど、トルコに出動していて、ああ
助かった。

そこで、彼は元気よくアパートに帰ると、
これからまたヒトネムリするつもりだったの
だけど、それだけ彼はタクサンつかれていた
のだけど、マミが彼のベッドの上ではらばい
になっていた。

彼のいいつけをよく守って、チンマリした
お尻を露出していたのは勿論である。

ところが、お尻をムキダシにしていたのは
マミばかりではなかった。マミの隣りに、も

う一人の麗婦人が可愛いひらひらのついたお
パンティを片足にひっかけて、Z旗よろしく

くるくる廻っていたのである。

彼は、そこで、ホカホカした二つのお尻に
キスすると、

「ただいま」

といった。

「お帰りなさい」

マミはティッシュの帰りを待つ新妻よろしく
にっこりして答えた。

「ダーリン、キスして」

「今、したろう」

「もう一度」

彼は再びホカホカしたマミのお尻と、誰だか知らないけど、まっ白なお尻の中央に、即ち、その、ネ、なだらかな曲線が、そこだけ谷間になっていく、その中央に、大きなホクロも印象的な、裸のお尻に、うやうやしく力をこめてギュウツと、お接吻したのである。

「ウフ」

「くすぐったい」

二人の美女はともに身を縮めた。いったいこのヨミモノはいつ終るんだろうな。くたびれて、彼は眠くてしょうがないのにねえ。

「紹介しますわ」

とマミが丁寧な言葉で彼にいった。

「こちら、クラスメートの小鹿さん」

「サクラとハギとシカじゃ、またブタだな」

「ブタ」

「いや、なんでもありませんよ」

「小鹿淳子です」

片足に巻きついていているキンキラキンのおパニティをくるくる廻しながら、小鹿淳子は彼に挨拶した。

「よろしく」

「やあ」

「マミから、お話はうかがっております」

「いやあ、どうも」

彼は、それでもテレているのである。ここが彼のイトコロなんだ。

「女の子のお尻が大好きなんですってね」

「そうなの、お鹿」

とマミがにっこりして小鹿淳子にいった。

「だから、わたくしたち、お尻を、露出していましたの」

「それは光栄です」

「それで、おたずねしたいのですけど」

「はあ」

「どうして、女の子のお尻が、大好きなんですかの」

「それはですね」

彼は、男性を迎えて、血液がそこに集中したマミとお鹿のお尻を、右手と左手で軽く撫でながら、つまり、両手でサワリながら、

「つまり」

何が、つまり、だ。

まっ白で、とか、丸くて、とか、やわらかくて、とか、あたたかくて、とか、オッパイより大きくて、とか、とてもイイ匂いがしてとか、これ以上の枕はないだろう、とかゴチ

ヤゴチャいって、あら、ホントにさわりたくなっちゃった。オサワリバーに行つて来よう。ウン。

クラシックをききながら、女の子の裸のお尻を枕にして、マンガを読むなんてこれ以上の幸福はないだろう。

「今日は御相談に参りましたの」

と、お尻を彼にマッサージさせながら、お鹿もまたのんびりした声でいった。マミとつき合う人種は、すべてののんびりしてしまうらしい。

「きいて下さいますか」

「出来ることなら」

「そのほうの Authority とおききましたの」

「何かいいましたか」

「権威ですわ」

「ケンイね」

「わたくし、おトイレが近くて困っておりますの」

その時、お鹿のお尻のホクロがニヤッと笑ったような気がして、彼はマッサージをやめてしまった。

「母に相談しましたところ、気にしないほうがよいと申しました」

「そうですか」

「でも、考えまいとすればするほど、気になるって……ごめん遊ばせ」

「いえ、別に」

「ちょっと失礼」

「どちらへ」

「あの……」

「ああ、玄関の右側です」

「すみません」

「マミもおトイレ」

とマミも立ち上がった。

「馬鹿、あそこは一人で満員だ」

「だって、男の……」

「いつから男になった」

「だって、面白いからやれ、っていったのは……」

「……」

「シャラップ」

彼はやさしくお鹿にいった。

「どうぞお先に」

「失礼します」

そして、おトイレからもどったお鹿は、

「毎日が、不安で、不安で」

と涙ぐんだ。

「お勉強も手につかないのです」

「高校三年生でしたね」

「ええ」

「来春は大学ですか」

「父母は、せめて短大だけでも、と申し立てられます」

「受験勉強が手につかないようでは困りますね」

お鹿はうなづいた。

「お医者様に相談しましたか」

「いえ」

「どうして」

「はるかしくて」

「そうでしょうねえ」

死ぬほどはるかしい告白をしてくれたお鹿を、それだけ彼を信頼していてくれると思うと、彼はうれしくなって、

「ちょっと待って下さい」

彼は友達のクレイジードクターに電話をしたのである。ドクターはまだ医局にいた。

「その問題は、精神科でなくて神経科だな」とクレイジードクターはいった。

「同じじゃねえか」

「違うよ」

「まあいいよ。知っているだけ、わかりやすく話をしてくれよ」

「いつ頃から、そうなった」

「知らない」

「おめえじゃないのか」

「失礼な、俺じゃないよ」

「誰だ」

「絶世の美女」

「ゼッセイか」

「そうだ」

「ほ、ほう」

「ドクターよ、ずいぶん、ヒマなんだね」

「馬鹿いえ、いそがしくてたまらん」

「だったら、早く、話をしてよ」

「そうあわてるな。今、調べている」

「たよりにならねえなあ」

「医者がすべてを知っているとは限らんぞ」

「そうかよ」

「それはだな、神経性尿意頻数症というのだ」

「ヒンスウ」

「そうだ。不安情動が高まると、トイレにいきたくないになる一種の心身症だ」

「不安情動か」

「つまりだな、トイレにいきたくないという感情はごく自然だろう」

「自然現象だもな」

「そうだ。自然現象はおさえてはいかん」

「俺は、シゼンゲンショウには、とてもスナオだよ」

「スナオなのはいいんだが、あまりスナオすぎてだな、外出先でトイレのないような場所だ、もし、でそうになったらどうしようつまあ、こんなことを考えて、不安になってだ外出前に自然に尿意の無いのにトイレに行く癖がつくんだな」

「女は外でできねえものな」

「その美女、神経質になりすぎて、かえって不安をとりのぞくために、トイレに逃げこむようになったんじゃないかな」

「お尻にキスさせるぐらいだから、そう神経質にはみえないけど」

「なんだ」

「いや、こちらの話」

「絶世の美女の神経は、我々と違ってデリケートすぎるのだ」

「で、どうすればいい」

「そうだな、精神安定剤でも、飲ませるんだな」

「それだけ」

「あとは性格の訓練だ」

「クンレン」

「おトイレに、そうヒンパンにいかせなくす

ればいい」

「がまんさせるわけか」

電話箱を出ると、彼は薬局に飛び込んだ。

「おむつカバー」

若い女の店員が戸棚から赤ちゃん用を取り出すと、

「こちらは、アセテートのトリコットで、プラスチックのスナップが新製品になっております」

とか、

「こちらはナイロンで、スナップは金属製で御座居ます」

「赤ちゃんじゃないんです」

と彼はいった。

「あなたに合うのはありませんか」

「まあ」

とにかく、だ、彼は薬局を四五軒走り廻って、やっとこ大人用を発見した。

彼はアパートにもどると、にこにこしてお鹿にいった。

「さあ、おしめをしましょう」

「おしめ、ですか」

「お医者様がおしめをなさいって」

「でも…」

「なんですか」

「おしめじゃ……」

「そりゃアフレルかもしれないけど、そこはがまんしてよ」

「そうじゃないのです」

「違う」

「でたか、でないか、それが不安で」

「しょうがねえな」

「いいことがある」

とマミがいった。

「おむつ警報器をしたら、どうかしら」

「なんだ、それ」

「おむつがぬれると、ブザーが鳴るの」

「ブザー」

「ネコのぬいぐるみのお人形にね、ブザーが

かけてあるのよ」

「へえ」

「電極をおむつのぬれそうな部分にはさんでおけば、ブー」

「それでいこう」

「いやだわ」

「お医者様のいいつけです」

「はずかしい」

「マミ、それ、いそいで買ってこい」

ベッドの上に花模様の美しいおしめをひろげると、

「さあ、あんよをあげて」

にここにこしながら彼はお鹿にいった。

P コマネズミが帰って来ると、ベッド

の上にサクラとお萩が寝ていて、ベ

ッドの下にサクラの布団でマミとお

鹿が寝ているので、芳野眉美氏はい

ずこ、と問えば、マミは黙してかた

らず、おもむろに押入れに向かって

アゴをしゃくったので、唐紙を開け

ると毛布をかぶった彼が押入れの上

段で丸くなって寝ていたということ

と、結局、つまるところ、コマネズ

ミ氏も押入れの下段にマミとお鹿が

敷いていたアタカミのあるシート

をかぶって寝なければならなかった、

ということ。そして彼とコマネズミ

氏は人間なみに風邪をひいてしまっ

たということ。このことは、女性の

残酷性に関係が有る、と思う、とい
う事に就いて。

彼は、ますます腰と首が痛くなって、トウ
ブン浮気が出来なくなった。残念。

Q Memories of You

彼が、かならず神酒を飲むとはかぎらない
よ。

〔浣腸フォト新版〕

△山原清子が無類の浣腸マニア東
浦ひかるに施す力作浣腸写真▽

○浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(かね)

○百CCの溶液注入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(かと)

○グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(かて)

○シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(かた)

○イルリガートル

嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(かち)

○アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
略号(かの)

○イルリガートルの浣腸

大手札十枚一組 一五〇〇円
略号(かも)

○オシメを着用させる

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(むし)

○ゴム製カバー着用

大手札六枚一組 一〇〇〇円
略号(むに)

〔女相撲と女斗美写真〕

△湖畔女相撲(第一回)▽
モデル 大塚啓子、東浦ひかる

〔第一組〕 略号(すや)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

〔第二組〕 略号(すゆ)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

〔第三組〕 略号(すよ)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

△女斗美場面写真▽

〔砂浜での格闘〕
大手札十二枚一組 一〇〇〇円
略号(すえ)

〔叢で止めをさす〕
大手札十二枚一組 一〇〇〇円
略号(すう)

〔松林の中での死斗〕
大手札十二枚一組 一〇〇〇円
略号(すき)

〔責めフォト新版〕

○全裸強烈縛り
大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(なの)

○猿ぐつわにあえぐ
大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(なむ)

○真紅の腰巻をする
大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(なれ)

○膨大な臀部責め
大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(なに)

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

.....
 ^伊吹真砂子の巻^

『断層の女』

そして、梨花悠紀子のこと

辻村 隆

「断層の女」

瞬間の偶然が、過去の甘い追憶に、歳月の断層を束の間に埋めて、突発的に繋がる事が往々にしてある。

現在の読者の方は、伊吹真佐子を或いは御存知ないかも知れない。それ程に彼女は過去の人に違いなかった。しかし、川端多奈子に続いて、彼女が登場した前後の、昭和廿八年頃は、伊吹真砂子のグラビヤが、来る月も来る月も、奇クの巻頭を飾ったものだった。そして十年経って、私が一九六四年一月号『奇譚三十九夜物語』の第三十一夜第七十二話に於て、梨花悠紀子との、同性のSMプレイの一文をのせた時も、彼女に対しての反響は少

なかった。誌面の都合もあり、且つは又、私が編集部に送ったその時の五枚のフォトが、僅か一枚しか掲載されなかったのも、反響のなかった原因かも知れない。『三十九夜物語』自身、中にはフィクションも混えてあった関係上、事実を事実として認めてくれなかったのであらうか――。

伊吹真砂子のプロフィールは、正直にいった既に私の脳裡より消滅して、忘却の彼方にあった。その彼女に、私は都会の喧噪の巷の渦の中で、はからずも真正面から出逢う羽目になった。エロスの神は、時々、いたずらをなされる。そこで 私のカメラ・ハントが生れ

る。前置きが長くなった。現実の進行形に戻ろう。

忘年会には一寸早いですが、それを兼ねて一杯やろうと電話して来た、京都のT氏の、強つての懇望に、体の調子で飲めないからと一度は断わって見たものの、根が左キキの私のこと。洋酒かビールで雰囲気を楽しむうよといわれてはスゲなくも嫌やといえず、やや気乗薄ながら、京都へ出掛けることにした。不況不況といわれ乍ら、ボーナスの出た勢いもあって、年の暮の河原町は人の渦に包まれていた。土曜日のせいもあるのだらう。

京阪四条駅の改札口に、T氏は幾分待ちくたびれたポーズで私を迎えてくれた。

人混みを縫って木屋町へ向う。昼過ぎで、少し腹饑えをしておこうというので、彼の案内で、とある一角に入る。勝手知ったT氏について林立する飲食街の細い路をぬけて、ひなびた店ののれんを潜った。ここは利休定食というのが旨いそう。入口を入って、フト目についたのは、ここが勤皇の志士で捕われて拷問の挙句池田屋騒動の端緒となった古高俊太郎の邸跡であることだった。成程一風変った定食である。焼肴、とりの煮付、わけぎの酢合、ぜんまい、茹玉子などが、平たい塗の角盆にちよっぴりずつのせ、扇形にした、かやく飯がチンマリと真中におかれてある。それにこの名物のしる。所謂京都好みの量より質の、ままごとめいた定食だった。しかし味付はどれもこれも年季が入っている。京のうまいものの店の一つに数えられているのかも知れない。T氏はかなりの顔なじみらしい。「あれがコレを好きでネ——。出掛けた時は大概ここへ寄るんですよ」とT氏。

これでは何のことだか分らない。つまり美木乃々子の巻で紹介した。T氏の彼女(二号)的なK子という人——二号というより彼女といった方がおだやかだから、そう呼称するのだが)が、この利休定食をお好きだという意味らしい。美木乃々子が、T氏と彼女のプレイ振りを拝見し『拷問刑罰史』とS子の巻では、S子即ち南志津子のプレイを、この彼女の私宅で行なったのは既に御存知の通りである。

そこで、私達の話は、水の流れる様に、その方へと自然話題が集中する。

「彼女とはその後どうなの? 益々プレイは花盛りじゃないの?」

「K子との事だろう。何ていっていいかな、殆んどやり尽した感ありだよ。しかし昨日の朝は凄かったんだ。本当に辻村さんを電話で呼びたかったネ——」

T氏の瞳は輝やきを帯びて来た。こんな時はきつと凄いプレイを想い出しているに違いない。

「じらさずに白状なさいよ」

「申しますよ、申しますよ。あんたも御存知の通り、一昨日の十二月十六日の夜から凄く寒波襲来で大雪となっただろう。霏々と降りしきる雪を自宅で眺めていたら、フト思いついたんだ。このチャンスに、K子を雪責めにして見ようかね。思い立つと矢も楯も耐らな

いが、夜遅くから、カアちゃん(T氏夫人)が、おいそれと出してくれない。心は雪責めに飛んでいるが、まあまあ、その夜は我慢して、夜が明けりゃ、一面の銀世界、しかも雪は尚も降りつづいてるとくるネ。この寒いのに御精の出ることと、皮肉か本心か知らないが、カアちゃんの言葉を背に、朝早く家を飛び出すと、すぐさま車を拾って、K子の許へ駆けつけたネ。子供を学校へやって、ホッと一息、K子はホームゴタツに入って新聞を見ていたが、私のこの突然の訪問に不審の眼——。何しろ午前八時過ぎから無理もなかった。いつもならここを出る時刻だ。すぐ風呂を沸かす様に私は命じた」

T氏の話は佳境に入ると、つい声が大きくなって弾んでくる。狭い店の中で、私はヒヤヒヤする。紺がすりに、赤いたすきの店の娘が盆を持って、耳をすましている様に思われる。注文した焼蛤がくる。私はT氏にビールをつぐ。

「もう少し小声でいこう。で、どうなった」

心なしか彼は顔を寄せて来た。場所柄を自分でも気付いたのだろう。

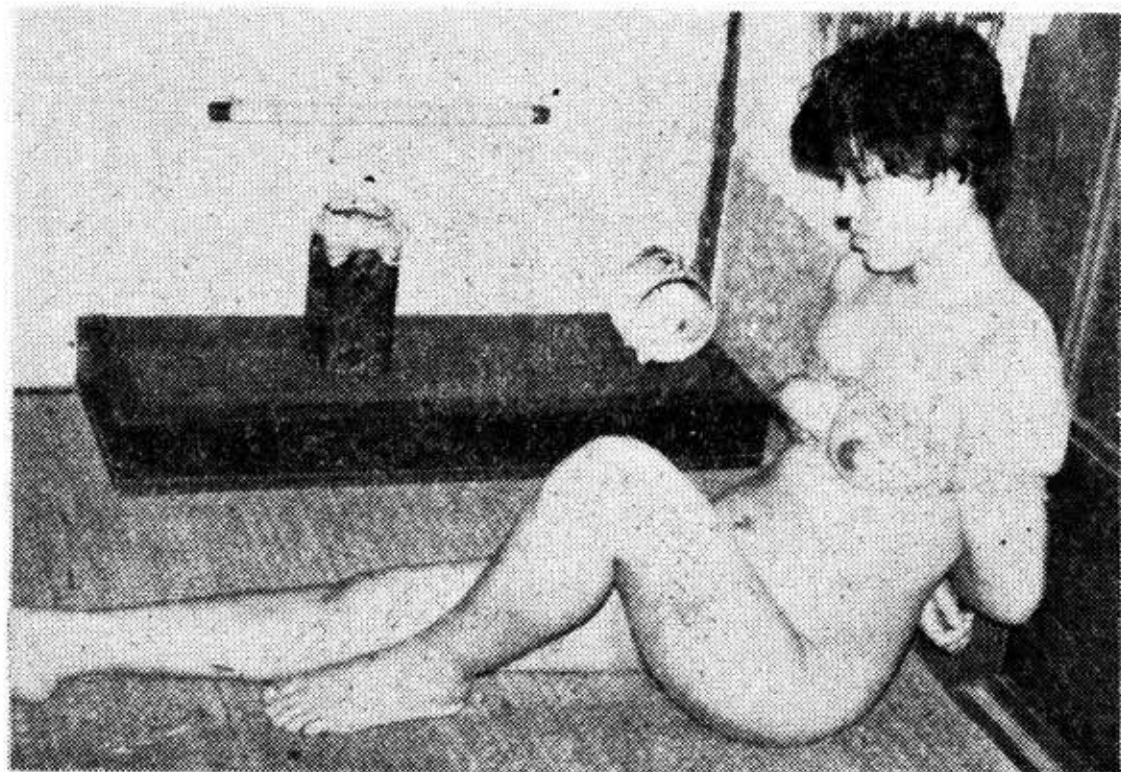
「じゃんじゃん石炭をくべて、風呂を沸かさせ、その合間に私は、この雪責めの思いつき

をいってやったよ。色街の出の女だ、呑込みが早い。『浦里』でやろうといったら「えッ?」ときき返した。『浦里時次郎』だよと重ねていってやったら、首をコクンとふって、障子の硝子ごしに乱舞する雪をみて、「だからお風呂わかすのね。おおお、寒いことドスナ」と以心伝心、にっこり笑いましたよ。

湯加減を見計らって、クルクルと裸になって二人で一緒に、狭い湯舟につかって、芯まで体を温めると、私は素ッ裸の俣飛び出して、物置から荒縄を抱えて、再び風呂場へ飛込んだね。洗い場でK子を犇々と荒縄で縛り上げて、縄尻を握って外へつれ出し、二寸余りも積った、白一色の中庭へ引き曳り出したんですよ。いきなり庭石の前へおし倒し、割れ竹でピシピシと打ち据えたんです。いわずとした私も裸、雪にまみれ呻くK子の軀に更に紛々と雪は容赦なく降りつもって行きます。限界は精々四、五分少しでしょう。寒さの限界は私も裸だから、この肌でじかに感じとります。一責めして、荒縄をしばってK子を起すと、三メートルと離れていない風呂場へ引っ立て、縛った俣、二人でザブリと飛び込みます。私は折角結い上げた女の髪をわざとわし掴みにして無茶苦茶に潰してやった。

短い髪は私も厭だし、K子も長い方が好きだから、乱してピンをドンドン外すと、長々と垂れ下ります。伊藤晴雨サンよ、ザマアミロ、俺だってやる気になれば、いとも易々と、雪中裸女責めが出来るんだぞ、と心の中で独りで快哉を叫んでいましたネ。この時ぐらいカメラがあったらと思ったことはなかったですね。辻村氏が見たら、ヨダレ垂らして喜びぶ図だぜ」といったらK子も「そうドスね」と合槌を打ちました。二度、三度、風呂を出たり入ったりして、堪能するまで雪責めを愉しみました。風呂から上りたてなら、五分ぐらい結構もちますよ。辻村さんも試してごらんなさいよ」

誠にこれは垂涎ものの話である。私もかねてから、そんなチャンスをねらっているんだが、そうそううまく女性がいらないから未だ雪中責めは撮ったことがない。既に顔をホテらせて、T氏は尚も、その後のハナシをしてくれたが、これは書けない。K子の桃色に染まった肌が、スゴくハッスルしたと彼は手放しで喋々囁々としやべるが、又しても声が大きくなっている。店の娘の頬が心なしか紅潮し、隣りの席の客が、しきりに私達



をジロジロ見ている。辟易して、私はT氏を小突くと出ようといった。正直余りのんでいない私は、この席にいたたまれなくなっていた。

既に酔歩漫々と、のたくり乍らT氏は私を

連れて、行きつけの店を次々と、二軒ぐぐった。T氏好みらしく、いずれも渋い構えである。意識して吞まぬ様にする私は、最初の店で、鯛の生きつくりを口に入れ、二軒目では軽くオードブル程度でつき合った。

冬の陽は短かい、五時というに辺りは既に仄暗く、宵の河原町に夜の幕りは降りようとしていた。もう一軒と誘うT氏の誘いを、敢えて断わって、私達は京宝の前で、東西に袂を分った。ジングルベルがかしましく流れ、ネオンはすべての光芒を宵闇に放っていた。

私も心なしか酔っている。ぶらぶらと河原町を三条から四条へと人浪にもまれて歩く。

河原町の交叉点を渡ると、新装のT百貨店が大きく聳えている。その前は人だかり。弥次馬根性で何気なく覗くと、近畿放送のサテライト・スタジオの正面だった。『サテスタお笑い寄席』の時間らしく、サテスタの中は煌々と明るく輝き渡って、はんじ・けんじの漫才の真最中だった。どっと人浪が笑い、若い娘が二人、私の肩を持たん許りにして、短軀の体を一杯に伸ばして、大きく口を開いて笑っている。クールミントガムの仄かな匂いが、私の頬の辺りににおう。所在ない私も弥次馬の一人。笑い終って人浪が崩れ、スッと

あかりの消えたサテスタの前は一瞬佗しくなる。笑いの持って行き場所をハグラかされた感じで、私は左右の人垣にもまれて、しばらく佇立していた。私の前の女性が踵をひるがえして、私に正面を見せ、一瞬チラリと視線が合った。瞬間、どちらもアッという感懐が起って、マジマジと相手をみつめ、そこにフィルムの一駒が、流れを止めて、クローズアップされていた。

紛れもない伊吹真砂子のクローズアップがそこにあつたのだ。フィルムが動き始めた。懐かしさと、思いもかけない場所での出会いが、思わず、私の手を彼女の肩にかけさせていた。

「伊吹さんだろ——」

間髪を入れず

「辻村さんネ——」

とこだまが返って、私達はどちらからともなく微笑んでいた。

「偶然ネ」

「ほんとだ。約束しても滅多にあえないこの人混みの中でね。奇遇だよ」

「今頃どうして、こんな処で一人？」

「一杯のんでね、ある人と。勿論男性とだけど、酔いぎまみにフラフラ歩いて、フト立止

つてのぞいていたんだ。この地下から阪急にでも乗るつもりで、ここ迄来たんだけど」

「私は一寸買物、今、伏見にいるのよ」

「とも角、お茶でものまないかね。こんな処で立話も出来やしない」

私達はデートで出逢ったアベックの如く、極く自然に並んで歩き出した。真砂子の左手が、これも極めてスムーズに私の右腕にかかっていた。

× × ×

『奇譚三十九夜物語』第三十一夜の第七十二話、(悠紀子と真砂子)に、彼女のその後を少し触れておいたが、今茲にバックナンバーをとり出し、探し出していたく煩雑さを省くため、重複する様であるが、彼女の概念だけでも、もう一度リバイバルしてみよう。

伊吹真砂子はあの当時、グラビヤモデルから身を退く理由として、結婚を条件にしていた。噂によれば、片想いの医師に失恋して、多少は自棄も手伝って、母親のきめた見合結婚で一応は納まったかに見えたが、奇クでの数年の培養された彼女のマゾ性は、おとなしく、至ってノーマルで平凡な夫に、いつしか飽き足らなくなっていた。子供のない儘に結婚生活三年半で夫と別れた。夫と別れたこと

については色々私的な理由があったが、プレイバシーの問題になるので、精しくは触れない。不妊も一つの問題となったらしいが、直接の原因は被虐によるめき、かつて奇く当時知り合った男性とのプレイにあったらしい。その点は彼女も精しくはいいたがらない。

その後アパートで独り暮らしをしたり、時には気の合う女性と同棲

めいたレスボスの関係をつづけて一緒に暮して見たりしている。コピニストという職業が稀少価値もあって、結構一人暮らしの気軽さを愉しんでおり、気が向けば、昔を偲んで、奇クを買う折もあったという。その頃、彼女の願望で、当時大阪のH百貨店の化粧品売場にいた梨花悠紀子を紹介して、悠紀子がS、真砂子がMのプレイを愉しんだことがある。

(悠紀子と真砂子)の終章——。今読み返しても懐かしく、あの夜のことがまざまざと脳



裡に浮び上ってくる。私の文も又、二年経ってもチットも変わっていない。三十九夜物語もカメラ・ハントも、いつも別れは幾分ロマンチックで、センチメンタルである。

——(ほろ苦い哀愁に包まれ、ぼんやりと二人に目をそそぎ乍ら、人間の味あう快楽の底辺、明日は他人であるかも知れない二人——数時間前迄はまぎれもなく他人であった二人が今、煙草をわけてのみ、囁やきをかわしている。その、綾にかぎらない女心の妖しさに

私は何となく空怖ろしいものを感じていた。スイッチを消してカーテンを開くと、ホテルの谷間の間隙から、辛うじて差し込む秋の月光が、冷めたくこぼれていた)——
そして今、あの日ホテルに二人を残して別れてから、丸二年の歳月が経っている。

× × ×
静かな喫茶ルームで私達は相對していた。二年の空白が不思議なくらい、話はすぐに続いた。

「あの夜、君は悠紀子と約束したから、私に帰ってくれといったネ。二人で泊ることにきめたからといって——。悠紀ちゃんもうなづいたものだから、私は締め出されてしまったけど、あれからどうなったの。私が梨花を紹介したんだから、報告の義務はあるよ」

二人のプレイが予想以上に意気投合し、私はあの夜、女二人をホテルに残して部屋を出たのだった。

「田代美代子よ」

「えッ？」

「愛しちゃったのよう……ということ。女が女を愛したらおかしい？」

「おかしくはないけどさ。それにしても、たった一度の出合で、よくもまあ意気投合した

ものだね。こりゃ驚いた」

「驚いたでしヨ。でもネ、悠紀ちゃんは私を始めてでも、私は本で随分あの娘にお目にかかっているわ。あの娘に虐められたら、どんなに嬉しいだろうなあって、そんな事考えると、夜も眠れなくなるの」

「でも梨花は大体、Mの方だよ」

「違うわ。それは箕田さんや辻村さんが、勝手にあの娘をMに仕立て上げただけよ。凄いわヨ。流石の私も、クタクタになったのよ。あの夜」

「あの時は、君がMなもんだから、悠紀子はサジストめいたプレイしたけど、それが本心なのかなあ」

しかし二年の空白を埋めると、あの夜の事がマザマザと私の眼前に浮んで来た。

激しい感情の起伏を抑制するかの様に、梨花は伊吹の肩に齒を立てた。齒が徐々に深く伊吹の肌に喰い込み、パツと離すと綺麗な齒並びの齒型が、クッキリと赤く、真砂子の肩に残っていた事を、私は鮮烈に思い出した。そうか、悠紀子は私達の予知しない、こんなS的な反面を併せ持っていたのか。

「聞かせてもらえない？後日譚を——」
「そうね——」

彼女は一寸首をかしげ、思い出そうとする様に人さし指をおとがいに当てて黙考した。

「兎も角ね、私達はあの夜から離れられない二人になったってわけよ。私は毎日でも逢いたかったけど、あの娘もお勤め、私も仕事あるでしょう。だから毎日ってわけには行かないのネ。日曜日の夜を私のアパートで過ごすことに定めたの。百貨店が月曜日休みだから、あの娘の方に合わせたのよ。私もあの娘の為に、コピーリスト止して、あの娘の友達の世話でデパートの臨時雇い。収入は今までの半分以上だけど、貯わえもあるし、何より、あの娘を逃がしたくなかったの。女の執念って怖いでしヨ」

私は唸る許りであった。男女の仲にこのような激しい独占欲は見受けられても、女同士のことになると弱かった。

「そんなもんかネエー」

私の返事はどうも頼りない。

「らしいわ。水商売のホステスさんなんかには多いんですってよ。いつかミナミで、ホステス二人がアパートで怪死したでしょう？あれだって、私の推理では、SMの果てじゃないかって思われるフシがあるんだけど……今だに犯人が挙らないじゃありませんか。ま

あ、そんな事はどうでもいいコトよ。出来たら私達二人で暮らしたいって、どんなに願ったかしれないわ」

「へーえ、私に連絡してくれりゃ飛んでゆくの、惜しいことだよ」

「お生憎さま。男は無用の世界よ。すきな娘と二人きりで、好き放題なことが出来るのがどんなに嬉しいことか、辻村さんなんか私に氣持分りっこないわヨ」

「いやネ、フोटを撮らして貰うだけで満足だったのさ」

「二人の愛のかたみに随分撮ったわヨ。三百枚ぐらいあるわ」

「ウーン！それを拝みたいね。でもよく撮れたね」

「馬鹿にしないでよ。カメラぐらい平ちゃらじゃないの。私の腕は頼りなくても、近頃ではカメラの方で、チャンと撮ってくれるわ。私こう見えてもペンタックスの一眼レフ持っているのヨ。ストロボ使ってリリース握ればワケないじゃない？」

「どんなフोटなんだい。君がMかい？」

「Mの時もあるし、Sにもなるわ。要するにその夜の風次第ってわけね」

「でも現像は？焼付は？引伸しは？」

「それよ。それで随分頭絞ったのよ。余程引伸機買ってきて、私達の手でやろうかと思っただけ、そこ迄の勇氣なかったの。むつかしいときめてかかっていたのネ。散々知恵をシボッタ挙句」

「どうした？」

「どうしたと思う？ 余り人に知られないで、案外安全な方法が見付かったの。実はネ女のカンで、私達の勤めているデパートの、カメラ売場の女の子が、時計部の女の子とデベンであることを知ったのよ。私は悠紀ちゃんとしめし合せて、彼女等二人に、近づいたの。悠紀ちゃんは化粧品会社の、化粧品の見本に使うミニチュアセットをプレゼントして近づいたし、私は私で、食料品売場の菓子部にいたから、チョコレートなど、随分贈ったわ。一緒に食事を誘ったり、ビヤホールへ行ったりしてネ。彼女達もペアなら私達もペアお互いにS同志であることを認識しあっていたわけ。」

こんな時間、本当は惜しかったけど、私達が酔って体をくっつけ合ったり、唇をつけたりするのをワザと見せつけるの。相手も負けないで仲のいいところを見せるしね。はたから見たら気狂い沙汰でも、やってる本人は皆

真剣。どうやらチャンス到来と許り、或る夜私達二人ですっかりおごった夜、とうとう打明けたの。私達の愛のかたみのフオート、誰にもいわず内緒で焼いてくれない”って。勿論カメラ部の娘によ。彼女がカメラに興味もって、引伸機やら一式揃えているのをチャンと探つての上のことよ。彼女は即座にO・Kしてくれたわ。私達の愛のかたみに、凄く興味を抱いたらしいこともあるけど、二つ返事だった。その上、D・P・Eはすべてタダよ。彼女印画紙からクスリから、すべて、出入の問屋にコネつけて、見本としてもって来さすチャッカリ振りよ。どう？」

「で、その彼女さぞ吃驚しただろう」

「吃驚りする様なものは始めから頼めるわけないでしょ。辻村さんが御覧になったら、なんだこれっていうような、何の変哲もないものから徐々にね」

「例えば？」

「そうね、最初に頼んだのは、何だったかしら——。そうそう、着衣で悠紀ちゃんを膝に抱いて、頬をすりよせたり、軽く唇と唇を合せたり、抱きしめたり、まあそんなとこね」
「そんなもの、普通に出しても、よかつたじゃないか」

「ダメね、感が鈍いのね。コトワザにも、先ずカイより始めよっていつてるじゃないの」
(このことわざ、さっぱり見当違いだが、真砂子がいうと、何か如何にもピッタリする)
「だから、わざと安全なのを撮っておいたってわけ？」

「そうよ。千里の道も一里よりだわ」

「いやに格言が出るね。格言女史に名を変えよう」

「でもネ、これが凄く反響あったのよ、彼女達に。カメラ部の娘が佐伯あけみ、時計部の娘は牧野雅子。あけみがリードする方で二年前のあの頃二十四だったかな。雅子は二十二年才だったわ。こんな事どうでもいいけど……」

話に夢中になっていて、注文したチョコレートパフェはすっかりとけてドロリと澱んでいる。誰かの注文かそれともコインを入れたのか、喫茶の奥のジュークボックスから、奥村チヨの「ごめんねジロー」ががなり出す。

奥村チヨをテレビで見る毎に、私はその容貌のどこかに、梨花悠紀子の面影を思い浮かべる。悠紀子は奥村チヨのように、片チンバの眼ではなかったが——。

「反響っていうと？」

「あけみちゃんが雅子に私達のフオートを見せ

たらしいの。無論見せると思っていたけど。それで、私達も撮ろうよという事になったらしいの。妙な競争が始まったのよ。より凄いものを撮って、相手を驚かしてやろうっていう、女同志の感情のたかぶりだね。私があけみのマンション、そうそうこの娘は四国の人よ。残念だけど、雅子を口説いて、とうとう私達より一歩先に同棲してしまったわ。豊中市の庄内ってところで。そのマンションを訪ねて、フोटを貰いに行くかどうかでしょう。これ見よがしに、机の上に凄く大きく、あれはハツ切りっていうのかな、兎も角大きいのよ。そんな大きいのを、どうしようもないのに、一等気に入ったのを引伸して、見て下さいといわん許りにおいてあるの。ブラジャーとパンティだけの姿でベッドの上で抱き合っで口づけしているのをよ。あけみのフェイスがわりかし肉感的にとれているのが気に入ったのでしょね。ようし今にヒックリ返る程ビックリさせて上げるわと、私は腹にきめて徐々にとり溜めておいた、プレイのネガをもったいったってわけ。私がS、悠紀子がMのものをね」

話は二年前から一年半ぐらいまで遡のぼってきたが、この調子だと、まだまだ続きそう

だ。私は時計を見る。既に七時四十分、一時間足らずネバっていた事になる。

「で、とうとう、すべてものにしたらってわけだね。分ったよ」

「あらッ、まだまだ面白いことが沢山あるのに、聞いてよ。折角喋り出したんだから」

「あのネ格言女史よ。すべからく百聞は一見にしかずだ。あッ、私も格言をいったネ。兎も角そいつを見せてもらうのが一番手つとり早いんだがね。君今のところ一人なんだろう」

「おかしいいい方ね。今のところ一人っていうと、いつもは誰かいる様じゃないの。悠紀ちゃんが東京へ移って以来、ずっと一人よ。悲しい悲しい胸の痛手をじっとこらえて、一人ぼっちよ」

「御邪魔してもいいかい？」

「男性の訪れ皆無の、わが部屋なれど、過ぎし日の愉しかった話をしているうち、私もむしろに写真みたくなっちゃった。いいでしょ。その代り夕御飯奢ってね。お腹ペコペコよ」

現実に戻ったのか、途端に伊吹真砂子は空腹を訴えた。彼女も何年たっても変わらない。あの頃の長い髪はバッサリ切って、今はショートカットというより、水前寺清子スタイルに近い。御色気にいささか乏しいが、やはりグラマーの体はぐんと張切っている。

女の年を数えるのはタブーだが二十八年に始めてとった時、十九の春よと笑っていたから、えーと今年は、なんて数えるのは野暮。眼前の彼女は矢張り若くハツラツとしているのだから、それでいいのだろう。女の子と恋をしたり、一人で結構気分に暮していると、世帯の垢がしみつかないから、いつ迄も若々しいのだろう。

私の胃袋は満たされていたが、彼女のために、近くの寿司屋ののれんを潜った。

私はエビのオドリを二切れつまんだだけで専らたべる方は彼女一人。次々と高価なにぎりを遠慮もなく注文する彼女に、その健啖ぶりに半ば苦笑し乍ら呆れて見ていた。伊吹真砂子は実に健康そのものの様な女である。

× × ×

京阪四条駅より大阪行の各駅停車に乗って藤の森駅で下車。駅前を出るとすぐ通りは暗くなる。街灯の光りも、ポツンポツンと隔たりがあって、夜の女性の一人歩きには些か物騒な場所だ。駅より歩いて五分そこそこ。洒落た近代建築のアパートかと思ったら、これは又、古い京の名残りを留めたしもた屋の離

れの一室を借りていた。未亡人が独身女性相手に、部屋を区切って三人許りに貸しているそう。正面玄関の横手の勝手口を開き、私を導き入れる。冷え冷えした空気が部屋の闇からスーッと私の頬を撫ですぎる。入口近くのスイッチでパッパッと紫のグローブ球が瞬たき、蛍光灯が薄暗く部屋を照し出した。蛍光灯はとも古くなると最初の間は暗いので困る。六帖と二帖の日本風な離れ座敷。自動点火のガストーブをパチリとひねると、蒼白い炎が吹き出して、忽ちに網目を赤く温かく染めて行く。

「お茶を漉れるわ。一寸待っててね」

真砂子はガスレンジをひねり、湯沸しをかけた。一人暮らしの女世帯は、悲しい程に整頓されていて、あるべきものが、その位置にちゃんと行儀よくあるのも、反ってよそよそしかった。

「どうして悠紀ちゃんを引止められなかったの？ 君の激しい愛情で引止めればよかったのに——」

真砂子は、一瞬またたき悲しげにうつむいた。しばらく言葉を探している様であったがぼつりとつぶやいた。

「行きたいというのよあの娘——。化粧品

マネキンがチャームガールになって、東京へ進出するとなると、若い女にとっては、たまらない魅力なのね。東京の宣伝部長にスカウトされたのよ。一カ月に一度は連絡に帰ってきて、きつとその時愛情を確かめ合おうと約束したのに、東京へ行ってから、逢ったのはたった二度、近頃はもう全然梨のつぶてだわ」

「東京から一度私にも便りあったよ。公園はどこかで撮ったフोटを入れてネ」

「そんな娘なのよ。ケロッとしてるでしょ。もう近頃はあきらめたわ。段々と悠紀ちゃんの夢を見なくなるもの」

「元氣を出せよ。君らしくもない」

私は肩を叩いてやった。淋しげな睨みを返して、私を見上げた真砂子はぼつりといった。

「私ってよくよく、女の子が好きなたちのね。あけみのデベンの雅子ね。あの娘に惚れちゃったのだけど、どうにもならないの。片想いらしいわ」

真砂子は整理タンスの抽出しの中から、三冊のアルバムをとり出した。

「辻村さんならいいわ。随分恥かしいのもあるけど、全部お見せするわ。見て頂戴——」

アルバムを開くと詩の様なものが書きつけてある、意外に達筆だ。

——口じゃ言えない幾年月の

辛い苦勞も 女ゆえ

人に涙は見せないけれど

儚なく消えた想い出抱いて

泣いた涙を 誰が知る

何だか聞いた様な文句である。流行歌をあれこれ想い浮べたが想い出せない。

「この文句、どこかで聞いたよ」

私がやや茶化し気味にいうと、

「その筈よ。流行歌の一節よ。美空ひばりの『のれん一代』の二番目よ。私の氣持にピッタリだから、その倣借用したの。『初恋抱いて』を『想い出抱いて』に変えただけよ」

真砂子は赤くなって笑った。

アルバムはすべて、真砂子と悠紀子の愛の交歓のものだった。アパートの一室らしきものもある。どこかのホテルのものもある。黒幕のものもある。一冊はプラトニックなものがすべてをしめ、二冊目は全裸の二人のたわむれに終始し、三冊目は縄を使った私のもっとも期待していたSMプレイオンリーだった。縄は始めて二人を逢わしてやった時、彼女達の部屋に残しておいてきた、私愛用のダンダラ縄二条を殆んど使用し、偶に細いロープや紐なども交ってあった。真砂子がMの方がその六割

以上をしめていた。悠紀子の歓心を買うために、サジストの役目を努めて悠紀子にさせたのか。それともこれが真砂子の好む、最も本来のポーズなのか。フォトはどれもこれも、意外に思ったくらいよく撮れていた。そして引伸しも美しい。この引伸しを暗室で直視していた、佐伯あけみに、S M プレイに対する興味を持たなかったとは誰が保証し得よう。

「佐伯あけみは、私のカンでは、雅子と二人できっとプレイやってると思うよ。君見せてもらったことない？」

「S M のフォトは見たことないけど、私も間違いないと思うは。彼女の場合、恐らく、あけみがSで雅子がMでしょうね。現像液を押し入れよりとり出す時、真新しいしなやかなロープの一塊りを私見たのよ。このS M プレイのフォトもらいに行った時、あけみちゃん怒ったような顔して、ものも言わなかったわ。きつと、心のたかぶりを押えるのに必死だったのでしょうね。一度だけこんな事あったわ。八真砂ちゃん、一ぺんでいいから、うちの雅子と悠紀ちゃんを取っかえこしないVって」

「あけみ女史は悠紀子に相当参っているよ。ところで彼女達、今はどうしているの？」

「さあね。悠紀ちゃんが東京へ行ってからは私もデパートつまらないからすぐ止めたし、それに私仕事の都合で大阪を引き払って、この伏見へ移ったでしょう。だから精しくは知らないわ、その後。今もH百貨店に勤めているんじゃないかしら」

内心、新しきものを求めて、私はあけみ、雅子の二人に猛烈に会いたくなって来たが、気振りには見せず、さりげなくいった。

「彼女達のフォト一枚もないの？」

「あるわ、二、三枚許り」

彼女は机の抽出しをゴソゴソいわせて、角封筒をとり出すと私につきつけた。期待に胸を弾ませて私はとり出した。

二人とも意外に美人である。雅子の方が少し痩せ型で、あけみは、髪の毛をヘヤダイしているのではなからうかと思われるグラマーであった。並んで着衣で撮したのが一枚、頬を寄せ合ったものが一枚。残る一枚は少し大胆なポーズで、ネグリジェ姿の二人が、ベッドに腰を降して、互いの胸のふくらみを握っているポーズだった。あけみの笑った顔にありと感情のたかぶりが現われていた。

いつか訪ねて見たい。そんな欲望に私はかされた。カメラ・ハントの絶好のネタではな

いか——。

そんな私の横顔をじっと見つめていた真砂子は、私の心の中をくすぐる様にいった。

「いやに、ごねっしんに見ているのね。さては——」

「いやいや」

私はあわてて打ち消して、机上にフォトを投げ出した。私の心は見透かされていたかも知れない。

「あんた達のネタがあるの？」

話題をかえると、

「大事にしまっておるわ。貸してほしいんでしょ」

と、私の言わんとする先きへ先きへと彼女は口に出す。どうも私は甘い。すぐに顔に出るのだろうか——。

「その通りなんだ」

「いいわ、お貸ししても。それでカメラ・ハントにでものせるのと違う？もう古いわよ」

正にズバリである。いやあ参った。

「参ったよ。実はそうしたいんだけど……」
「何でもネタさえあれば飛びつく、辻村さんの悪いくせね。でも余り非道いのは貸さないわよ。辻村さんがアルバムの中から選り出して、私の眼で合格すれば貸すわ」

私は改めて三冊のアルバムを最初より引っくり返し、カメラハント向きなのを数葉指さす。

「どう、こんなところで——」

「少し気になるものもあるけど、まあいいわ。」

でも二年も前の話よ。今更、こんなの書けるの？」

「何とでも書けば書けるさ。でもね、よかつたら、数枚、今の君を撮らしてくれば満点だがね。どう？」

「へえー呆れた。今からとるつもり？」

「用意はないけどさ。君のカメラでね。アサヒペンタの一眼レフだろう。いいだろう」

「二カ月前ぐらいに京都で景色とった残りが十枚許り入っているわ」

「恰度いいや。現像は私がやるよ。善は急げだ。さあ早いとこ早いとこ」

風向きが変わって、私は、懐旧のフォトの二人のプレイのあとへ、現在の伊吹真佐子のポーズを挿入したいと、急に思い立ったのである。彼女はしばらく思案していたが、

「まあいいわ。じゃあ、簡単なのをね」

と眩やき乍ら、服を脱ぎ始めた。部屋は既に適当に温い。二十二、三度はあるだろう。壁際に吊ってある、ペンタックスを外して、

私はいそいそと支度にかかった。

三脚は？ ストロボは？ 縄は？ と、きく私に真砂子は向うむきの姿勢のまま、棚の上だとか、押入れの右の箱よとか応えてくれた。

× × ×

片隅のものを取り片付けて、部屋の隅に空白をつくと、すべてを脱ぎ去った真佐子は肌寒さに身をかがめ、ストープに寄り添って両手を胸に抱えて縮こまっていた。

どちらにしても、十枚そこそこのフィルムなら、余り手のこんだ緊縛は撮る間もあるまい。私は、悠紀子とのあの夜、彼女のためにおいて来た、見覚えのある、初期のあのなつかしい斑ら縄を手にもって、兎も角彼女に近づいた。

この女体に、かつては塚本氏と共に、飽くなきSMの探求に埋没した事も、何か一昔前の遠い夢の様だった。あの頃の弾みきった肌は、流石に幾許かのたるみは見せてはいるが意外にみずみずしかった。

彼女も頼まれたら滅多にイヤと言いつ切れぬタチが、いろいろな意味で損をしていた。

ある人は抵抗感がないというし、ある人は素直すぎて人形を縛っている感じだという。少々の苦痛なら声もなくたえ得る、Mの素質

が時によっては、よくも悪くもとられる。

淫忍自重もいいところだ。今もこうして、私が冬の夜寒、突如としてきり出しても、決して忌避しない。どころか、自ら進んで私の言葉を待つ迄もなく、待機の姿勢をとっている。しかもSにもMにもなれる便利さだ。

しかしプレイは始まった。私は手早く縄をしごく、彼女の胸にかけ二廻りして後手に両手を縛った。オーソドックスの見本みたいな縛り方であるが、奥の奥まで探求しきった真砂子の女体に対して、今は脂ぎったむき出しのプレイではなく、サラリと淡白なプレイが反って希ましかったのだ。

贅肉がとれていて、彼女の肢態は思ったよりいいポーズだった。縦横から四、五枚とると、フィルムは既に大半を消費している。転がして撮り、開股をとり、片足を別の縄で吊り上げて撮ったら、もうフィルムは終わってしまった。目盛りが三六枚完了を指して、廻らなくなる。時間にして十分たらず。何とも飽気ないひとときである。

「もう終りだよ」

「気の毒見たいね。折角やり始めたんだからカメラとらなくてもいいから、もう少し続けたらどう？」

真砂子の勧誘は、こだわりもなくスムーズだった。実の処私もこれでは呆気なかった。片脚を高々と吊り上げた俣の姿態に眼を移していると、サジストの本能の血が、たぎってくる。この淫忍自重する女をうんと泣かせてやりたい——そんな欲望が頭を抬げる。

さもあらばあれ、今宵一夜、SMのプレイに耽溺するもよし、淫忍する真砂子を泣かすもよし。

私はおもむろにネクタイをゆるめ出した。

× × ×

熱いうめきのひとときが過ぎ去った。濡れた体をようやく抬げて、真砂子はSMプレイのあとに襲った激しい桎梏をじっと反芻していた。私は熱気のため幾分白けた体を起して、カメラのバトロネをとり出していた。シンとひそかに静まり返ったここには、男と女とのそれだけしかない。なる様になったあの悔恨も感傷もなかった。二人での密室でのプレイのあとの当然の帰結といえるかもしれないなかった。

のろのろと体を起すと、真砂子は散らばっている下着をつけ、部厚い生地 negligee を纏った。口をきくのが互いに憚られるような独特な雰囲気、それは気懶い憶劫さからか

もしれない。

無言で真砂子はステレオを開くと、ドーナツ盤をとり出してかけた。きき馴れぬメロデーが広くもない部屋に充満する。

梨花よ梨花 白い花

白い南の花の名よ

雪の降る夜 寒さに震え

赤い頭巾を かぶってた

君の姿を 星空に

呼べば濡れるよ この暁

知らないか 知らないか

だれか噂を 知らないか

母を知らない 悲しい影を

長い睫毛に 秘めていた

僕を待てずに 唯一人

何処へ流れて いったのか

往時流行した、"上海帰りのリル"に似た哀愁のメロデーが、梨花——梨花と、咽び泣く様に叫んでいた。

「辻村さん御存知ないでしょうこんな唄？

クラウンの新人で白浜章って人が歌っている梨花をたずねて"という唄なの。これでもかけて、梨花悠紀子を唄んでいるといえは、余りにもおセンチ過ぎるかも知れないけど」

心なしか、真砂子の暁はうつすらとにじん でいた。

(彼女には先程のあのプレイの激しさの中にも、私は念頭になく、ひたすらに梨花悠紀子との、愉しいひめごとの数々を唄んでいたのだ。ああ悲しきは女心よ！)

「御縁があれば又ね。そのうちに、悠紀子にも劣らない、素晴らしい彼女を見つけてやるよ。じゃあ——」

私は身支度を整えて立上った。うつろにならずいて、彼女は再び"梨花をたずねて"を反復していた。

知らないか 知らないか

だれかあの娘を 知らないか

梨花をたずねて 来た都

私の胸にありありと、別れた梨花悠紀子のイメージが蘇がえってきた。梨花を恋うるは真砂子以上に私にだって切々とある。

哀愁をこめて唄う、白浜章の声を耳に残して、外気に出た。師走の風は冷めたくほてった頬を逆なでして行く。微かな寒月が路上を照らし、人っ子一人ない夜更けの道を、私は首を垂れて駅前へと辿っていった。

(おわり)

百花撩乱期の論客 千草忠夫氏登場

論壇拡大して第二段階に入る

〈花と蛇〉評 おにぎやか ―二月号の展望―

＜KK時評＞

橘 行 司 子



時評の楽屋裏

「読者通信」の天道公平氏より評者を任じる行司子が寸評された。「橘氏の時評は全くだいらするほど歯切れが悪い」等である。反省すること多々あるようだ。いつも軍配を天にむけるという出来そうもない立場を時評形式に盛込もうとした無理である。底をわれは八方美人。これではホメ評で初恋の相手にレターを書くならよいが、時評はつとまらん。さて、二月号あたりを見てみると強者揃いで

「わさびをピリリと効かす」所か、一発や二発のバクダンを投げててもビクともしない筆陣のようである。せっかくの天道氏のお言葉、思い切って天下御免の本腰を――とペンをかまえたが、さてどうなるか。夜乃氏の創作については、△ある者は小説ではなく、笑説^{ジョウセツ}である▽という評では如何がであろうか。

楽屋裏をさらけ出したついでに、もう少し述べたい。実は今回の号を読んでみて体載しようと、はじめは考えた。

その理由は（体載の弁を一時は仕上げ、ポストに入れる寸前、思いとどまった。その原稿をそのまま引写す）

「K・K時評、嬉しい悲鳴で休載について」短い期間であったが△時評▽というオセツカイについておよみ下さつたこと感謝致します。二月号はまさに行司子など顔まけの鋭いそして達筆な論評が続々と投稿発表、これからも続出が予想されます。つまりオセツカイなど必要ないほど大方マニアのペンさばきがまさしく、わさびをピリリと効かしたもので、すつかりオカブを、取られた感じがす。大人の文章で活気にあふれて居り、まぶしくてなかなか軍配のかざしようもありません。K誌はこの号で「読む雑誌脱皮」開眼された。

対奇ク評又は作品評も反転して本腰が入りとどまる事を知らぬ活発化、その傾向をたどりはじめたと推察します。これは、△編集後記▽の「読者の手による読者のための雑誌をモットーにしている本誌」または「型破りの雑誌」にむかって新開拓、前進される裏付とし大いに拍手を捧げたい。ここに嬉しい悲鳴をもって△K・K時評▽を休載致し、拍子木

をもって幕を閉じたいと願うものです。お引立ありがとうございます。サヨウナラ。

——これがいつわらない二月号の論壇に対する私的な行司子の感想、退場の弁（ベン）でもあるので、御参考のためあえて発表した。ではなぜ思いとどまったかという、この舌たらずの時評でも幾人かの読者がよんで下さる、少しはまだK誌のために、お役に立つのではと考えなおしたからである。

論壇

近頃の論壇は多岐に亘って展開されているので、スカッと一刀両断という事はむずかしい。特に今回は一方交通式では評のペンを取りにくいのである。行司子など足下にもおよびそうも無い論客がズラリとペンをかざして斬り結んでいるので、いくら天下御免と乗り出して、プロレスの審判（レフリー）のように、選手に下手するとブンナグラレルかわさがある。

さて、個人のやり取りは「二人で会って又は私信で話せばよいのだ」とか「読者通信」でと一部、投稿意見がなされているが、その御本人が個人攻撃やら感情むき出しのオシヤベリではミイラ取りがミイラになってしまっておそれを感じ「論壇の新転を願う」と「新年

号の展望」で要望した。どこまで続くぬかるみぞ、

——を警戒したからである。そこからズバリ対奇ク評から一歩前進！SMの本質を衝くような論壇にと願ったわけだ。

ここに百花撩乱期の花形論客でもあった千草忠夫氏（36・八月号に「奇ク私見」〔エロとどぎつさについて〕を本文巻頭で発表）が『のおと・あと・らんだむ』をひっさげて登場するにおよんで泥試合にめり込まんとした論壇に新風が送りこまれ、これが機会となつて「論壇」のこれからの正しい方向が予想されるにいたったようだ。

○「秋色の中での雑感」保藤久人（40・十二月号）の対奇ク評の流れは「のおと・あと・らんだむ」千草忠夫の線にそって、より活発に開花される。

○SMの本質を衝く論壇は「想うこと（三たび）」西条操から新転出発される。

——以上の二大潮流の他に新しく論壇提供も増加期待され、まさに二月号をケイキとして第二段階に入る（期待したい）。

小説評の動き

『花と蛇』の根強い人気は今回に至って、さらに裏付けされたようだ。——花と蛇・特集——とでも表紙にタイトルを入れた位のおにぎやかさである。

「小説・花と蛇その文学性について」保藤久人・「珍学的善讚美論」夜乃探郎・「鬼六談義・日本三文映画」団鬼六等の他に「のおと・あと・らんだむ」千草忠夫・もその中で「二、『花と蛇』一つのユートピア小説」と一章を使用している。どれも個性ある文章で興味はあるが、これらの動きから行司子は小説「花と蛇」という巨大な城に挑むわれこそは立派なS小説を発表せんという作者は無きやこう切望したい。いつもK誌の小説は「花と蛇」とのカケ声ばかりでは羞恥文学のジャンルの開拓（かいたく）はお淋しい限りである。団氏もそれを期待していると思う。小説の世界にえんりよは無用——。Sマニアの創作家の奮起（ふんき）をうながすものである。

小説

「花と蛇」——続第十四回——団鬼六・「続・悪女の手紙」福田久文・「ひいらぎの花」八花物語・I/V万田不仁・「牝犬羞恥地獄」夜乃探郎・「花の女斗美たち」奮斗士好太・「ポ

ケット・ブックに発見したM的クライマックス紹介」河津安春・「心傷たむ遍歴」西条操・「小説・新解体新書」高野原美・「アリアドネ」黒淵嬰一などの小説陣は九本である。

(この内、河津氏のは紹介という意味で、このランクに入れるのはどうかと思うが便宜上そうした)

以上の作品の中で読者評が二つに分れた物がある。『心傷たむ遍歴』である。△読者通信V(兵庫県・根本守)は「小生は貴誌の作品の中では『心傷む遍歴』を自分の好みにぴたり合うものとして、愛読しております」

(天道公平)は「確かに力作であるし作者の熱意はよく分るが、内容的には愚作という他はない」。これについては作者みずから「思うこと(三たび)」の中で文学観を述べている。このエッセイを再読して、続けてこの作品(心傷む遍歴)の大方マニアの評を期待したい。行司子として一言すれば、愚作というより難解、サービス精神に欠けている。だがわが道を行く——と作者に云われれば、それまでのこと。

『牝犬羞恥地獄』夜乃探郎・あれもこれもと手を出さず、このへんでヤジ馬? の罪ほろぼし? としてしばらく小説一本槍で進まれ

たらどうか。今回の作品を羞恥責め小説シリーズの出発点として、本格的な小説のサービスなら、一部の読者の批判も好転するだろうか——。

とにかく、小説陣の強化がようやく実を結びつつあることをうれしく思う。

読物・エッセイ・告白

『夏彦蛇行録』△彼女の「スゴイ」という本Vの堀夏彦氏は、その文中で興味ある発言をしていられる。「もっと気軽に楽しめるフランクな雰囲気欲しいと思う」これは具体的にどのような文章かと考えると、おそらく△奇クサロンVの編集構成されたような物と思われる。だが、全誌面のムードがすべて、そればかりが感じられるようになっては又、文句も出るのでは——。

食傷(論評・批評)というのはちょっとゼイタクなお気持と行司子は微笑。堀氏は常に新人、若い人の進出を希望して居られる。支持したい。この件については失望なされる事は無いと思う。それはすでに、新年号の△編集後記Vでも「異色ある真実の△告白集Vを漸次誌上に載せてゆきたい」と編集子は約束された。また事実「異常なる夜の記録」島

田啓子・『青木順子さんについて』丸鬼土佐度・『サーカスの想い出』曲馬団好・などの新鋭の執筆陣が台頭を見せはじめた傾向が裏付けされてきたからである。なお、堀氏も使用されて居り、またしばしば△常連Vという言葉が話題の中に近頃は批判の代名詞のように使われている。これについて、考えてみたい。常連とか、レギュラーとは普通、読者と寄稿者との親しみある関係を意味した愛称として使われてきた。いまのK誌の現状はむしろ、その反対的に受取れる感がある。これはこまった現象である。早く平常にもどり「常連さんよ。御苦労さま」と二つ事を願いたい。良否は別として、ともかく何かを書き発表続けるより、あまり書かず、たまに酷評する程度が利口だというおかしな世界は望みたくないものだ。読者よ、どうでしょうか——。

告白『異常なる夜の記録』島田啓子・について「太なわで全身を縛られた年若い豊満な女性が浣腸を受けている写真」をはじめ結婚半年後の新妻たる作者が見て「頭に血ののぼる思い」であったのが、それが「夫が今夜も浣腸してやろうという事に、特にさからおうという気にもならないところを見ると、或いは、浣腸されることに喜びを見出している

のかも知れません」というまでカンチョウ歴が成長する迄を告白した物だが、特に「沢山入れないでね。お腹がはって苦しくなるんですもの。それと、あんまり高くつるさないでよ。一時に入っちゃうと、腸がなんだか痛くなるわ。こわいのよ」などの会話も、空想でなく事実が示す強さを持って読者の共感をよぶ。「啓子ちゃん、又ウンコためちゃったね。どれ、チュッとやってやるかな、それモーションとして」などの作者の小学時代の回想ある一節の言葉も生彩が感じられる。

奇クサロン

「ゴムマニア夜話」梅川幸子。

——梅川さんの文章に、ゴムマニアの愛読者某氏の提供による写真が挿入され楽しい頁となった。

「サロン楽我記」辻村隆。

——ペンの肴にされるのは有名税としてガンされるよう、奇クは昔より読む雑誌ではなかったか」の氏の言葉は考えさせられる物がふくまれている。

「貴女のメンス・バンドにして下さい」鬼頭 莊吉

——このタイトルは、たいした刺激を発散させる。タイトル賞ものだ。

「夫婦のSMフォト」小竹一浩
——二月号には辻村氏の「SMカメラ・ハント」で「みゆきのバースディ」としてみゆき夫妻に焦点が当てられている。妻みゆきさんの変ったSMフォトは異色の。「夫婦のSMフォト」戦線異常なし。御安心下さい。

○魔?の頁か——について

サロンの頁の終りは、この所、酷評されていると思われる常連幾人かには、まさに魔の頁ともいべきか。四十年十一月号は、「雑感」山本一章氏の投稿が布石されていたし、今回は「最近の奇ク」津治良一と「奇クを想う」オールド・ファンの二氏の布石が頁をひらくと同時に発火する。

編集お手並拝見

サロンの冒頭「青き空に白い雲」の文は、編集子の芯の強さをよみ取る。△昨今の本誌は大方評判がよくないようだ。世評で叩かれ読者にも見はなされたら、誰かの言ではないが廃刊を待つより外なろう。いや、そんな本誌だったら、頑張っただけ残しておいたって、存在価値はないだろう△この言葉は裏返しすると、今後、続刊されれば、存在価値があるという意味もふくまれる。そして、編集子は一言も△だろう△とか△かもしれない△とは

形容しても△廃刊する△とは、この頁ばかりでなく、全誌面のどこにも述べてない。むしろ「編集後記」では「益々本誌の型破りの雑誌としての真価が発揮されるものと信じている」と記している。この編集子による編集されるK誌を信じて期待したい。

「さし絵」について見てみよう。毎号種々新傾向を盛って編集されている。前回は新人美術家の手によるカットが目だったが、今回は、縛られた美女の傑作な絵が眼だつ。『表紙』は益々快調。小説「花と蛇」の小説評が数篇、又、映画「花と蛇」評（夏彦蛇行録・中の△映画「花と蛇」に肚を立てる△など）を掲載した所に、当の団鬼六氏の『日本三文映画』を発表するなど、編集の妙はあざやか。ただし、枚数の関係もあるだろうが、「花と蛇」にさし絵が無いのは淋しい。これで正月号、二月号と二回、さし絵が顔を見せない。『編集部だより』にある「愛読者の某氏が、門外不出の秘蔵のコレクション」たる伊藤晴雨氏の作品の誌上発表を期待したい。折込フロク形式で、毎号色彩復刻は出来ないだろうか。一年で十二枚の画が提供される。これは夢だけで終らしたくない。

(終)

花

と

蛇

はな

へび

団

鬼六

続編 (第十五回)

風前の灯

蛇 と 花

「兄貴、やっぱりここじゃ気分が出ねえ。もつとムードのある部屋へ連れ込もうや」

堀川が竹田にいった。

カビくさく、荒むしろなどが敷かれただけの薄暗くてしめっぽい土牢の中で、こんな艶々した美女を料理するのは、惜しいと堀川は竹田に相談しかけたのである。

「それもそうだな」

と、竹田もうなずく。

「恋人の见ている前じゃ美津子も辛くて、ハッスル出来ねえだろうからな。よし、それじ

やあ担ぎ出そう」

竹田と堀川は、八の字に割り開かれている美津子の足首にかけられた縄を急いで解き始める。

豆絞りの手拭で、鼻まで覆われるような猿轡をかまされている美少女は、両足が自由になると、本能的に腿と腿とを密着させるのだった。

「さ、おんぶしてやるぜ」

うしろの棒ぐいにつないであった縄を外した竹田は、思いきり、ぐいと縄尻をひき、美津子を強引に立上らせるのだった。

立上った美津子の前に、堀川がうしろ向きになって身体をかがませる。

「さ、俺の背中に乗っかりな」

竹田に背をつつかれた美津子は、眼を固く閉じ合わせ我が身を堀川の背へ倒していく。

「どっこいしょ。へえー。割に重てえな。このお嬢さん」

堀川は、美津子のふくよかな尻に両手を廻わして、二三度、上へ押し上げるようにして立上る。

完全におおさってしまった美津子は、がっくりと首を堀川の肩へ押しつけるようにして激しくすすり泣きを始めるのだった。

「さ、行こうぜ」

牢舎の扉を押し開けた竹田は、美津子を背負った堀川をうながした。

堀川の背に乗っている美津子は、涙で、キラキラ光る美しい黒眼を、牢舎の中へ一人残されているみじめな文夫にふと向ける。

文夫さん、許して、美津子はもう駄目よ、と、恐らく美津子は心の中でいったのである。

猿轡を美津子と同じよう固くかまされている文夫は、八の字に開かされている両足を激しく悶えさせるようにして、牢舎から出て行く美津子を血走った眼で見つめている。

そんな文夫を表へ出た竹田は、格子の間から面白そうに眺めていった。

「へへへ、悪いけど、お坊ちゃん。美津子嬢は、ちよっとの間、お貸りするぜ。用事がすんだら、ちゃんとここへ返えしに来るからな。ハッハハ」

そういつて、笑い出し、美津子を背たつた堀川と一緒に地下階段を上って行くのだった。

「さ、兄貴、一体、これからどこへ行ったらいいんだい」

地下室より表廊下へ出た堀川は、背負った美津子のふくよかな尻の感触を楽しみながら竹田にいった。

「そうだな。このお嬢さんの姉さんが断髪さ

れた土蔵部屋がいいだろう。あそこなら邪魔は入らねえよ」

「よしきた」

堀川は、わくわくする思いで足を早め、渡り廊から庭へ降りる。

屋敷にいる連中に気づかれないようなるだけ足音をたてないように庭の敷石をわたり、奥の竹藪へ向かって進んで行く。竹藪の奥には、会員達を集めて、秘密ショーを開催する事になっている秘密の部屋があるのだ。

美津子は、目前に竹藪が近づくと、もう駄目だと観念の眼を閉じたが——突然、あっと堀川は切株にけつまずき、その場へ転倒してしまう。美津子は、堀川の背から投げ出され草むらの中へ転がってしまったのだ。

「馬鹿野郎、気をつけろ」

竹田は、腰を押さえて、いてて、と顔をしかめる堀川には眼もくれず、前へ投げ出されてしまった美津子を抱え上げようとする。

両手を後手に縛り上げられているため、重心がとれず、どこかを強く打ったのではなからうかと、つまり、美津子が商品でもあるだけに、その美しい肌に生傷などについては大変だと竹田はあわてて、かけ寄って行ったのであったが——。美津子は緊縛された自由のき

かぬ裸身をよじって、やっと立ち上り、竹田の手がのびて来る直前、反射的に身をひるがえし、そのまま逃げ出したのである。

「あっ畜生、待ちやがれっ」

竹田はうろたえて懸命に追う。

美津子は所詮、これらの悪魔の手から逃げ切れずとは思わない。これから、この竹藪の向こうにある密室の中へ連れこまれ、二匹の野獣の爪にひきさかれる恐ろしささえ、再び捕まった後、どのような折檻をされるという事など考える余裕はなく、美津子は、前後の見さかえもないまま、本能的に逃走したのであった。

草むらへ投げ出されたはずみで、美津子の口をきびしく覆っていた猿轡は外れていた。美津子は必死になって、外壁に向い大声をあげる。

「助けてっ、誰か、誰か助けて下さい！」

竹田は一層あわて出した。

深夜になれば、このあたりは全く人通りはなく、外の誰かに美津子の悲鳴が聞こえるという事はまずないであろうが、屋敷の中にいる連中に聞こえたと、あとが大変だ。商売ものに手をつけようとしたという事で、森田親分より指をつめさせられるという事も十分あ

り得る。

竹田は、血走った思いになった。

なお、まずい事に、美津子は竹藪の中へ逃げこんだのである。竹藪はかなり広い。夜だけに、人間一人もぐりこんだとなると、なかなか見つけ出せるものではない。

「畜生」

竹田は血眼になって竹藪の中へ入った。堀川も、ちんばをひきながらやってくる。

「堀川、お前は左へ廻れ。俺は右の方を調べからな」

二人は二手に分れて、竹藪の中へ入って行った。

「やい、美津子、おとなしく出て来い。出て来ねえとひっつかまえた時、口じゃいえねえほどの羞しい目に合わすぞ」

竹田は、うっそうとした竹藪の中へ向かって、そうどなった。

ふと月は雲間に隠れ、あたり一面は、うるしをぬったような闇になる。

「やい、出て来ねえか」

竹田も堀川も、おろおろした声でどなるのだった。

京子の逃走

「さ、歩きな」

京子は川田に縄尻をとられ、部屋から廊下へ出てくる。

美しく髪もセットされ、更に全身美容までほどこされた京子は、豊かな胸の丘陵の上下を真新しい麻縄数本できびしく緊縛され、観念の眼を閉じて、吉沢の待つ部屋へ引き立てられて行くのだった。

山つづきの崖や大竹藪などがある広大な庭につき出た渡り廊下を、京子は川田に背を押されるようにしながら、柔軟な裸身をくの字に曲げて歩まされていたが、おや、と川田は途中で立上った。

竹藪の中で、ガサゴソと物音がしたからである。

「そこにいるのは誰だっ」

川田が大声で叫ぶと、物音は止ったが、もしやその筋の者が侵入して来たのではないかと川田は捨ててはおけぬ気持になる。

「京子、ちょっと、ここで待ってるんだぞ」

川田は、渡り廊下の手すりに京子の縄尻をつなぎ、銀子や朱美達のいる部屋へ走っていく。竹藪の中に何者かがひそんでいるのはたしかで、自分一人で調べに行くのは気味悪く、葉桜団や森田組の若い衆達の力を求めに行っ

たのであろう。

川田の姿が廊下から消えると同時に、再び竹藪の中では、草をふみしめるような音がする。

「あっ」

もしや誰かが救援に来てくれたのでは、と京子は竹藪の方を眼をこらして見ていたのであるが、思わず、その正体を知って驚きの声をあげた。

「美、美津子っ」

月の光にうかび上るように真っ白な美津子の裸身が竹と竹の間からのぞいたのである。

「あ、お姉さん！」

美津子は、もう前後の見境もなく、竹藪の中から飛び出して来た。

こうこうとした月の、ねばりつくような光波に包まれた雪のように白い美津子の裸身、走りながら、時折、重心を失ったようによるけるのは、両手を後手に縛りあげられているせいであろう。そのような不自由な体で、どこをどう逃げて来たのだらう。そう思うと、京子は、あまりの哀れさに、胸のあたりがキリでえぐられるように痛み、

「美津子、ど、どうしたの」

何と聞いていいかわからず、京子はそんな

事をいって涙ぐむのだったが、美津子が必死になつて廊下へ上り、自分のもとへ近づいてくると、はっとしていった。

「いけない、ここへは川田達が来るのよ。逃げてっ、何とか逃げるのよ、ここへ来ちゃ駄目！」

心を鬼にする気で、そう叫んだものの、布切一枚まとわぬ裸身を、しかもきびしく後手に緊縛されている美津子が、どうして、この周囲が塀に取り囲まれている屋敷から脱出する事が出来よう。

「お姉さん！」

美津子は走り寄ってくると、京子の肩に顔を埋めるようにして、堰をきったように泣き出すのであった。

美津子が、この屋敷に巣くうズベ公やチンピラ達に、どのような恐しい目に会わされつづけていたか、京子も想像はつく。

可哀そうな美津子——京子も泣きじゃくる美津子の黒髪に顔を押し当てようにして声をあげて泣くのだった。

「お、お姉さん、美津子、死にたい。ああ、死んでしまいたいっ」

美津子は京子の肩に押し当てた頭を震わせるようにしていう。

廊下の向こうの方で、どたどたと激しい足音が起った。川田の連絡を受けた森田組や葉桜団が、竹藪の中の曲者の正体を見極めようとして、かけつけて来たのであろう。もうぐずぐずは出来ない。美津子が連中の手に捕われれば、逃走を計った罰として、どのようなおぞましい責め折檻が待っているかわからないのだ。それに、美津子自身、もう逃走の氣力を失っている。どうしようもなく、ただ姉の胸元に顔をうずめ、泣きじゃくっているだけなのだ。

京子は、眼前で美津子が、鬼畜に等しい連中の手で取り押さえられ、再び、地獄部屋へ連行されていくのを見るには忍びず、必死になつて、固く緊縛されている裸身をゆすり、何とか縛しめを解こうとしたが、川田にかけられた縄は、もがけばもがくほど、固く締まり出しこそすれ、びくともするものではなかった。だが、川田が手すりにむすんでいた縄尻はよほど川田もあわてていたと見え、軽くむすんであったただけなので、美津子が、身をかがめて歯をつかって解き始めると、簡単にパリリと縄尻はほぐれ、ときはなす事が出来たのである。

「美っちゃん、逃げよう！」

京子は美津子をうながし、二人の美女は、固く緊縛されたままの不自由な身を互いにかばうようにしながら、廊下を走り出したのである。

「あっ、あそこだっ」

竹藪の中から泥だらけになつて、這い出して来た竹田と堀川が叫んだ。

京子は、一旦、美津子をせかして庭へ降りようとしたものの、二人のチンピラの出現にはっとし、

「美っちゃん、こっちへ早く！」

姉妹は廊下の突き当りまで走り、階段をかけるのだった。捕まれば、地獄の責苦が待っている。二人は必死な思いで、二階へ上ると、無我夢中で、廊下を走りつづける。

「京子も美津子と一緒に逃げ出したぜ。二階だ。皆んな二階へ上れ！」

大声でどなっているのは川田である。

京子は美津子を叱咤するようにして、二階の廊下を走るものの、周囲は全部敵に囲まれつゝ、敵の本陣の中心で右往左往しているにすぎないわけだが、そんな事すら考える余裕はなかった。

「あっ」

京子は、前方に現われた竹田と堀川の姿を

見て、息をのんで立ち上った。

「馬鹿な奴だ。この屋敷の中から逃げられる
とでも思ってたやがんのか」

竹田と堀川は、通せんぼでもするように大
手を広げながらじわじわと迫って行く。

京子は、竹田と堀川に必死な眼を向けつつ
美津子をうしろへかばうようにして後退し始
める。

「おのきつ、ち、近寄ると承知しないよっ」

京子は、齒を喰いしばった表情で、近づい
てくる二人のチンピラにいったが、フンと竹
田は鼻に小じわを寄せて笑う。

「何をいいやがる。なにもかも丸出しにして
いるくせに、大きな口をきくじゃねえか」

二人のチンピラは顔を見合わせて笑うのだ

った。二人とも京子は唐手二段の腕前を持っ
た。山崎探偵の女秘書である事は知っている。だ
が、彼女の得意の唐手チョップも、その両腕
の自由を奪われている限り、心配する必要は

ないと竹田も堀川も、せせら笑って、ズカズ
カと踏みこんで来たのだ。

「姉の方も一緒に可愛がってくれていうん
だな。こっちも二人だから都合だ。さあ、
こっちへ来な」

両手の自由もきかぬ女一匹、何の事はない

と、その縄尻をとるべく、接近していく。

京子は、おろおろする美津子を背にかばう
ようにしながら、後退をつづけたが、今度は
うしろから、

「やい、京子、まだ手前、根生は直らねえよ
うだな」

吉沢であった。精神的にも肉体的にも、す
っかり調教され、女として生まれかわった京
子が、部屋へ運ばれてくるものだと思ってい
た吉沢であったが、京子が逃げたという階下
の声に、眼をつりあげ、びっこをひきつつ、
部屋から出て来たのだ。

吉沢の声に、京子は、反射的に背後を振り
向き、全身を針のように緊張させて、美津子
を背へ隠す。

前も敵、後も敵、進退極まった京子である
が、更に、ドタドタと階段をかけ上る音がし
て、川田が銀子や朱美達と一緒に現われたの
だ。

「性こりもなく、よくもよくも逃げ出しやが
ったな。さ、京子、も一度、根生をたたき直
してやる。こっちへ来るんだ」

川田も眼をつり上げて、どなるのだった。
もう逃がれる術はなかった。逃がれられな
いことは最初からわかっている。わかってい

ながら逃走したという事は、妹の美津子が地
獄の責苦に合わされるのを、少しでもものばし
たいという京子のせっぱつまった気持からで
ある。

もうどうしようもなく、京子は、血の出る
ほど唇をかたく噛み、がっくりと首を落し、
その背後にいる美津子は、姉の背に顔を押し
当て、肩を震わせて泣きじゃくる。

そんな二人の美女を吉沢は、舌なめずりを
するように見て、

「おや、京子、しばらく見ねえうちに、大分
黒くなってきたじゃねえか。ちよっと、こっ
ちへ突き出して、よく見せてみなよ」

それを聞くと、そのあたりを取り囲むズベ
公ややくざ達は、どっと笑う。

「ちよっと、さわらせてみな」

吉沢は、見物人をわかせるつもりで、そん
な事をいい、京子に近づいて、手を差しのば
した。

「あっ、な、なにするんです！」

京子は、悲鳴をあげて、身をちぢませる。

見物人達の哄笑が、どっとわき起った。

身体を二つ折りにする京子に対して、吉沢
は執拗に喰い下がろうとする。あまりの屈辱
に京子は、吉沢の手の甲へ噛みついた。

「いてっ」

吉沢は顔を歪めて、京子に噛みつかれた手を振りほどこうとしたが、京子も必死であった。

「は、はなしてくれっ、いてえっ、助けくれっ」

吉沢は、顔をしかめて、わめき出す。

最初は面白がって見ていた連中も、吉沢の顔色が変わって来たので、驚き、寄ってたかって、京子の鼻をつまみ、耳をひっぱったりして、やっと、吉沢の手を京子の口から、ひっぱりもどしたのだ。

吉沢の手の甲から、血が流れている。

「畜生、何て事をしゃがるんだ！」

川田が、カンカンになって、京子の横面をひっぱいた。

「何だ、騒々しいじゃねえか」

森田が階段を上ってやって来た。

「今、伊沢先生と静子夫人は楽しいプレイの最中なんだ。あんまりガタガタすると先生に失礼だぜ」

「だって、親分さん」

銀子が口をとがらせるようにして、京子が美津子と一緒に逃走をはかった事、そして、相手もあろうに今夜契りを結ぶ相手の吉沢の

手の甲に噛みつき、ひどい怪我をさせてしまった事などを説明するのだった。

「よし、話はわかった。だが、地下倉に閉じこめてある美津子が、どうして京子のいる所まで逃げ出して来たんだ。竹田、堀川、手前達の仕業だな」

さすがに森田は、見抜いていた。

竹田も堀川も、そう観破されれば悪びれず「申し訳ございません。美津子のきれいな身体を見ていると、つい、たまらなくなっちゃまって——」

と、美津子を地下から連れ出した事を白状したのである。

「馬鹿野郎、俺達の許しを得ず、商売もんに手を出すんじゃないかと、きびしくいつてあるじゃねえか」

森田は太い眉毛を動かして、二人のチンピラを頭ごなしにどなりつける。

「手前達はあとから俺の部屋へ来い。川田は美津子を地下へ連れもどすんだ。明日、美津子は初舞台だ。大事に扱わなきゃいけねえ。それから——」

森田は、壁を背に、立膝をして身をかがめ屈辱にあえいでいる京子に向っていう。

「今夜の事は美津子にや罪はねえが、手前に

や罪がある。美津子が逃げ出そうとした事に協力した事、それと、自分の夫ときまった吉沢の手に噛みついたりなんぞしやがって、怪我をさせちまった事だ。それ相当の覚悟は出来てるだろうな」

そして、森田は、手の甲を押さえて顔をしかめつづけている吉沢に向って、

「おめえは傷の手当てをして来な。その間、俺は、おめえの部屋の中で、京子を再教育しておいてやるよ。おめえのいい女房になれるようにな」

森田は、そういつて、銀子や朱美に、おめえ達も手をかしな、という。

あいよ、と銀子は、身をかがめている京子の傍へつかつかと歩み寄り、縄尻をつかむと「さ、立ちな。うんとヤキを入れてやるよ」

再教育

何時か美津子が、数々のおぞましい責めを受けた吉沢の寝室——その中央の床に、つま先立ちをして立っているのは京子である。京子の縄尻には、新しいロープがつぎたされ、それは天井のハリにかけられている。

先程、吉沢に乱暴されたため、おどろに髪

も乱れていたが、それも、二人のズベ公に、きれいに櫛を当てられ、化粧もし直された京子は、こうこうとした明るい電球のもと、ぴんと肉の締った美しい裸身を立たせている。数々の責めを受けたとは思えぬ驚くほど新鮮な若い肌は、明るい電光をはじき返えすように真っ白に光って見えるのだった。

「フッフ、いいおっぱいしているわね」

銀子と朱美は、緊縛された美女の周囲をニヤニヤしながら廻り、数本の麻縄をその上下へ巻きつかせている盛り上った京子の乳房をついたりする。

「あんた、少しは悪い事をしたと反省しているの」

「夫となる人の手に噛みついたりして、猿の夫婦じゃあるまいし——」

銀子と朱美は、うしろへまわって、脂肪のしぶきで、光るような尻たぶをつねったりする。森田はベッドの傍にある椅子に腰をおろし、ウイスキーを飲みながら、京子の美しい肉体をしげしげ見つめていたが、

「どうだ京子。この屋敷から逃げようとしたって無駄だという事がよくわかったろう。おめえは妹の美津子だけでも何とかここから逃がそうと考えてるようだが、そういう量見も

きっぱり捨てて、姉妹仲良くショーのスターになってくれなきゃ困るんだ」

森田がそういった時、銀子がキラリと眼を光らせるようにして、

「そこでね。親分さん、あたいの考えなんだけど、こうしちゃどうでしょう」

銀子は森田の所へ来て、何か耳元に小聲でささやく。

森田は、口をあけて笑い出した。

「なるほど、そいつは面白いかも知れねえ」

「妹思い、姉思いの姉妹でしょう。一そ、そうしてやった方が——」

銀子も森田に合わせるようにして口を開けて笑うのだ。

森田は、椅子から立上り、酒にほてった赤ら顔をなぜながら京子に近づく。

「へっへ、銀子はなかなか面白い事を考えてくれたぜ。それほど、お互いの身を思い合う姉妹なら、一そ、二人をプレイのコンビにしちまおうというんだ」

今まで、美しい顔を横へ伏せるようにして一切の屈辱に眼を閉じていた京子であるが、その言葉を耳にすると、はっと血の気を失い思わず眼を見開く。

「どう、京子さん。グッド・アイデアでしょ

う。明日、美津子嬢は初舞台、それで彼女もきっと自信がつく事でしようし、明後日から姉妹ショーの練習にとりかかろうと思うの。仲のいい貴女達の事だもの。この企画はきっと成功すると思うわ」

何という残酷無惨な銀子の着想か。京子は恐怖のため、唇がふるえ言葉も出ないのだ。

「静子夫人だって、桂子と見事に演じて見せたぜ。おめえと静子夫人のコンビは、そのうち解消させなきゃなくなる。というのは、新しく遠山夫人となられた人の命令で、静子奥様に妊娠して頂く事になったんだ。となりゃ、おめえの新しい相手が必要だ。美津子なら異存はあるめえ。どうだ」

森田は、今にも泣き出しそうな京子の顔を、楽しそうに眺めて、口元を歪める。

「ああ」

京子は、悲痛な顔つきになり、きびしく緊縛されている全身をブルブル震わせるのだった。

鬼か、けだものか、いや、この屋敷に巣くう人間どもにくらべれば、鬼やけだものの方がまだましであろう。あの深窓に育った艶麗な令夫人と令嬢に地獄のショーを演じさせ、なおそれだけではあき足らず、静子夫人を無

理やり妊娠させようという悪どさ、京子はあまりのことに気を失いそうになった。

「返事がないところを見ると、承知してくれたのね」

朱実が、京子の臍を指ではじき、くすくす笑う。

京子は、再び、眼を見開いて、唇を震わせるようにしていった。

「美、美津子と私とは、ほ、ほんとの姉妹なのよ。そ、それを、貴方達は——」

あとは涙で、のどがつまり声が出ない京子である。

銀子がせせら笑うようにいう。

「姉妹だから、どうっていうのよ。二人とも女である事には違いないでしょう。心配しなくてもいいわよ。あたいと朱実が、腕によりをかけてみっちり仕込んであげるわ。ねえ、朱実」

「そうよ。二人とも音をたてて喜び合うまで仕込んであげる」

二人のズベ公は顔を見合わせ、キヤッキヤッと笑い合った。

遂に、京子は、がっくりと首を垂れ、肩を激しく震わせ、号泣し始める。

森田はそれを見ると、ズベ公二人を手で押

し止めるようにして、京子の傍へ寄る。

激しく嗚咽する京子の美しい横顔を見ながら、

「へっへへ、京子嬢、そんなに美津子とプレイするのは辛いのかね」

京子は、その言葉にすがりつくように、涙の一杯にじんだ美しい瞳をあげる。

「お、お願いです。妹と、そ、そんな事だけは——」

そういつて、再び、泣きじゃくる京子である。

「じゃ、さっきの事は充分反省するっていうんだね」

「——は、反省します——」

京子は、すすりあげるようにしていい、「どうぞ、私を、ぶつなり、なぐるなり、お気のすむように、なさって下さい。お願いします」

京子は、森田に向かって、必死になって哀願するのだった。

「いや、別に、ぶつたり、なぐったりはしねえよ。第一、おめえは森田組の大切な商品だからな。商品に傷をつけるような事はしたくねえ」

森田はそういつて、ウイスキーびんを口に

当て、ラッパ飲みしながら、

「俺の要求する事は大した事じゃねえ。吉沢のいい女房におめえがなってくれりゃいいのさ。奴は血の気が多くていけねえ。おめえの

ような別嬪が奴の女房になってくれりゃ奴も少しはおとなしくなってくれると思うんだ」

わかったな、と森田は、京子のあごに手をかけて、泣きぬれた京子の美しい顔をこじあ

げる。

「もうすぐ、ここへ吉沢が手の治療をしてやってくる。おめえは奴にさっきの事を充分詫

びて、仲直りし、夫婦の契りを固くむすんでくれりゃいいのだ。簡単な事だよ」

森田は、そういつて、銀子と朱実を手招き

して部屋の隅へ行き、京子に聞こえないよう小声で話し出す。

「あとはおめえ達に任すぜ。吉沢に充分、詫びを入れさせ、とにかく今夜、吉沢と夫婦にしちまうんだ。そうなりゃこっちのもの、吉

沢からも口説かせて、明後日からは泣こうが

わめこうが、美津子とコンビを組ませる。仕事は、予定通りすすめてくれ」

森田は、そういつて、銀子と朱実の肩をたたくようにして出て行く。

銀子と朱実は、わくわくする思いで、京子

の傍へ近寄っていく。

「いいね。京子、今、親分が私達にいい残していったけど、吉沢さんがここへ来たら、心からさっきの失礼をお詫びしなきゃ駄目よ。あたい達が横から見ていて、貴女の態度が気に入らない時は、やはり予定通り、美津子とコンビを組ませるからね。そのつもりでいるのよ」

銀子が、そういうと、つづいて朱美が、

「貴女、さっき、吉沢さんがきた時、ときびしく、突っぱねたでしょう。夫にさわれるのを嫌がる妻っていないわよ。今度は、貴女から吉沢さんにおねだりして、気のすむまでさわって頂くのよ。わかった」

「そうね。でも、その前に、反省の意味で、元通り、吉沢さんに剃ってもらおう事だわ」

「でも、すましこんでちゃ駄目ね。そういう事をされる場合の女性の動作というものは、男性の気持をとて、楽しくさせるものなのよ。つまり剃られ方が大切っていうわけね。教えてあげるわ」

銀子と朱美は、真っ赤になった顔を横をそむけ、身をよじりつつづける京子の左右に立って、色々な事を耳もとにふきこみ、吉沢が現れた場合の京子のとるべき態度を面白半分、

教示するのだ。

「わかったわね。あたい達に教わった通りの事を実行しないと、フッフ、もういわなくても、わかってるわね」

銀子は、羞恥と恐怖に、身を震わせる京子に対し、何度も念を押すように、乳房や尻を指でつつくのだった。

京子の号泣

手首に縋帯を巻きつけた吉沢が、部屋へ入って来たのは、それから、十五分ほどたつてからであったが、京子は、銀子と朱美の二人に、男性、つまり、吉沢に対する意識的ポーズ、いいかえれば男性に対する性的魅力発揮という事について、教育され、教示され、その一切を承服した如く、軽い瞑目をしたまま吉沢の登場を待っていたのである。

吉沢を見ると、銀子と朱美は、北叟笑み、「ずいぶん、おそかったじゃないの。京子嬢は待ちくたびれて、しびれを切らしていたのよ」

そして、銀子は、すぐ京子に向い、「御主人がおいでになったわよ。さ、先程の失礼を心からお詫びして、仲直りするのよ」

吉沢は、緊縛された美女の前へ、朱美にながされて進み出る。

「さ、京子、黙っていちゃ駄目よ」

と、朱美は、京子の横に立って肩をつく。いわれた通りにしないと、お前さんは姉の美津子と——朱美の冷たい瞳は、そういったがっているのだ。

京子は、うっすらと美しい瞳を開いて、眼前に立つ吉沢の醜惡な顔を見る。八つ裂きしてやりたい程、憎い男の吉沢——しかし京子は、彼に対し、その獸欲を一層、昂めるため、銀子達に指導されたポーズをとらねばならないのだ。

京子は、恨みとも呪いともつかぬものを呑みこみ、わなわな唇を震わせながら口を開くのだった。

「——吉沢さん。貴方に噛みついたりなんかして、本当に悪うございました。京子、心から、お詫び致します」

京子は、口惜しさをぐっと呑みこむようにして、銀子達に教示された言葉を口にしていた。

吉沢は、フンと鼻で笑う。

「お詫び致しますとだと。やい、京子。俺は手前のために、一度ならず二度までも、煮湯

をのまされてるんだぞ。一体どういう風に詫
びを入れるっていうんだ」

吉沢が京子の前で凄んで見せると、銀子が
それをなだめるように、

「まあまあ、吉沢兄貴、そんなに怒る事はな
いじゃないか。今度という今度は、この京子
嬢、本当に改心する気持になってるんだよ」
銀子がうなだれている京子を楽しそうに見
て、そういうと、つづいて朱実も吉沢にいっ
た。

「さっきは、あんなに沢山の人間がいる前だ
から、京子嬢も羞しくて、つい、かっとなり
ああいう事をしてしまったんだよ。でもね、
さわらせるのは妻として当然の事だと改心し
てね。吉沢さんが満足されるまで、さわって
いただくと自分でいい出したのよ。ね、そう
だろう。京子さん」

京子は、消え入るように、小さくうなずく
のだった。

「そうかい。俺が満足するっていうより、お
めえが満足するまで、さわってやるぜ」

吉沢は、口をまげて笑い、身をかがませよ
うとすると、

「待、待って」

京子は、すすりあげながら、真っ赤になっ

た顔をそむけ、固く眼を閉ざしたまま、震わ
せるように唇を開く。

「そ、そんなに、せっかちな嫌」

「へえ？」

吉沢は眼をパチパチさせて京子を下から見
上げる。

「京子、今度は本当に心を入れかえたの。も
一度、丸坊主になって、貴方にお詫びがした
いのよ。ね。お剃りになって頂戴。」

よし、わかった、と吉沢は、ほくほくした
顔つきで立上り、ベッドのある所まで戻って
机のひき出しを開け、剃刃を探し始める。

その間に、銀子と朱実は、そっと、京子の
傍へにじり寄るようにして、

「なかなかうまいわね。その調子でやるの
よ。いいわね。あたい達が教えてあげたよう
に、最後までしっかりやってね」

京子の固く閉じた瞳から、幾筋もの涙が、
白い頬を伝わって流れ落ちる。

朱実も、それを眺めながら、くすくす笑っ
ていった。

「せっかく元通り生えてきたものを剃りとら
れるのは悲しいだろうけど、美津子と変な関
係を結ばなくてもすむんだからね。まあ、が
まんするさ」

吉沢が西洋剃刃と少量の水が入った皿とを
持って戻ってくる。

へへへ、と舌なめずりをするように笑いな
がら、腰をかがめ、

「生憎、石ケンをきらしちゃったんだ。水で
がまんしてくんな」

吉沢は、皿の水を掌にこぼし、万遍なくぬ
り始めた。

「ああー」

京子は、全身を熱くして、思わず、身をよ
じり始める。

「おいおい、そんなに身体を動かしちゃ駄目
だ。肌を傷つけちゃうじゃないか」

吉沢は、剃刃を右手に持ち、当てがいなが
ら叱るのだった。

京子は、キリキリと歯を噛み鳴らしながら
全身を鋼鉄のように固くし、吉沢の剃刃に身
を任せてしまう。

「剃られ方が大事と、あたいが、いった筈だ
けど」

銀子は、わなわな身体を震わせて、剃刃の
動きを受けている京子に蛇のような眼をむけ
ていうのだった。

「——よ、吉沢さん。もっと、もっと、ゆっ
くり剃刃を使って頂戴」

「よしよし、どうかい」

「——ええ——ああ、京子、幸せだわ」

「へへへ、こうしてやろうか」

「あ——駄目よ。そんな事、全部、お剃りになってから、ゆっくりなさればいいじゃないの」

京子は、我れと我耳を没我の境地に落し入れるべく努力し、銀子や朱実に命令された通り、吉沢の心を高ぶらせるように努めるのだった。

切なげに身をよじり、赤らんだ顔をそむけ吉沢のいたずらに対して、拒否に非ざる甘い否定の言葉、すべてが銀子の要求によるものとはいえ、京子は、半ば、無意識のうちに、吉沢にそれらを示し始め出したのだ。

強烈な羞恥という精神的抑制は、吉沢の一種の手練手管によって、少しずつ、薄らいでいく感であり、やがて、京子は、吉沢の仕事に協力し始めたよう、心持、足を開き、軽く前へ突き出すようにさえするのである。

「そーら、出来上りだ。どうでい。さっぱりした気分になったろう」

吉沢は、立上り、仕事の出来具合を点検するように眺める。

「フッフ、いい形をしているわよ、京子嬢」

銀子と朱実も、待ってました、とばかり近寄って、眼をギラギラさせて、のぞきこむ。

吉沢の作業がようやく終わったところで、京子は、夢の境地から眼覚めたように、再び、たまらなく辛い羞恥心が、ぐっとこみ上げてきて、思わず両肢をびったりと閉じ合わせてしまう。

銀子は、煙草を口にし、火をつけると、けむそうに煙を吐きながら、京子にいった。

「さあ、京子さん。次は、どうするのだった。教えられた通り、早く先をすすめてゆく。ぐずぐずすると、ベッドへ入らないうち夜が明けてしまうわよ」

京子は、人間的思念を断ち切ったように、美しい顔をそっとあげ、涙のにじんだきれいな瞳を吉沢に向けた。

「——吉沢さん」

京子の一点をじっと凝視していた吉沢は、ふと首をあげ、ニヤリと笑う。

「何だね。京子嬢、きれいに剃ってもらった礼が いい のか」

京子は黒眼がちににじんだ二つの瞳を、ふと、吉沢の視線からそらし、

「——とても、とても、すばらしい気持だったわ。——ねえ、キスして下さない」

吉沢は、顔中、しわだらけにくずして、京子のふくやかな肩をいだく。

「京子、今夜、おめえと俺とは、この部屋で夫婦になるんだ。異存はあるめえな。これからも、せいぜい可愛がってやるぜ」

吉沢に肩をゆすられて、京子は、ハラハラ涙をこぼした。憎みてもあまりある、この獣と今夜は——そう思うと、屈辱の、くやし涙が次々にあふれ出るのであった。

酒くさい吉沢の唇が近づいてくる。京子は涙をのみこむようにして、その唇に自分の唇を合わせるのだった。肩を抱く吉沢の腕に力が入り、京子は、覆いかぶさって来るような吉沢に抱きすくめられたまま、知覚が消えていくような接吻を受ける。

吉沢は、白い京子の首筋に遮二無二キスし、京子の柔軟な肌から、ほのかにたちこめる香料に酔ったよう、再び、強烈な接吻を唇に求め、京子の舌を吸い始める。京子は、もうどうともなれとばかり、にがい涙をこぼしつつ、軽く瞑目したまま、吉沢に舌を吸わせているのだった。

「熱烈な接吻ね。あたい達も、何だか、ポ——ッとなってきたわ」

銀子と朱実は、顔を見合わせて、笑ってい

たが、ふと、嫉妬めいたものが胸にきたのか
そんな状態にある二人の傍へ近寄る。

吉沢は、何かに憑かれたように、京子から
やっと唇を離すと、首筋から、肩のあたりに
まで接吻の雨を降らしまくっている。

小さく口を開け、上気したように熱い息を
吐いている京子の耳もとへ、口を寄せた銀子
は、

「フッフ、美人は得だね。男から、こんなに
愛してもらえるんだから」

と、妙に、ひがんだいいかたをし、次に語
気を強めて、

「何時までも、いい気分になっているんじゃないよ。次に吉沢兄貴に、おねだりする事が
あったろう」

京子は、上気した顔を、嫌嫌するように
左右へ振る。

「お願い、も、もうこれ以上、私、出来ない
わ」

「なんだって」

銀子は、眼をつりあげる。

「じゃ、美津子とプレイがしたいというんだ
ね」

「嫌っ嫌っ、そ、それだけは——」

「じゃ、いわれた通りの事を、ちゃんとする

んだよっ」

吉沢が、上体を起して、銀子にどなり出し
た。

「なんだ、この野郎。せっかく気分がのって
るところに水をさすねえ。何をブツブツいっ
てやがるんだ」

銀子は顔をくずして、

「いや、なに、この京子嬢がね。あんたに、
おねだりしたい事があるんだとさ」

銀子は、京子の肩をつく。

京子は、すすりあげながら、顔を横へそむ
けつつ、口を開いた。

「——吉、吉沢さん。京子は、今夜から、貴
方の妻よ。先程のような失礼な態度は二度と
とらないわ。おさわりになりたい所があった
のでしょう。ご、ご満足されるまで、さ、遠
慮はいらないわ」

京子は、声を震わせてそういい、一層、ね
じ曲げるように顔をそむけるのだった。

「へへへ、そういう気持になってくれたのは
有難いが、何も、銀子達のいる前で、そんな
事しなくてもいいぜ。二人きりになった時た
っぷりと——」

「嫌、嫌、京子、どれほど、貴方を愛してい
るか、その証拠をさらけ出し、銀子さんや朱

美さん達の眼で、たしかめて、頂きたいの」

これには吉沢も、たじたととなり、銀子や
朱美達の悪ふざけに舌をまく。

朱美は、平然とした顔つきで、吉沢にいっ
た。

「そんなに頼んでいるんだから、望みを叶え
ておやりよ。女に恥をかかせるもんじゃない
わよ」

「丸坊主を責めあげるのも面白いじゃない。
あたい達も手伝ってあげるわ」

朱美と銀子は、キヤッキヤッ笑いながら、
屈辱にのたうっている京子の緊縛肢体に眼を
向けるのだった。

勝利に酔う悪魔

千代は、義子の案内で、地下倉に檻禁され
ている文夫と美津子をのぞき、それから、一
番、奥まったところにある牢舎へ向う。そこ
には、村瀬宝石商の令嬢、小夜子が檻禁され
ているのだ。

四坪位の狭くて薄暗い牢舎の中、裸電球の
にぶい燭光に照らし出されている、雪白の美肌
を格子越しにのぞいた千代は、

「まあ、美しいお嬢さんね」

と、感歎の声をあげる。

黒ずんだ柱を背にし、坐っているのは、どこからどこまでも、柔かい曲線でとり囲まれた均整のとれた身体づきの美女、小夜子であった。洗煉された如何にも大家の令嬢らしい気品にあふれた美女が、後手にきびしく緊縛され、適度に肉ののっぴきらしい足はあぐらに組まれ、その交錯した両足首をかつちりと縄でつなぎ合わされている。

義子が、千代に説明した。

「向うの牢屋の中へ入っている文夫の姉ですの。村瀬宝石商会の令嬢ですわ」

「へえー」

千代は、うなずきながら、あられもないあぐら縛りにされている大家の令嬢に眼をそそぎつつける。

小夜子は、キラキラ光る涙をにじませた黒真珠のように美しい瞳を、表にいる二人にちらと向けたが、すぐに顔を横へそらせるのだった。

その妖しいばかりの色の白さと美しく緊まった鼻すじは、高貴なところに生まれたという事を物語っているように受取られる。

「こんな美しいお嬢さんを、商売ものにするの」

千代は、義子に聞いた。

「ええ、最初は身代金を一千万円ばかり頂戴しようという計画でしたの。でも、それに失敗しちゃったんで、方針をかえ、商品にして稼げるだけ稼ごうという事になったわけですよ」

義子は、ポケットから鍵を取り出し、牢格子の扉の錠前へさしこむ。

ギイーと音を軋ませて扉が開くと、柱を背に、あぐら縛りにされている小夜子は、はつと体を硬化させ、交錯された膝頭のあたりをブルブル震わせるのだ。

「どう、お嬢さん、御気分は？」

義子は、小夜子の横に身をかがませ、麻縄で、しめあげられている小夜子の美しい全身をしげしげと見つめるのだ。

「ほんとに、きれいな身体だわ」

千代は、小夜子の正面に身をかがませる。

人間の手に及ばない深い海底で造りあげられた天然真珠のような光沢をもつ小夜子の美しい肌。千代は絶世とばかりいわれた美女、静子夫人に対する嫉妬めいた憎悪と共通したもの、ふと、この若い美しい令嬢に対してもち出したのである。

「ホホホ、お嬢さん、これから、どういう修

業をつまれるのかは知らないけれど、とにかく一生懸命がんばって下さいね。私も、かげながら大いに応援させて頂きますわ」

義子が、それにつけ足すようにして小夜子にいった。

「まだ知らせていなかったけど、貴女の弟の文夫は明日、美津子とめでたく結婚する事になったのよ」

えっと小夜子は、美しい顔をひきつらせるようにして上へあげる。

「何もそんなに驚く事はないじゃないの。文夫と美津子は以前から恋仲なんでしょう。だから、私達が気を利かせて夫婦にしてやるのよ。つまり、これから、あの若い二人の夫婦生活というものがショーになるわけ。わかるでしょう」

義子がそういって、笑うと、小夜子は、たまらなくなったように全身を悶えさせて、

「文夫に、文夫に一眼逢わせて下さい」

「でもね。いくら姉と弟だからといっても、お互いに丸裸で対面するのは羞しくない？」

美子は、そんな事をいって、せせら笑い、「心配しなくてもいいわ。明日の夜行なう文夫と美津子の結婚式には、文夫の姉と美津子の姉は出席させるという事になっているの。」

それに、何か余興もやって頂きたいし、ま、それは明日のお楽しみってところね」

小夜子は、がっくりと首を垂れ、パーマのかかった艶々しい黒髪を震わせて、号泣し始めたので、義子は千代をうながすように見て立上る。

「じゃ、また、明日ね」

千代と義子は、牢舎から出て行く。地下階段を上がりながら、千代は義子にいった。

「ああいう大家の令嬢を調教するっていうのは大変だね」

「でも、静子夫人だって、最初は本当に手古

挿絵画家を募る

○本誌の内容にふさわしい挿絵を求めます。腕に自信のあるお方は、どうか自作画をお送り下さい。

○用紙は必ず白い画用紙に墨又は黒インクにてお書き願います。鉛筆画や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですが、余り小さいものは困ります。

○今まで多数御応募頂きましたが、挿絵の型にはまっていけないものが殆どで甚だ残念でした。傑作を期待いたします。

ずったけど、あそこまでいくようになったんですからね。調教する側の腕次第って事ですよ」

千代は義子に案内されて、自分の寝室に当てがわれた一室に入る。

「お休み前に、もう一杯、ウイスキーでもお飲みになりますか」

と、義子は、棚から、ウイスキーびんを取りおろし、卓の上へ持って来た。

長い間、憎悪の心を持って接してきた、静子夫人に対し、復讐でもしたつもりで、夕刻から徹底的に責めあげた興奮は、未だに千代の体内から去らない。それに今——自分から一切の財産を没収し、人間としての権利さえ剥奪した悪徳弁護士の伊沢と汗みどろになってプレイを演じているであろう静子夫人の事を思うと、変質的な悦びがじわじわと胸にこみ上ってくる千代であった。いくら酒やウイスキーを飲んでも、千代は眼がさえるばかりで、仲々、寝つかれない。

義子を相手に、とりとめもなく雑談をかわして、ウイスキーを飲み合っていると、ノックの音。入って来たのは、ほろ酔い気嫌の川田である。

「何だ。千代、まだ寝ねえのか。おっと、い

くら妹でも千代なんて呼びつけしちゃう罰が当るな。おめえは遠山新夫人だからな」

川田は、千代に注がれたウイスキーをうまそうに飲みながら、

「さっき、伊沢先生、腹がへったといって、食堂へ来てパンとソーセージをかじってよ。また戦闘開始だと部屋へもどって行ったぜ」

「まあ」

千代は義子と顔を見合わせて、くすくす笑う。

「戦争の状況はどうです、と聞いたらよ。静子夫人をたてつけに三回させちまったというから驚くじゃねえか。この分で、あけがたまでつづけられたんじゃ、あの令夫人、ガタガタになっちまうんじゃないか。とにかく、聞きしに勝る凄惨な先生だよ」

川田は、ゲラゲラ笑いながらいう。

千代もそれにつられて笑いながら

「奥様にしたって必死よ。先生の挑戦に応じなければ桂子嬢をまきこむ事になっちまうんだからね。だけど、あれだけのいい体だよ。何とか朝まで持ちこたえるだろうさ」

千代、川田、義子の三人は、一度に溜飲を下げたように高笑いしながら、ウイスキーをくみ合うのだった。

(つづく)



牡丹 (ぼたん)

〈花物語・2〉

万 田 不 仁

「寒からぬ露やぼたんの花の蜜……か」

男はつぶやくように言くと、またごろり横になる。床に生けた白牡丹が今しがた小女が入れたばかりの明りに映えて美しい。午過ぎから降りだした雨が春も終りらしい重たい雨音を軒にひびかせて、閉じきった部屋のなかには暖気と酒のにおいと情痴に没頭した男女のあふら濃い体臭、白粉の香り、びんの油などないまざったどろっとした空気でいっそ、うつつうしいくらい。

「……しらぬ火の鏡にうつる牡丹かな……ふうむ……」

冷えた残り酒を口に含んで、男は天井を見つめて何やらしきりに思案顔。坊主頭の小び

んに短い白髪のうるさくはえている小ぶとりの五十男だ。

「ホホホ、俳諧ですか？」

「うむ、あす夜雪庵の運座でナ。わしはこの道に、晩学で、古人の名句に感心してもさて己れで作ridすととなると、とんとうまくいかんのじゃよ」

「なんの、なんのその実達者なんじゃないんですか、遊びとおんなじに、ホホホホ」

「ふふふふ」

男はたちまち作句のことなど一気に振り切ったのか、笑いながら半身を起こして、片手を女の腰にやった。横坐りの女はわざとらしくものうそうに膝をくずして

「ホホホ、まあま、もう少しお行儀よくなさいますナ」

と、愛嬌のあるながし目。裾が少しひらいてふっくらした白いはぎが見える。

「わたしはひと汗流してきますよ、あなたのお相手はこれでちよっとばかり疲れます」

行燈のほうに切れ長の目を向けて、女は片膝立てた。

「ふふふ、まあいいではないか、その汗ばんだところで、もう一度……」

「おや、おや、俳諧を考えるかと思えば、またすぐさま……よく気のうごく方。わたしは買われた体ですから、そりゃ何度でもお相手しますが、おふうできよめてきた体のほうが

あなたも気持ちがいいでしょうに」

「いや、いや、おせい、そうでないで。それに今夜は戻らねばならぬ、いかに息子がやさしくても、そうそう甘えられぬのじゃ、ハハハハ」

「おや、まあ、居続けかとはっかし思っていました、そんならどうぞ、どうせ隣に蒲団は敷きずめですしネ、ホホホホ」

おせいは立ち上がり、ちよっと背のびしてからよろめく足を踏みしめる男を押すようにして小部屋にはいった。

深川のこども屋「福づち」の遊女のおせいは、もう四年もかせいで良い客もつき、前借も返したうえ、二十両ほどためていた。客運が悪かったり、生得しまりのない、朋輩の遊女たちに言わせると、おせいはずるくて、床じようずなのだそうだが、彼女はそんな蔭口に少しも気付かぬふうに、おっとりかまえていた。

男は、向島の子供医者で笹島玄昌と言い、去年家督を息子に譲って気ままな隠居の身、妻は十年ほど前、世を去っており、その時分からちよくちよく岡場所通いをしている。俗に七つ下がりの雨とか言う女道楽の部類の玄昌の遊びであるが、彼の遊びは些か普通人と

ことなっていた。もっとも多くの客に接しているおせいの目からすればこうしたたぐいの客も格別に珍しいものではなかったが……。

玄昌は小部屋の夏床に横になった。その夏床は裕福な玄昌がいち早くおせいの為にととのえたものだ。夏床を女に支度して、その初床の客になる。遊蕩気分を満たし、己れのふところぐあいに自足する後生楽な男ごころに玄昌の初老の血はうずいていらいしい。

おせいは、横伏しの玄昌の体を仰向けにした。そしてこれも手くだで、袷の裾をわざと乱して男の広い胸のうえに馬乗りになった。それから武者絵の組討ちで上になった士がよくしているように男の両腕を左右の膝がしらしにしっかりと敷きこんだ。肉置きのいいおせいにどっかりと組敷かれた玄昌はかるく両足をばたつかせて

「されども真田は力まさりの武者なれば、下よりも、えいやッと言うて跳ね返し、俣野を取って抑え、兜をばかなぐり捨て、乱髪をつかんで上げ、首をかけども、かかれずかかれず」

と、軍談調にふざける。

「ホホホホ、なんのことですか、それは？」
「なあにネ、石橋山の合戦じゃよ、ふふふ」

おせいは笑って、両手でじわじわ男の喉を締めにかかる。男はやがてうっとりした目の色になりかける……。おせいの目がじっと玄昌のそんな目を見る。

こんなことをもう何回したことだろうとおせいはしだいにきつく玄昌の喉を両手に圧しながら考える。おせいのもとへ通う客は色々ある。ずいぶんと恥ずかしいことをさせたがる客もいるし、乱暴なあつかいをする客もいる。そんななかで玄昌のように己れの嗜好を訴えて、女にいじめてもらいたがる客も時々あらわれる。二年余り前の、雁が鳴き渡る物さびしい秋のある晩に、あがったやせぎすの三十男、両国の版木職人と言うその男が玄昌のような好みを持った最初の客だった。それまでごくいやらしい真似をしたり、金を出した時間はこっちの勝手だとばかり手ひどいことをする客ばかりに当たってきたおせいは当座ひどく驚いたものだった。

おせいは玄昌の喉を責めながら版木職人の場合は、共に横伏しに寝て後ろから女に首を締められるのが好きだったと、その手ぐたのさまを思い出していた。

「あなた、ちよいとお頼みなんだけど」
男の目色が次第に恍惚となったところにおせ

いは小さな声で言った。それはとうに切り出そうとしてできなかったことだった。

「え、え、なんだい、ふふん、なんぞねだりごとかい？ ふふ川柳点にもある。心棒をはめると何とかねだりごとって」

男の酒臭い息をさりげなく避けて女は目にたっぷり媚をこめて

「ホホホ、おねだりには違いないが、そんな大層なもんじゃありませんよ、それにいやあだ、まだ何もほんとうになってないじゃありませんか、ただ上に乗ってあげてるだけなのに、ホホホホ」

男の腕を抑えていた右の膝を立てて、おせいは白い腿とはぎをなめる緋ぢりめんで男の血をそそりながら

「なにネ、ちかごろこのへんをたちの悪い犬がうろつくんですよ、やたら噛むそうでみんなこわがってるの、それであなたにマチンの分量をおしえていただこうかと思って……」

「なんだ、そんなことは私に聞かなくても薬屋で教えてくれらあネ」

「でもねエ、いっぺんに利いてひどく苦しんで死なれるのは気色が悪いんですよ。こうだんだんに利いて……」

「ハハハハ、どっちだって殺されるぶんには

おんなじさ、いっそいっぺんにお陀仏のほうがいい第一お前の目の前で死ぬわけだし」

「ホホホ、それもそうだけど、なんだか酷ですネ」

「ふふふふ、ちっとずつ体をおかしくされるほうがもっとひどいわ」

「ホホホホ、あなたをこうしてやんわり締め、しまいに息の根を止めてしまったらどうでしょう？」

「おお、惚れた女の尻に敷かれて極楽往生。それこそ私の本望とするところだ。けれど、そうもなるまいて」

「ええ、ええ、そんなことになったらたいへん。お仕置き場ではさきり首を斬られてしまふ。おおこわ、ぶるぶる」

「ハハハハ」

たあいなく玄昌は笑った。彼はおせいに万一首締めのおげく気絶した場合の活の入れ方まで教えこんであつたが、おせいにはおそろしくて、とても、そんなひどい戯れはできない。しかし、あまり手ぬるく、やわやわと締めるだけでは玄昌はもどかしがり満足しないので、時には己れを金で買った魂のない玩具のように取扱ういやらしい、憎たらしい客の顔やしぐさを頭にえがいて、そんな客たちへ

の嫌悪や怨みをここで幾らか晴らしてやるような気になって玄昌の喉を圧してやることもあつた。そうしてやれば若い女による被虐を愛する玄昌は苦し気に目をむきながら有頂天に歓ぶし、そんな晩は祝儀も殊にはずむので金をためるのに夢中なおせいには得なことなのだが、ことのあとには何か胸ににがいかたまりが残るのだった。

「締めるのはこのくらいにして、こんどはこうしてあげる」

すっと腰を浮かして、体を前に進めたおせいは、玄昌の年より若く見えるまる顔のうえにまたがった。ゆたかな女の尻が男の顔をかきつけて、尻の割れ目が男の鼻にかかった。それは、柳句にある「女天狗はねぼけて鼻におつかぶせ」さながらの恰好だった。おせいはそうやって男のせつなげな熱い息使いを尻の下に感じながら、じっと目をつむった。一人のやっかいな男、できるものなら闇から闇へねむらせてしまいたい、男のことを考えながら。根は臆病な女だが、これだけはだんだん固く思いつめていたのだ。

★

玄昌を送り出して、おせいが中座敷に出ると回しの客は勘蔵だった。おせいの頬ににが

いものが浮かんだ。

「おう、あんまり嬉しい顔もしてくれねえがおいらだって客じゃあねエか、それによ昔を言やあ、おめえもそうそう冷てえそぶりもできねエ筈だぜ」

勘蔵は酒を飲むと青みがかかる細面の白目がちの目をぎらつかせて、最初からからんでくる調子だ。

「なに言ってるんだい。またたかりに来たんだろうに、客づらがあきれるよ、フフフ、なあにネ、べつだん悪い顔を見せるわけじゃないんだが今日はえらく疲れてんのサ」

蛇に見込まれた蛙みたいになりたくない虚勢をはった。ことさら自堕落なふりで、おせいは勘蔵のそばに横坐りになる。

勘蔵の言うとおり彼とおせいは以前一度は世帯らしいものを持った仲であった。

今でこそ見るかげもなくうらぶれた勘蔵だが、七年前は日本橋の太物商の次男坊で、ずいぶん毎日面白い自分だった。道楽者で羽目をはずしていながら、弟思いの兄与兵衛の庇護のもとで兎も角大きなボロを出さずに暮らしているうち岡場所遊びのたまたまの口直しに手をつけた心算の女中のおせいにいつときのぼせて、共に家を飛び出したものの、

もとよりすぐにおせいにあきた勘蔵にはまるでたつきの甲斐性がなかった。そのうち身内のなかで唯一人勘蔵の味方だった与兵衛がはやり病であっけなく死んだ為、勘蔵は改めて勘当というきびしい処置を受けねばならなかった。彼が博奕の間違いがもとで刃傷沙汰に巻きこまれ、島送りになったとき、おせいは勘蔵の子をやどしていたが、驚愕のあまり流産した。

三宅島での乏しい、みじめな流人ぐらし。三年ののちに赦免に遇って江戸に還った勘蔵には、かつての商家の若旦那の面影に代わるに世間からあぶれた無籍者めいた、すさんだ丰采がはめこんだようにびったりしていた。「おいらいろんなことしたぜ、島帰りのおいらを使ってくれるところはなかなかねエ。料理屋の洗い場、瓦葺きの下職、屑買い……おれの根がねエのか、向こうが人が悪いのかどうも永続きがしねエ、いや、おめえは昔のぐうたらばかし考えてるが、これでも何とかまっとうになろうとあがいてるんだ」

博奕でついたときにあがった福づちで初会の女がおせいだった驚きがおさまったあとで勘蔵はこんなことを言った。彼はどういう経路をたどって、おせいがこんな社会に身を沈

めたのかその身の上話を聞いて、女の境涯をあわれむよりも三宅島で毎晩のようにおせいの情の深かったことを想い、おせいの夢をよく見たことを言って、女の同情を引こうとする心組みの甘い言葉をしきりに言いつづけるのだった。彼の偶然の再会を喜ぶ心の底にはかつて本所の裏だなでちゃん世帯を持った時分におせいが針仕事をはじめ色々な内職をして精いっぱい己れを養ってくれた昔を繰返したいまるで虫のいい期待があったのだが……

「明りは消そうか、それともこのままがいいかい？」

おせいはせわしげに男を誘った。玄昌との永い座敷で事実体の心が重たかった。変態的な玄昌の相手をしたあとではほんとうに体を借した数は勘えないのに疲れが残る。

「いやに、邪慳にせつつくじゃねエか、ま、いいやな、寝ながらも話はできる、へへへ」

おせいは立ったまままで無造作に着物をぬいだ。女に不自由しているらしい勘蔵はほんの短い間に萎えて豊満な女の体を離れた。

「なア、おせい、実はなア、おいら博打場の借金が二十両ほどある。下谷の大木様下屋敷

の賭場でよ。こいつを早急に戻さねえと、おいらの顔が立たねえんだ、不義理をするやと帰ってきたこの江戸にいらなくなるんだ」

事務的にさっと身づくろいしているおせいの袖にすぎするようにして勘蔵は頼みだした。

「おや、おや、お前さんいつそんなえらい博打うちになったんだい。考えてもごらん、こんな泥水稼業の私にまとまった金なんざあるわけがないだろう」

「ま、そう冷たくするなてエことよ。なんだってナ、おめえ金貸しのおしん婆とかにだいが預けてあるそうじゃねエか」

「えーば、ばかをお言いでないよ、なんで私にそんな稼ぎがあるもんかネ」

おせいは体がわなわなふるほど腹が立った。勘蔵は来るたびに何とか理由をあげて無心をする。ことわれればへんに凄んで、人が変わったように島帰りをひけらかしておれはもう半ばやけだ、ことわれれば只じゃすまねエぜなどとおどす、そんな今は底知れない男の心がやはりおそろしい。すでに二十両、おせいは勘蔵にせびられていた。ひと口に二十両だが、この商売にはいつてからのおせいには稼いだ金は、己れのそれこそ血と脂のか

たまりに思えたから戻るあてのない二十両は惜しみて余りがあった。今後ともこの男に哀願されたり、おどかされたり、すかさねたりして、だいいじなお宝をむしり取られねばならぬのかと思うと目の先がまっくらになる。

「よう、何んとかしてもらいてえんだ」

ねばっこの声で勘蔵はせびった。ついにおせいは舌打ちして、己れの小部屋へ行き、姫つづらの底から五両取り出すほかなかった。

「これで勘弁しておくれ、どだい私には無理難題なんだから……」

「ちえッ、五両じゃ何ともしよがねエなア、すまねえが金貸し婆のそこから下げてこいよこれッばかりじゃだめなんだ」

しつこくねだる勘蔵におせいは気色ばんで「金貸し婆と言うが、そんな婆さん、私が知るもんか」

「おっとそうは言わせねえ、おひでにおいらちゃん聞いてるんだぜ」

せせら笑う勘蔵。ちょッおしゃべりめ、おせいは朋輩のおひでを呪い、同じ店へ来て、別な女と寝た勘蔵に奇妙に腹が立つのもいまいしかった。

「まア、いいやナ、今日が今日でなくてもいい、また近々に来るからそのときは残り十五

両をそろえてくんナ」

意外にあっさり勘蔵は旗を巻いて帰り支度をした。おせいは真実ほっとしたが、そのときふっと胸を騒がす思いつきに捉えられた。弱い己れにだにみたいに食いつこうとしている男をいたぶってやりたい気持ちが一瞬ぱつと燃え上がった。

「ちよいと、お前さん、お客にもらった酒があるんだがネ、私の寝酒なんだがお前さんにもお裾分けしようと思ってたんだが」

何か体がじんと熱くなってくるような不安を抑えて、おせいはこれまで勘蔵には見せたことのない媚をたたえたながし目を送った。

「おんや、急にひょんな風向きになってきたぜ、おめえにそんな情けがのこっていいようたア今が今まで思わなかったぜ、ああ、お辞儀なしに頂くと」

「そうかい、じゃすぐに持ってくるよ」

再びおせいは小部屋に行って、姫つづらの蓋を取った。朱塗りのふくべにつめた酒。その酒の中にはマチンが入れてある。もっともおせいには到底人を殺すに足りる分量を入れる勇氣はなかったのだが……。

★
床の間の牡丹が今宵はあでやかな緋牡丹に

読者M氏受難の巻

◎M組二十五態◎

大手札印画紙焼付 (9×13 糎)
各組一枚一組 (送料共)

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

MMMMMMMM

8 7 6 5 4 3 2 1
両股責め押え込み鼻弄り
足の踵で鼻の頭をつぶす
皮ムチを顔に浴びせられる
犬男になめさせる太股
足の指をすっぽりなめる
顔面騎乗の女御主人さま
臀臭を嗅ぎまわらせる犬
足の裏なめを強制する女

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMM

25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9
女御主人の唾液をのます
玄関でチンチンをする男
玄関で足指をなめされる
私の放屁でも糞くらえ
足の踵を必死になめる犬男
両股の下に埋れた犬の顔
頭を蹴られた尻尾を振る犬
両股の首絞めに喘ぐ犬男
臀部を革ムチで打ちまくる
ツバの御馳走を飲みませる
足の指先で鼻を摘みあげ
鼻も口も足の裏で蓋される
足のお味はどんな具合？
この犬奴踏み潰してやろう
股に挟まれて幸福な男の顔
さあ口を開けてごらん！
両股の下にある悦楽境

変わっていた。玄昌はおせいにひと責めされたあとのふやけ顔で酒を飲んでいる。股倉に玄昌の首をはさんでぎしぎし締めつけるあくどい戯れにひと汗かいたおせいは、むし暑そうに襟元をくつろげている。

そこへ襖を少し開けて小女が顔を見せた。

「あのう、ちょっと姐さん」

「なんだい？」

何やら仔細ありげな様子におせいが座をはずして廊下へ出ると

「あのう、姐さんに合いたいと言う人が」

おせいはまたぞろ勘蔵がせびりに来たのかしらと思ひながら脇玄関へ出て行った。

掛行灯の明りに四十がらみの職人風の苦味ばしった顔立の見知らぬ男が立っていた。

「ああ、おせいさんてのはお前さんか、なあにネ、こいつはお前さんにかかわり合いがあることかどうか知らねエが、ただおれは知らせるだけは知らせようと思ってネ……」

と、男は言葉尻を落とした。

「なんのことでしょうか？」

なぜか胸にとどろくものがあって、おせいははやくも顔色を変えていた。

「いや、おれはそ

の、勘蔵てえ人と博打仲間。勘蔵さんからちよいちよいお前さんの話を聞かされてたもんだから」

男にじつと顔を見られて、おせいは愈々内心うろたえた。

「あの、勘蔵さんがどうかしたのですか？」

「うん、勘蔵さんがおとついの晩、下谷の覚清寺の賭場で武清の代貸とけんかして、ぶんなぐられてネ、泡吹いて死んじまったのよ」

「えっ」

「なぐられたあと、体をこう弓のように曲げて泡を吹いてよ、ひでえ苦しみようで、ぶんなぐった代貸のほうがあぶったまげちまった。

そんなにひどくなぐったわけじゃねエんで……。その前に勘蔵さん、ふくべから酒をちびちびやってたが、酒毒でも頭にのぼってたんじゃないかねエかっていう話も出たんだがネ。とも角武清がうまく役人のほうはすませて清覚寺へなげこみ式に葬っちゃったんだよ。知らせってエのはこの話さ」

聞いているうちにおせいは、肩からがっくり力がぬけて、くたくたと、その場へくずおれた。

「おっと、しっかりしておくれ。そうかい、そうかい、お前さんは情深い女だって勘蔵さんが言ってたが、あんなやくざな勘蔵さんでもサ、お前さんにやいいんだったのかねエ」
おせいはそんな男のひとり合点もうわの空だった。耳の奥でマチンが利いた、マチンでやってやったと悪魔のような声がしきりにわめいていた。

(おわり)



(フェチ小説)

カード・プレイ

ト ガシ マル ゾウ
富 樫 丸 三

優勝者
―― 勝者 ―― 敬子
―― 勝者 ―― 悦子
―― 勝者 ―― ナイト
―― 勝者 ―― 洋子

(一)

第一試合が終った。所要時間45分。

日頃ギャンブルに強い女子大生敬子はブル
ーの日のハンディも手伝ってか熱戦の末、パ
ンティ一つの差で高校生悦子に全裸にむかれ
アヌス責めの処刑に遭って今バスルームへ馳
け込んだところ。

勝誇ったようにゴムを鳴らしてパンティを
たくし上げた悦子は、そのままの姿でマジッ
クを手にしてうしろの壁に歩み寄った。敬子
の文字は赤く消された。

ポーカージョー・トーナメント

一、組合せ

二、ルール

一米間隔に対座す。ポーカージョー勝負毎に負
けた者は別表の順序で着衣を脱ぐ。最後の脱
衣、即ち試合に敗れた者は起立して受縛を待
つ。勝者は敗者を緊縛し最後の着衣を剥がす
三、処刑

勝者は敗者を全裸にした上五分間だけその
身体を自由にできる。但し少しの傷害も与え
てはならない。敗者は、その間沈黙して勝者
に服従しなければならぬ。

四、登録着衣

(洋子) カードガン、タイトスカート、ブラ

ウス、スリッパ、ストッキング、ガートル、
ブラジャー、ショーツ

(敬子) セーター、フレアスカート、ペチコ
ート、スリマー、ストッキング、ガートル付
ズロース、ブラジャー、ショーツ

(悦子) セーラー、スカート、スリマー、ガ
ートル、ストッキング、ショーツ・スリッパ
ブルマー、パンティ

(ナイト) 上衣、ズボン、ソックス、ネクタ
イ、カッター、ズボン下、下シャツ、ブリー
フ

(二)

第二試合はBGの洋子対ナイト即ち俺。室
内は漸く熱気を帯びガス・ストーブが熱い。

「少し消そうか」

「だって敬子が気の毒よ」

「じゃ窓を少し開けな」

男女の声が入り乱れる。窓と反対側の隅に
メンス・バンドだけ許された敬子が、背中を
見せて転がっている。俺はそれに流し目をく
れた。

試合開始。ジャンケンで親は洋子。カード
が配られた。ペア札を残し三枚要求した。変
らない。敵はツー・ペアだ。規定により上衣
を取り坐り直す。二戦目も落す。まだ先は長

い。三戦目ジャックと10のフルハウスで一矢を報い続いて四、五戦とものにした。スリッパになった洋子のくやしそうな顔。次を失ってソックスを脱いだ。俺はおもむろに煙草をくわえライターをこすった。

「ペナルティ一本。ゲーム中は禁煙よ」

すかさず抗議する洋子。だがレフェリーにまわった悦子が同性に加勢したので抗議は通った。

「ずるいぞ。そんなルールは聞いていない」

言いながら俺はネクタイをはずした。札は配り直された。しかしツキは変わらない。ストリートとスリーカードで矢継ぎ早に連勝した。クイーンが三枚広げられている前で、洋子の素足が躍った。ストックキングはくるくる巻かれて洋子から離れた。三分すぎ、ガートルも腰から離れた。白磁の肌が苦しうに波打つ。二本の白い帯が踊る。洋子の息が乱れている。

俺は目の前の裸身をより長く楽しむため敢えて一回手を抜いた。洋子はここで大きく深呼吸した。へもう手加減はしないぞVと思つた二分後、洋子はブラジャーのホックをはずすはめになった。豊かなオッパイ。乳首が可愛らしく染っている。へたまんねえなV俺は

一気加勢に突き進んだ。ワンペア。手はよくなかったが敵はもう四離滅裂だった。洋子はその瞬間散らばったままのカードの上に身を伏せた。髪が乱れた先にダイヤのクイーンの冷たい表情があった。

俺は洋子を立たせた。洋子はストックキングで両手をうしろに固定された。ほんの10分程前まで、自分の太腿を柔かく護っていた肌色のペットが。へ何たる裏切者！V洋子は口惜しかったろう。うつむいた眉間がけわしくけいれんした。ともすれば、しゃがみ込んでうしろに突き出している洋子の臀を俺は一張りした。ひるんで腰を浮かせた洋子。つけ込んでむしり取るように一気にショーツを下げてしまった。

(三)

「そうそう君はウィスキー党だっけね」

俺はそう言って足から抜きとったショーツを裏返して四角にきちんとたたんだ。ショーツのウィスキー漬けだ。軽くしぼってその上にメンタムをたっぷり湿布した。

俺は急にサジスチックな衝動が突きあげてくる。俺は夢中で洋子の褌の三ツ目に結んだあたりを力いっぱいけとばした。両手の自由が効かず禪姿のあわれな洋子は他愛もなく隅

の方に転がってしまった。

「ひどいことをするのね。それにタイム・オーバーよ」

今まで気にもしなかった悦子が、横から柳眉をさかだてた。処刑時間は10分近くかかったらしい。

「何をいうか。洋子のやつがモタモタするからよ」

「いよいよあなたとわたしね。きっと洋子ねえさんの仇を取ってやるわ。覚えといで」

悦子は左手に持った何やら黒い布をこれ見よがしに掲げ、スカートをたくし上げるとそれを小麦色の両脚に通した。ブルマーで身仕度した悦子。俺はショッキングなデモ攻勢に一瞬たじたとって

「そいつぁ君に言う俺のせりふさ」

だがパンチは効いていない。

「いいわ。試合開始まであと10分よ。早く身締りを正して覚悟することね」

悦子は余程気の強い女らしい。まだ十七才の青臭い高校生のくせして、ブルマーのベルトをしっかりと締め大げさなジュエスチャーでスカートの塵を払って装身の完了を告げた。

決勝戦の火蓋は、今まさに切られようとしている。

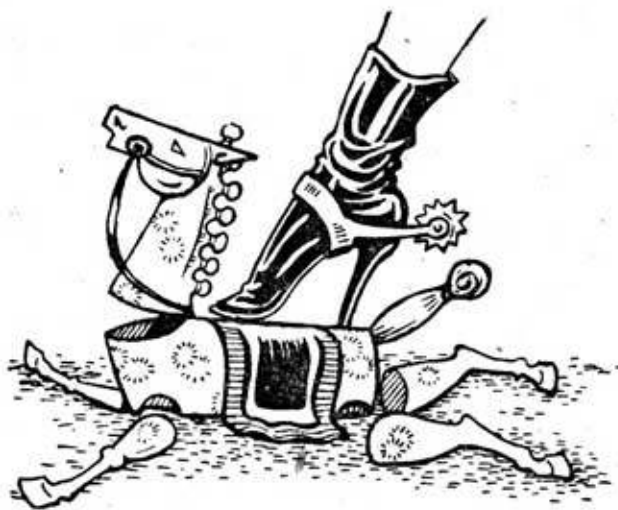
(未完)

嗜虐の歴史

〈ソバイの記録より〉

三原

寛



仏和辞典と首引きの煩わしさが憶劫で暫く放棄していたソバイの記録を何カ月ぶりかで繙いてみた私は、頁を繰ってゆくうちに、此のクメール王国の社会組織の構成する身分制度と思想がけない風習の存在を知って凝然とさせられた。それは現代の時世に於いてすら思いも及ばぬ驚嘆すべき国家統一の手段であった。

先ず此の王国の下部組織を構成するのはクニヨムと呼ばれる一般大衆である。クメール王国の人民である千五百万のクニヨムは栄光

あるペン女王の統治下に繁栄を謳歌した。領土は拡大され、豊富な奴隷労働力による生産力の向上が国民全体の経済を潤沢にし、クニヨム大衆はその恵まれた生活の享受にすっかり満足していた。彼等にとって生きた女神として君臨するペン女王は神格された信仰的存在であり、まさに宗教的ヴェールの奥深く存在する崇高にして、全智全能の神の象徴であった。光輝あるアンコールワット宮殿にあって此の王国を統治するペン女王の神々しい尊顔を拝することはクニヨムには許されない事で

ある。アンコールワット宮殿内に住みペン女王の尊顔を遠くからでも垣間みることでできるのは、選ばれた約二万余のバロックとよばれる支配階級であった。

バロックは兵役を免じられ、奴隷の所有を認められた。バロックは宮殿内に居住を許された此の王国の特権階級で、クニヨムにとっては渴望のエリート達であった。生きた女神であるペン女王の宮殿に住んで居るという事だけでクニヨムにとって身に余る光栄に違いなかった。バロックはクニヨムに対する時、神格化されたペン女王の選ばれた伝導者であり、クニヨムはバロックを宗教的情熱を以て崇拜した。宮殿に入る事によって自分達より神に近い存在とされているからである。

バロックに欠員が出るとクニヨムの中から選ばれて補充される事になり、その対象となる有資格者は十八から二十五才迄の男女に限られた。バロックに選ばれる事こそクニヨムにとって生涯最高の栄誉であり生涯唯一の目標でもあったから、クニヨム達はかねてより競ってバロックに対して金品を献納し、又、生きた女神ペン女王に対する熱狂的な信仰心に燃えるクニヨムにとって、その伝導者であるバロックに対して喜捨を惜しまぬのは、信

仰心厚い教徒が寺院に対して喜んで金品を奉納するのと全く同様の心理であったから、高税を課して人民を搾り上げる迄もなく、此の王国の支配者達は等しく巨満の富の上にその身分を保証されるのである。

バロックに選ばれた者は後に述べる奇妙な洗礼を受ける事により一切家族との血縁関係を断絶されクニヨムよりは一階級上の支配階級として生れ変わるのである。しかし、これらバロック階級と雖も、ペン女王の神域に足を踏み入れる事は出来なかった。宮殿にあってバロックの上に君臨するのはシアックヴィンという聖なる階級である。クニヨムやクニヨムから選ばれたバロックが骨格のがっしりした、皮膚の色が小麦色のクメール人種から構成されているのに対して、アンコールワット宮殿の城廓の中の更に奥深い聖なる神殿とよばれる嚴重に護衛された玉殿に居住する一千人たらずのシアックヴィン階級は、ペン女王と同じくヴェトナム系の民族の血をひく、クメール族とは全く異った、肌の色は透き通る蟬の白さを持ち、細いきゃしゃな骨格ですらりとした背たけをもつ異民族であった。シアックヴィンは永遠の生命の泉のある聖なる宮殿にあって、バロックに対して文字通り、神

として君臨した。

クニヨムが選ばれて、バロックとして生れ変わる為の洗礼の儀式というのは、穢れを俗界との縁を切り、聖なる宮殿のシアックヴィン直属の伝導者として生れ変わる為に、七日七晩の間一室に隔離されて、その間、シアックヴィンより御下賜される聖なる排泄物以外一切口にすることを許されず、自分がシアックヴィンのお蔭で生命を保ち、与えられた地位に随喜の涙をこぼしながら神にお仕えする身であるということとを身にしみて自覚させられる莊嚴な儀式なのである。クニヨムがバロックに対して、そうであるように、バロックも、シアックヴィンの前では如何なる場所であっても、直ちにその場に土下坐して、額を地にすりつけたまま、上げる事は許されない。

シアックヴィンがバロックの顔をみたい時には足先を使ってひれ伏しているバロックの顔をおこすのだが、その時もバロックは目を伏せて、シアックヴィンに視線を当てるような不敬は許されない。聖なる宮殿に立ち入る事の出来ないバロックが遠くからでもペン女王の美しい御容姿を拝する事が出来るのは、バロックには斗技場での観覧が許されて居るからである。もっとも、バロックに許されて

いる観覧席からでは、顔形の区別もつかぬ程であるからペン女王の玉顔を拝したことのあるバロックはないといってよいだろう。

クニヨムが、その地位にすっかり満ち足りひたすら、ペン女王の治世を謳歌しているように、バロックもその恵まれた地位に全く満足していたのだが、そのバロックにとっても夢はあった。それは、バロックの男にとって、シアックヴィンの聖なる奴隷として選ばれて、聖なる宮殿でシアックヴィンのお側近くお仕えする事であり、バロックの女性にとっては職業女斗技士或は職業女騎手に選ばれて、女王の前で卓越した技を披露して面目を施す事であった。此の事はバロックの女性にとっては文字通り金的を射止める事を意味し、前稿迄に御紹介した如く、すぐれた腕前を示した女性斗技師や女性騎手達は高給を以て遇せられる上に莫大な賞金と保証された地位を約されるのであるが、聖なる奴隷としての栄を得たバロックの男性にとっては、それがどんな事を意味するか、ここにソバイの記録から抜萃してみようと思う。

勿論奴隷といっても、バロックが所有を許されている労力用奴隷とは違う。バロックの奴隷は戦争で得た捕虜を下げ渡されたもので

バロックの所有する広大な農地の耕作や、森林の開拓、運河や水利施設の土木工事、城や寺院の建設等凡ゆる労働に酷使されるのであるが、聖なる奴隷は、聖なる宮殿内に居留させられて、シアックヴィンの御用をたすのである。働らく必要のないシアックヴィンにお仕える奴隷に労役を要求される訳がない。

ソバイの記述は続く。先ずシアックヴィンはすべて女性ばかりである事が明らかにされている。シアックヴィンを直視する事を許さず、ただ神の御前にあるという畏怖の念で震え上っているバロックが、此の点に気付き得なかったのは無理ない事だが、ソバイによると、シアックヴィンに男児が出生した場合は総て処分されたらしい。

ここ迄読んで私は、これ程迄に榮え誇った王国が、一代にして忽然と消滅し、榮耀榮華のアンコールワット宮殿が密林の中に没し去ったまま、その後何世紀にも亘って無人の廃虚として人知れず眠り続けていたという世界史の謎が解けた様な気がするのであるが、兎に角、ソバイの目撃した聖なる奴隷の任命式の模様から先にお伝えしたい。

「バロックの中から聖なる奴隷として白羽の矢を立てられたこの幸運な男は、この世のも

のとは思えぬほどに美しい果てしのない廊下豪華な部屋、そして優雅な広間を通じてゆっくり進んで行った。回廊の大理石の柱の間からは、深紅の草原、まばゆいばかりの紫の花で飾られた象牙色の幹の木々、乳白色の木の葉の茂み、砕いたルビー、エメラルド、トルコ石、それにダイアモンド迄使って敷きつめてある遊歩道。すばらしい手細工のデザインをほどこした金色燦然たる荘麗な屋根飾りなど、すばらしい景観が眩惑するのだ。

やがて神殿の中央にある広々とした部屋に到着すると面前の大きな扉の前に立つ。いよいよ神域に入るのだ。そこで、これから入る部屋の方へ背をむけて膝まずき、両手をついて、この屈辱的な恰好のまま七十メートルも這いずってゆくと女王の御前にでるのである『立て』と女王がいった。長年のあいだ人に命令する事に慣れている声。

『期限だけ奴隷として仕えさせよう。その男をこちらへむかせ、女神の尊顔を拝ませるがよい、そして身分卑しきものどもの中で、女王の輝きわたる尊顔を拝するものは、かたじけなくも一年だけ生きのびることができるということを教えてやれ』男はからだをこわばらせて立ちつくしていた』

これがソバイの目撃した聖なる奴隷任命の光景である。ペン女王は上壇の彫刻をほどこしたソラプス材の玉座に傲然とふんぞり返り両側にはシアックヴィンの女神達がずらりと居並んでいるのだ。女神たちにはそれぞれ、数人のバロックの奴隷がついて、或る者は女神のお臀の下に敷かれ或る者は女神の足許にうずくまり、そして或る者は仰向きにねそべった女神の股の間にひざまづいて、今新しく入って来た男等には全く無関心の態で、それぞれの女神の快樂の御奉仕に余念ないのだ。

淫蕩な頹廢的なムードが充満して漂っている此の部屋の支配者ペン女王の玉座の下にも一人の奴隷が仰向きにうずくまっている。ソバイである。ペン女王は玉座についたまま排泄のできる仕組みになっていた。バロック達は、こうして選ばれた光榮ある聖なる奴隷の生命が一年しかない事を全く知らない。ソバイが、自分を瞞して現在の屈辱的な境遇に落し込んだスレイ女隊長と問答した事がある。スレイ女隊長もバロックの一人だが、ソバイを生捕りにした功績で特にシアックヴィンと同じ待遇を与えられて今やペン女王の側近の一人として神の地位に上っているのである。『お前はわかってないのね。あたしたちシア

ックヴィンは神聖な種族なのよ。あたしたちの奴隷となることは、下賤のものにとっては名誉なことよ。クメールの全生命は、シアックヴィンを養うためにのみ生みだされているのよ。外界が労働と食物を提供してくれなかったら、あたしたちには、ほかにどんな生き方があるというのさ？」

「それでは、あなた方が人肉を食べるというのは本当なんですね」

私は此のクメール王国がペン女王を中心とするシアックヴィン一族によって実に巧妙に

運営されているのに感嘆した。人民のペン女王に対する崇拜を宗教的な信仰心に迄高め、そしてクニヨムのエリートであるバロックを構成し、そして神聖にして冒すべからざるシアックヴィンの女神達はその熱狂的なまでの信仰心に支えられて、文字通り神として君臨し、まさに冒瀆的な放題のふるまいを享受していたのである。ソバイの記録は、こういった社会組織を背景として綴らねばならない事に気がついた。

クニヨム達が生涯の夢として情熱を傾けて

来た神聖なる宮殿の紫のヴェールの奥は、結局淫蕩卑猥で冷酷なシアックヴィンの女神達の慰みものにされた揚句、彼女達の珍味として食べられてしまうことだったのだ。ただ、クニヨムの中であって、バロックに選ばれた女性だけは違っていた。殊に、職業女斗技士、職業女騎手の地位を得た女性はまだにエリートの中のエリートといえた。職業女騎士については既に紹介済みなので、次稿では、職業女斗技士について、ソバイの記録を辿ってみたい。

(未完)

「最新版」 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13寸) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)
K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)
K 7	厳しき縛りに酔う (山原)
K 8	荒縄で仕置される (美木)
K 9	土壇に観念した女 (美木)
K 10	ムチ打たれる女囚 (美木)
K 11	縛り人形を眺める (山原)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K 13	足首と首を連繫す (大塚)
K 14	後手の複雑な縛り (玉田)
K 15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 16	夫にされる鼻責め (増田)
K 17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 18	猿轡で鼻を虐める (増田)
K 19	開股縛にあう女囚 (美木)
K 20	罪状を訊かれる女 (美木)
K 21	股間縛りの全裸像 (山原)
K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)
K 23	革拘束衣で括らる (大塚)
K 24	庭木に立縛りなる (木村)
K 25	柱に晒される裸身 (玉田)
K 26	セーラー服しぼり (大塚)
K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K 28	黒縄豊満刺青縛り (山原)
K 29	踏みこまれた女 (山原)
K 30	古墳にて吊り準備 (木村)
K 31	拷問にあう裸女賊 (山原)
K 32	ロープブラジャー (山原)
K 33	嚴重な後手縛猿轡 (刑部)
K 34	エビ縛りにあう女 (木村)
K 35	イルリのある風景 (大塚)
K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 39	全裸を投げだして (山原)
K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)
K 41	エビ責め放置十分 (木村)
K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K 43	観念アグラ縛り凶 (玉田)
K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)
K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 49	立木より逆さ吊り (木村)
K 50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

<告白>

深 紅 の 歌

なお語らず、なお充たされず、わが至高の希望は残っている。しかもわが一切の青春の俤も慰めもはや泯びた。(竹山道雄訳・ツァラトストラかく語りき)

福田 久 文

カントが、というと、前世紀の遺物のことを聞くように思われる方が多いが、その方といえども最近の理論物理学は信仰されるであろう。ところが最近の理論物理学は、数学者同様誠実だったこの哲学者が主著「批判」のなかで用いた思考方式を踏襲しているのだそうであるから、厭な顔をなさらずにお読み願いたい。そのカントが「批判」第二版八〇八頁で有力な仮説として、こんな意味のことを書いている——わたしたちの生は生れる前にもあったのだし、死んだ後にもあるのだ。

男女の享樂遊戯の結果、たまたま子供が生まれてしまったら、そして人の一生がしばしば地獄の様相を呈する負担の多いものであることを思えば、人はこの仮説が、人生を齊合的に見ることでできる英智の影を宿しているのに気づくのである。あまりスケールが大きすぎて確かに人間だったかどうか疑わしい宗教家イエスは更に自明の事実として付け加える——肉体をもって生きることのできるこの世界でわたしを拒否し続けた者には、耐えがた

い幽界が待っている。(わたしの素人細工の創作については何をいつて頂いても感謝しますが、わたしが告白をしているときだけは、お気に障っても、それは幽界の審きに任せてくださって、黙殺方お願いできればと思う場合がございます。このことは何もながながとイエスやカントのような真正の『貴族』たちを引用してお願いするまでもなく、誠実な告白がしにくくなってしまつて第一に困るのです。三原さん始めわたしの文章をご愛読くださる方々にとつては、わたしは奇クの花園の片隅で、そつと羽根を



括弧でいる小さな蝶のようなものです。奇く編集部の各位にも、愛読者の方々にも、今はもう温い視線以外は何も求めるところのないわたしは、不調和音が耐え難くなったら、蝶のように、声もなく、羽音もなく、そして生物のいずれもがもっている本能的な恐れ以外には何の怒りも悲しみもなく、多分出ていくでしょう。わたしの創作も次第に奇譚の名から離れようとしていますから。しかしおなじ性癖をお持ちの熱心な読者の方々、こない人たちが奇くを離れてどこにおられるだろう。その方々は心に触れる告白や創作を求めてこの園に這入っておられる。そしてわたしもまたイエスなんか存在しなかったかのよう

に、凡庸で罪深い人間には免れ難い現世の空虚を、このような告白や創作で、埋めるより外に方法を知らぬ、同じマニヤの一人なのです。デュオニソスのいたずらによって足を踏み入れることになったあのホテルの特別室における事後の出来事を、それに触発された心像とともに、この方々に読んで頂くために、ここに写します。ただ、書き易くするために、そのために多分読みやすくなるのですが、若干の整理はさせて頂きます。なお既報のレポートをまだご記憶くださっている方にお詫

びしなければなりません。わたしの下書きの不注意のために、昨年十一月号に示されたこの部屋の平面図のなかに、トイレおよび拷問器具を納めた物置が附属している広い浴室と巨大なベッドおよび細長いテーブルが置かれている広い居間とを、一直線に縦割りする、架空の壁が現われました。どうかそれを取り除いてお読みください)

女は身を転じて腹這い、受話器を取ってビールをいいつけるや、また幽界を恐れぬ悦楽を求めて、カーテン越しに控えていた婆さんと呼んだ。わたしは休息する間もなく、ふたび婆さんに引き立てられて、自分がその上で嘔まれる台を運んだ。

女は枕もとの小棚の前に枕を一つ当て、小棚の上にも今一つ枕を置いて、その上に二つ折りにした掛け布団を(婆さんがベッドの下から取り出した。ベッドの下は布団のみならず人も押し込めるのだという)被せ、そこに上半身を凭れさせた。

小棚の掛け布団のかかっているところには、わたしの当惑を二人して笑いながら、若い女中に持ち込ませたビール壺と小皿とが置かれ、女は片手にグラスを握った。なげ出した片足をくの字型に立て、残る片足を同じく

くの字型に横たえて、黒いネグリジェの裾をはしく乱したまま。

ようやくわたしから離れて身をベッドの上に仰向けたとき女は枕もとの桜紙を叩いた。

「拭き」

痛めつけられたわたしの体を女の情欲に供するために、婆さんが巧みに取りつけた、大きな指輪を取り去って、その紙を当てたとき女は膝でわたしの脇腹を蹴った。

「だれが自分のを拭けいうた？」

同時に、片手で、わたしの後頭を突き上げた。起きて拭けというのだ。

薄暗い一面の鏡には、横たわる女に接して身に纏うぼろもなく正坐する自分の姿が、鮮やかに浮んだ。女は拭ぐうというよりは余烬を愉しんでいたのだ。わたしの指先には屈辱の負担が重苦しく加わって、長い時間に思われた。

△あのとくに、なぜ、決然とベッドを降りて、女を見捨てなかったのか。なぜ、あのとくに▽

台上に体をすっかり固定されたあと、いたぶる者の窃かな愉しみなのか、しばらくそのまま放置して、いたぶられる者の悔恨を弄ぶ沈黙がそこにあった。

わたしは、突然襲いかかった純重な激痛に用済みの桜紙を詰められ一枚の絆創膏を貼られて動かぬ口の中で、自分の喉の唸るのを聞いた。ベッドと同じ高さになっている細長いテーブルがベッドに横づけられて、わたしはその上に腰を上げて坐っていたのである。そして、足首を縛ってテーブルの下へやった縄尻でまた前の立て膝を縛られたふくらはぎの上へ、婆さんが両端で握った警棒を力任せに押しつけたのである。すこしゆとりをあけてつけられた犬の頸輪の引き鎖は一直線に上って、その他端がカーテンレールに絡みついている。前で縛られた両手と胴体とが自動的に激しく左右に振動し、婆さんの唾え煙草の匂いの漂うなかで、ふらふらと頭が霞んだ。

これが事後の拷責の第一着手だった。

いま、わたしの創作の一つに似かよった責め方があったのを、薄気味悪く憶い出す。人が真実心をこめて希い願ったことは不思議に実現するのではないか。ではわたしの拙い創作の「悪女」は、いつか現実の血と肉を纏ってわたしの前に現れてくれるのであろうか。

わたしはペンを置いて、書架の一隅から古いノートを取り出した。ホイットマン夫人に逢った直後にエドガ・アラン・ポウの書いた感動的な英文である。

：あなたの双の眼が、ひとまたたきのあいだわたしの眼を見、胸に響くように静止したとき、わたしは、生れて始めて、感動に身を震わせて、感じたのです、全く条理を超えた霊の力が存在することを——わたしはあなたが「ヘレン」であることを知りまして——「わたし」のヘレン——千度（ちたび）夢みたヘレン——その幻影の唇が、聖らかな情熱の昂りのなかで、わたしの唇にちたび去りがたくとどまったひと——すべての善をわたしたちに与えるあの大きな「恩恵」がわたしに遣わしたひと……

（江戸川乱歩全集には載らない種類の手紙であり、このような感動を伴わない男女の仲は少くとも情欲を離れたわたしには、貧弱であり、嘔吐に過ぎません。いかに奇譚を装っても、そんな仲から引き出せるのは、真正の芸術には昇華しない生臭い事実と脆弱な虚構だけでしょう）

「TO HELEN」と題した彼の絶唱を、わたしはかつて訳したことがある。旧制高校理科一年、十七才の青春にいた。厨川白村の訳よりも正確で典雅だと文科の上級生が（現在著名な詩人になっておられる）真顔でいっ

たその訳詩は散佚して、いまここに二行しか憶い出せない。

ああ荒寥のわが道よ、

ばらひとつだにひらかざる。

楽しかった日の僅かに残る記憶のように、そして今のわたしの生活の不毛をあざ笑うかのように。

薄青く白濁した池が見え隠れする赤松の山路を廻ると、赤い幹と濃緑の重なる先に、積乱雲を従えて聳り立つ白壁の本館があり、そこから西欧中世の古城のように小暗い櫓木の茂みのなかを、いくつもの回廊が上下して、図書館、生徒寮その他いくつかの建物に通じていた、あの明るい女人禁制の城。母が与えてくれた世界以外の世界が心にひらけたところ。あの城もいまはない。

主題からそれた追憶を追いやって、わたしはまた「特別室」のベッドのそばを憶い出そう。

長い年月多くの体をいたぶって荒れた手を見せ物の失心を防ぐために、すこし休めるとき、責めの手法に長けた六十女は、卓上でいろいろの責苦にあわせた体をいじりながら、好色と嗜虐の言葉を口にして客の気をひくすべも心得ていた。

「おーきおまんな。生まず（産をしない女）
 やったら、こらあ責道具ダ（です）。こんな
 顔になりまっせ」

婆さんは皺を寄せて両眼を固く閉じ、口を
 はち切れんばかりに開けてみせた。数多い金
 歯が醜くかった。女は、目を細めて燻製のた
 こを嚙んでいた口もとをほころばせ、促音の
 響く鼻孔を拡げて、冷笑した。

それからの会話は芳野式に連続した。

「それも燻製にしたらいけるの違う？」

「惚れ薬だったか？」

「酒のつまみヨ」

「このまま刺身でないだ？」

「やってみ。はずんだげるわ」

「お定だんな」

戦前起きた猟奇事件の「ヒロイン」の名であ
 る。

「有名になるで」

「ヒ、ヒヒッ」

「ハ、ハ、ハ」

崩れた厚化粧の顔を哄笑に歪める女の頭には
 金色のネットがけげばしかった。

△不潔な支配階級の、心情のすさんだ女。
 偶然関与した富と力を誇り、勞せず寄生虫の
 ように生き、情痴以上に深い人生の何事をも

知らず、心は深く酷薄な無明にとざされてい
 る。地上にこれほど嫌悪すべき生物が他にい
 るだろうか▽

鋭い嫌悪の眼を向けると、その哄笑が、遥
 かな過去か、遠い未来から響いているような
 気がした。そのとき、わたしはすでに幽界に
 いて、人肉の細片を嚙む黒衣の鬼女を見てい
 たのではなかったか。悪夢のなかで寒気のす
 るような心地だった。

その心地には憶えがあった。（信じて頂き
 たい。わたしの五官は正常で幻聴幻覚の病歴
 なく、針の穴ほどの見落し、万に一つの不正
 確も許さぬ精密科学に慣れている。だから、
 いま手短かにお話ししようとしていることを
 荒唐無稽だと思えば、人は本来体験し
 たことしか信じるのができないという事実
 を顧みて頂きたい）

自宅の、決して或る部屋で、またいつも曉
 け方に、兩三度わたしは幽霊に逢っている。
 小学三年のとき明治以前の髪型をした女が枕
 もとに立ち、二十数年後その嚙り泣きだけを
 聴き、それから一年置いて、にび色の（多分
 満月の夜だったのであろう）空の下、落葉し
 た樹間が揺れて、わたしの喉が締るのを感じ
 た。それ以後間違ってもそこでは就寝しない

から、この幽界の女には逢わないが、昔自宅
 の建っている辺りが森だった（いまも自宅の
 前のけやきの大木を含めて、附近にその跡を
 残している）頃、縊死した女がいたものと思
 われる。事実土地の古老が幽霊が出るという
 噂のあったのを知っている。

この世のものではない、肺腑を氷らせる鳴
 咽、総髪立つ思いのする寂しい顔つき。それ
 を如実に伝える言葉はないが、時空と因果の
 法則が固く支配しているものの本質を見誤り
 がちなこの世界で、エゴイズムにすっかり目
 が眩んで、イエスが教えたように人を愛する
 ことを知らず、恣な（自殺こそ、その最たる
 もの）生涯を終えた女の閉じ込められている
 孤独は、わたしたちの想像を超えた恐ろしいも
 のに違いない。その幽閉に耐えかねて現世の
 人に逢うとするのに、人は悲鳴をあげて逃げ
 ていく。全く救いがない。

眼前に鬼女の様相を帯びて背徳の悦楽を愉
 しんでいる女は何も知らない。しかしそれを見
 るわたしは、幽界の女を見たときと、程度
 の差こそあれ、同じ感じがしたのである。

その感じは次のように説明できると思う。
 逢っても話をするのを避けたい嫌な知人がい
 るものである。決して我儘で心の干涸びた人

だ。そんな人から受ける感じを何倍か大きくしたのがこの女から受ける感じで、それを更に何乗か充分なだけ累乗したのが幽霊から受ける感じだと想像して頂けばよい。

(奇クの読者通信やサロン欄に現われて、マゾ傾向の心優しい方々から女王様と呼ばけられてゐる人たちの短い文章を読みますと、遺憾ながら、本当に遺憾ながら、やはり同じような厭な感じを受けることが多いのです。だからわたしは原稿用紙に向つて、わたしの「悪女」を、いわばわたしの「至高の希望」を、創るのです。この意味で確かに「孤独地獄に落ち込ん」でいます)

この創造的な孤独を見捨てて情欲に眼を燃やさぬかぎり人はネグリジェの裾を開いて酒を飲む五十女に心を惹かれるものではない。

昂ぶる情欲、それは酒に似て人の眼と心を狂わせ、嫌悪すべき夜叉を高貴な婦人に見せるものである。それは、本来、慕わしい配偶者を得て次の世代を導く喜ばしい善であり、人を懈怠地獄から救い出す大きな力の一部であっても、目標を誤って昂ぶり、退いていったときは、また、酒と同様酔い醒めの寂しさを人の胸に疼かせる。天性の詩人の強いヴィジョンだけが、多分、空しく退いていった情欲

にもかかわらず、なおそのあとに踏みとどまって、現実を美化することができるのである。情欲なく噴まれていたわたしは、大きなベッドの他端に「醜悪」をしか見なかった。

(ただ、わたしも、森をよく知るためには、森の外に出るよりもむしろ、森より高い所に上らねばならないように、SMの異常な世界を知るためには、それにおおれないという配慮以上に、一層深い世界に関心を寄せる必要があることは、西条さんとともに知っています。丁度ユークリッドの古典幾何学の内容を豊富なものにし、より透徹した理解を持つためには、射影幾何学と群論の知識が不可欠なように。しかしこれだけではあゝのときあゝの女を美しく見ることはできなかったのです)

ディレンマもクノートン(解き難い謎)もない人生、それは射影幾何学やダンテの天堂界のように味気ないものである。白い敷布と壁に金のかむりと黒衣を纏う上半身を凭れかけ、泡立つ琥珀の酒をくみながら、贅の悶えを眺める人の、姿態、表情、そしてその動き。嫌悪と怪奇の化身のようなその姿が、奇妙なことに、いま冷静な回想のなかでわたしを魅了する。そこに、無明の暗さのなかに底光りする英智の光を見るのである。その光は

わたしのように暗愚で罪深い「賤民」には、消え易いものだが、わたしがその女によって高められた暁には、その光りに包まれて、いまのわたしの世界の方が消え易い闇に見えるような、そんな光なのである。女はいまわたしの「悪女」だ。わたしを練獄に繋ぐ鬼面の天女。真実と救済は幻想のなかにある。

魅惑の時は去った。現実はいまわしく時間を刻む。わたしはまた生臭い体験に帰らねばならない。

女は息づいて、黒く透き通るネグリジェに覆われた胸をけだるげに上下させていた。ようやく廻つて来たビールの酔いか。それとも真迫の拷問演技を眼前にした嗜虐の昂りか。ぐっとグラスを飲み乾して、女はそれを小棚の上に返えた。

「外してこっちへ倒して。蠟燭、頼むよ」

婆さんは火をつけた燭台を卓上に置いて頸輪を外し、わたしの頭を小突いた。女の上げた両脚の間にわたしの額が落ちた。小棚の上のスイッチに手を当てる音がして、部屋の電燈がすべて消えた。女は小棚からずりさがり両腿の間にわたしの頸を挟んだ。脚を組んでしっかりとわたしを捉え終ると、その腰を粗暴にひとあげして両手でわたしの頭を押え込

んだ。

「ちゃんと当ててるんや」

凌辱の幽閉を受けた顔の、その中央に、固

い芯をもって隆起を起し、柔らかく高まって
息づくもの、鼻。わたしを高価な道具として
賃借した女は、拷責を愉しむときにも、これ

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キヤピネ版印画紙焼付
各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

仰向け木馬責

略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足を四方に縛り
つけられて仰向けに固定された無防備の女
賊に対して加えられる羞恥責の数々。

海老責の拷問

略号(よす)

全身が二つ折りになるまで両手首と両足
首とが連結されると、流石強情我慢の女賊
も骨身にしみて苦痛の呻きを洩すのだ。

全裸入墨女折檻

略号(よせ)

厳しい高小手の上更に股間縛りにさ
れた女囚は竹棒で追いまくられ足蹴にされ
て白洲の上を転りまくるのだった。

全裸四這木馬責

略号(よも)

見事な入墨をさらけだして木馬に四這い
に括りつけられた女賊の豊満な臀部に竹の
ささらが炸烈する凄惨なシーン。

笞打ち白洲糾問

略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引き据えら
れた女賊はむきだしの入墨の背中を、竹の
棒にて打ちまくられ悶え苦しむのだった。

逆さ吊りの仕置

略号(よき)

荒縄で両足首を括られて逆さに吊り上げ
られた女賊、首がかるうじて床についてい
るが非情な竹が容赦なくムチを加える。

ハリツケの拷問

略号(よめ)

僅かに白布を前に当てた裸の女賊は磔架
にかけられ美しい白肌をさらけだして身動
きも出来ない裸身をいとおしむのだった。

大の字磔処刑

略号(よさ)

磔合に四肢を思いきりひろげた大の字に
固定され、いよいよ胴斬り、足斬り、両腕
斬りと一寸刻み五分試しに寸断される。

によって香辛を添えることを知っていた。

臀部から下を婆さんに炙られて間断なく跳
ね上らうとするわたしに仰向けに乗り掛った
女は、腰を左にあるいは右に移していつて、
わたしの縛られた膝を倦むことなく痛めつけ
た。ときどき「男めかけ」に顔を上げさせて
鼻をつまんだり(窒息する)、愚弄の言葉を
口にしながら。

「あんた結婚してんの？早うからがつがつす
るから、困るんやないの。装束やみな、叔母
やいう女から取ったんやろ？ふん、そんなら
どうしたん？安サラリーで」

一方的な会話は記憶に残り易い。今一つは
こうだった。

「ずっと世話になりたい？こんなことされ
るの、好きじゃないらしいね。いじめられて
喜ぶ男なんて面白くないわ。月二回ぐらいで
いいの。勤めや女関係そっとしといたげるし
別に将来も束縛なし。どう？身元割れてんの
よ」

諾否を示さないわたしの両耳を引きちぎる
ようにつまんだ女の呟きを、わたしは苦痛に
眼を閉じて聞いた。

「可愛いげのな」

そのあと女は一層凶暴になった。まずかつ

たと気づいたが、口は閉ざされているし、顔はついに上げさせなかった。

ようやく女の侍っていた時が来たのである。う。わたしの体を動かすのをやめて、腰をまた突き上げた。

「喉乾いたやろ。これからええ塩茶あげる」
ひとときわ激しく顔を振ると、両手で頭をこじ上げられた。

「わが俵いうと、何してもいいんよ」女は顔を上げて婆さんに話しかけた。その顔には微笑が浮んでいた。「そうやったなあ」

「どないだ、風呂の上へ吊して、たっぷり白湯やりなはれ。頭上げよったら、びしやっとな顔面打ちまひよ」婆さんは焰をじかにわたしの足のうらに当てて、続けた。「あんた、やっぱ厭だっか？」

二人の女は、わたしの恐怖を弄んでいたのだ。傷こそつけられなかったが、顔は何ともいいようのない不快な液体に濡れそぼち、腰から下は蠟涙が一面についたわたしを、婆さんは、湯の中へ逆吊りにした。蠟燭の光を横から受けて、巨大な獄卒の影を床と壁のタイルにひきながら。その影は囚人の頭を浴槽の縁に引き上げたとき、低い声を洩した。

「地獄の沙汰も金次第」

引き払われたカーテンの奥、薄暗いベッドの上に片腕ついて横わり、ガラス越しに眺めていた女に、脇腹をつねる残酷ショーを見せながら、鬼婆はわたしの顔を見降して低く唱った。

「けーち、けーち、しなさんな。なんぼーかとかうーか、しれんのに」

わたしは、ようやく気がついた。婆さんにチップを渡していなかった。買手手のついた「上玉」を湯搔くために、婆さんがわたしを後手に縛って湯槽で蹴り倒したとき、湯は必要以上に熱く、威嚇の鞭を故意にわたしの肌に当てたのではないか。恐いのは拷責ではなく、それを敢えてする人の心である。

その液体を飲んでも飲まなくても逆吊りの水責めはされるのに、そんなことになるとは知らず、止むなく脚の上下の細引だけを解かれて拷問台から降りたわたしに寄り添って、婆さんは表情一つ変えず、小さな燭台を捧げていた。その光に照らされて、黒々と波立つカーテンと一面の水銀のような壁鏡の間に、巨大な玩弄台が遠近法に従って幅を縮めつつ壁に続く辺りで、火をつけた煙草を手にしてそことカーテンの間に降り立った女は、婆さんとともに立っているわたしの前に来、酔に

薄くあからんだ顔の口もとを緩めて、じわじわと絆創膏をめくり、喉の奥まで指を突っ込んで桜紙を入念につまみ出した。小さく四次曲線こま（英名TOP）を描いて立っていた焰がアッフィン変換を受けて傾き、婆さんが動いた。縛られたままの手に眼を落して続くわたしを追いたてるように女の息遣いが随いて来る。

△トイレで直接飲まされるのか▽

その思いは、わたしには吐き気を伴う不快以外の何物でもなかった。いまも、お喋りを杜切らせていたそのときの女たちの動作と燭光にゆれる悪どい享楽の部屋のたたずまいが鮮やかに憶い出されるのは、そのときの当惑の激しさのせいであろう。

婆さんは慌てたようにトイレの小窓の黒いカーテンを引いてひきさがった。ドアは開けられたまま。階段式になっていて両用に使えものだが、手前がすっぱりと欠けていた。そして灰皿まで置いてあった。その目的でこの片隅に引き据えられたものは、床に仰臥させられて、頭を入れるのである。わたしは女の短い叱声と、婆さんの蹂躪を受けて、薄暗りのなかで、眼を開き続けなければならなかった。醜悪無残。

肉体の疼痛はやがて消える。消えないのは醜悪なものに触れた記憶である。メテリリシクが「賢明に」(わたしはいつもこの形容動詞を英智にかかわることにだけ使用しています。奇クの某評論家のように卑俗な判断に対しては使用しません。指摘したように、わたしたちの心の美しさが、かつて触れることのできた自然の美しさの反映に過ぎないとすれば、わたしはあの密室のベッドとトイレで心に墨を塗ったのだ。あの醜悪で悪臭を放つものをじかに見て。あんなところから始まる人生が、しばしば途方にくれるところであり時として苦痛が解脱で、その果ての死が救いになるような恐いところであるのに不思議はない。

しかし、あの醜く臭いものの記憶はまだ拭い得る穢れだったであろう。刺青の墨のように心の内面にしみ込んで、拭い難い穢れを植えたのは、カントのいう「可想界に根だ

★代理部の分譲品について★

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。○お申込みは(大阪)市阿倍野郵便局礼書箱第十四号八天(星)社(株)宛に願います。○御希望の品名は、必ず「略号」にてお書き下さい。

した人格」を一塊の賤しい道具に供しているという事実だった。これは、女に責め嘖まれ頑弄されて、正、負の、つまり悦楽と苦痛の肉の疼きにわれを忘れていたときには覚えないう心の悶えであり、処女を犯すにも等しい凌辱であることについては、拙い草稿「住み慣れた地獄を立ち去るために」(三十七年七月号掲載)のなかで想像してみたが、代償の金を払いさえすれば、一抹の疑念も恐れもなく徹底的に人間を売り物買物として扱える現実の女の心の凄まじさは、男めかけを装って異常な世界に魅惑を求めたのだという気休めなど踏みこみについて、思うがままに毒々しい針を打ち込んだ。

女を恨むまい。みずからの罪の深さを知った者は、自分を呵責し凌辱する者のためにさえ赦しを乞う。わたしこそ女を罪に誘ったのではないか。責任は知っている者にある。女もそれを汚すために寄りつくすべのない厳しい美しさ、敢えて近づけば天上の至福に触れて地獄への意志を悔いざるを得ぬあの姿なき人格——天なる父のみもとに帰られたイエスとともにあらねばならぬことをわたしは知っていた。

またわたしは高村光太郎夫人やジョン・シ

チュワート・ミルの慕ったティラー夫人のように、天上の至福の影を宿した人がいたことを知っているから、婦人のすべてを蔑んで、いつでもみなこの女のようになれるのだとも思わない。ただ、心の荒(すさ)んだ女に身売ることがどんなに心を荒ませるかという例証として、この日附随して起った恥しい告白もしてしまいたい。

金を使わせた返しに、女の手で近くにある国際観光ホテルへ行き、葡萄酒のすこしいのを添えて一コースの夕食を済ませたあと、別れて駅へ行く途中、まだ一人も客のない料亭のスタンドに坐り込んだ。さいわい女は小さな名刺の裏に電話番号を書いて、気が向いたら電話をくれというだけで別れてくれたので、ほっとしたのである。わたしはそのために陽気だった。

いきのよい花の溢れた食卓で、買った若い男の職務内容を知って、女は一層卑屈な態度を見せた。「傲慢」は「卑屈」の姉妹である。優雅を装ってグラスを口に近づけながら、万一の誤解を虞れるかのように、あのホテルを知った当初婆さんが接触のときにまで身乗り出してコーチをしたのだといった女に、生々しく鬼女の姿をしていたときを憶い出し、

不快だった。

「あの女はいま一人車を走らせている」

背中の鞭跡を見て、眼の色を変えた、料亭の女三人を、前と左右に置き、わたしは満足だった。刻一刻女が遠ざかっていることが。

「床入りしてまで?」

わたしを間近に覗き込んで腰掛けていた中年の仲居が縛るなんて阿呆かいなといわんばかりの顔をした。

「じわじわっと両手で頸を締めながら、僕の舌を歯で挟んで引張んだ。手足縛られとらな我慢できんよ」

「鬼やね」

白木の上に両手を置いて乗り出して来たエプロン婆さんが顔を顰めた。

「双の眼を固く閉じ、開いた口を横長に引きつらせ、丸く広げた鼻のうえに深い皺をいくつも走らせた女の顔。その女の呻きとわたしの呻きを耳にしながら、それが中世中国の獄卒の顔のように思われてすぐ眼を閉じた。何の情緒もない醜悪な顔だった。わたしの顔も中年の女の悪どい情慾を満す肉塊に恥しく醜く歪んでいたに違いない。女の小気味よく悶える性具にされているという屈辱の思いが肉体の激痛にもかかわらず昂奮を内面から煽

るとは何と因果なことか」

いま、手足を縛られ、器具（指輪でない）

をつけられて強制された二回目の接触を回想していると、また一つのクノータンが事新しくわたしを悩ませる——マゾヒズムは練獄への意志なのか、それとも単なる異常なのか。

わたしはそのときもふとお喋りをやめた。

「沈みに来たのではない」

わたしはまたユーモラスに話を続けた。一回目完全に押え込まれて、またプロレス以上にさんざ痛めつけられ、二回目の押え込みにはいるとき、ホテルの女支配人がわたしの腿の付け根にビタミン注射をしに来たが、場所がいいのかすぐ効いた、といったら、エプロン婆さんは、それは麻薬やで、と呟くようにいつて、わたしを驚かせた。そうだったと思う。もし途中で帰えろうとしたら変な男が出て来たのではないだろうか。

そういえば、女がトイレで化粧直しをしていたとき、また和服の女支配人が部屋へ這入って来て、「特別室」があることはだれにも洩さぬ方がよいとわたしに念を押したが、その冷静な表情と声の響きには、看護婦だったという前歴からくる気の強さ以上に強（こわ）い顔が漂っていたように思う。

「ホテル代別で、一回いくら取るの? 五千円ぐらい?」

わたしを男めかけと信じ込んで対等の言葉遣いになっていたエプロン婆さんが、請求書の用紙を拡げながら質ねた。酔ってくると、別に気にならぬばかりか却って面白かった。

「その倍だ」

わたしは、差し出された請求書を見て驚いた。客以上に勝手に飲み食いした女たちの分は黙認した客が払うものだ。それにしてもなおひどく高かった。

「なめるな!」

わたしは立ち上って白木を平手で叩いた。酔った身にも手の痛みが分る程激しく当って音が高かった。

「俺は、体張ってる男だぞオ」

女たちも驚いただろうが、いった者自身も酔も醒めんばかりに愕然とした。

「今日の行為は、こんなにまでわたしの心を荒したのか」

途端に悲しみが胸に溢れた。

「天分もなく、平和な家庭もなく、世に頼れた職とでもない。自分のあこがれていたものは次々と月日とともに遠ざかり、色褪せていく。そして寂寥と倦怠と、それを貪り喰ら

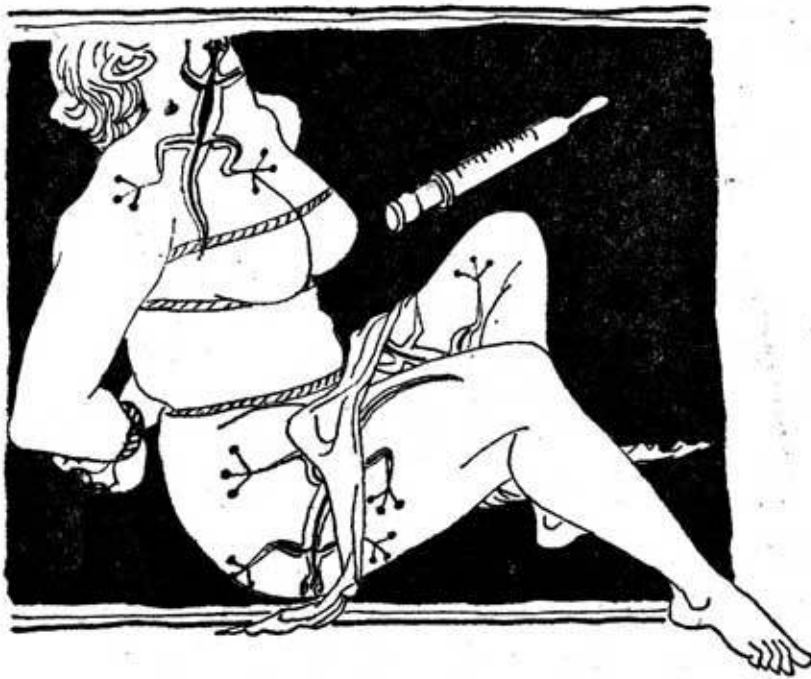
○木馬責にあって苦悶する女囚八一葉▽（美
 木乃々子）○白州の上で非人の賜りものにな
 る女囚八連続四葉▽（美木乃々子）○牢内にて
 折檻を受ける女囚——海老縛りと笞打ち八
 連続四葉▽（美木乃々子）○非人に縛り上げ
 られる哀れな女囚八連続十二葉▽（美木乃々
 子）○海老責めに放置され全身蒼白となった
 女囚八二葉▽（美木乃々子）○非人に不浄縄
 を掛けられいたぶられる女囚八二葉▽（美木
 乃々子）○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
 える女囚八連続八葉▽（美木乃々子）○算盤
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
 女囚八四葉▽（美木乃々子）○荒縄で乳房も
 くびれるまで縛られた女囚八三葉▽（美木乃
 々子）○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八
 四葉▽（美木乃々子）○算盤責めと石抱きの
 拷問八四葉▽（美木乃々子）○囚衣を剥がさ
 れ竹のささらで打たれる女囚八四葉▽（美木
 乃々子）○刺青を晒して木馬責にあう女囚八
 三葉▽（山原清子）○海老縛りでムチ打ちに
 喘ぐ女囚八四葉▽（山原清子）○海老責に苦
 悶する女囚八四葉▽（山原清子）○竹の棒に
 て折檻される女囚八三葉▽（山原清子）○全
 裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八六
 葉▽（山原清子）○礫台に括られた人墨姐御
 八一葉▽（山原清子）○足首を上にして逆さ
 吊りにされた女囚八一葉▽（山原清子）

以上合計七十四葉——

懸賞「世田、手記、本験」入選作の発表表

冬子のクリスマス・イブ

山中 冬子



東京都下とはいっても、都心とは大分離れている私の住居——とはいっても、私にとって、ここは牢獄のようなものですが——は、年末の騒々しさとはかけはなれた生活ができます。

ご主人は、さすがにお忙しいと見え、あまりこちらにおいでになりませんが、お留守の間も、冬子はお手伝いさん達に監視され、時には、きびしい寒さの中で、与えられた粗末な着物も脱ぎ捨てて、責められる日が続けていました。

十二月も半ばころの或る日、ご主人が久しぶりに来られ、私にこんなことを申されました。

「冬子、熱海へ連れてってやろうか。学校時代の友だちで忘年会をやるんだ。丁度、クリスマス・イブなんだがね」

ソファにかけられたご主人の傍で、床に正座させられたまま聞いていた私は、こんなことは、この家へ来て以来始めてでしたので、とたんに嬉しく思いました。先日ご主人の奥さまがこの家に来られ、私は、僅かな誇りも捨てなければならぬ程、奥さまに責められ顔まで傷を残す程（もう大体直りましたが）鞭打たれ、この上もない屈辱に泣かされたことを、ご主人は知っていますので、私をなぐさめてくれるのかと思いました。

私が一寸笑顔を見せたとき、ご主人は、ニヤリと笑われて、今度は冷たい言葉を私に浴

びせたのです。

「お前は、ヌードショウをやるんだ、忘年会でね」

何ということだったでしょう。

この家へ来てからの私は、同性の二人のお手伝いさんや、運転手さんの前で、人間とは思えない姿態をとられ、見世物にもなってきたのですが、その他の人たちにまで私の裸身をさらさなければならぬとは、いかになんでも恥かしく思われます。

「気心の知れた連中ばかりだからね。それも七、八人だ」

「でも、私は踊りもできませんし、そんなことだけは勘弁して下さい」

「いいんだよ、踊りなんか。それに一寸は出来るだろう、子供のとき日本舞踊やったといってたじゃないか。いい加減でいいんだよ。客は踊りを見たいんじゃないからね」

「でも、そんなこと出来ませんお願いです」

「バカ、奴隷が俺の命令に背くのか、鼻輪つけてやろうか。犬も卒業して、牛になりたいかい」

こうなると私も涙をこらえながら、承知しなければなりません。この家へ来る前、私はバーのホステスをして働いていましたが、そ

の頃一度だけお客さんに連れられてストリップを見にまいりました。日劇でしたから上品なものでしたが、大ぜいの男性の前で衣裳を脱いで肌をみせる踊り子は、つらくないだろうかと思いました。今、私が、それをやらなければなりません。それも、おそらく、ご主人のことですから、ひどい恥ずかしい見世物にされるでしょう。

その翌日から、黒田節や真室川音頭などのレコードをかけて、お手伝いさんたちの手伝いで、踊りの練習が始まりました。始めは、和服にきちんと帯をしめて挨拶するところから、音楽に合わせて順々に脱ぎ、やがてためらいながら、赤いお腰もとらなければなりません。そして、生れたままの姿に、扇子を一本持っただけで黒田節を踊ります。

「中々うまいじゃないの、ドサ廻りのストリップにでもなったら、どう」

などとひやかされます。

二

とうとう、その日が来ました。クリスマス・イブです。私だってふつうの生活をしていたら、ケーキでも買うか、お友だちと遊ぶか出来たのにと情なくなりしました。

新幹線に乗ったのは始めてでした。ご主人

は、まさか、私を二号だとはお友だちに云えないので、私は、ある芸能社に所属しているストリッパーということになりました。「リリー夏子」という名で呼ばれることに打合せもできました。楽しい筈の新幹線の一等車も熱海に着いてからのことを思うと、悲しさが先に立ちました。

お宮の松に近いEホテルの一室で、私は夜八時ころまで放っておかれました。ご主人達の宴会は、少しはなれた部屋で始まっています。

宴もたけなわのころでしょうか、ご主人が呼びにまいりました。

「仕度できてるかい、出番だよ、リリー夏子さん」

と赤い顔で笑いながら云われました。

仕方なく私も立ち上りましたが、足がふるえて、頭もくらくらしそうです。

ご主人が先に立ってふすまを開け、私も中に入った途端、はっ、としました。男性ばかりと思ったのに、六、七人の芸妓さんがいてじっとこちらを見ているのです。男性の宴席に芸妓さんは当然ですのに、私はうかつにもそれに気付かなかったのです。同性の前であさましい踊りをするのかと思うと、一層ボー

ッとなり、へやが暖いこともあって、額が汗びっしょりになります。

扇子を前において、型どおりお辞儀をします。持ってきたレコードプレーヤーを芸妓さんの一人が準備してくれました。

もう、こうなつては逃げだすこともできません。衣裳のままで、しばらく踊ってから、帯に手をかけました。

「サア、サア」などと、男性の催促の音が聞えます。やっとの思いで、着物を脱ぎ終り、乳房がお客様の眼にさらされます。でも、そのあと、私は、腰巻をとることがなかなかできません。恥ずかしいこと、この上もないのです。もちろん、大ぜいの男女の注視する中で若い女性の身として、全裸になるなど、ふつうではできません。けれども、私にはそれ以上に恥ずかしいのです。実は、私には、有るべきものが全くないのです。つまり、赤ん坊同然の体にされているのです。そんな姿を同性の眼にさらすなんて、いくらメス犬として生きている私でも、ためらわずにはいられません。

「どうしたんだ、リリーさん」

と、ご主人の一寸怒ったような声がしました。私は、その瞬間、ここで変なことをして

は、後の懲罰がこわいとも思い、ご主人に飼われている身であることを思い出しました。

もう仕方ありません。ふるえる手で、最後のものを落しました。そして、すぐ両手で隠したのですが、本物のストリッパーではありませんから、お客様の、眼はくまますことはできません。

「ホー」

「赤ちゃんかい」

「あら、ないのね」

などという声が上がられ、酔いも手伝ってか、急に騒がしくなりました。

「おい、よく見せろよ、両手は上に」

「もっと、もっと、足を挙げて」

などと、私にとっては悲しい注文が乱れとびました。腰をくねらせながら、私は両手を差し上げ、もはや、覆うものとなない肌身をお客さんに晒します。眼をつぶって、家で練習したとおりに体を動かすほかはありませんでした。

三

時間にして、二十分くらいのものでしょうが、私にとっては長い長い時間でした。やっ

とでしたが、私の屈辱の時間は、これからののでした。

「リリー嬢、お酌してくれよ、そのままの恰好でいいんだ、着物はいらさないよ」

ご主人の命令です。私は踊りに使った手拭を折たたんだまま、のせただけのみじめな姿で、お客さんや芸妓さんの間に座わらなければなりません。バーのホステスをしていましたから、サービスには慣れていますがこの姿で、始めての方達にサービスするなど本当に情ないことでした。

お隣の芸妓さんから声もかけられます。

「中々サービスするヌードさんね」

「あなた、まだ慣れてないみたいね、わりとウブだね」

「でも、一寸可哀想ね、一人だけ裸じゃね」

「じゃ、あなたつきあってあげなさいよ、肉体美みせたら」

「やだわ、冗談じゃない、私は裸が売り物じゃないわよ」

などと、私をますます哀しくさせる会話が続きます。

「きれいに剃ってるなあ、いつもそうしてるのかい」

お客さんに聞かれ答えようもありません。

お客さんたちは、私にも、しきりとビールをすすめます。私も少し位は飲めますし、ご主人も「飲みなさい」と云ってすすめるので少しずつ頂いていました。

やがて、酒が一層すすんでから、お客さんの一人が声を上げました。

「リリーさん、もう少し実演やってくれよ、出演料、おれがはずんでやるよ、皆んな見たがつてるぜ」

それを待ってたように、ご主人が命令されます。

「リリー、やって見な、お客さんのリクエストをもらったら、どうだい」

皆さんが、色々なことを云い出しました。

「ワンワンやってみな」

「花電車どうだい」

でも、私は、お客さんたちのいう実演というものを見たことがありませんし、どういうことをすればよいのか判らず、だまってうつむいているより仕方がありません。すると、芸妓さんの一人が、大分酔いがまわっているのか、

「私、コーチしてあげるわ、この人、一人じややりにくそうよ」

と云い出し、私の手をとって立ち上らせま

した。

それからの出来ごとは、到底ここに自分で書くことも出来ません。ビール瓶や、お酒のトクリが当座の小道具をつとめました。とり寄せられた卵を使って、私は鶏のまねまでさせられたのです。「コケ、コケッコー」などと云わされて、涙でぐしゃぐしゃになった顔を、お客さんたちの方に向けていました。私が泣き出したのが、お客さんたちを一層喜ばせたりしいのですが、さすがに、芸妓さんの一人、二人は見るに見兼ねて顔をそむけておりました。

最後のときがきました。先程飲んだビールのおかげで耐えられなくなってきたのです。「ちょ、ちょっと休ませて下さい。トイレへゆかせて……」

とお願いして、脱ぎすてであった衣類に手をかけました。裸のままでは外へ出られせん。ところが、

「いいよ、いいよ、着たり脱いだりじゃ大変だから、ここで済ませなよ、一寸臭いけどみんな我慢してやるから」

と、ご主人の声がかかってしまいました。

芸妓さんの一人が、洗面器をとってきました。もう仕方がありません。しばらくもじも

じしていると、

「何だ、まだいいのかい、じゃあ、もう一度にわとりやってみるかい」

などと云われます。やむなく、洗面器をとろうとしますと、

「おっと、早まっちゃいけない、どんなスタイルがいいか、お客さんに聞いてからやんなよ」

「立ったままやって見な」

「犬がいいよ、片足あげてね」

「土俵入りスタイルはどうだい」

などと、さんざんにかかわれた挙句、結局もっとも見やすい恰好にされました。

我慢していたせいか、時間が長く感じられました。その間、お客さんも、芸妓さんも、しーんとして私をみつめているのが感じられました。ようやく、洗面器を打つ水音が弱くなるころ、私は、ぼんやりと気が遠くなりかけていました。

四

冬子のクリスマス・イブは終わりました。

世の中の人たちが楽しんでいる夜、金で買われた身とはいえ、自分で自分の体がいとわしく、きたならしいものに思われてなりませんでした。

女奴隸を弄ぶ

啓子、東浦ひかるの二人の女性が
一緒に、なつてぎりと縛りあげ
さんさんといじめ抜く場面を実際
のプレーから選びました。

股裂きと逆さ吊

大塚啓子、東浦ひかるの二嬢が後手高小手に縛りあげた木村洋子を逆さに引きあげ、両足を左右にそれぞれ引っぱって股裂きにしようとする緊迫的シーン。

口中の詰物で汚辱

裸身の胸に喰ひ込む縄目もむご
たらしく高小手のまま転がされ
た木村洋子の上に跨って押えつけ
鼻を摘んで開いた口の中へ無理矢
理布片を押し込む二嬢。

猿ぐわのいたぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きさ」
痩せ気味の木村洋子の裸身をぐ

るぐる縛りあげ思うまま弄んだ二嬢は、洋子の口にぎゅうぎゅう豆絞りの猿ぐつわを力いっぱい噛ませて、その悲鳴を封じる。

抓ねりと操ぐり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きし」

柔らかな脇腹、豊かな乳房、お
 臍のまわりと、大塚啓子、東浦ひ
 かる二嬢の手と足は、執拗に木村
 洋子の肌をとろ嫌わず襲いかか
 って抓ねり攪ぐりまくる。

二女を虐める啓子

大手札十枚一組 一二〇〇円
東浦、木村、大塚 略号「きい」

マゾ木村洋子、東浦ひかるの二人の
子は女性の裸身を緊縛した大塚啓
つづを噛ませ一緒にして踏みつけ猿
つけ虐めつくす連続組写真。押さえ

血紅使用介添切腹

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚、東浦 略号「きつ」

東浦ひかるの豊満な下腹を背後に回った大塚啓子の手によって、きりきりと切りさばかれてゆく凄惨な介添切腹の場面を豊富な血紅を使用して真迫的に描写した。

柔肌を切り裂く

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚、東浦 略号「きち」

下腹を真紅に染めて仰向きに倒
れた東浦ひかるを冷やかに見下
ろした大塚啓子は、更に右手に
脇差でひかるの胸を、脇腹を、
下腹を切り裂いてゆく。

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦 略号「きす」

縛られて仰向きに転った東浦ひかるの上、に馬乗りになつた大塚啓子は脇腹、臍のまわりをくすぐりまくる。悶え喚めき馬乗りになつた啓子をはねよけようとす。

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号「きせ」

身動きできぬように束縛された
ひかるの豊満な胸、腹部、馬乗
りになった啓子の手にした火のつ
いたローソクから熱い蟬涙がたら
りたりとしたり落ちる。

豊満な乳房責め

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きそ」

只でさえ巨大なひかるの乳房は
縄目によって一層膨れあがる。啓
子は足で踏みつけ、プライヤーで
乳房をはさみ、あらゆる方法で乳
房を痛めつける乳房責め決定版。

女奴隸を飼育する

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きて」

女奴隷東浦ひかるの裸身をくびるように強烈に縄をかけた大塚啓子は、どのように飼育してゆくの
か。さまざまな素晴らしい傑作縛り
フオトにて解説します。

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きと」

総べての身の自由を奪われた女
奴隷東浦ひかるが、きびきびした
大塚啓子の手によって、人間性の
喪失を宣言され、凌辱のかずかず
を強要される幾場面を展開。

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚、東浦 略号「きな」

見事な高手小手に緊縛した東浦
ひかるの鼻を思ひのまゝに責める
啓子。女の誇りの鼻を痛めつけら
れても、どうすることも出来ない
捕われの裸身のひかるである。

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組
東浦ひかる
略号「まぐ」
一〇〇〇円

男性モデル募集に応じた男性として体験から、その膨大な尻の下に男を敷くといったプレイの場面を特に分譲いたします。

☆極最近撮影<悦虐>写真新分譲品☆

◎カラー・プリントの部

真紅の腰巻着用

大手札二枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号ハうおV

真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻フアンの方々の要望によって特にカラー写真にて分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる、大塚啓子 略号ハうてV

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高小手に縛り上げ、珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って啓子の縄尻をとるという今までに嘗てなかった横図がカラーにてお目みえいたします。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号ハうこV

真紅な腰巻の乱れた裾から、真白な太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、力強い責めフोटです。

◎モノクロ写真の部

オシメと女学生

大手札印画紙焼付

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号ハうえV

肉づきのよい真白な太腿を八の字に開かされてオシメを当てられるオシメ・カパーを着けられる可憐なセーラー服姿の女学生。オシメマニヤの憧れの的である羞恥と汚辱に一人の感興を催させます。

◎三人による女相撲

大塚啓子 (東浦ひかる、木村洋子)

マワシを締めあう

大手札印画紙焼付
十五枚一組 二〇〇〇円
略号ハうみV

三人の若き女性が素裸になつてお互いに相撲を締めあう様子を三十五ミリ判にて漸次スナップしていった、女相撲準備中のありのままの状況描写の連続写真。

好取組三番勝負

大手札印画紙焼付
十枚一組 一五〇〇円
略号ハうむV

三人のマワシ着用、女性性が、勝抜きの三番勝負を展開、控えの一人は双方に声援し、技に対するアミズクになつて繰り返す女相撲。

迫力実戦好相撲

大手札四枚一組 五〇〇円

十枚一組 一五〇〇円
略号ハうめV

三人がお互いに相手を選んで力をかぎり女相撲の技を競うところを次々と早いシャッターで場面を捉ええしました。その中で妙味のあふれるシーンを選びました。

マワシの三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
略号ハうやV

相撲マワシを締めた三人の娘が三人揃つて立つて並んだところを記念撮影しました。仲良し三人娘の裸の写真です。背面からのポーズも忘れず集録いたしました。

取組む三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
略号ハうゆV

三人の中の一人が行役となつて蹲踞して向きあう二人から始まつて睨みあいから四つに組むまで型通りの女相撲の展開を、一つ一つ丹念に狙つてゆきました。

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号ハうもV

イルリガートル、ガラス製一〇〇CC浣腸器を用いて、浣腸に心をこめて清子が蒲団の上にて自ら精神でフोट化しました。

浣腸されるマニヤ

大手札四枚一組 五〇〇円

山原清子 略号ハうわV

浣腸マニヤでもある山原清子が他人の手によって各種の浣腸器具によって浣腸される状態を、浣腸フアンの眼を楽しませるために刻明に描写いたしました。

刺青姐御の切腹

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号ハうたV

白晒の六尺褌を前垂れなしに、きりりと締めた背中一面刺青の姐御が脇差を右手に右膝を立てて覚悟の切腹。裸一貫女伊達の最期はこうぞとばかり下腹を切る。

◎Mフोटの部

二女のなぶりもの

大手札三枚一組 六〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号ハうろV

応募してきたM男性モデルが二人の若い女性に手どり足どりでなぶりものはなされ、あとでこれに楽しかったMプレイ・フोट。

二女の馬にされる

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号ハうまV

二人の遅ましい肉づきのよい女性から、文字通り人間馬とされ、草の多いまわを哀れなM男性が馬の乗心地を楽しむ若い女性。

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 八〇〇円
相撲マワシ着用 略号(すか)

女相撲投げ業

大手札八枚一組 八〇〇円
相撲マワシ着用 略号(すね)

褌裸女の争闘

大手札五枚一組 五〇〇円
白晒六尺褌着用 略号(めん)

褌裸女の寝業

大手札五枚一組 五〇〇円
白晒六尺褌着用 略号(めき)

褌裸女相搏つ

大手札八枚一組 八〇〇円
白晒六尺褌着用 略号(えく)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すは)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すむ)

女斗立業の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すち)

立業の攻撃場面

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すた)

寝業の女レス

大手札六枚一組 八〇〇円
略号(すほ)

女斗連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円
略号(すく)

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

褌裸女血紅切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

女体介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

海老縛りの表情

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えふ)

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にち)

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 (にし)

臨月腹開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 (にり)

臨月腹開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にす)

柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
田中美佐子 略号 (にや)

臨月のヌード

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にわ)

妊婦の裸身像

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
田中美佐子 略号 (にた)

縛られた妊婦

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
田中美佐子 略号 (にる)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にお)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にぬ)

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 (にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いち)

縄に悶える入墨

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いへ)

足吊り三態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いと)

剣れた腰巻

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いは)

女一匹御意見無用

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いお)

玉取姫が妻む

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いる)

全裸緊縛立像

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いに)

入墨ヌード

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いよ)

後手吊りの構図

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いほ)

黒細帯の裸身

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いわ)

黒褌を誇る

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いか)

入墨 自慢

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いり)

黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (くの)

黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (くな)

黒褌背面模様

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (くこ)

黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (くり)

全裸入墨姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (いれ)

晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (ろと)

白六尺褌一本の姿

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (ろに)

白褌後手高手小手

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (ろし)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (いら)

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (いこ)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

山原 清子 略号 (いさ)

可憐島田鬚全裸縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (いみ)

黒フン高手小手縛り

大手札八枚一組 略号 八〇〇円
山原 清子 略号 (ひろ)

入墨女体全裸像

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひへ)

黒褌刺青女体美

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひね)

六尺褌をするまで

連続二十ポーズ組写真
大手札二十枚一組 略号 二〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひは)

白ふんどし脇差切腹

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひに)

白ふんどし短刀切腹

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひぬ)

刺青姐御腹巻脇差

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひほ)

刺青姐御腹巻短刀

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (ひり)

入墨女体海老責姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (ほか)

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
山原 清子 略号 (ほき)

〔代理部新版分譲品一覽〕

〔代理部新版分譲品一覽〕											
腸露出無念腹切腹											
大手札十枚一組 略号 八〇〇円											
大塚啓子 (せ10)											
全裸の切腹悦楽 1											
大手札四枚一組 略号 四〇〇円											
大塚啓子 (ひた)											
全裸の切腹悦楽 2											
大手札四枚一組 略号 四〇〇円											
大塚啓子 (ひと)											
マニヤの切腹											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
甘木春子 (まに)											
女子斗争場面写真											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚、玉田 (のわ)											
二女格闘場面写真											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚、玉田 (のか)											
全裸正面切腹姿態											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (のみ)											
切腹に悶える裸身											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (のそ)											
浣腸と便意の苦悶											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
遠藤百合子 (のけ)											
強烈エビ責め											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
玉田美佐子 (ねむ)											
後手首の高縛り											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
玉田美佐子 (ねへ)											
椅子またぎの責め											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
玉田美佐子 (ねと)											
血紅切腹決定版											
大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円											
大塚啓子 (れは)											
血紅切腹凄惨姿態											
大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円											
大塚啓子 (れみ)											
黒いフンドンを誇る											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
遠藤百合子 (くわ)											
高圧空気浣腸											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (むい)											
浣腸場面大写真し											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (むは)											
施される浣腸											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (むろ)											
全裸脚挙姿態											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
長野良子 (てい)											
全裸アグラ縛り											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
長野良子 (てへ)											
全裸屈伸縛り											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
長野良子 (てほ)											
六尺禪の変形姿態											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
長野良子 (てに)											
蹲踞と拍手											
大手札二枚一組 略号 二〇〇円											
長野良子 (てり)											
鬼面と接吻する											
大手札二枚一組 略号 二〇〇円											
長野良子 (てち)											
強烈エビ責め											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
松本アサ子 (まと)											
裸身に羞らう											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
松本アサ子 (まつ)											
女賊捕縛											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (へい)											
女賊処刑											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (へは)											
全裸緊縛姿態開陳											
大手札四枚一組 略号 四〇〇円											
遠藤百合子 (ゆり)											
鼻をいたふる											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
遠藤百合子 (ゆは)											
浣腸をする女											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
遠藤百合子 (ゆか)											
バンドを脱ぐ女											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
遠藤百合子 (ゆお)											
絞首刑											
大手札二枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (るく)											
引回しと晒											
大手札二枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (るに)											
磔 (はりつけ)											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (はみ)											
晒 (さらし)											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (さら)											
絞首刑											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (こけ)											
晒台の生首											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (のく)											
斬首の瞬間											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (のき)											
斬首処刑場面											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
新宮夫人 (くし)											
吊り打ち											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
関谷富佐子 (やり)											
股間縛法悦境											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
絹川文代 (ぬこ)											
踊り子緊縛											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
絹川文代 (りこ)											
責め衣											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
大塚啓子 (せめ)											
猪吊り											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
梨花悠紀子 (いの)											
足挙開股責											
大手札三枚一組 略号 三〇〇円											
梨花悠紀子 (あけ)											
緊縛女体撮影風景											
大手札四枚一組 略号 四〇〇円											
大塚啓子 (むら)											

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 絹川文代 略号 (らふ)	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 東浦ひかる 略号 (へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (たく)	淫らな長髪の乱れ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)	
長野良子 略号 (ろめ) 縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちぬ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 細川アヤ子 略号 (ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふな)	フンドシの変った姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふに)	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しま)	前開き布製防水オシメカバー	
大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しな)	全裸の切腹悦楽(1) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひた)	全裸切腹悦楽(2) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひと)	乳房しばり 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (うは)	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (うい)	木馬責三態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (もく)	椅子責めの果て 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (いす)	哀婉血紅切腹 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (るな)	双胸の強調縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (そう)	動感海老責地獄 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (とう)	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (いふ)	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (はす)	膨満 正面縛り
大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (へな)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちた)	オムツ着用フット 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 大塚啓子 略号 (むね)	バンド着用開股ポース 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (つん)	マニヤ全裸緊縛フット 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (いな)	強烈エビ縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もい)	乳房責の苦悶 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もろ)	全裸ムチ打ち 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もた)	強打に泣く裸身 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (むち)	裸身の晒し 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (わあ)	全裸股間縛り 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (せら)	

☆異色文献資料分譲品☆

鼻 いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね)

山原清子 略号(はね)

寝棺の中の裸婦

大手札二枚一組 略号(ねか)

山原清子 略号(ねか)

刺青姐御禪一本艶姿脇差

大手札八枚一組 略号(てね)

山原清子 略号(てね)

刺青姐御禪一本艶姿短刀

大手札十二枚一組 略号(てし)

山原清子 略号(てし)

刺青姐御腰巻一丁艶姿短刀

大手札八枚一組 略号(てな)

山原清子 略号(てな)

刺青姐御腰巻一丁艶姿脇差

大手札十二枚一組 略号(てふ)

山原清子 略号(てふ)

黒禪奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろち)

刑部典子 略号(ろち)

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん)

刑部典子 略号(のん)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 略号(いね)

山原清子 略号(いね)

白禪奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろて)

刑部典子 略号(ろて)

入墨を踏みにじる

大手札八枚一組 略号(いつ)

山原清子 略号(いつ)

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号(はた)

山原・鈴木 略号(はた)

裸女レスリング

大手札四十枚一組 略号(れす)

大塚・山原 略号(れす)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる)

山原清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ)

山原清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに)

山原清子 略号(かに)

乳房責め五態

大手札五枚一組 略号(てら)

山原清子 略号(てら)

禪美に羞じらう

大手札六枚一組 略号(こん)

玉田美佐子 略号(こん)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 略号(うの)

山原・大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 略号(うな)

山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 略号(うね)

大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面背面

大手札二枚一組 略号(つる)

増田みゆき 略号(つる)

夫婦連縛鼻責

大手札十枚一組 略号(らか)

増田夫妻 略号(らか)

夫を責める新妻

大手札十枚一組 略号(はや)

増田夫妻 略号(はや)

牛男をのりこなす新妻

大手札十枚一組 略号(はま)

増田夫妻 略号(はま)

完全逆さ吊りフォト

大判三枚一組 略号(さつり)

木村洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 略号(さか)

梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊りの女体折檻

大判五枚一組 略号(させ)

梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 略号(さと)

梨花悠紀子 略号(さと)

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にん)

安原さゆり 略号(にん)

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にの)

安原さゆり 略号(にの)

妊娠九カ月の腹部

大手札三枚一組 略号(にみ)

安原さゆり 略号(にみ)

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にへ)

安原さゆり 略号(にへ)

六カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にそ)

安原さゆり 略号(にそ)

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号(のせ)

大塚啓子 略号(のせ)

血紅使用美しき女の屍体

大手札十二枚一組 略号(のり)

大塚啓子 略号(のり)

血紅使用立腹に悶える女体

大手札十枚一組 略号(のさ)

大塚啓子 略号(のさ)

血紅使用切腹した女の死体

大手札十二枚一組 略号(のい)

大塚啓子 略号(のい)

血紅使用屠腹される女体

大手札十二枚一組 略号(のる)

大塚啓子 略号(のる)

血紅使用絞首された女体

大手札六枚一組 略号(のひ)

大塚啓子 略号(のひ)

血紅使用切腹に苦悶する女

大手札十枚一組 略号(のむ)

大塚啓子 略号(のむ)

檻に入れられた女

大手札二枚一組 略号(もの)

山原清子 略号(もの)

浴室の全裸刺青

大手札五枚一組 略号(よな)

山原清子 略号(よな)

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 一〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 一〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円
- 顔面に女の尻が乗る

- 大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 一〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 一〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 一〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 一〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 一〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 一〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円



○ 一月号の「痴人の糧」のなかに（肉体をもった人間―それはなんとちっぽけで哀れな存在だろう。昆虫の短い生命も、人間のそれとどれだけ違うのだろうか。枯れて行く果実と、どれだけ人間の体が違うのだろうか）という箇所があります。わが国の専門学者や職業作家がどう見ているのかわたしはよく存じませんが。この実感をプラスの方向に越えて行つて新しい芸術、道徳、哲学、文学に達しよ

うとする場合とこの実感をマイナスの方向に向け「高級な」情事のなかで安易に解消しようとする場合が考えられます。プラスの方向に向えば奇巧は編集者の抱負どうり後世に残る分野を開拓するでしょうが、マイナスの方向に向えば世の道学者や浅はかな立法といえずに衝突して自滅の恐れがあります。昨年初頭の西条、久我論争の本質もわたしはこのプラス・マイナスの衝突と見ております。これまで「痴人の糧」は通読できても「花と蛇」は拾い読みしかできなかつたのは何よりも自分が気が弱いためだと思つていました。一月号で、たまたまこの箇所に着し、相当の根拠が他にあるのを改めて、確認したように思いました。「花と蛇」はこの実感とそれをプラスの方向へ越えていくとする意欲が稀薄に見えるのです。文学史に残るべき作品か単なる娯楽読物かという議論が続出し、果ては二月号に、ユーモラスな「珍学的」評論まで飛び出す原因の一つがここにあります。保藤さんがその評論のなかでS行為の根底に被虐者への愛情があるべきだという意味のことを述べておられましたが、この愛情もまた冒頭に掲げ

た「痴人の糧」の実感をプラスの方向に推し進めて始めて芽生えてくるものだと思います。以上奇巧随一のS小説「花と蛇」に対し、その卓越性の故に望蜀の願いを述べることを、お許し下さいますよう。（福田久文）

○ 山中冬子さんに寄せて。十月号に貴女の通信文がのつて以来、あこがれをもって真先きに毎号貴女の通信を探して読んで居ります。二月号には夜乃探郎さんの筆になる貴女の生活がなまなましく書れていて、ますます貴女が憎い程うらやましくなりました。併せて読者通信の中の一文：本妻にいじめられる貴女を想像して貴女の女心を思うとき、まるで私自身が裸にむかれて鞭打たれる様なそんなおのきすら感じました。親の為金で売った身ではあるにせよ、貴女の若さで無上の悦楽を味つていらつしやる、どの様に現したら、このうらやましさを貴女に知って戴けるでしょうか。それは私だって牝犬として扱われ、人前で放水したり、御主人様だけではなく使用人にまでもおもちにされ鞭打たれたりすることは死ね程羞しいことには違いありませんけれど羞しめ

られ弄ばれることを、私の妹は望んでいるのです。貴女や「花と蛇」の静子夫人を思うとき私のマゾの血は、騒いで仕方がありません。三十女の血のもだえとマゾが爆発してしまいそうです。この手紙を書いている今も貴女は御主人様やお手伝いさん達に可愛いがられていられるんですね。死ぬ程の悲鳴をあげながら。ああ、貴女に逢いたい。そして貴女からその苦痛にみちた体験を聞き、万が一にもプレイをみる事が出来たら、私の血もいくらかおさまるかも知れません。貴女の御主人様はお許し下さらないでしょうか。（東京・深見圭子）

○ 寒中、編集部ならびに読者の皆さん如何お過ごしですか。さて、二月号は特に愉しい記事が沢山で、毎月一、二回は伊豆箱根方面へ旅行が私の私には、この上ない独り寝の伴侶をしてくれました。マニアの手帖で「縛り方教室―第三章女体デコレーション」の拙筆を載せて頂いた同号に、くしくも辻村隆氏の（みゆきのバスデー）が掲載されたことは、増田氏御夫妻に興味の類似を拝見し、嬉しくもあり、耽美この上なしと思いまし

た。それと(サロン)小竹一浩氏の「夫婦のSMフォート」仲々お見事でいずれも理解ある奥さんをお持ちのこと羨望にたえません。さて最近M女性の方の通信投稿も増え、本誌並に同好の我々男性にとつて喜ばしいことです。仲々勇気ある申出の投稿もあり、次号には男性の名乗りが一杯で、思わずほは笑ましくなります。他にも読者M女性の方々も多く、ひそかに「誰かに」と思っておられるような気配が感ぜられます。私は心からフエミニストですが、しかしプレイはプレイ、いささかも女性の美を觀賞するに、容赦はしないつもりです。真のSMにおいては、とるものはとり去り、痛い目も我慢させねば、ならぬと思つています。手加減を加えることは寧ろM女性に対する侮辱だと思ひます。第一章で載せた写真の女性も晩秋というのに汗で光った程でした。もし、東京及び近県で、かくれた読者のM女性の方で、お望みならば、ご年令、スタイルは関係ありません、十二分に縛つて差上げますから、編集部経由でご連絡下さい。ただ奇クの名誉のため公私の生活には一切立入らぬことは大切だと思ひます。十分お打合せのう

えご希望にそいたいと考えます。
(東京都・池田勝)

河津安春さんの「ポケット・ブック紹介」に取上げられた「波瀾の一年」は、S女性、M男性の心理が巧みに描かれており、大へんに興味深い文献で、チャチなもの多いこの種のストーリー中の白眉でした。ステイヴを精神的にも肉体的にも苦しめながら、奉仕をさせるメリイ・エレンのくだりは、ザッヒエル・マゾッホの作品をさえ想わせました。また、黒人奴隷ロニイを、乗馬鞭でピシピシ打ち長靴で蹴り、ふみつける美しいアマゾン、アリス。何と魅力的なことでしょう。しかも、彼女は「ロニイを鞭で打つたに、私は、自分が美しい女であるという自信が満ち溢れますの」などという心憎いセリフまで言うのです。奇クの最近、ややM不足の気味ある折柄、この種のものの紹介、翻訳に河津氏の御健筆を禱り上げます。
(麻生保)

○ 東京の藤村美香様、あなたの悩み、奇クの愛読者ならだれにでもわかるかと思ひます。あなたの複雑にして深刻な悩みの解決法は只

一つ、プレイすることではないでしょうか。私は今まで一度もプレイしたことがないので果してあなたを満足させる程のプレイができるかは解りませんが一生懸命努力しますからお呼びかけ下さい。私は身長一六七センチ二ミリ、体重五四Kの小柄なS趣味の男です。スポーツはアイススケートとやり多少ながら、柔術の心得もあります。去年の八月号の平伏人氏の文を読み、自分も設備の整った(Sの意味において)マンションでプレイができたなら、どんなに楽しいだろうと思つていたところです。不器用なのか縛りの技術もなく拘束具等の小道具も持たずプレイする場所まで欠く小生にはとうていプレイすることはできまいと思つていました。空想するのも楽しいものです。空想すればする程実行に移したくなる気持はつのるばかりでした。そんな時2月号にあなたの通信文を拝見した次第。小生の喜び様を御想像下さい。「天にも昇る気持」等まだまだ表現不足の程、まさに言葉を絶する程狂喜したものです。あなたが自虐の目的の為、種々の工夫を凝らされたマンション、Sの私には天国のような理想境に思えます。よろしければ是非一度拝見してみたいものです。藤村美香様、あなたは以前の経験から駅や喫茶店で待合わせられるような事は好まないとおっしゃられますがこれは私にとって非常に難題です。逢う前にTEL番号連絡住所を知らせるようにこのこと。とても私には公開誌上に自分の住所を知らせる勇氣はありません。どうしても駅や喫茶店で待合わせることがおいやでしたらさいわい東京には貸連絡事務所等があるそうですからそれを利用しようかと思ひます。最近では平凡パンチ12月20日号によると「セクレタリーセンター」なるものがあり、公私にかかわらず秘密を厳守し連絡事務やスケジュールの調整をやってくれるそうです。藤村美香様、女性の身で奇クを買うのはつらいことでしょう。そのことはいいたい程理解できるのですが、奇クを通じて、もう一度誌上にてお便り下さい。私の希望は互に秘密を守り二人きりのプレイを楽しみたいのです。私には一人の女性を多勢で責めるような趣味はありません。ムード派的なものがあるのかも知れませんが、どうも勝手に自分のことばかり書き並べて申し訳ありませんあなたの第2信が少しでも速く掲

載されることを祈りつつ。(東京
都港区・川上健治)

○花山千鶴子様、奇ク十二月号読者通信にて貴信にて貴女の投書を拝見して、願ってもない事と私は矢も盾もたまずペンを取りました。私に是非貴女を責めさせて下さい。必ず貴女の満足するように責めたいと思っております。私自身では、SM半々位だと思っております。私も体にきずのつくような責めは嫌です。私は殊に女性の裸体又は半裸での、逆えび縛りや逆さ吊り、股裂き、股間縛り、禪姿等には本当に最高の魅力を感じます。千鶴子様さえよろしければそのさまざまのポーズをカメラに収めたいと思いますが、如何でしょうか。お嫌でしたら無理にとは申しませんが、モデルになって頂ければ此上なき幸せと思います。自分の若き時代の美しい肌を普通では写す事の出来ないポーズを写真に撮るのも魅力のある事と思いますが。貴方のお望みのように致します。私はかねがねM女性と近づきになりたいと願っていました。が其の機会が無いまま現在まで来ましたが今回計らずも千鶴子様の奇クの読者通信欄を拝し、お近づ

きになれる事を心から嬉しく思っております。私はカメラや引伸機等一通り揃えていますので、現像引伸し、焼付等全部自分で処理致しますから、人に秘密を見られる事は絶対ありません。乗用車も持っていますから貴女の御希望の処へ御案内又はドライブを致しますよう。是非一度逢って下さいお願いします。お互に常識ある社会人として秘密は絶対に厳守する事を誓います。お便りお願い致します。編集部より回送をお願い申上ます
(東京・山崎生)

○花山千鶴子様。貴女のお便りを拝見し、日頃望んでいた女性の出現に思わず万才を叫んでしまいました。僕は中学生の頃、姉の様に慕っていた女性にアブプレイを教えたことになりました。彼女は当時レスビアンの相手を持っていました。それに飽き足らず僕を対象として考えて、豊かな臀部を剥き出しにあられもない恰好で責めさいなまれている姿を見せ付けて、僕をアブの虜としてしまったのです。縛り、鞭打ち、アヌヌ責め、浣腸とオールラウンドに飼育され、女性を責める事にのみ生甲斐を感じる完全なSとなりました。しかし貴

女のおっしやる様に身体に傷つける事に好みません。飽くまで一種の遊戯として楽しく交歓する事を本分としておりました。その彼女もわずか五年の同棲で、今は亡くなりその生活が充実していただけに、淋しさは一しおです。今一たび千鶴子さんに依って取戻して戴けたら、こんな嬉しい事はありません。どうかこの僕の気持ちを汲んで戴きお会い下さる様お願い致します。申し遅れましたが、僕は三十二才のサラリーマンです。(東京都中央区日本橋・高木正之)

○東京の藤村美香様。貴女のお便りを二月号にて読まして頂きました。一・六米、五二サロの体格素晴らしいグラマーですね。バスト、ヒップもよく発達している事でしよう。モデルにもなられたとの事お顔も美しい方だと思えます。そのような美しいグラマー女性を一度縛ってみたい。全裸にして乳房の形が変る程しめ上げる、或いは女性が一番恥ずかしい部分を縦に縛り上げる。先日花と蛇をみました。映画でさえ、ぐっとくるものがあるのに実際に女体を縛って目の前に転がせばどんな気持ちだろ

う。そのような気持ちを十二年間も持ち続けてきました。どうか藤村様この私のパートナーになって頂きたいのです。私の住所は仔細があって公表できませんが私から貴女にあて直接お便りを差し上げます。申し遅れましたが、私は本年三十三才、二児の父親で、平凡な会社員。奇ク歴は十二年、傾向は縛りだけ、むち打その他肌に傷のつくのは好みません。出来たら名古屋か京都辺の豪華なホテルの一室で心ゆく迄プレイを楽しみたいと思います。(大阪市・柴田守)

○藤村美香様。私は二月号で貴女の通信を読ませて頂きました。貴女と同様に私も今まで自分の性格について随分悩んで来ましたが。奇クもずっと以前から読んでおります。そして、今までいろいろの人の通信も読みましたが、どうしても決心がつかず今日までじっと過ごしてまいりました。しかし、貴女の通信文の中で『どうしても生れた私のさがは、どうする事も出来ず……』の一節を読んだ時は、全身にびびき渡るものがあり、どうしても貴女とお知合いになりたく筆を取った次第です。私は現在、東京にある一流会社で機

械の設計をしておりますが、職業柄、自分でも良く勉強し、まじめで誠実な人間であると、確信しております。それだけに、自分のこの性格についても人一倍悩んでおりまして、今では逆にそれを、我が人生の楽しみに加えております。しかし、何分にも貴女の仰る様に一人では楽しむにも限度があるので、ぜひとも貴女とお知合いになりたく読者通信に投稿した次第です。尚、最後になりましたが自分の好む責め方について少々申し上げますと、私はどちらかと云うと、柔らかいムードの羞恥責に興味がありますが、貴女の意向も十分取り入れるつもりでおります。是非お返事を下さい。ではお返事を一日千秋の思いでお待ち申しております。住所は編集部に知らせておきますので、回送して頂いて下さい。(東京・HM生)

○ 二月号の「みゆきのパースデイ」は実に素晴らしい演出でした。今に鼻梁を貫通する物凄い責が実現することでしょう。楽しみにして居ります。青木順子のショーを見に行ったときのストリップは壹百円時代から十年ぶりのヌードダンサーの物凄い露出には驚歎しま

した。三十年迄よく娼妓を買いに行きましたが、あれだけ露出する者はありませんでした。警察がよく黙認しているものです。この老人でも胸がドキドキします。ミュージックの近くのゲーバーがあるときましたので参考のため見学してきましたが、仲々よく化けています。耳朶に穿孔をすすめたら、拾万円呉れるかと言うので驚きました。(京都市・佐々木生)

○ 小生、貴誌を読み始めてから、もう三年になります。グラビヤがなくなったのは、まことに残念なことですが、それも、只今の状況からは本誌が存続するためには仕方のないことかも知れません。その分だけ本文の充実で補って下さい。小生のように、毎月貴誌に馴染んでいる者にとって、グラビヤがなくなったからといって、簡単に購読をやめられるものではありません。たった一度しかない小生の人生にあって、こんな素晴らしい雑誌がとやかく制限されるということとは、まことに生活の上でのマインナスでなければいけません。でも本誌がなくなることを思えば読者も辛抱しなければならぬのでしよう。新年号と二月号の表紙

はモダンでシックで、とてもよろしいですね。昭和四十一年から表紙のデザインを変えられたことは成功したといえるでしょう。(和歌山・紀国山人)

○ 編集者の皆様、おめでとうございます。昨年は読者の我々のため色々とおいそがしかった一年と存じます。本年も昨年以上に我々読者のために御努力をお願い致します。昨年の十一月号の読者通信には、私の奴隷養子の願いをのせて頂き本当に有難うございました。今一度今年も全国のサド女性の方々に私の願いをひたすら訴えさせて下さい。私は今年二十八才、身長一六〇、体重五五キロの貧弱な男ですが、身体は強健です。私を奴隷養子として下さる女性の方はいないでしょうか。もしおられましたら御連絡下さい。希望は身長一六三センチから一七三センチぐ

らしい色の白い強烈なS女性の方私を奴隷養子に下されば私はどのような御奉仕でも致します。たとえば足舐、バスに入るときは背中流し、椅子、人間馬、犬、牛、ご主人様が外出から帰られて埃でお汚れになったおみ足の雑巾にもなります。もし貴女様がボーイフレ

ンドをおつくりになられても結構です。私は只世間体だけの貴女の夫ですから家の中では私は貴女様(ご主人様)の奴隷で、ご主人様のお思い通りに私を飼育して下さい。結構です。また炊事、洗濯、掃除なども一切私が致します。こんな便利な奴隷を自分の夫にしてやろうとお思いの方はお便り下さい。太塚啓子様。一度貴女の休日私を私のためにお与え下さい。私を奴隷として一日だけで結構です。飼育して頂けませんか。どうか編集者の方、太塚啓子女王様に、おとりつぎ下さい。(大阪市城東区・山崎進)

○ この冬のことでした。いつものように私のたのしいお買物は、やはり家庭的な商品に気がついてしまふのでした。食事の仕度や日用に必要な品々は当然のことですが、とある洋品店の前に参りますと、もう春もすぐそこであるのか婦人洋反物、スカート地などと共に各種のはぎれも一せいに売出中なのでした。私も多くの女性に混って店内に入りました。やはりおなごむきの店なのか、むーうとばかりお化粧の臭いが一ぱい致します。店員さんも女ばかりで私まで中年

の婦人になった様な気分になってまいりました。洋服地にまじってやはりネルの布地がたくさんならべてあるところに来てしまいました。そこには純綿、ネルオコシ一枚分などと札のついたはぎれもありました。少々すみの汚れた難ものもありましたが、少しでも安い品を欲しいおなどの気質などもありありとうかがえます。私の耳に入ってくる声には、「おこしも買いたいし、あの服地も安いわ」とか「これ一枚分あるのかしら」などです。そして若い人、中年の人など相当にあれこれよりどりでネルを求めていました。とにかくおなどは無地ネルと見れば、オコシ用と気が働くのです。又こんな売出のときに買えばほんとにとくをした、よい買物だったと満足するのでしようか。スタイルを気にする、よいものを身につける欲の反面、やはり女のマゾ性につながるかどうかは、たしかではありませんが、ネル地への愛着もあるのではないのでしょうか。買物中にこんな言葉も聞かれました。私はその中年の女の人達を思わず見つめました。「やっぱりの耳のところに印の字が入っているの、いややわね。前のような濃いピンクがほし

いわ」私は自然な姿で、気がねもなく、店内にいることが出来ました。ほんとに店員さんも、めずらしくあいそがよく、そして、やはり忙しく立働いておりました。体中におなどの空気がとりまいてしまった様で、いまでも、あの店のことなど思い出されます。一歩でも女の世界にとけ入ろうと、毎日を送っている私のくりごとを申し上げます。女性の方で、お呼びかけの文をお待ち申しております。(大阪・里乃糸枝)

○ 奇クを毎月心から楽しみに愛読している一青年です。大阪の井手雅子様、読者通信上にて貴女のお便りを拝見しました。私は今まで奇クを只読むだけで投稿など、まだ一度もしたことなく、この便りを書くペンも知らず知らずふるえ勝ちです。といえますのは、通信欄の皆さまは、ベテランばかりで、とても私のような者は、お仲間入りもさせてもらえないと思うからです。でも、一女性としての貴女のお便りを拝見して、私も心の中から勇気がわいてきました。貴女のような上手な文章もよう書かない私、それでも、なんとはなしに、貴女と文通してみたい、い

やお逢いしてみたいという強い気持が押さえきれないので。なんとなく甘い貴女のムードがたまらなく、後手縛られたままの夜のドライブなど、泣きたくなるくらいですね。どうか、私と一度そういう雰囲気を感じてみて下さいませんか。私は至ってロマンチックな男性です。貴女のことを夢見ています。貴女も実際にされたら嫌になるかもしれませんが、とおっしゃっておられましたね。私も貧しい一サラリーマンで、自家用車など、とてももてる身分ではありませんから、これもはかない夢にすぎないかもしれません。でも夢だけはつぶしたくないのです。そしてこの甘く温かい貴女の通信文が、私の胸の中に、未来への希望として、大きく影響していると思うのです。せめて、これから誌上でお便り、たやさないで下さい。一ファンとしてお願いします。(大阪・本村和男)

○ 初めてお便り致します。私ようやく三十代の仲間入りしたばかりの人妻でございます。この年代では単純な夫婦生活にもそろそろ倦を覚えて参ります。この様な私達夫婦に願ってもない幸福がおとず

れました。八カ月程前、奇ク愛読者のある御夫婦を知り得まして、私達夫婦共にお付合い戴く様になった事でございます。この様な事から今迄気にも止めてみなかった奇クに少しばかり興味を持つ様になりました。と申しまして奇クにある様な、激しいプレイを求めたのではなく、十二月号の読者通信で拝見致しました、大阪の井手雅子様のようにMのムードとでも申しましようか「女性はムードに弱い」と良くいわれる様に私とてそのムードを大切に致します。今迄奇クサロンに投稿なさっていらっしゃる御夫婦のプレイの成果をフォトによって発表されたものも拝見させて頂きました。それからフォトにつきまして編集部の方々の選定もございました。私達にとりましてはすべて圧倒されるばかりの出来栄でございます。でも、奇クの愛読者の方々のすべてがそうとは思えない様な気が致します。初步的なプレイにムードを含み……とお考えの方もおいではなんでしょうか。若しその様な御夫婦、そして同性の方がおいででしたら、お付合い戴きたいものと思っております。あまりにも奇クサロンに投稿される方々が本格

派の方達ばかりで「私達のプレイでは」と引込み思案なさっている方々に呼びかけを致します。お互に語り合ってみるのも案に相違。易く道が開かれるのではないかとと思うのでございます。只今、私達がお付合い戴いている御夫婦の方は、ことの他の様な気持で共鳴し、有意義にお付合いですしていただいております。フォートの交換、文通とすべて許す間柄に達しながらもその御夫婦の方の住居が私達よりあまり遠く離れていますために折角の夢に描いたWプレイも不可能で、主人同志も何より残念がっている有様でございます。若しこの私の便りに目を止められましたまじめな御夫婦の方に限り私達が只今お付合い戴いている御夫婦の近くにお住いの方がありませんら紹介もしてさし上げます。本当に熱心な二十代の御夫婦で、奥様も御主人に劣らず、同性の友達でも出来れば三人仲良く、プレイを楽しみたいとお便りに希望を述べられた事もございます。何と申しまして、色々の面できびしく複雑な問題を含むこの世界でございます。お互いに絶対の信頼と責任のある方でなければなりません。その意味でも御夫婦の方と

の対等なお付合いが何よりも望ましく思います。軽いプレイとムー

〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

遅ましき腎責め

大手札三枚一組 三〇〇円
美木乃々子 略号(ぬい)

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
美木乃々子 略号(ぬい)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬへ)

真紅腹巻着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号(ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つめ)

柱縛り全裸腎晒し

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さは)

ドの中で共に語り、打明け合っていくとき、Wプレイも夢ではなく

柱抱擁全身嚴重縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さけ)

足挙げ全一正面縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さこ)

柱縛り腎部晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号(ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円
美木乃々子 略号(ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つふ)

より豊かな、そして幸せな夫婦生活も、生まれるのではないでしょう

浣腸悦楽独リプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の義味

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さふ)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

相撲着用裸女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
美木乃々子 略号(ぬわ)

六尺着用裸女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号(ぬお)

か。幸い主人はカメラ狂で、撮影から仕上まで人知れず楽しむ事も出来ます。お互のプライバシーを尊重致しまして、お付合い戴ける御夫婦、そして同性の方がございましたらお便りお待ちしております。ありがとうございます。香川県の高松志朗様、バックナンバーの投稿拝見致しました。主人共々大変共鳴しております。お目に止まりましたお便り下さい、お待ちいたしております。奥様のMフォト名刺判数葉、私の所にお大変親しみを感じお呼びかけいたしました。しまいに私達共稼ぎの身でございます。(鳥取県倉吉市・南恵子)

○ 新年号拝受、有難うございました。実は一生懸命読ませて頂きましたためお礼の文おくれてすみません。シックな表紙とカット、気分転換に大成功です。併し巻頭言で拝見するような事情から挿画まで後退を知り、編集のご苦心をファンとしても、これでは何だかぜいたくな注文がはばかられそうです。が本号は大変読みごたえがあり、特に「カメラハント」「宴はてて」「ポケットブック」を面白く読みました。論争は盛んですが、それはそれとして面白い、

という弥次馬精神?もありませんがそれも程度問題で、きわどい攻撃は後味もよくないと思います。火元は夜乃氏あたりでしょうが、このパディ・ナンセンスの名手よ、粘着性格もよいが、同じことを余り書かないように、というのは私ばかりでもありますまい。(内容が面白いといわれますから)芳野氏は奇クを背負って立つベテラン才人。モダンジャズのアドリブ的な効果を所謂ヨシノブシにけんめいに取り入れようとなさる?ご努力には頭が下る。モダンもジャズ、パンチのある本格的ユリニズム?小説を期待します。中年男の私にはM・ダンス・エレキはしたこと

もなく判らず、語る資格はありませんが、久我氏のエッセイの個性の強い?のには消耗しました。いともカンタンに若者をお叱りですが、もっとしっかりした論拠なしでは老人?のナントカと非難されるのは必定。私はエレキギターをラジオではじめて苦心してきいてみたところ、必ずしも悪いとも思わない要素もあった。(キャラバnetc)かるがるしく善悪決定不可能なのは、所謂「悪書」と同じでは、と思った次第。尚私は人世相診断室Vの巧みな逆説に感心

した一人です。妄言深謝。(静岡・須渾朔)

○

藤村美香君。二月号通信面白く読みましたが、成程、初めて緊縛を経験する女性に対しては随分ひどい事をする男性もあるものですね。勿論貴女もある程度は覚悟していたとは思いますが、私はSですが、今までにひどい目にあった人の記事を読んだ事もあり、また私自身噂をたてられた事もあり、貴女が相手に信用出来ない気持は理解出来ます。私は今年四十二才のSですが、ここ十年余の間に数人の女性を緊縛しておりますが、残念な事に未だMの女性に出会っておりません。勿論、これらの女性Mでないとはいっても、私の縛り方はきつく、とても奇クのもデル写真等は問題でない程強烈ですが、やはり何となく物足りません。若しよろしければ左記の様な方法でSM遊戯をして見ては如何ですか。私自身は自分から言うのはおかしいですが絶対信用して戴いて結構です。先ず私は大阪から貴方は東京から夫々出向いて浜松位(例えばです)から場所を貴女に委せます)の所で落ち合います。この辺なら私も貴方も見知らぬ土

地ですから、互いに安心出来ると思います。次に旅館へつけば二人で夫々契約書を交わし、これを旅館に預けて受取人を貴女にしておけば安心出来ませんか。その後で好きな様に責めるのですが、ムードを出す為、最初はお互いの体験談を話してゆけば、良いと思います。ここで私の好きな責めを紹介しておきますが、少し心配なのは身長、体重より見て貴女はグラマラだと思えます。私の体験ではグラマラ女性はありませんが、私の好みは極端に手首を肩へ上げるのですが、貴女の手首がどの程度上るかどうか、すぐ悲鳴をあげないか心配です。責めには海老責、逆海老責、柱へ縛る股裂きの上海老責に逆海老責及び吊し責めです。私はポロライドカメラを用意(撮影すると、すぐその場で現像出来る)しますから、色々緊縛ポーズを研究して見ませんか。同じ事を繰り返しますが、私の住所・電話は申し上げられませんが、絶対に信用して戴いて結構ですから安心して一度、二人で緊縛を楽しんで有意義な一日を過してはと思いますので、次号の通信欄に返事をして下さい。尚、文中で奇譚クラブを購入したく三カ月に一度位い

しか買わないそうですが、マンションに一人住んでいるのでしたら直接購入すればよいではないですか。(大阪・池田良雄)

数年前より奇譚クラブを愛読している者です。このような人間の持つ複雑特異な、多種多様に亘る性向を肯定的に、いろいろな悪条件を排して、今日までも進められてきた編集者の見識と努力には、深く頭が下がります。私の性向はお灸の情景のもつ、妖しい魅力に子供の頃からとりつかれ、当誌に依って同様な性向の人がかなり多くいるという不思議な、心強さとなつかしさを持って(他のSMはほとんど関心ありません) 毎号お

灸に関する記事を、求めて来ました。自分も何度か、お灸に関する手記を書き送ろうと思いつつ、果してお灸の記事が姿を消してしまっていることに、大変な淋しさを感じている一人です。岩瀬さん、長谷川さんや、保田、松原さん、特に水木さん、あなたのお灸に対する感じ方は、他人とは思えない程です。昭和二十年代の当誌を見つけて、お灸記事を読むたびに、また女性の背にある真新しい灸痕、古い灸痕を見た後、何か落ちつかない妙な心境になって仕事もうわの空になるような経験は、同性向の者でなければ理解出来ない、判ってもらえないものと痛感致します。

その意味でも当奇譚クラブの存在は心強い城のように思われるのです。男女性を問わず、これからも同好者の意見発表、意志の疏通を願っています。(東京・田中生)

り子パンティが七百円と、すこし高いようです。くわしくは「娯楽読本」に出ています。最後に奇くの御発展を祈ります。(京都・奥村勇次郎)

奇く愛読者の皆様、お元気ですか。以前一度お便りした事があります。一読者です。私も大のゴムマニアです。毎月々楽しく拝読しております。最近オムツ、オムツカバーの文章が無く、残念に思っています。大西良子様初めゴムマニアの皆様。総ナメゴムパンティが発売されました。以下、生理用ゴムパンティ、踊り子用パンティ等、代金は総ナメゴムパンティが三千元、生理用ゴムパンティが九百元、踊

私は佐賀市内の薬店に勤めるB G、未婚女性です。お恥しいことですが、中学に入った年の夏休みに海水浴に行って夕方帰る時、中年の男性の甘言に乗せられその男の下宿に上り、ゴム引布を敷いてある布団で、ゴムのオシメカバーを無理にあてがわれて以来、ゴムに異常な関心を持つようになり、今日までゴム製品に愛着をもって居ります。薬店に勤めている関係上、ゴム製品にはいろいろ知識を

四馬孝 妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号一〇〇〇円

略号(しせ)

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

五、愛人の手で介錯される娘

浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 略号六〇〇円

略号(のゆ)

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号一〇〇〇円

略号(しき)

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンドラー乱舞す
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号一〇〇〇円

略号(しえ)

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 略号一〇〇〇円

略号(しい)

- 一、灌水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

もって居りますが、最近ではこのような代物ではもの足りなくなつてしまい、自分でいろいろ工夫してゴム器具、ゴム衣裳を作り、着用しております。私はゴムの魅力が余りにも強く、結婚など考えたこともなく、また結婚するとしても男性もゴムに魅力を感じていないのでなければ決して長続きしないと考えております。生来、私は旅行が好きなので、誰も知っていない人はいない所へ行き、ゴムで身をうずめ尽した恰好で人にじろじろ見られながら、その恥しさの中に我慢して歩きまわるのが私の道楽なのです。以前流行したゴム引雨衣でパンティやシャツを作り、先ず総生ゴムのプリプリしたオシメカバーをピッタリと着け、その上にゴムパンティをつけ、上半身にはゴムシャツを着、その上からバイク用の雨合羽のフードをはずしたのを上下に穿き、ゴム氷嚢をソックス代りに穿き、裏がついていないゴム長靴を穿きます。雨天の場合はこのままの恰好ですが、晴天の時はその上からダスターコートでも着ていれば外見上あまり目につきません。手には手術用の極薄のゴム手袋をはめます。その上から普通の皮手袋でもあれば全く

判りません。そしてバレーボールをネットに入れ持ち歩けば一段と身が引きしまります。映画館や列車の人ごみの中でもまれて汗ばんでくれば、また一段と快さはつります。先日、もまれていた中男の人が私のゴム衣のキュキュと音がしたのにびっくりして時々、私の顔を盗み見をしたのには顔がほてって目の置き所に困ってしまいました。この様に一日を過した時には夕方このままゴム衣裳をまとったまま風呂に入り、ゴムの肌ざわりと匂いをしんみりと楽しむことにしております。そして生ゴムのシートを敷いた布団の上にはだかのまま横になり、ゴムに身をこすりつけ悩ましい思いにふけるのです。ゴムマスクをつけゴム管を鼻にさしこみ、ゴムをキュキュきしませる時は、また一段と興奮を覚えるのです。ゴムの色もオークル(国防色)系統が最高です。私のゴム性癖は異常なものでしょうが、私に同調して下さる同じマニヤの方、通信をお願い致します(佐賀市下今宿・武富加奈子)

れを鼻責めに傾ける者もある事をお忘れなく。また、それらの迷える羊のために貴重な資料を発表してマニアを喜ばせて下さる編集部の方々への感謝もお忘れなく。でももっともっと大塚、美木、遠藤絹川(彼女はその後どうしたかしらん)スタッフを駆使して新版、鼻責写真を恵んで下されん事を祈ります。「花と蛇」に鼻責場面ありと聞き久しく、漸く師走に及んで浅草に現れたので早速拝見に参りました。結構楽しみました。そして若干の記録も採取、満足の上はあります。二月号に「花と蛇」と見ても一向詰まらんと誰かさんはおっしゃるが、嗜好の異なる世界での独善的な批判で、鼻責ファンにとっては公開映画では、全く新記録の貴重な資料でした。これというのもK・K誌が導火線で、あの映画の発祥があった事と思われまふ。嬉しさと感謝の意味で拙写一葉御参考までに御送りします。但し、発表は御かんべん下さい。二十五才の美しいモデル嬢のです。こうした資料交換を華鼻愛好家ととり交わしたいのです。(東京・墨堤K生)

自肅に自肅を重ねて、とうとう忍者スタイルの黒づくめの装束であらわれた新年号と、つづいて緋色に衣裳をあらためた二月号を、複雑な気持ちで読みかえしているうちに、すでにヒノエウマの年に突入し、四月ごろまでは受胎解禁とならない模様である。バース・コントロールの技術が普及した現代において、昔ながらの迷信が幅を利かせることは、何とも割り切れない感じがする。今日はひとつ、淋しさをまぎらわすために、ひっそりと空想してみたお正月の夢をそっと紹介してみたいと思う。ウマ年ならぬイヌ年のことだと思つて、四年先き、一九七〇年にはどうなるだろうかと勝手に想像していただきたい。お正月に、ダイレクト・メール風の四角い封書で来た手紙。「年賀」のスタンプにあやしみながら開けてみると、三枚の美しい写真。ハガキ大の美事なカラー・プリントで、いずれも分婉間近い臨月の同じ妊婦をちがった角度から撮影したもの。いうまでもなく一糸まとわぬ全裸で「あけまして、おめでとう」の文字のかわりに、イロハかるたの取り札を模したものらしい、③犬も孕めば思いあたる③論よりフォト③腹

マゾと神酒で明け暮れるこの頃のK・K誌。然しK・Kファンの中には、それ以上の情熱とあこが

○

しばらくごぶさたしていたが、

四馬孝画 秘蔵版 責め画集 分譲

△責められる美女波津子の痴態▽

大判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

- 一、白く輝く肌にどす黒い縄。
- 二、恐怖の浣腸責め展開す
- 三、庭に於けるハダカ責めシーン
- 四、裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チェン・ブロックの吊り

△可憐な美少女加奈子の羞恥責め▽

大判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

- 一、捕われの美女加奈子の運命
- 二、ローソクの火責めにあう
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り
- 四、股間縛りで被虐の絶叫
- 五、鑑賞に供される緊縛美体

『花と蛇』画集 浣腸と排泄画集

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

- 一、京子に芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人への汚辱
- 三、操り責めにあう美津子
- 四、片足挙げ縛りの桂子
- 五、粗相を強要される京子

女体吊責め特集 美貌汚辱と鼻責

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

- 一、弓吊りローソク責め
- 二、エビ縛りの宙吊り
- 三、股間縛りの責め
- 四、美女の舌の先縛り
- 五、股間縛り鼻孔吊り

ぼてれんこ、と毛筆で書いた字が
焼きこんである。前の年にカワイ
コちゃんとなにしたおぼえのある
亭主なら、思わずギョッとして奥
さんの目にふれさせまいと、苦慮
することになる次第。こんなアイ
ディアはいかがであらうか。「ど
うみても、たしかにこれは、腹に
子を持つているわね」と言われて
は、ギクッとならざるを得まい。
身に覚えがなくて、いたずらをさ
れたにしても……しかし、一度
そんな目にあつてみたい、とひ
そかに念じて、もう一枚追加を請
求したいと思う。(◎妊婦ヌード世
にはばかるな。(三重・瀬沼四郎)

奇ク発刊のための編集部各位の
御努力には敬意を表します。私は
三十五才になる浣腸のとりこにな
っている男性ですが、私の希望は
若くて美しい女性に浣腸していた
だくことです。私が浣腸に興味を
持つようになりしたのは、子供
の頃から私が小さかった頃は、
「発熱だ」「さあ浣腸」といわれ
るように、しばしば浣腸されたも
のです。その頃のイチジク浣腸は
今のようにはポリエチレンの容器で
はなく、ゴム製のスポイトのなか
に、浣腸液が入っているものでし

た。子供の頃は身体が弱かったの
で母親の手で(シリンドーで)グ
リセリン浣腸されたり、かかりつ
けの医者の手で(イルリガートル
で)石鹼水の浣腸をされたりした
ものでした。そのような状況で育
った私はいつの頃からか浣腸に強
い関心を持つようになり、長ずる
に及んでますますその傾向はつ
るばかりで、浣腸のような変った
ものに関心を持つているのは、広
い世の中で私だけであるかと悩ん
だこともありました。数年前、
書店で立読みした奇ク誌で自分が
あれ程悩んでいた浣腸の記事が出
ているではありませんが、私はそ
の時目の前が開かれたような気が
し、世の中には私と同じような悩
みや傾向を持つている人が意外に
多い事をしりました。以来奇ク誌
の浣腸の記事はかかさず読んでい
るつもりです。今では50C・C・
100C・Cグリセリン浣腸器(シリ
ダー)、エネマシュリンジ、500C
Cイルリガートル、スポイト、ア
メリカ製ゴム製イルリガートル(エ
ネマバック)等を持っています。
今まで集めようとして入手してい
ないものには浣腸缶があるだけで
す。アメリカンファーマシーで売
っているフリートエネマも使った

ことがありますし、医学書院器械で出している流腸カテーテルも使用してみました。今、私が希望していることは、さきにも書きましたように若い女性のかたに流腸していただくことです。都内で希望にに応じてくださる同好の方はおられませんか、もしおられましたらお便りください、また、もしよかったら、私にもあなたを流腸させていただけたら、それこそ見果てぬ夢と思って居ります。十二月号の東京の新井生さん、同好の志としてお話しだけでもいたしたく思います。お便りください。終りに奇ク誌の発展を祈ります。(東京目黒区・上田実)

○ 藤村美香様。本誌二月号にて貴女の読者通信でのお便りを拝見し或る種の共感を覚えまして筆を取らせていただきました。私は某大卒卒業後貿易商社に勤務して居ります。二十六才の独身サラリーマンです。奇クの愛読のきっかけは古く、昭和三十三年の二月頃いよいよ高校卒業も目前のある日古本屋で店番をしている友人の所に遊びに行った時、友人から奇クを見せられて、すごく興奮し、手足が自然に震えて来るのを禁じ得ませ

んでした。この頃は未だ自分の性格の中にS的傾向の存在は知りませんでした。大学に入学して、両親と別れて下宿生活をする様になってからは毎月の様に買って愛読する様になりました。しかしそんなS的傾向を一方では罪悪視でもしていたのでしよう。当時の私は随分と悩みも致しました。又何度となく一年分位たった奇クをこっそりと自分で焼いてしまいました。反面下宿生活のきままさから自分で色々空想にふけることもはじめました。私の頭の中では、或る時は女子学生、或る時は、友人や、街角で会った可愛らしい人が、くすぐらられたり緊縛されたりするのです。小さい頃から演劇をやつて来た私には登場人物に適当な役割を与え、巧みな構成と演出のもとにそのドラマは何時果てるともなく続くのです。こうした空想の世界と毎月の奇クによって育つともなく育つて来ました私の幻想も、社会人となって現に実現出来る機会を得ました。幸運にも某雑誌のペンフレンドとして知り合った女の人がM性向の女性だったのです。娘さんである彼女にその性向を見い出した時は本当に嬉しかったです。お互いに性向を理

解し合う迄には相当の時間もかかりましたし、苦心もしました。でもそれから月一度位、彼女の山好きからピクニックに出掛けました。運動選手だった私には山登りなぞ、何でもなく、重いリュックを背負って林や湖畔やスロープを登りました。歌を歌い激まし合いい手を取り合って歩く私達は恋人同志に見えたでしよう。でもリュックの中には自分で手に入れた道具がはいっていました。でも空想の世界とは違ってああもこうもと思う自分の半分も出来ませんでした。なんだかすぐにでも壊れてしまふ人形の様に思われて、この事は私のたった一つの体験なのです。が、今では淡い思い出となつて脳裡から離れません。半年位で彼女は家庭の主婦として嫁いで行きましたので、このドラマも終りとなりました。以来、又学生時代と同じく、又貴女も、そうする様に、毎月あすこ、ここと恥かしいながらも、書店で本誌を買っては自分だけの、空想の世界に没入致します。一時は自分の性向をさげすんだ私ですが、又こんな人生も相手に恵まれればあつてもいいのではあきらかと自認するに至りました。あきらめでしょうか? かと云っ

て今の自分の周囲では発散する場所として機会として何もなく、うっかり人に話そうなら変態だと白眼視されるでしよう。この点貴女と同じく悩んでいる一人なのです。もしお話しなりお便りができたらどんなにいいだろうなあと、幾夜か考えて、思い切ってお便り致しました。幸い東京にお住いの由、私の住所会社の電話番号は編集部でお問い合わせ下さってお電話下されば幸いと存じます。住所の方は会社の関係上、夜なるべく遅く会社なれば九時から昼頃迄は確実に居ますから何時なりともよろしいです。犯罪者は自分の罪はきつと誰かに洩らすと云いますがそれと同じ様にSM性向で悩んでいる者が話し相手を得られれば、これに過ぎたる幸福はないものと存じます。(東京・S男)

○ 奇クを読みはじめてから二年目いまでは完全に奇クの虜となり果てた四十才の男子です。私は前々からM的傾向があったようですが、奇クを知ってからM100%であることが明かになりました。私は晩婚でしたが毎週一回妻の協力でSMプレイを行っています。現在アパート住まいで、それも四畳半一

間切りですがこの部屋が土曜の夜となると忽ち私と妻のSMの聖なる宴(うたげ)場と化します。私が裸となりますと、待ち兼ねたように妻は部屋の片隅にあるポストンバッグから、大小の犬の首輪、鎖、ロープなどを取り出し先ず私の両足首に足錠をつけ、次に手錠を後手につけます。それから大きな犬の首輪をつけ、その先についている鎖をじゃらつかせながら、私の首をぐいぐい一杯引き立たせ部屋の鴨居のフックに私の両足が爪先でやっと立てる高さで吊してしまふのです。首が苦しいので爪先を下ろそうにも下せません。すると、妻はそんな私の姿態が私の眼によく見えるように壁かけ用

の鏡を窓の下あたりに置いてくれます。全裸で首輪で鴨居にぶら下がり、足錠をつけられた両足の爪先で必死に立っている自分自身の姿を見る私は、みるみる全身が火照り、エキサイトしてくるので、暫く経つと妻は私を後ろ向きにして、私の尻を革のベルトで思い切り、鞭打つのです。ビシッビシッというベルトの音が私の尻の上で炸裂するのを聞いている私は恍惚として、半ば夢心地にすらなってしまう。やがて仰向けにされた私は、妻の足の裏をペロペロと犬のようになめ廻し、そして接吻します。そしてまた、四つ這いになり鞭を頂きます、そしていつか夜は白々と明けていくので

す。実を申し上げますと元来、心臓が丈夫でない私は、激しくエキサイトした後には時々気分が悪くなることがあり、或いはプレイの最中にそのまま昇天する危険が無い訳ではありません。併し、それでも私はSMプレイを止められないのです。子供の居ない私は万一に備えて最近、生命保険に入りました。勿論、妻も承知の上です。私の最高の夢は、静まり返った深山溪谷で全裸体となり、犬の首輪、両手両足に鎖をつけられ、犬のように這いつくばり、鎖をひっぱられ、血の吹き出るほど鞭打たれて私は死にたいのです。私はそれを是非来年実行に移したいと思ひ、着々準備しています。使し、これはや

はり私の単なる夢でしょうか……
(仙台・秋田一郎)

藤村美香様。二月号の読者通信でああなたのお便り拝見しました。

貴女がマンションの一室で、自分で自分を縛っていじめている様子が目に見えるようです。かつて勇をこして男性にあたりながら、そして気絶するような侮辱を受けながら、そこから、悦びを見出せず怖れしか得られなかったとすれば、貴女のMは本物ではないと思えませんか。相手にどんなことをされても、また、ひどい事をされれば、される程、Mとしての悦びが、もえあがるのではないのでしょうか。もっとも、こりごりし

☆本誌既刊号在庫一覧表

○本誌の既刊雑誌は左記の一覧表の通り在庫しております。昭和38年10月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。
○在庫が次第に減少して左記のように最近号のみとなってしまうましたが、残部僅少のものもありますから、御入用の分は、お早目にお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和38年11月号 (定価二五〇円)
昭和38年12月号 (定価二五〇円)
昭和39年1月号 (売切)
昭和39年2月号 (定価二五〇円)
昭和39年3月号 (定価二五〇円)
昭和39年4月号 (定価二五〇円)
昭和39年5月号 (定価二五〇円)

昭和39年6月号 (定価二五〇円)
昭和39年7月号 (定価三〇〇円)
昭和39年8月号 (定価三〇〇円)
昭和39年9月号 (定価三〇〇円)
昭和39年10月号 (定価三〇〇円)
昭和39年11月号 (定価三〇〇円)
昭和39年12月号 (定価三〇〇円)
昭和40年1月号 (定価三〇〇円)
昭和40年2月号 (定価三〇〇円)
昭和40年3月号 (定価三〇〇円)
昭和40年4月号 (定価三〇〇円)

昭和40年5月号 (定価三〇〇円)
昭和40年6月号 (定価三〇〇円)
昭和40年7月号 (定価三〇〇円)
昭和40年8月号 (定価三〇〇円)
昭和40年9月号 (定価三〇〇円)
昭和40年10月号 (定価三〇〇円)
昭和40年11月号 (定価三〇〇円)
昭和40年12月号 (定価三〇〇円)
昭和41年1月号 (定価三〇〇円)
昭和41年2月号 (定価三〇〇円)
昭和41年3月号 (定価三〇〇円)

たと言いながら、また、このよう
な通信を出してS男性を求めている
のを見れば、Mの血のさわぎが
おさえられず、先の経験もどこか
甘美な思い出として残っているの
かも知れませんか。さて、以前の
経験から、駅とか喫茶店での待ち
合せは、いやだ、とおっしゃいま
すが、どこで待ち合せようと、未
知の男性はあくまで未知であるは
ず。人前でのプレイが不可能な以
上、いずれは二人きりとなるので
す。どんなに恥しい責めにも応える
覚悟があるのなら、ひとつ僕の責
めを受けてみては如何です。僕は
今年二十二になる青年です。現在
は東京の杉並区に住んでいます。
貴女と同様、住所、電話は、発表
するわけにはいかないのです、連絡
方法に困りますね。でも貴女は車
をもっている様なので、それを使
っての連絡も、出来るかと思いま
す。ともかく、最初は読者通信を
使って、お話しようではありません
か。まだるっこくて、いやです
けれど、これしか方法がなさそう
です。では、お返事をお待ちして
います。(東京・古沢一男)

藤村美香様。二月号の貴方のお
便りにはさぞ多くの反響があると

思いますが私もその仲間入りをさ
せて下さい。私も自分の性癖には
長らく悩んで参った者です。国立
の大学を中退しましたのも一つに
はその為です。私は大学教師を父
に持ちギターと奇巧を心の友とす
る二九才の孤独な男です。背は高
くありませんが容ぼうは男として
悪くないつもりであります。こん
な私ですが貴方の御気持のいくら
かは理解出来ると思います。よろ
しかったらお便り下さい。貴方が
どこにお住いか分りませんが、お
便りの様子では山の手の都心をは
なれた辺りとお察します、失礼
乍ら次の様な方法で私のTEL、
住所を連絡させていただきます。
この通信が載った奇巧の発売され
た次の月の十日迄に私の住所、氏
名、電話番号を中野郵便局止、藤
村美香様宛に送らせていただきます
す。いかがでしょうか。私は経験
もありませんし余り残酷な事は好
みませんが出来る事ならお逢いし
て貴方とプレイして見たいと思ひ
ます。後手に縛られた貴女のそば
で「禁じられた遊び」を弾いてい
る自分を夢に見てお便りお待ちし
ます。(東京・厨川弘)

奇巧編集部の皆様読者の皆様明

湖畔第二回女相撲

モデル大塚啓子・東浦ひかる

△二人とも「相撲」着用▽

○女相撲連続スナツプ

大手札十枚一組 一五〇〇円

略号(すな)

○揮着用連続スナツプ

大手札十枚一組 一五〇〇円

略号(すふ)

実戦迫力女相撲

【第一組】 略号(すに)

大手札六枚一組 一〇〇〇円

【第二組】 略号(すぬ)

大手札六枚一組 一〇〇〇円
【第三組】 略号(すの)
大手札六枚一組 一〇〇〇円
【第四組】 略号(すつ)
大手札六枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる・大塚啓子
室内相撲熱戦譜
【第一組】 略号(すも)
大手札六枚一組 一〇〇〇円
【第二組】 略号(すみ)
大手札六枚一組 一〇〇〇円
【第三組】 略号(すわ)
大手札六枚一組 一〇〇〇円

けましてお目出度うございます。
本年も我々マニアの為何とぞよろ
しくお願い致します。本誌からグ
ラビアが消えた事は淋しい限りで
すが、今の様な社会情勢では仕方
のない事だと思ひます。それだけ
にわれわれマニアが団結して奇巧
を盛り立てて行つてこそ、本誌も
発展して、いつの日にかより多く
の人々から理解される時もあると
思ひます。今までも書きました
が私は身体障害者で本誌を買うの
がやっとと云う様な時もあります
が奇巧は私の心を慰めてくれる唯
一の本です。自分の周囲にはこう
した性格を打明けてプレイをする
事を頼める相手もなく残念ですが
今にきつと良き相手を見つけて何
か書きます。私自身サド的な事を
いろいろやってみたいのですが、
完全に利くのは左手だけで女体責
めとか緊縛プレイといった事も不
可能に近いので理解者があつてプ
レイをする様な機会があつても、
お互いに満ち足りたものにならな
いのではないかと云う事も心配に
なり今まで積極的にプレイの相手
を見付け出そうという努力をしま
せんでしたが、これからは理解し
て呉れる人さえあれば、勇を鼓し

て試みたいと思っております。(長野県・原田弘)

○ 明けましておめでとうございませう。今日は私の御誌に対する希望を送らせていただきます。読者信欄の一隅をおかり出来れば幸いです。仮名はお許し下さい。最近の御誌を見て私はさびしくてなりません。そしてつくづく以前の御誌がなつかしくなりませんか。グラビア廃止のせいではありません。何か味気ないのです。判然いえば夢がないのです。以前の御誌には夢がありました。詩がありました。ムードがありました。それが数年前より編集方針が大きく変化し、(社会情勢のせいばかりではなくそれ以前よりすでに起りつつあった)最近の御誌は何かレポートの様な医者のカルテの様な殺風景なものにかわってしまいました。最大の原因はストーリーの不足だと思います。今の所ストーリーらしきものは「花と蛇」だけです。これとてまたずらにくだいだけで心理描写や幻想的空気もなく、以前の御誌をかざった「燐光」「妓

の影」「淫火」の様な数々の傑作には較ぶべくもありません。これらの作者の方々は今どうしておられるのでしょうか。色々事情もある事と思いますが、もう少し以前の編集方針にかえる事はできないものでしょうか。かつての御誌は大衆誌であり得ました。時には文芸誌でさえあり得ました。今御誌は機関誌にすぎません。写真にいても最近のものはあまりにもしげきを求め、「縛り」そのものであり過ぎる様に思われます。勿論それも結構ですが、私はもっとおんなを表現してほしい光と影の幻想を追ってほしいと思うのです。かつての様に写真としても格調高いものを作っていたいただきたいのです。(分譲写真中私の最も感激したものはE75次いでE89です)生意気ばかり申しましたお許し下さい。でも私と同じ思いの方もきっと数多くある事と思います。もう一度申します「文献であるよりも読物であり、ごらく誌であってほしい。写真よりも、絵であってほしい」そしていつまでも私の良き友であります様に。では又。(東

京・長沢一良)

○ 東京の藤村美香様、この欄をかりてお便りいたします。あなたの奇ク二月号に掲載されましたお便り拝読いたしました。小生今年23才になる独身男性です。元来の好奇心から様々なものに興味をもつてまいりました。私の頭はいろいろなことといっぱいです。という実はずいぶんいいかもしれません。精神をいたつける諸々の苦悩から必然的にいろいろなものに、その解決を見出そうとする一つの表れかもしれません。つまり人間の生き方、人間の精神というものの、私は大いなる興味をもっております。芸術には様々な形式があります。歴史はその変化を我々に明らかにしてくれます。その様々の芸術のうちでも、本能的に強く以前から私を惹きつけてきたのは、耽美の世界、あるいは「正常なる人々」の常識からみて異常な世界、つまり奇クの小説に出てくるような世界でした。私はわりと早熟で早くからサディズム、マゾヒズムということに興味を持っていました。高校を卒業してからはいそがしさにまぎれて、そちらの方の

関心もうすれていましたが、仕事にもなれ、いろいろなことを考えるようになる、ともするとさかんに頭にうかんでくるのが奇クのことでした。高校時代から音楽や絵画に関心をもっていて、今でもヒマをみては音楽をきき絵を描いています。例えば絵について考える時、異常性愛とか、サド、マゾというような特異な世界がどうしても出てくるのです。そのようなわけで、私は実際、自分でそのようなことをやってみたい、相手になつてくれる人がいたら、実際に経験してみたいと考えるようになりました。そういう理論なのですが、多分それは私という人間の本能的な好奇心であり欲望なのです。二月号の読者通信欄であなたのお便りを拝読し、私の心に描いていた方だと思いました。私はあなたの悩みを正當に理解出来ると信じます。また、私の悩みもあなたに理解していただけるようになったら、これに勝る悦びはありません。私の性格として、極端に体をいためつける、傷つけるやり方は好みません。よろしかったら、どうぞ、お手紙下さい。いろいろ話し合ひましょう。(東京・溝口雄一)

次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

これだけは、どうしても人に話したい、書いておきたいといったことが、どなたにも一つや二つ必ずある筈です。物言わざるは、腹ふくるるのたえ、どうか皆様の真実の叫びや思い出などをどしどしお寄せ下さい。採用篇には本誌一年分以内贈呈します。

△創作、小説、物語▽

最初は余り長いものは無理ですが、本誌の内容に適した題材で皆様の夢を文章に托して下さい。採用篇には本誌半年分以内贈呈します。

年分以上贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを皆様の筆でまとめて下さい。採用篇には本誌五カ月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく報導下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月分贈呈します。

は本誌三カ月分贈呈します。

△マニヤ、ファン通信▽

編集者、執筆者、投稿者、モデル嬢などへの呼びかけやファンとしての希望、或は前号の感想批評、本誌に対する希望や御意見、など愛読者としての通信をお寄せ下さい。本誌とファン、マニヤ同志の忌憚のない通信ですから、何なりと御遠慮なく。採用篇には本誌三カ月分贈呈します。

☆編集後記☆

○例年のことながら三月号は、年末から年初に跨って印刷されるので、その間どうしても一週間ばかりの休みが挟まることになる。普通の月だったら一番忙しいときに当るのだが正月だから仕方がない。一週間のブランクを見越して早手回しにやるより手はない。

○本誌の存続についてや或は内容についてなどの熱心な御進言を殊に最近沢山いただいた。先月号にも書いたように公開可能のもの、つとめて誌上に掲載して広く皆さまの御批判を仰ぐという気持ちに変わりはないのだ。が、私信としてまことに結構な御意見を寄せられる方も少くないのには、全く感謝のほかはない。一々全部の方々にお返事を差し上げ

る余裕はないのだが、漸次誌上に具現してお礼にかえたいと思う。

○なにしろ誌面が狭隘なため、少し長い小説を掲載すると他の作品を圧迫することが甚だしいのが残念である。定価が三百円になってから約一年半、ここらあたりで値上げが許容されるとするならば、グラビア頁、口絵再開の上本文も大増頁して四百頁ぐらいにしたら、新年に際しての夢を描いてみた。

○△現実には厳しい△の言葉の通り、種々の制約のため部数が伸びないの大きな痛手となっている。口絵や挿画をなくす程優等生に近くなるというのだから、内容の充実と部数向上のジレンマは当分続くことだろう。部数を増やさずに増頁するとなれば、勿論定価を値上げするより仕方がない。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共▽
三月分(3冊) 九〇〇円△送共▽
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

三月号 【第二十巻第三号】
【通刊第二二二号】

昭和四十一年二月二十日 印刷
昭和四十一年三月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとり、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されていますが、本来成人向けとして編集いたしましたにもかかわらず、未成年の方には絶対販売しては上げません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。